明治三十九年二月五日発行
毎月一回五日発行
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第六巻
第三號



季節向き新柄物漏れなく取揃へ店内一面に陳列致し置候間御来観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて御申付被下度く即日小包郵便を以て御届け可申上候尚ほ註文御案内書は御一報次第呈上可仕候

東京日本橋駿河町

三越呉服店

電話本局
五二二五
一二一七
一八五六
一八六〇
二三三二



女學世界 第六巻第參號 目次

登錄商標

良薬にして口に甘し

登錄 淺田宗伯先生直傳 商標

淺田飴

たんせき一切
肺病の持薬
ひきかぜ・よはき人
老人の滋養薬

登錄商標



十二日分 金五拾錢
一週間分 金參拾錢
四日強 金貳拾錢
二日分 金拾錢

日本全國到る處の薬店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町
大阪北久寶寺町堺筋

（電話本局壹壹二一番）
（電話東三九五八番）

堀内伊太郎

女子高等師範學校教授 槇山榮治君
明治女學校・學監 呉久美子君
高田商會技師工學士 關藤國助君
東京府職工學校々長 今景彦君
學習院教授 馬上孝太郎君
高等工業學校助教授 瀬谷準造君
日本女子大學校教授 片岡哲子君
法學士 大里武八郎君
醫學士 佐藤得齋君
農學士 河村精八君
補助

報知新聞家庭記者 中村千代松君編纂

實驗問答 日本家庭節用

全一冊洋装總クロース三六版
美本紙數千二百七拾餘頁
正價壹圓參拾錢　小包料拾錢

特價壹圓（三月十五日迄）

▲口繪――家庭行事寫眞銅版數葉挿入

報知新聞の家庭顧問は非常に讀者の歡迎を博したものにて其質問の端書のみが三萬枚以上に達した本書は其中に就き極めて必要なる種類のみを撰拔したので其答は全然各専門の學說と實驗を有する諸大家に依て得たものである。本書は二樣の目的を持つて居る一は「其れなり直ぐと實用たらしめ得ること」一つは「普通の人には實用なり難いが其れを知て居ると萬事に理解の便利あること」是なり斯くして得たる經驗でなければ到底確實とは云はれぬ、本書元來博士大家の實驗と學理から出て居るから讀者にして十分の注意を怠らざれば一事一物必ず其希望を達するのである。附錄百六十餘頁には『日用書翰文例』として書翰文二十八種類につき解說及其文例を掲げ其他園藝行事略、家庭萬重寶等孰れも家庭必要の事項たらざるはなし。

◎衣食問答 六十餘項
◎食物問答 二百六十項
◎作法問答 百餘項
◎家事問答 十餘項
◎衛生問答 八十餘項
◎病氣問答 百二十項
◎理科問答 九十項
◎戸籍問答 二十餘項
◎諸税問答 二十餘項
◎通信問答 二十餘項
◎農事問答 四百二十項
◎教育問答 四十項

附錄

▲日用書翰文例
▲電信文の認方
▲歳時と月名異稱
▲園藝行事略
▲二宮尊德翁訓言
▲家庭萬重寶
其他

（甲の一）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

二月一日發行
第二卷第六號

日本の家庭

一册十一錢　六册六十錢　十一册壹圓十錢

◎獨立心と自覺　記者
◎中等社會の家庭　櫻井博士
◎婦人の自覺　三輪田眞佐子
◎學校敎育と家庭敎育　野田文學士
◎良妻の意義　得能文
◎物語について　大村仁太郎
◎境遇　せゝらぎ
◎雪の庭松　三宅花圃
◎わが家の子供　樋口勘次郎
◎子供の怒りについて　沼田藤次
◎下女奬勵法　中島よし子
◎小兒の衞生と家庭敎育　關以雄
◎母の氣まぐれ　記者
◎娘の交際　笠峯生

◎言いにくいこと　幡幽泉
◎自他の別　葉村ゆき子
◎うぐひす神社（お伽噺）　福田琴月
◎むかしの二月　岸本柳子
◎お姑のくりこと　せんせい
◎うらをもて　伊藤ふく
◎和歌　花園選
◎貧しき妻の氣陷　かさみれ
◎玉に疵　無二子
◎あはれその日　麻生たつ子
◎料理の切形　石井泰次郎
◎ジャガイモの料理　ゆうづき
◎新刊紹介　記者
◎巻中挿書寫眞版木版數十箇

學習院教授　大村仁太郎先生著

家庭教師としての母

再版發賣　和裝全一册定價金七十五錢　郵税金十錢

専門大家十二名選評及執筆

家庭講話　母と子供

再版發賣　和裝全一册定價金六十五錢　郵税金八錢

福田琴月先生著　尾竹竹坡先生畫

新版　四百餘洲（しひやくよしう）

洋裝全一册定價十五錢郵税四錢

露領に名高きバイカルから、日本太郎はたゞ一人探ぐるは蒙古の砂の海、山羊や駱駝の案内と聞くや鐵木眞成喜斯汗が武勇すぐれし戰爭談、萬里の長城乘りこえて、仰ぐは北京の紫禁城、昔語の面白さ三國時代の諸葛亮、天津すぎて山東省、大聖のあとしのびつゝ南京蘇洲寒山寺、虎邱山をも見廻つて、上海港に待ちうけし、應が氣轉の日本丸に、又も乘りこみ香港にしばし休むる旅の足、四百餘洲の活動寫眞、さあ評判ぢやく。

福田琴月先生著　梶田半古先生畫　◉朝鮮と滿洲　全一册　定價十五錢　郵税四錢

（甲の二）

發兌　東京市神田區裏神保町　同文館

大賣捌　東京神田表神保町　東京堂　大坂東區備後町　寶文館

●模範的家庭のよみもの●

外務大臣官邸厨房主管 宇野彌太郎
華族會館厨房主任 渡邊鎌吉 共著

家庭 西洋料理

洋裝全一冊正價金九十五錢郵税金八錢

赤堀峰吉 赤堀峰翁 赤堀菊子共著

即席 惣菜料理

洋裝全一冊正價金三十五錢郵税金六錢

赤堀峰翁 赤堀峰吉 赤堀菊子共著

家庭 十二ヶ月料理法

和裝上卷正價金五十錢
全二冊下卷正價金五十錢
郵税一冊八錢

未蒼庵矯菓著

實驗和洋 菓子製造法

洋裝全一冊正價金六十五錢郵税金六錢

華族女學校教授 小野鵞堂書

增訂 女子手紙文

和裝全一冊正價金四十錢 郵税金四錢

落合直文著 小野鵞堂書

女子消息 雁のゆきかひ

和裝上卷正價金四十錢
全二冊下卷正價金四十錢
郵税一冊四錢

文學博士 小杉榲邨校閲 齋藤圓子編

女子教科 包結之栞

和裝正價金九十五錢郵税金八錢
全二冊套入正價金壹圓十錢郵税金十錢

女子高等師範學校助教授 神田順子先生著（挿畫二百餘入）

新著

裁縫新教授書

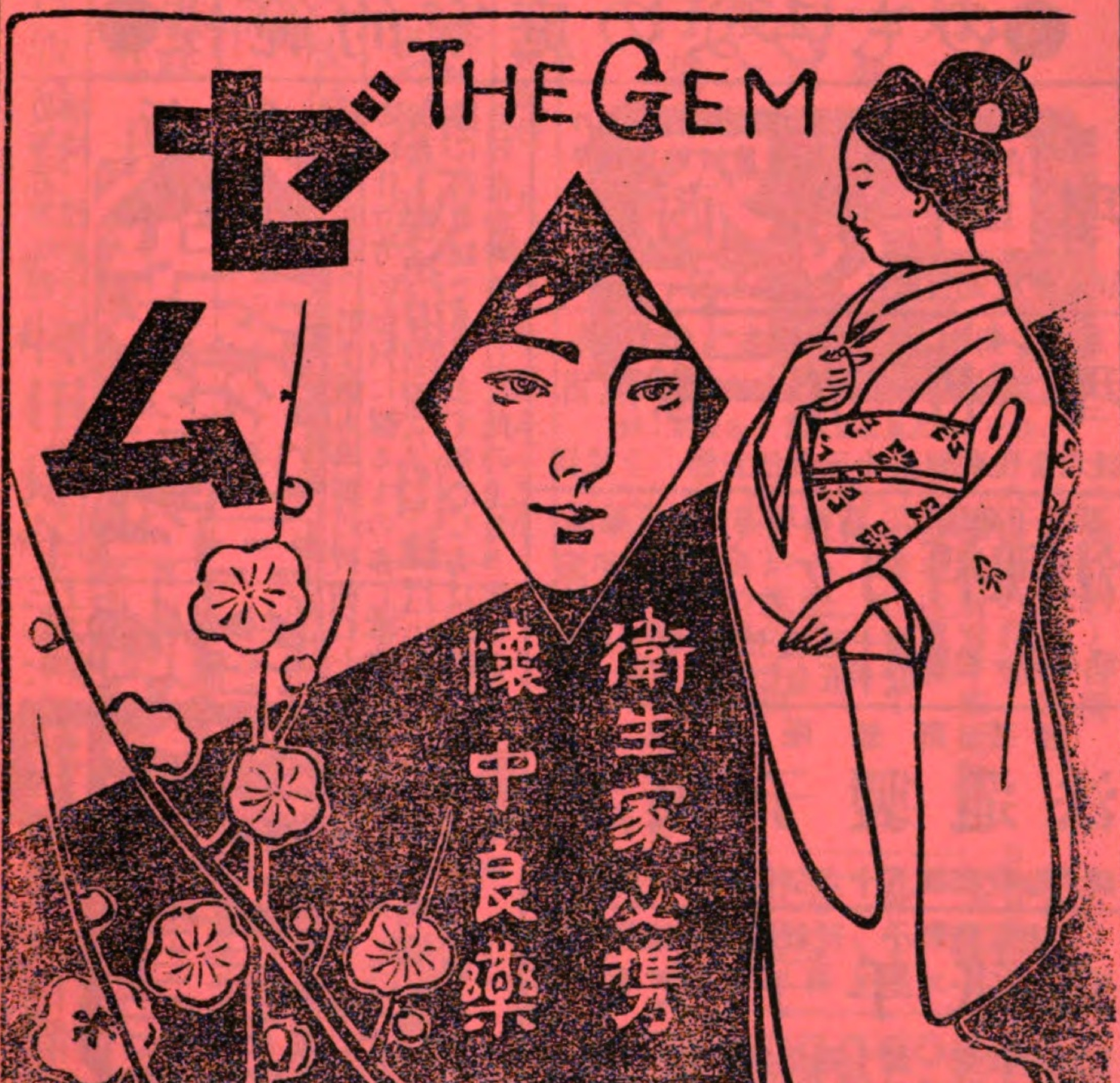
裁縫は家庭に於て最も樞要の技術にして女子たる者の必ず修むべき業にして服裝の高尚優美なるは仕立方の如何に據るもの多し本書は綿密な分り安い文章を以て精しく説明しそれに挿畫は何れも實物の縮圖なので縫目の針數迄もこの挿畫の通りで實物に適應されますのは一番に誇る點であります初心な方は勿論高等女學校女子師範を始め女子教育に關係する各學校の教科書參考書として此の上なき善い書です

●下卷近刊

和裝美麗
上卷全壹冊
正價金六拾錢
郵税金八錢

發行所 東京日本橋區通一丁目 大倉書店 電本四一四番

(甲の四)



偉大の名譽

ゼムは勇敢絶倫なる陸海軍將士の愛用を蒙り殊に
東郷大將閣下よりは鄭重なる禮狀を賜はり亦々戰勝國紀念として
ノーエル大將閣下の賞讃を忝ふせる光榮を得たり

ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他鄕或は惡臭の場所に携帶し常に少量を用ゐなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防する良劑也。

ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしむ、又偉大なる效能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必らず談話喫煙飮酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり。

定價

優美高尚包
七十五粒入拾錢　百六十粒入貳拾錢
四百卅粒入五拾錢　九百粒入壹圓
新意匠容器ゼム入貳拾錢

發賣元　東京市日本橋區馬喰町二丁目　愛國堂 山崎榮三郎

支舗　大阪市東區高麗橋二丁目　山崎兄弟商會

▲全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

夕月



榊原蕉園筆

弦齋式料理服 無料進呈

增補註釋 食道樂

春の巻
夏の巻
秋の巻
冬の巻
——合本

正價金貳圓
郵税金十五錢
臺灣清韓金卅五錢

來る二月十五日迄に(遠地讀者の希望に依り進呈期間延期)非常廉價なる食道樂合本を買ふ人は各壹冊毎に外國製繪葉書の景品を得べく又十人に一人の割合を以て弦齋式料理服引替券の封入しあるものに中り給ふの福あるべし其券を報知社出版部又は新橋堂書店へ御持參あれば弦齋居士夫人の考案と實驗とに成り三越呉服店にて調製したる最便最利の料理服一組を進呈すべし

▲東京市麹町區有樂町二丁目 報知社出版部 ◆ 東京市京橋區出雲町 新橋堂書店▼

◎十二版賣切れんとす

村井弦齋著

實地経驗 臺所重寶記

●一升の酒を買はんよりは此の書一冊を買ふに如かず

定價八十錢
郵税十錢
臺灣三十錢

▲發行 東京麹町區有樂町一 報知社出版部 ◆ 發賣 東京銀座通新橋際 新橋堂書店▼

(乙の一)

田舎の春

丸山晩霞筆



春寒（みそさゞいと梅もどき）



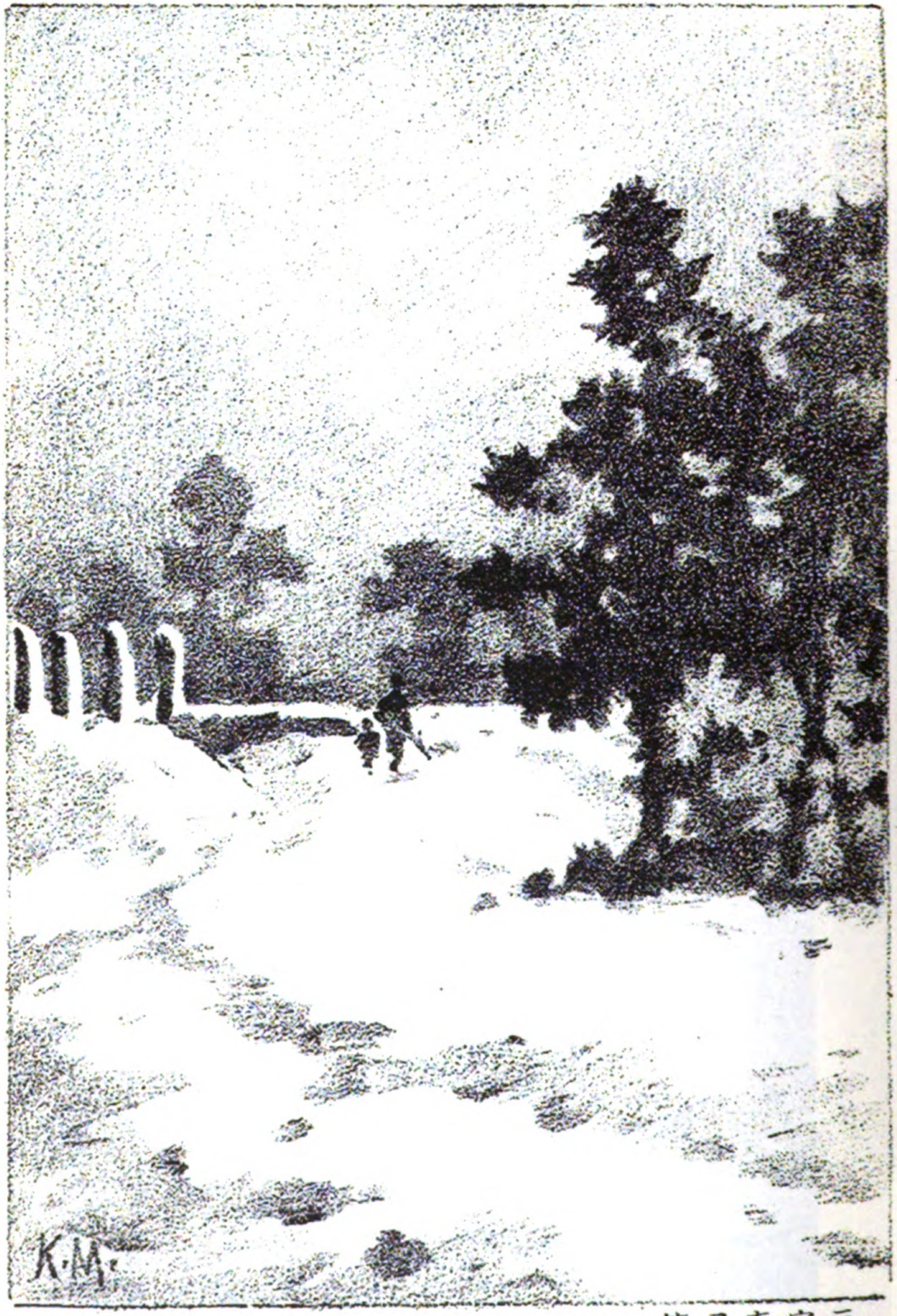
川崎蘭香女史

靜夜



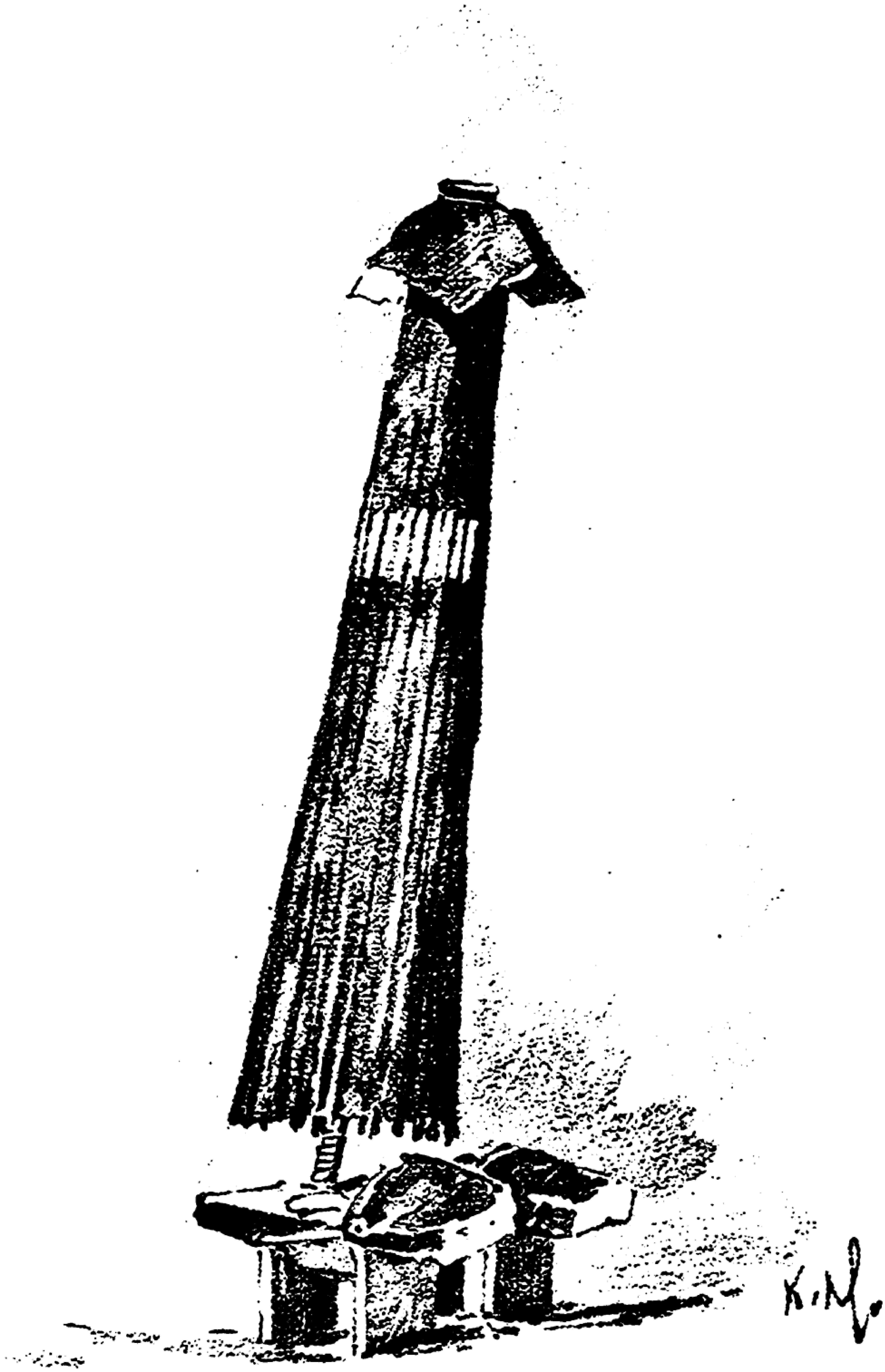
川崎蘭香女史

雪景色



三宅克己筆

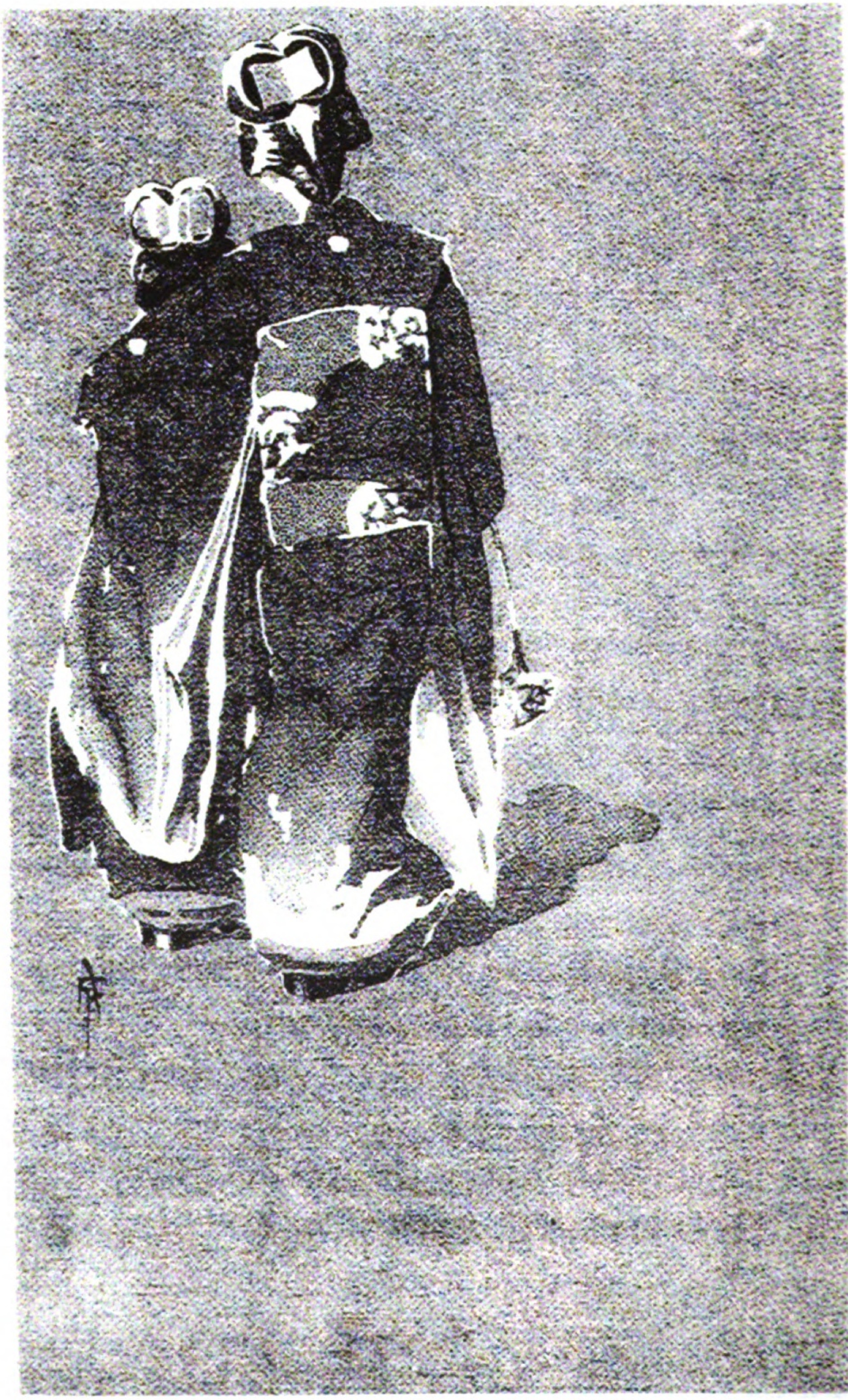
傘と下駄



三宅克己筆

つみくさ

一條成美筆



白椿

一條成美筆




美術
造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

(丙の一)

理想的新家庭の寶庫

塚本はま子先生講述 (製本既成) 全一册

實踐家政學講義

菊判總クロース綴
コロタイプ口繪入
紙數三百五十頁
正價金七拾錢
內地送本料金拾錢

近頃新家庭を組織するに就て、種々の議論があるやうで御座いますが、實際理想的の新家庭を作るには、先づそれに就て根本的の新智識が必要で、若し是れを缺いたならば如何に千百の名論を聽ても一向其効力がないでありませう。さらば家庭に關する根本の新智識を與へるものは何であるかと申ますと、それは家政學で御座います。從來家政學の著述は七八種も出て居りますが、多くは乾燥無味宛然砂を嚙むやうで少しも興味と言ふ點に就て注意した處がない上に、講述の方法も陳腐で一向嶄新な處が御座いません。本書は家政學の大家塚本はま子先生が右の缺點を慨かれて特に高等女學校、女子師範學校程度の女子諸君の爲に新式の方法を以て講義せられたもので、其特色は第一見地の極めて穩健周到な點にあるので御座いますが、殊に趣味と言ふ點に意を注いで面白く、樂しく、知らず〳〵の間に家政學の新智識を注入し、開發しやうとせられた處に他の人々が又企及する能はざる特色が御座います。即ちその文章は平易流麗で、少しの澁滯なく、又た一々實地の經驗に照して興味ある多くの實例を揭げて直に活用する事が出來るやうに講述されてあります。其他猶種々の長所が御座いますが、今一々吹聽することを廢めて、是れを本書に就て知られん事を希望致します。一度此書を手に入るれば直に理想的の新家庭を作るべき精確周到の智識を得らるゝでありませう。

發行所 東京市京橋區北槇町貳番地 (電本二六二三番) 參文舍
發行所 大阪東區南本町四丁目五〇 (電東三三八四番) 積文社

最新家政學の指導者

(丙の三)


最も愛すべき香料馥郁
やぐまみ石鹸
高評煉香油（水油代用品）
カスガオイル
紳士令嬢貴婦人用として最も上流
社會に歡迎せらる 有名なる小間物
化粧品店薬舗にて販賣す
發賣元 東京橘町 小川潮華園


●（貴婦人令嬢には最も愛せらる）●
白妙は無鉛毒白粉にして
皮膚を艶麗ならしむ
しろたへ
白妙
おしろい
白粉
白妙は他に比類なき最も
佳良なる白粉なり
●（賣捌は有名なる小間物化粧品店）●
東京市日本橋區横山町貳丁目
發賣元 小間物問屋 森本支店

（丙の四）

（丙の五）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムヲスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價） 壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵劵代用貳割增し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體ヶ純白色に變化し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 （電話下谷五四六番）

（丙の六）

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

開館時間

午前八時半より
午後四時半迄

大橋圖書館

麹町區上六番町四三

●觀世流うたひ教授

瓢聲館　土居香海

東京市麹町區有樂町一丁目五番地

生徒募集

高輪裁縫女學校

▲本校は齊家に須要なる和洋服の裁縫、手藝並に諸學科を教授し婦德の涵養に努む
▲本校は家庭的の誘導を理想とし監督嚴也
▲本校は土地高燥、周圍閑靜勉學の好適地なり
▲本校は修業年限二ヶ年（豫科六ヶ月、本科前期六ヶ月、同後期六ヶ月、高等科六ヶ月）を以て婦女一通りの技能智識を習得せしむ
▲本校規則書は御申越次第直に郵送す

芝區日本榎　天神坂上

わぎら

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある**毒素**を深潜腐蝕し惡臭を**根底**より**全滅**せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用ひて苦惱を脫せよ

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

毛のはへる

原名ヘベクネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらる**有力な最新液**にして**毛をはやしたき人**は早く試みられよ●わけ毛落毛を止め

化學製品 効ハントコロン溶液

色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば**主性分の力**に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に**皮膚**を**漂白**するを以て全身次第に**白色艶美**となる男女交際上最も必用の品なり

みやくをとし

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に**流經**す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮**血の道**を治し**古血**を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

メリルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

●專賣　東京本郷湯島四丁目十四　**オリエンタル藥舘**

（丙の七）

登録商標

◉衛生無二殺菌防腐之三種石鹸

消毒 化粧 洗濯

定價
消毒用 金二十錢
化粧用 金十五錢
洗濯用 金五錢

今般弊店創製發賣の**ホルマリン**石鹸ハ現今醫學藥學兩社界に於て無害にして卓絶なる防腐藥として賞用さる丶(**ホルマリン**)を適量を含有せしめたるものなれば其効力の顯著なるハ彼の諸病原菌中に於て最も頑強の脾脱疽菌も本品二萬倍の稀薄液に因て死滅すと日本藥局法註解に下山藥學博士の記述せられ有を以ても明かなり故にシラクモ田虫水虫シツ、ヒゼン、ニキビ、ソバカスの如きハ勿論淋病、癩病、等の諸毒を消し殊に本石鹸の特色は如斯効用に兼ぬるに優美高尚最も世人の嗜好に適する高貴の香料を配伍しあれは其佳香云はん方なく馥郁として使用後と雖ども長く衣体に薫るべし請ふ論より證據御試みありて必ず衛生保健の完全を期せられんことを

官許本舗 東京市日本橋區本町三丁目七番地 登記商號 圓城商店

(丙の八)

新粧



泰西美姫

愛國婦人會新年互禮會



(記本參照)

日本橋婦人會小集



（記事參照）

風景



湖畔の精舎



海濱の朝



海濱の夕

特待廣告に就て
本館雜誌廣告主に告白す

各位平素の御眷顧に酬ひんが爲め、本年より大に廣告歡迎の道を開き、茲に其一端として左記規定の資格ある廣告主に對し特待抽籤券を呈し、以て各位を優遇するの誠意を表せんとす。

一、本館發行の雜誌に**月極め**として**引續き二回以上掲載**せし廣告申込者に、其の廣告料入金**毎拾圓**（菊判は一回半頁以上太陽判は一段以上の廣告に限る）につき**特待券壹葉**宛を呈し、本館が最も公平にして適實なりと信ずる方法に依り**年四回**之が抽籤を行ひ、當籤者には、本館の特待廣告紙上に於て之れが廣告料を**無料**にて掲載すべし。

　但し半頁以上の廣告たりとも行數計算のものは抽籤券を呈せざるものとす。

一、特待廣告の掲載誌は、**太陽、太平洋、文藝倶樂部、女學世界、**の四種とす。

一、特待廣告掲載の方法、廣告の位置及其面積等は本館に於て當籤者の贊同に依り之を定むべし。

　但し其標準は毎一葉の當籤券につき定價金拾圓の價値ある廣告紙面とす。

一、**抽籤**は**年四回**とし其第一回は一月、二月分に掲載せし廣告の特待券に對し**三月**に、第二回は三月、四月、五月の三ヶ月間の廣告の特待券に對し**六月**に、第三回は六月、七月、八月の三ヶ月間の特待券に對し**九月**に、第四回は九月、十月、十一月、十二月の四ヶ月間の特待券に對し**翌年一月**に之を擧行すべし。

一、**當籤**は**毎回二十五口**と定め、第一回は**四月**の誌上に、第二回は同**七月**に、第三回は同**十月**に、第四回は**翌年二月發行の誌上に掲げ**、併せて壹ヶ年**壹百口金壹千圓の當籤廣告**を**無料**にて掲載すべし。

一、抽籤時日は追而本館誌上に公告すべし。

（丁の一）

博文館廣告部

日本女子大學教授鹽井文學士主筆

女子文藝

（毎月一回）（一日發行）

到る所婦人女學生間の讀物として好評嘖々たる本誌第二號の如何に發展せるかを見よ

本誌は多く言はず唯本誌が如何に現今女學雜誌の群を拔いて世人囑望の多大なるかは請ふ全國雜誌界の批評の聲に聞けよ

第二號要目

高雅なる娯樂　坪内逍遙
單獨生活　島田三郎
武士的家庭の遊戲　戸川殘花
家庭教育に就て　湯本武比古
育兒の注意　石原笠軒
家庭の花　松浦政泰
新曲霞姫　鹽井雨江
同樂譜　白井規矩郎
星の話　木暮理太郎

籠の鳥　中村春雨
二十三夜詩　大和田建樹
小川の畔　高濱梅溪
花子さん　西村醉夢
乳母の庵　明石靜江子
和歌選釋　安部鳥橘
婦人論　醉へる人
英會話梅の花　山縣五十雄
紫式部の墓　關根正直

女子文藝　和歌、俳句、新體詩、論說、叙事文、抒情文、書簡文、川柳、一口噺、狂句等

表紙（紫式部　武内桂舟）　卷頭畫（太田三郎）　口繪（彈琴　榊原蕉園）

寫眞版（ヘインス、キング）（下條正雄）　其の他（女子高等師範學校、澁澤伯家庭と庭園、虎門東京女學館）

木版挿繪（數十葉）

定價　一册拾錢郵税一錢　四册前金三十八錢　八册七十五錢　拾六册金一圓四十錢外郵税一錢宛

發行所　東京小石川久堅町　日本葉書會

賣捌　東京堂　東海堂　北隆館　良明堂其他各書籍雜誌店

（丁の二）

(丁の三)

（丁の四）

博士夫人新年互禮會



（記事參照）

口絵 鏑木清方氏畫　田口掬汀著　表紙 平福百穗氏畫

▲大阪朝日新聞曰 一度び巻を繙けば知らずく讀了せしむる感興あり、叙景の筆簡勁にして清楚、節々の波瀾曲折ありて讀者は先づ其景情の變化に眩めく感あるべし吾人は此書を本年掉尾の佳作として讀書界に紹介す▲女學世界曰 作意に於て教訓的意味を含み、波瀾重疊奇趣百出、高潔なる詩趣と場面の變化に富めるぞ嬉し、結構宛ら芝居を見るの心地して芝居よりも面白く無難上乘の佳作(中略)而も文章の洗鍊なる、叙景の巧みなるは感興を引く事少なからず、記者は善良の讀物として此書を家庭の女子に薦む。



後編發賣
前編三版出來

總クロース美本定價各八拾錢
小包料一冊拾錢二冊拾五錢

紳士の讀むべき小説は之なり
淑女の讀むべき小説は之なり
人生に關する詩的教訓書として天下の批評家の齊しく認むるは此小説なり

▲二六新聞曰 慘憺たる戀の苦惱を描出して意志に強き男子が一念の轉機と智に敏き女子が纏綿の情緒と相結び讀者をして殆んど運命の數奇に泣かしめ可憐なる二孤兒の身上に萬斛の涙を注がしむ、此は平凡なる一夕の戀物語に非ずして人生の奇脈を拓ける運命小説なり、斯くの如きは大人讀むべく老母讀むべくまた青年の讀むべき好小説ならん▲新潮曰 小説『伯爵夫人』は人生の尊嚴に對して吾人の理想を向上せしめ、戀愛と友誼との切磋すべからざる美しさに向つて、吾人が感情を興起せしめんとするに似たり。

(其の一)

發賣元　東京神田表神保町 東京堂　同區裏神保町 上田屋

新刊發賣廣告

學生參考叢書

袖珍携帯至便
正價各拾參錢
郵税貳錢宛

◎既刊書目◎

日本地理（全）　志賀重昂君校閲　設樂金三郎君著
物理學（前編）　理學士　林　茂増君著
代數學（前後）　陸軍大學校教授　宮本藤吉君著
植物學（全）　農學士　今村猛雄君著
鑛物學（全）　農學士　今村猛雄君著
國文典（全）　哲學館大學講師　三石賤夫君著

東洋史（全）　文學士　丸井圭次郎君著
化學（前後）　理學士加納清三君共　理學士小林盈一君著
外國地理（前編）　哲學館大學講師　三島定之助君著
地文學（全）　理學士八巻準次君共　設樂金三郎君著
漢字異同辨（全）　哲學館大學講師　安藤　弘君著

以上の外各科目續刊

中學校、師範學校、高等女學校等に在學せらるゝ學生諸君が、日常及ひ受驗準備用の寶典たるべき、學生參考叢書は、專攻にして中等教育に教鞭を取らるゝ諸先生の筆に成れる者なるが故に、能く要を摘み、精を蒐め、説明は懇切、文章は平易、加ふるに冊子は小にして携帯に至便、體裁は雅にして製本は堅牢、之を繙かば必ず滿足を表せらるべきを確信す、彼の滔々世間に流布する同種の書と玉石混淆すること勿れ。

發兌元　東京本町　博文館　東京神田　東京堂

（戊の二）

醫學士 石原弘君著

醫學新書 人體解剖學 （中卷）

二月中旬發行

我國人體解剖學を講ずるの書二三先輩の者あるも概ね十數年の刊行に係るを以て現時の趨勢に應ずる能はざるは刀圭社會の至憾とする處なり編者玆に見る所ありて本書を公にす、而して本書は主としてゲーゲンバルウル氏の分類に從ひ、學名術語は必ず羅甸若くは獨語を併記し主として新名稱に據れり、且つ精巧緻密なる要圖は毎節に挿入せり

洋裝脊皮總クロース
紙數五百頁
正價金參圓
小包料拾五錢

中卷目次

▲人體解剖學 上卷 洋裝脊皮總クロース頗美本 正價金參圓 小包拾五錢 （既刊發賣）

下卷 近刊

（戊の三）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(戊の四)

跡見女學校新年會の一部



陸軍省御用木杯

木杯 銀杯

定價表

御入用之節ハ御送附可仕候

東京市日本橋區室町貳丁目

漆器 蒔繪商

木屋本店 林九兵衛

電話本局 特 九九七 一七一〇



○外部徽防ゴム製

婦人の衛生器現れたる



子宮サック

定價 一個

甲種 金壹圓

乙種 金七十五錢

子宮サック 効能及使用方 一名さよごろも

子宮サック はゴム製にて嶄新の發明御婦人方の衛生上必ず捺ふべき要用の良器なり子宮サック を用ゆるときはいかなる場合といへども黴毒淋毒下疳等の傳染することなく又子宮を汚傷する患なし子宮サック は懷妊を忌む御婦人は用ゆべからずこれを用ふるときは懷妊せざればなり子宮サック は月經の際綿水の溜洩を防ぎ立居を便ならしむ子宮サックの使用方は本品を添て委細解說すべし

○子宮サック入用の御人は御注文次第東京市内は無過送料にて御届申上候其他地方は郵送料一個に付金十錢にて全國何處を問はず御郵送申上候

東京兩國米澤町二丁目一番地角

月やくはらい 通經丸本舖

子宮サック 發賣所 萬珠堂藥舖 電話浪花一一三八

特約大販賣所

東京々橋區銀座通、一 吉田安五郎

東京日本橋區坂本町角 佐々木立兵衛

東京日本橋通四丁目 德田多助

東京日本橋通二丁目 津村順天堂

東京日本橋通二丁目 北島茂兵衛

大阪道修町一丁目 安發郎舍

大阪高麗橋一丁目 松尾商社

京都四條新町 武田部店

京都三條小橋 大庭路盛堂

幼年畫報

發行元 東京 博文館



第二號 二月五日發行

記事

▲鬼拂ひ（サ、ナミ▲寫眞の説明▲山と川▲ゆき▲風の神▲まゝごと▲お獅子▲おなりさん▲お池の人形等學事遊戲等について、面白い説明があります、挿畫は例に依つて桂舟、永年、竹舟の諸氏の筆になる、面白いこと此の上なし。

さあ〳〵皆さん御覽なさい、今度御存じの當館より皆さんに第一等のおなぐさみ、第一番のお友達として幼年畫報といふ、日本に是迄類の無いごくきれいな、ごく面白い繪雜誌を發行しました、定價は一册拾錢で、どこの雜誌屋でも、どこの繪雙子屋でも賣つて居ます、品のなくならぬうちに早く買つて御覽なさい、さあ〳〵評判〳〵

本年創刊●毎月五日發行●菊判美本
本文石版極彩色刷及活版彩色寫眞入

正價 一册拾錢●六册五拾六錢●十二册壹圓拾錢▲郵稅五厘宛

太陽臨時増刊第十二巻第三號

博文館編輯局編纂……二月二十日發行

明治史第四編 産業史

全壹册太陽判
寫眞口繪廿頁
本文二百五十餘頁
正價金參拾錢
郵稅參錢

（巳の四）

明治年間の　」は驚くべき發達を爲したり。舊時代の産業組織は變革せられて、新時代の産業は急激に勃興し、國家の富は之れが爲に增加し、國民の生活は之れが爲に高度の上進を示せり。特に日清戰爭に依て導かれたる戰後經營と共に各種の産業は頗る面目を改め今や日露戰爭の結果として更らに産業の一大變遷期に入らむとす。此時に當り明治の産業史を知らざれば決して未來の産業政策を談ずる能はず、又戰後經營の事業を語る能はず。一般の國民も亦産業の前途に對して茫洋の歎あらむ。是れ本館が玆に太陽の臨時增刊として産業史を編纂する所以なり。明治の産業は明治初年より明治十四年までを第一期とし、其以後日清戰爭までを第二期とし、日清戰爭より桂内閣成立までを第三期とし、其の以後を第四期と爲す。本書は此の四期間に起れる政府の産業政策及び各種産業の變遷發達を叙述して頗る簡明精確を得たり。苟も産業に從事するもの若くは産業政策を講ずるものは本書を一讀して必らず大に啓發する所多かるべきを信ず。近來新刊の著書汗牛充棟啻ならずと雖も、明治の産業に關する著書は一も之れあるなし即ち本書は天下一品の有益なる著書と謂ふも可ならむか。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

軍人遺族授產會役員



前列右方　村井母堂　伊東子爵夫人　千家男爵夫人　江副夫人　齋藤夫人
中列　黑木大將夫人　森村夫人　高橋夫人
後列　岡田夫人　清浦男爵夫人

（記事參照）

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢　束修四拾錢
○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）

○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）附錄機關雜誌「なでしこ」

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢　束修貳拾錢
○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下貳卷迄發行　入會の好時機

東京麹町區下三番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

（其の一）

(其の二)

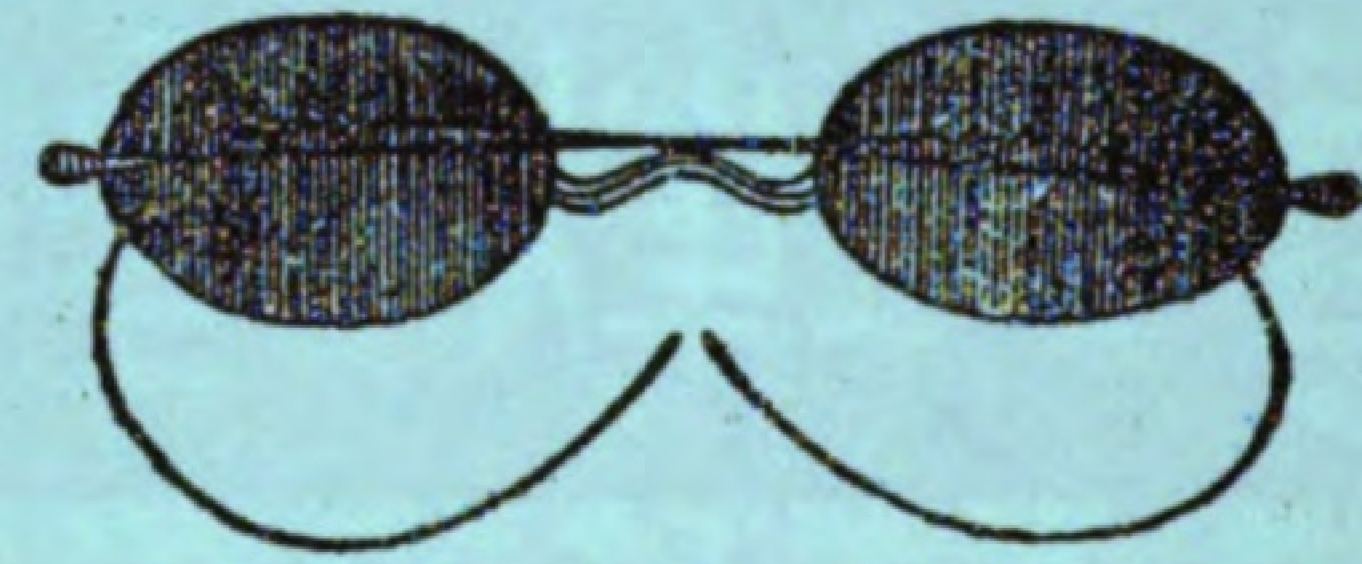
挿花と茶湯





女子大學校生徒の禮法稽古

金銀縁眼鏡



蔓掛

廿二金壹匁四分附十貳圓也
廿金壹匁三分附十圓五十錢
十八金壹匁二分附九圓拾錢
十四金壹匁壹分附七圓七錢
十二金壹匁附六圓十錢
九金九分附四圓八十錢

縄蔓掛

廿二金貳匁附十六圓四十錢
廿金壹匁八分附十三圓九十錢
十八金壹匁七分附十二圓廿錢
十四金一匁六分附九圓六十錢
十二金壹匁五分附八圓廿錢
九金壹匁三分附六圓二十錢

半掛及差込

廿二金三匁三分附十八圓廿錢
廿金貳匁貳分附十六圓廿錢
十八金貳匁附十三圓七十錢
十四金壹匁七分附九圓八十錢
十二金壹匁六分附八圓四十錢
九金壹匁五分附六圓六十錢

銀蔓掛　壹圓五十錢
同鼈甲附　壹圓六十錢
銀縄蔓掛　壹圓八十錢
同鼈甲附　金貳圓也

◎注意

度附玉は遠視何度近視何度ト御申越ヲ乞フ

右の外御好み次第調製可仕候金質は金性の刻印を捺し確實なる保證書相添萬一相違等有之候節は他品と交換又は原價を御返戻申すべし

美術貴金屬細工及袋物　東京市京橋區南傳馬町三丁目

丸屋商店　電話本局二十番

女醫學生募集

來ル五月一日ヨリ新學期ヲ開始シ生徒百五十名ヲ募集ス入學志望者ハ來ル四月廿日迄ニ入學願書差出サル可シ
監督寄宿舍ノ設ケアリ嚴重ナル監督ヲナス規則書郵券三錢ヲ要ス

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所



全國各藥店にて取次販賣す

(辛の一)

日露戰史

四六判二倍（太陽同形）毎卷本文二百餘頁寫眞版二十頁毎月二回發行

正價一冊參拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓廿錢▲郵稅一冊貳錢五厘

日露の戰役は、世界稀有の大戰、我國開國以來の大事變にして、其陸海軍連戰連勝の偉勳は、有史以還實に比類なきなり。此の戰後の經營は、時々の新聞雜誌に於て斷へず之を報道せしも、常に軍機の秘密に拘束せられ、僅に公示して差支無き皮相の外は全く其骨髓を除かれたり。今や戰役終を告げ、陸海各軍の幹部は陸續凱旋せられ、加ふるに各軍從軍の操觚者も、皆な歸朝し、完全なる戰史を編述する資料と著者とは具に備はれり、此に於て各軍從軍記者の俊秀に請ひ各軍の記事分擔を托し、開戰前の外交始末より、開戰以後の戰鬪經過と、各軍隊の勇戰奮鬪、後方勤務の辛酸勞苦に至るまで、細大漏さず、系統的に編述し、以て天下後世に傳へんと欲するもの即ち日露戰史是なり、憂國の諸彥世の一時の群小戰史と同視するなく、各自一本を藏して明治聖代の紀念とせられなば本館の望み足る矣。

◎第二卷 二月五日發行

▲第二軍の前進

博文館從軍記者 田山錄彌君編

本文貳百餘頁
寫眞版口繪二十頁

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（辛の二）

高等女學通信教授

大日本淑女學會

△貳ヶ年卒業△講義錄月刊一冊參百頁△講義平易懇切△講師は専門の名家△會費低廉

目下入學の好機　詳細なる規則は申込次第進呈す

（辛の四）

本會講義錄之批評

△報知新聞評　高等女學科の全學科をば知名の女子教育家が講述せるもの也、平易と懇切とを主とせるものなれば、何人も難解の慮なかる可く、各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど、講述者の苦心を見るに足る、且つ有益なる科外講話の外に『姫百合』と題する五十頁の附錄あり、博士學士の婦人に關する評議史傳衛生家庭等の文學を掲載して、一面雜誌の觀を備ふ、卷末更に田口掬汀の『學者の妻』といへる面白き小説あり。凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する書斯くの如きは稀なりと云ふ可し。

△中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

△毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せる者、文學平易説明懇篤を盡くせり

△朝日新聞評　女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義錄を發行せり

△二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

△日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

△都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

△貿易新聞評　從來の講義錄中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大冊子なり

東京神田南甲賀町十番地
（電話本局三千四番）

◎大日本淑女學會◎



女學世界

第六卷第參號

(二月五日發行)

學校と家庭

家庭と學校とは極めて親しき關係をもてるものゆゑ其の敎育に至りても場所こそ異なれ目的とする所は同一のものなり、されば若し家庭の敎育行届かざるに於ては學校の敎育も又思ふ通りに進步を見ざるものなり世に小兒を持てる母親はよく此の理を合點して、其の小兒に十分なる家庭敎育をして、他日學校敎育の効用を見る樣にせば、其小兒の學問の進步も一層早かるべし。

時論

婦人界の新發展

江原素六

私は從來靑年と曰ふ時に、必ず若い女子をも含ませて曰ふて居る。人間の半分は男子であると同時に、他の半分は女子であるから、各々人類の事業の半分づゝを、銘々の特長に從つて選み取り、之を分擔すべきである。是迄の日本の婦人の樣に、中等社會以上は、遊藝を弄する位が精々で。殆ど徒食の姿に成つて居るのは、大なる間違であらうと思ふ。

嘗て佛國が戰敗の結果、五十億の償金を支拂つた時、其支拂ふべき金を作るに當つても、其後其瘢痕を癒やすに當ても、佛國婦人の力が甚だ偉大であつたことは、有名な事實である。大戰爭の後を承けた我邦も、亦大に婦人の力を假らなければ成らないので、手近い一例を擧げれば、良人が勤儉貯蓄の必要を感じて、よく勤勉に己の職務を盡し、平常以上の收入を得て來たとしても、家庭の經濟を掌る細君が何の考へもなく妄りに金錢を使ふ樣では、幾年經つても其家庭に貯蓄の出來る筈はない。現今十九歲以上の靑年が、全國を通じて一千萬

人居る。此の一千萬人が悉く心を一にして、積極的に働き、消極的に節約することに成れば、一年で二億や三億の錢を生み出すのは。譯もない話である。

戰後の急務は、こればかりでない。先づ國民の品性を高めると同時に、偉大な人物を出さなければ成らない。國民の品性を高めるには、勿論教育の力を假らないではならぬが、其教育は、學校教育と同時に、一半を家庭の教育に依らなければ成らないのである。嘗て貴族院で、帝國大學から人物の出ない事を攻撃した時、時の文部大臣(菊池大麓君)は、大學は學問の樞府で、人物を養成する所ではないと言はれた事がある。然らば大學は英雄豪傑の養成所ではないかも知れぬが、家庭だけは必ず偉人の出所である、如何なる偉人も家庭から出ないものはない。而して此の家庭なるものは、言ふまでもなく婦人の下に附屬して居るものであるから、婦人が其家庭を善良のものにするか否かは、直に國民が美事なる發展をなすか否かと云ふことに關係するのである。例へば英國民の家庭が、世界に於て最も善良なものゝ一に成つて居るのは、則ち英國民が全世界に到らぬ隈もなく行渡つて大なる勢力に成つて居る所以ではあるまい歟。然らば國民の品性を高め、偉人傑士を輩出させやうと云ふには、何は兎もあれ、首として婦人諸君に努力して貰はねば成らないのである。

嘗て成瀨仁藏君が女子大學を建てる時、帝國ホテルで贊成演說をしたのは、私と大隈伯で、其時も言つたが、男子ばかり如何に見事に發達しても、女子の教育が伴はない時は、功用をなす事が少ない。私の親共は嘗て鷄を飼つて居た。此の鷄が時々垣を越えて隣家の花圃を荒すので、親共は高い垣を造りましたが、鷄は矢張り飛越える。其處で今度は兩方の翼を短かく切り取り、これでこそ大丈夫だと安心して居た所、其短い翼で又々依然と飛び越えて行つた。然るに或日一人のクリスチャンが來て、一方の翼だけを切つて呉れたのである。すると、他の片方は可なりに長かつたであるが、鷄はばた〳〵やるばかりで最早少しも飛び上ることが出來なかつ

た。是と同じ理屈で、男子ばかり如何に見事に教育され、如何に見事に發達しても、他方の女子が教育も活動も之に伴はない時は、社會は如何に高尙雄大な希望を持つて居るとも、光輝ある文明に向て飛翔することは出來ないのである。のみならず、男子と女子とは、理性の根底が異つて居るから、これでは圓滿な家庭も得られないのである。其故教育で智識を進め、宗教で信仰を堅め、兩性相輔けて、徐々と理想に向つて進まなければ成らない。

西洋の或教育家は、人は五歳までの幼年時代を善良に養育すれば、其れからは何う云ふ所へ行つても差支へはないと曰つた。ナポレオンも、佛國の帝位に在つた時、一大臣が、功名輝くばかりな陛下の兵學校時代は、能く存じて居りますが、何時の間に陛下は、政治の方をもお學びに成りましたかと尋ねると、極めて眞面目に、我が母の家庭は、嚴然たる秩序を以て何時も規則正しく整理されてあつたので、一國の整理に就ても、大に我が母に習ひ得る所があつたと答へたさうである。此等を觀ても、偉人の出所が必ず家庭であることは、明かである。斯く家庭は大切な所であり、家庭の教育感化は、斯く重要なものであるから、戰勝國として世界に耻ぢない發展をしやうと云ふには、第一着に善良な家庭を作らなければ成らない。又此の家庭の司權者であり、偉人傑士の母である女子の教育を、大に發達させなければ成らない。

母親を教育すべし

獨逸協會學校々長　大村仁太郎

近來女子教育が著しく發達し、取分け女子の職業、技藝、學術などが、益〻盛に成つて來たのは、何より結

構の事であるが、此際特に希望することが一つある。其は新日本の要素に成る兒童其ものゝ養育所である家庭、其家庭の主權者である處の母の敎育である。

若い女子を敎育する機關には、高等女學校もあり、家政學校も、職業學校もあるが、今日既に母と成り居るものに然るべき學術を敎へる所は、まだ我邦にはないのである。二十世紀の活舞臺で花役者になる第二の國民を養成しやうと云ふには、先づ母を養成することが必要である。今後文化を進歩させるには、矢張り母の力に由らなければ成らないのである。然るに近い將來に母に成る高等女學校の生徒は格別として、目下既に母に成つて居るものには、適當の敎育を受けないものもあり、相當の品性を缺て居るものもある。歐洲では母の學校と云ふがあつて、母が一週に三時間なり、五時間なり出席して、家政やら、育兒上の實務やらを習ふことに成つて居る。我邦でも斯う云ふ事が望ましい。

其上我邦で、今日高等女學校邊で敎へて居る所は、餘り文明的に流れ過ぎて、却て實地に適しないと云ふ傾きもある。高等女學校で敎授する學科目は、必要でないものは勿論あるまいが、一旦學校を出て、海老茶袴を脫ぎ捨てると、儘に頭腦を惱まして覺えたものは、大方之を忘れて仕舞ひ、僅かに其殘つた糟の部分だけが、少し役に立つと云ふ樣な姿である。こんな有樣では、新敎育を受けたと曰つても、母の任務を全くすることは出來ないのみか、妻として必要な勤めも全くは出來ず、一家庭に主婦たる資格は六づかしいものである。況して子供でも出來、學生氣質のまだ取れない新細君が、俄然母に成ると云ふ段に成れば、所謂第二の國民を育成する大責任は、其双肩に懸つて來て、事が一層容易でない。此點から考へると、今日の高等女學校學科目の中に、妻としての任務や、母としての任務を學ぶことをも、加入して欲しいのである。

元來婦人の天分は、人の妻に成り、母に成るのに在るのであるから、婦人は宜しく之に相當する敎育を受け

なければならない。若し此種の敎育を受けず、子供が生れてから狼狽する樣では、實に己の天分を忘れて居るものと謂はなければ成らない。

　或は子を產めば、之を育てる人の本能(インステンリ)と云ふものがあるから、其本能に任せて置けば善い、泣く時に乳を與へれば默ると、事もなげに言ふものもあるが、親に敎育があれば、其子が無敎育者の子より成績の善いことは事實である。小供の敎育と人物の如何とは、殆ど其親の敎育程度如何に比例すると謂つても宜しい。敎育は小供を學校へ遣るばかりが敎育ではなくつて、むしろ敎育の根底は家庭に在るのである。小供の美德と云ふものは、其の五六歲に成るまでに家庭で芽を植ゑ付けられるので、學校は唯其先を助長するに過ぎない。從て人の天性とも言ふべき部分を作る責任は母にあるのである。母に敎育がなければ、迚も立派な人物は作れない筈である。

　現今の我が婦人社會を見るに、母として立派な敎育を受けた人も勿論あらうし、又善良な母も勿論あるが、悲い哉其多數は決してさうでない。聊か事々しい樣ではあるが、こゝに母の敎育と云ふことを絕叫する所以である。

　然らば其れなら何う云ふ方法手段を以て、母を敎育すべきかと云ふ實際問題に入らなければ成らないが、つまり歐洲の母の學校に倣ふより外はあるまい。日本でも母たる人が、料理や、挿花、音樂などの稽古はするが、其れを止めても、是非遣つて貰ひたいのは、母たるに必要な智識を求めることである。之が爲め母の會を立てるのも好い、通信講義を讀むのも好い、或は各學校で、母の行くに都合の好い樣時間を設け、一週に一度でも三度でも、晩方など家庭に差支へのない時を選で、講話を聽きに往くことの出來る樣にするのも好い。中には家庭が忙がしいから出席されぬと云ふものもあらうが、兒童の未來を思へば、小少の所は繰合せて出席すべき

である。

其れから家庭に於ける母の務は、子供の衛生、敎育、衣服等、いろ〳〵あるが、此等は從來の母も皆知らない事はない、唯精神的方面の智育には全く乏しい所があるから、自分は先づ此の方面に新しい發展を見るやう致したいと思ふのである。

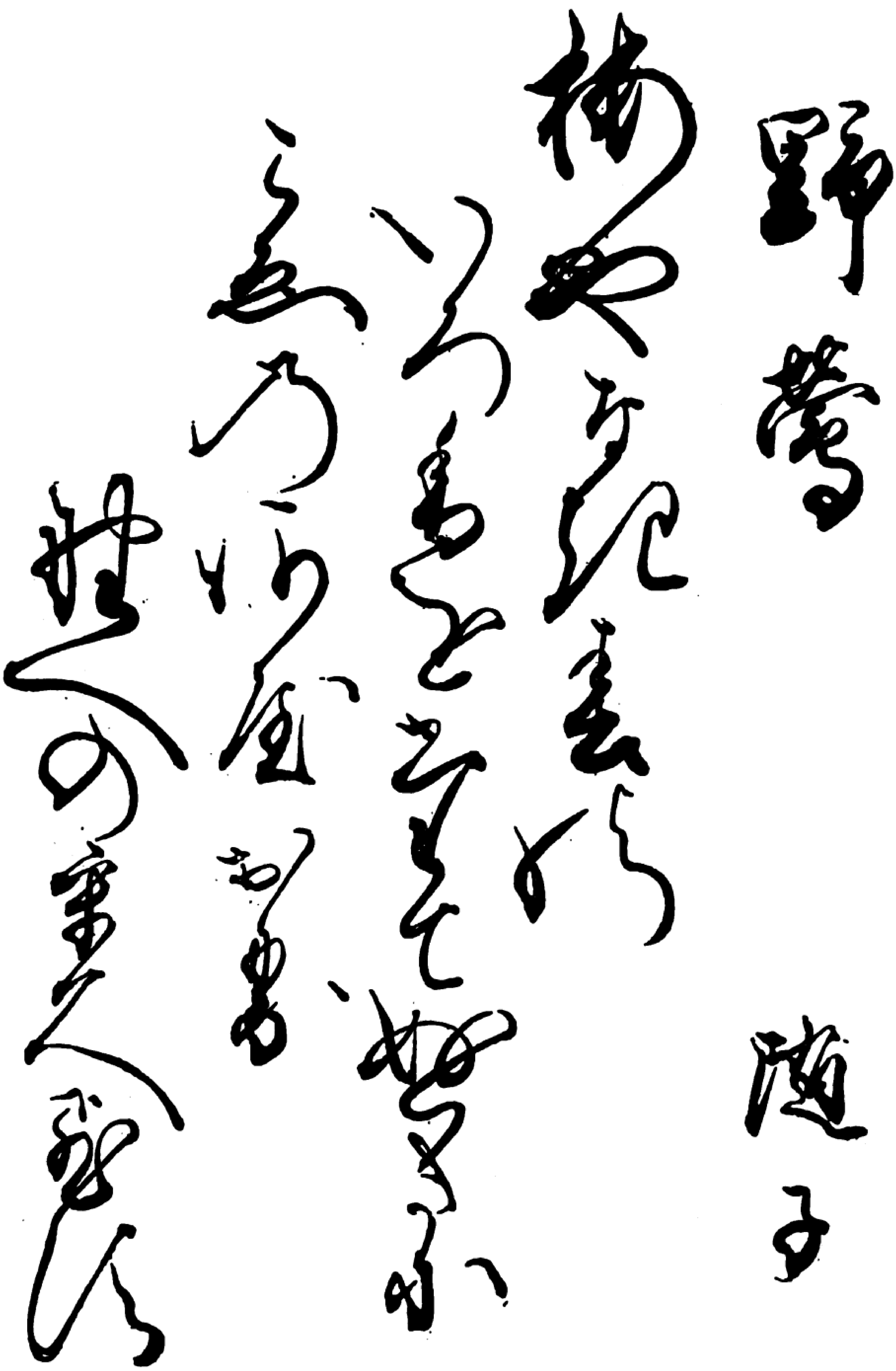
女子の遊學（下）

塚本はま子

○寄寓する家

さて遊學の目的も立ち、女學校の選擇も出來たとして、其の次に必要な事柄はまづ寄寓する家を考ふべき事です。よしや學校の敎育は完全で、監督は十分に、風儀は最上とした所が、これは僅かに一日五六時間の授業を受ける所たるに過ぎませぬから、その他の十八九時間を過ごすべき寄寓する家庭の善惡は、大した關係をもつものです。責任を持つて監督する人のない家に居る女學生の處へは、よからぬ男子の學生や好ましからぬ女の朋友がより集まるもので、遂には地方から出た質朴な女學生が知らず識らずの間に、浮華極まる惡風に化されてしまうのは、決して珍らしい事實ではありませぬ。地方のお方などでも東京の下宿屋のよくない事だけは大概お分りになつて居ますが、素人下宿といふものが、それにも增して一段ひどいものだといふ事に、お氣がつかぬのは歎かはしい次第です。勿論素人下宿屋には多數の室を有つてゐて、男女學生をたくさん集めてゐる

蜂須賀侯爵夫人筆





名流筆蹟

ものは少いですが、いくら一つ屋の棟の下に一所に居らぬからと申しても、朝夕出入りを自由にして居れば、却て壁一重を城廓として居る下宿屋よりは、弊害が多いわけですし、又下宿屋の立派なのになれば、衆人環視といふ傾があつて、割合に秘密が行はれ難いのですが、素人屋になれば、お神さんに少し袖の下をつかへば、大概なわるい事も他に洩れる氣遣もなく、又田舍から兩親が時々監督の爲に上京したとしても、十分安心をして歸へるやうに仕向ける事なども容易いのですから、その點に於ては私は却て危險は素人下宿屋にあると思ひます。そしてまたよしやその素人やが極上等な堅氣な人達だとしましても何も自分の身よりではなし、いはゞ一家の經濟上から、かし間や賄をしてゐるのですから、その借間人のお孃さんの所へ、どんなお客があらうと、乃至その女學生が、どこにでも出歩くとしても、或は怪しげな郵便物がくるとしても、何も責任がないのですから、なるべく知らぬ顏をして、その御機げんのよいように取り扱ふのが利徳だとおもひ、輕薄な口の一つも餘計に利く位がおちですから當人はこわいものなしで、愈々暗黒な方面に沈み行くばかりです。かくして遂にはお神さんの入智惠で、親をだまして過分の送金を請けたり、學校を變更したり、いろ〳〵な惡事も行はれて行くのですから、まづ寄寓する家は十分撰まねばならぬのです。さてどんな所ならば、安心かと申すにこれは實に困つた問題で、實はこの廣い東京しかも女子敎育が盛んだといはれる、明治の昭代にも、まだ安心して妙齡の女子を托すべき寄宿舍はないのです。今の所まづ家庭の正しい商賣氣のない（よしや商人でも女學生の宿をして金儲けをせうといふ心のない人）そして田舍の自分の家と日常の生計が大した相違のない堅氣な家を選み、寄寓と監督とを倂せて賴み、時々その狀況を聞く爲には、別に保證人とか保護者とかいふ名義で、女子敎育の方面に暗からぬ老功の人を賴んで、時々學校の成績や、日常の風儀を十分にみて貰ふのがまづ安全に近い道です。もしも女子の敎育家が家庭に寄寓をゆるすといふやうな人でもあつて、監督と寄寓とを同一に托する

事が出來れば、最も安全とおもはれます。

猶一つ申しておきたいのは實父母の膝下で勉學をして居る人、或は伯父伯母とかその他十分監督の責任ある人の家にゐて學問をして居る人もその監督者が敎育上の事がらに疎いため、危險な事を知らずに看過して居るのが珍らしくありませぬ。例へば詠歌とか、英語とか、若しくはバイオリン、繪畫といふやうなものを、學校以外に學ばせる爲、年若な獨身の男の先生が下宿して居る所へ通學させるのを見る事があります、これらは實に不注意でたとへ、幸にして何事もないとしても、大切にすべき婦人の節操を自ら粗末にすると申すものでしよう、「自ら輕んじて後人これを輕んず」とか申しまして、人の輕蔑を受け、玩弄物視されますのも自業自得と申さねばなりませぬ古い諺ですが「君子は危きに近づかず」と千古の確言です。

○交際する社會

人は社交の動物であつて、われ〳〵の智識も社交上の見聞から得るものが十の八九で、世間の狹い人は役に立たぬ人、目先きの利かぬ人、といふものはみな廣く他人と交際をせぬ人です。早い話が外國婦人のよい處と日本婦人のわるい所とは交際の廣いと狹いとがよほど關係をしてゐます。併し又交際は必要な事といたしても無暗に若いものがどこへでも頭を出して交際をしてはいけませぬ。外國でも娘を交際社會に出すのには、母親が十分監督をして、連れて歩きますといふ事を聞いて居りますが、地方からでも出られた女學生で、物珍らしさに行きなりいろ〳〵な所へ出て趣味や慾望の高いやうな、卑しい社會の男子や女子と交際をし其風を見習つて妙な髮に結つたり變な歩きかたをしたりするのを眞似ますと、夫れこそ報知の食道樂續篇でみる、お代孃のやうなのが出來上ります。極端に書いてあると、いかにも滑稽で、そんな人は生きた人間にありそうにもないで

すが、實際本郷邊から小石川邊を日曜日に通つてみますと、小お代嬢、擬お代嬢が幾人か恥かしげもなく、通るのを見て、おもはず弦齋先生の社會觀察に肯かれて寒心する事があるのです。それに猶更恐ろしくおもはれますのは、音樂會や、寄席、劇場などに誘ひやつて、若いもの同志が遊びまはるとか、公園の散歩郊外の散策名は如何にも高尚らしいですが、その實監督する者もなしに、若いものが一所に遊ぶのですから結果のよい筈はありませぬ。假令へ取り立てゝいふほどの惡い事がないにしても、かやうな交際をしはじめた、女學生は始終そは〱として、學藝の出來たものも、急に出來なくなり、妙にはしやいだり沈んだりして、常識を失つたやうになるのが多いですから、監督者は初めから、十分に信用のおける女子の朋友の外、無暗に交際をさせてはなりませぬ。

ことに注意せねばならぬのは、冬休とか夏休とかです。こんな時には誰れでも、氣がゆるんで遊びますからつひつまらぬ交際もするやうになります。歌留多會に朋友にさそはれ、知らぬ家で夜明かしをするなどは、淑女のすべき事でないのはいふまでもありませぬし、歸省の途次、汽車汽船で道づれになり、新聞の貸借や荷物の世話などの事から懇意になり、身元も知らずして、交際するやうな事も稀でなくそこらからとんだ災難にあふ人もあるさうです。かやうな時でも日本婦人の見識が高くて知人からの紹介もない男子に、物をいひかけられたのを、笑顏をして返詞などする事がなかつたら間違も少ないわけでしよう。こゝらはまづ精神教育の缺點とでも申すのでしやう。よし長途の旅行でなくても、電車で乘り合はした人や、往來ですれ違つた人、いはゞ素性の知れぬ人間に話しかけるべきでないのはいふまでもなく、又話しかけられても、なるべく相手にならぬやうにすべしです尤も老人や小兒に道を聞かれたり、地方からでも出たての人に、物を尋ねられた時などには十分親切に敎へてやらねばなりませぬが、若い男子などには紹介のしてがなければ決して話をせぬといふ見識

をもたねばならぬのです。さてお話が横道に外れましたが、休暇中海水浴や温泉に出養生をしたり、又は歸省中東京の人戀しい折から、つまらぬ男子と交際を結んだのが始まりで身を持ち崩す者も少くありませぬ。もと海水浴場や温泉場といふものは、總てが無聊に苦しんでゐる時で、いはゆる「小人閑居して不善を爲す」とかで心の定つたものですら、とかく豫定通りの勉强が出來なかつたり、不斷爲きたりの規律をくづしたり、するものですから、まして年若な世間見ずの、好奇心の盛んな女學生には、十分な監督者があつて常に傍を放さぬほど注意をしてくれませぬならば、安心は出來ませぬ。海水浴や温泉で、身體だけはいかに壯健になりましても肝心の精神が不治の病氣にとりつかれては、何の役にも立ちませぬ。いかほど自信力が強く、人はとにかく自分ながら、どんな墮落した女學生の仲間にはいつて居ても、又は男子と自由に交際をしてゐても、大丈夫とおもふ方でも誘惑といふものは、恐しいものであるといふ事だけは信じてその誘惑に出遇ぬやう、誘惑の乘ずべき機會を與へぬやう警戒するのが肝要です。それ故たとへ休暇中でも、監督者なしに我儘な生活をしてはなりませぬ。

○女學生諸姉に告ぐ

以上述べた所は當地で、女子敎育家がよると障ると心配して常に口にのぼる話柄のかたはしで、實際はこれ以上、これ以外に憂慮すべき點が多く、こゝに擧げたのはその百分の一にも萬分の一にも足らぬほどです。併し私はそれを悉く記載する事をもたぬのみならず、實は書く勇氣がないのです。去年八九月頃の本誌を御覽のかたは、既に御承知の事でしやうから今更隱しだてては致しませぬが、自分は去年四月一日から、十月廿七日頃まで、丁度半年ほど此の頃監督官廳から閉鎖の嚴命に接したとかいふ事が新聞にみえました、日本淑女學校に

關係して居たのです。始めは生徒のかた〴〵と情誼が深くなるにつれ、どうかして一歩でもよい方に移りたいと、種々盡力もしましたが、夏休の後からは到底自分の微力では、この女學校を管理して、よい教育を施して行く事は出來ぬとあきらめねばならぬやうな事情を認めましたので、遂に十月廿七日に講師がたの集會を開きその席上で明かに自分の意見を述べ、翌日校長小杉榲邨先生のお跡について辭職してしまいました。實はかやうな敗軍の時ですから、皆樣にお話するのも心苦しいですが、この苦心經驗から日本淑女學校に似て居る多數の不完全な女學校の散在してゐる東京市中を見渡しますと「女子の遊學」といふ問題がまことに氣になり家庭と女學生とに一言注意しておきたいといふ念が禁じられませずに筆を採る事となつたのです。今も念頭を去らぬのは氣の毒な運命にあつた同校の女學生たちです自分はめでたき新年にもたゞ不吉の涙をこの人々の爲にそゝいでゐます。世の女學生諸姉よ、東都遊學をおもひ立たれたならその目的をたしかに定め學校の選擇を鄭重にしよき寄宿所を得、よき監督者を得た後に上京したまへ。私は筆をさしおく前切にお勸め申しあげます。（完）

日本人と洋食作法

某ホテルの主婦日本人の洋食作法に就て曰くどうも日本の方が食事を爲さる時は緊張り過ぎる樣に見へます、宅に御出の御客に付て經驗して見ると殆んどどの方もそうです假令ば肉一皿が出ると一口に大きく切つた一片を口に御入になります、其れだから人に話しかけられるとモグ〳〵して返事は出來ぬ事が多い樣で御座います、其れですから洋食の爲めに却つて腸胃病等を引き起す事がありませんかと存じます、即ち良くかまずに呑下なさるからです、又此等は全體見苦しふ御座います、是は多分日本の方は米食を爲さるから一口に澤山口の中に入れる習慣より洋食に付ても同じくなりしものと思ひます、其から宴會の時の如きは中には恐ろしく澤山食べる方があります、而も始めの料理を澤山に食べすぎて後になると満腹して折角の料理も味を見ないと云ふ事がありなさる樣です是は宴會に御出になるとき空腹にしていらつしやるのではないかと思ひ升、外國では宴會に來る前には玉子焼きなりメン一切れなりを食して多少共空腹にならぬ樣にして來ます、其ですからガツ〳〵しません云々と參考すべき言なり。

實務

女子と實業

女子大學校長　成瀨仁藏

既に平和の克復された今日は、平和的事業が愈々口の時から手の時へ移つたもので、議論より實行にかゝらなければ成りません。女子大學などでも、櫻楓會の社會部（櫻楓會は、社會部、家庭部、敎育部の三に區分されてある）に、實業部と云ふがあつて、實行に注意をして居ります。して其實業部は、商業部と消費組合とに分れて居る。

今日女子大學の寮生即ち寄宿生は、七百五十名ありますが、其消費する金高を假りに毎月一人五圓半と見て、一ヶ年五萬圓、之を一切實業部で取扱へば、平均一割の利としても五千圓に成ります。此の半分を生徒の利得とし、殘る二千五百圓を寮の所得にして積立て居ります。其上目下實行しつゝある牧牛、園藝、野菜等の方面よりも、相當の利益は還入る。現時在學の生徒千三百餘名の學費は、すべて銀行部で預つて居て、其都度隨時切手を出す樣にしてありますが、斯くして實地に利子が斯う／＼の結果を生じて、斯う云ふ性質のもの、賣買は斯うであるから、經濟上に何う影響すると云ふ樣に、詳に敎へる事が出來て居ります。

凡そ世の中に働くと云ふこと程大切な事はないと云ふ觀念を十分に起させ、永久に持たせる爲め、やがて

一家庭の主婦に成つた時のため、勞働の神聖な事をよく呑み込ませねばならないから、華族の愛嬢でも、或程度の仕事は、必ず取らせてあります。斯うして勞働が分配と成り、分配と成つたものが更に貯蓄と成り、貯蓄か又一轉して、種々の有益な事業に出資されると云ふ、此等の順序と共に、其根源たる勞働の貴重さを、胸底に深く實地から植込で置くものであります。

兵の戰は、立派な勝利を以て既に終了したけれど、第二の戰爭なる平和の商戰は、今後に於て一の大發展を見るべき譯でありますから、此には女も男も、老幼までも加はつて、各自が大に努力しなければ成りません。而して兵の戰で得た所の利益と名聲とを、十二分に活用し、尙一層非光を發揮しなければ成らないのであります。平和の戰に負ければ、兵の戰に負けたと同樣、遂に立つべからざる悲境に陷るかも知れません。

此の平和の戰に於て、之が最大の武器たる資本は、最も之を巧妙に且つ大切に使用しなければ成らない。即ち費用を出來るだけ節約して、財貨を上手に使ひ、私欲の爲に徒費することなく、國家の爲めに使用する樣にしなければ成らないのであります。元來金錢の費用消費は、家庭に在ては、女子の役目に成つて居りますから、女子たるものに、節儉の念を抱かせるのは、甚た善い事であらうと思ひます。勿論金錢ばかりではない、時間をも節約して、成るたけ有益に之を使用することを習はせなければ成らないのであります。

日本の今日は、商工業的時代の紀元であり。敎育には、第一道德的敎育、第二科學的敎育、第三經濟的及國家的敎育の三通りありますが、現今の日本では、第三の敎育が最も缺乏して居て、就中女子には殆と之が見當らない程であります。其故是からは、第三の敎育に最も力を入れ、女子に經濟思想を持たせ、同時に女子も亦一個の國民であると云ふ事を腦中に銘記させ、さうして活動の上に此の意思のある所を發表させなければ成りません。遠からず母たるべき女子の此の念慮を持たなかつたならば、第二第三の國民たるべき年少子弟に此の觀念を持たせることは、殆と困難の事であ

ります。言ふまでもなく眞の國民的教育を普及させるには、母から之を始めるのが一番都合好い事であります。就ては此種の教育に力を入れる事は、全國の各女學校に向て、亦、大に希望する所であります。

兎に角家庭に於て大有力者たる女子は、他方に其職業も今後一層増加することでありますから、彼の空想的教育を捨てゝ、力めて適實有功な教育を受けしめなければ成らないのであります。

婦人と職業

女子商業學校學監　嘉悦孝子

此頃女子職業學校の一卒業生が、戰捷紀念簪と云ふを拵へたそうでありますが、そんな風に新發明でも出來る人は格別、普通の女子は、矢張り男子の差圖を要します。其代り女子は其命せられた事だけは、必ず忠實に致すものであります。

今日は、女子の仕事として、廢兵の爲に盡すも善からうし、未亡人や孤兒の問題もあらうし、中には良人を養はなければ成らない婦人もあらうと思ひます。斯う云ふ時に、職業を有つて居る婦人は幸福です。たとへ今日の樣な戰後でなくとも、婦人に職業は是非必要であります。嫁入をするに至らず方針に迷つて居る婦人などは、實業家に使つて貰ふのが一番安全に世を渡る道で御座います。

女子商業學校の卒業生二十餘名は、正金銀行、勸業銀行、白木屋、三越、村井など云ふ各商店に傭はれて居りますが、相當の好成績であるものと見え、各所から新らしい註文が續々あります。唯卒業生に限りがあるので、一々申込みに應じ兼ねて居る有樣であります。たとへそんな商店へ傭はれないとしても、家には是非其財政を處理し、又手傳をするものが必要でありますから、女子に經濟上の知識を得させるのは、大層好い事で御座います。是からは、商業上の知識を有する若い婦人が澤山入用に成ること、必然の勢であらうと思ひますから、此の需用に應ずる機關もなくては成ら

ない次第で、女子商業學校は、實に之が爲めに設けたものて御座います。

所が、女子の事務員は、やう／＼慣れて來て、使ひ頭に成ると、忽ち嫁に行つて仕舞ふと云ふ批難を、屢聞きます。此は多少免れ難い事で、致し方は御座いませんが、其嫁に行つた先で、習つた所が十分に活用出來れば、習つた甲斐は先づあると云ふ事が出來ます。たとへ嫁入り先に其必要がないと致しましても、嫁入り前を支へ得るだけに、已に其人の爲に成つたので御座います。

唯一つ前以て注意して置かなければ成らないのは、若い女子は誘惑され易いから、取締りを嚴にしなければ成らぬと、世間から言はれる事です。成る程多くの女子は、思慮が淺く、間違も出來易い所がないではありませんが、此は畢竟女子敎育を是迄等閑にして置いた爲めで、人格と云ふ程のものが殆どないからで御座います。其故智育か不足なら不足で宜しい、唯其腦中に自己の人格を自覺させると云ふ事が、甚だ大切であります。女子商業學校では、僅か一年の短日月でありますが、其間に自己を自覺させ、女子相當の威嚴を持たせることに力を用ゐて居ります。

最後にもう一つ注意して置く必要のあることが御座います。此頃も紐育生命保險會社の代理店から、タイプライターが出來る女子なら、六十圓乃至百圓までの月給は出すと申込で來ましたが、斯ふ云ふ會社とか銀行とか、商館とか云へば、誰も好みますが、日本風の商店に成ると、何うも厭がる風があります。つまり見え坊なのです。造花などでも、下ごしらへを皆厭がつて、仕上げばかり喜びますから、毎度左樣云つて注意します。下ごしらへがなければ、何うして仕上げが出來ませう、東鄉大將は神の如くにゑらいけれども、一人で軍は出來ません、又盡忠報國の一念に至ては、將も卒も異つたことはないのであります。職業に貴賤のへだては御座いません。おさんの水仕事は、賤しい樣でも、おさんが忠實に敏捷に立廻はらなければ、主人が十二分に働くことの出來ないのも同じ事です。ですか

ら寧ろ日本風の商店に居て、大に各種の手段方法を改良するなどは、進で希望すべき事であらうかと思ひます。

商人としての女子

早稻田大學講師
古河鑛業會社員　土屋長吉

予輩は嘗て本誌に於て、簿記方として女子を採用することの利益多きことを述べ、以て我商人の注意を喚起すると共に一方女子諸君の實學に志されんことを勸告し置きたるが、今や我が商業界は、其當時に比すれば稍や女子を尊重するの風を増し、三越呉服店、東京堂書店等を初め全國の商店に於て、店員として女子を用ゆるもの漸く多きを加へ、且つは小規模ながら女子商業學校といふもの丶設立をさへ見るに至りたるは、兎も角も慶賀すべきことなりとす。

歐米諸國に於ては流石に女子を尊敬するの國柄とて早くも女子の能力を認め、都會の地にありては女子が店員として商店會社に使役せられ、重要の地位を占むる者少なからず、殊に計算係、通信係、簿記係及び裁縫器械店、書籍店、藥種店等の販賣員として非常の歡迎を受け、就中小賣大商店ワナメーカー肆の如きは、其出納課長の椅子をば常に女子に占めさせありと云ふ、然るに一部の論者は女子の商業界に入る事を以て、男子の領分を侵害し、爲めに數多の家族を支持すべき男子勞働者をして、失職若くは賃銀低落の不幸に陷ゐらしむるものなりと譏ゆれども、是れ甚しき僻論にして、社會が男子獨占の領分にあらざる以上は、女子と雖も適所に之を用ひて、十分に其の才能を發揮さすべきなり。

女子と男子の比較

女子と男子とは其性質及び體力に於て種々なる相違あり、即ち一般に言ふ時は、其體質に於て女子は男子の威嚴を有せず又男子の腕力を有せず、されば女子は人を指揮するの職に適せず、又晝夜兼行の活動を要する劇務に堪えず、而して其性質に於て女子には男子の

理解力なく、男子の觀察力なく、男子の大膽なく、男子の寛容なく、男子の如き決斷力無し、されば女子は機會を捕捉するに遲鈍にして、其掛引は拙劣、其事務は緩漫、危急の場合に處して從容事を治むるの餘裕なく、殊に其感情的なるは喜怒直ちに面に現はれ、愛憎直ちに事を曲ぐ、是れ女子に通有する缺點なり、然れども翻て男子を見るに、男子にも又た相應に缺點あり、即ち男子には女子の如き想像力なく、お察しなく、直覺力なく、而して女子の緻密を有せず、女子の温順を有せず、男子は大ザッパにして女子の如く節約ならず、粗慢にして女子の如く小心なる能はず、男子は「大は小を兼ぬる」と稱すれど、女子は「小を積んで大となり」と唱ふ、是れ男女兩性先天的の相違と爲す、而してかゝる相違より來る當然の論結は、男子は經營的外交的の才に適し、女子は整理的店番的の才に適すといふに到着すべし。

販賣員としての女子

販賣員の職務は、支配人の經營の下に其補助者として、販賣の事務に從事し、店番として顧客の應接に當るにあり、されば其職務は整理的店番的にして、恰かも女子の才に適し、且つ女子の販賣的能力は正に男子のそれに均しかるべし、近年我國に於ても販賣方として女子を採用するもの、着々として現はるゝは其の才能を證するものにして、又米國の呉服商王マーシャルフキールドの商店にありては、男子の販賣員に毎週八弗を支拂ふに對し、女子の販賣員には七弗を給し、ワナメーカー商店には毎週十八弗乃至二十弗の高給を受けて、其收入遙かに男子を凌ぐ者ありといふを見ても、販賣員としての能力は男女相等しきを知るに足るべし更に

男女の傾向と實際家の言

とを見れば、マーシャル、フキールドの總支配人セルフリッヂは曰く、男子の希望は地位の上進にあり、而して女子の希望は幸福なる結婚にあり、されば俸給の增加は男子の勤勉力を增加し得べきは勿論なれども、女子とても亦俸給の增加によりて勤勉力を增加せ

しめ得るなり、と、彼れの商店は全員の三分の一は女子なるなり、ワナメーカーは曰へり、予は販賣員としての女子の能力を信認す、然れども其勤務の目的は男女相異なり、男子は何れも他日獨立する場合の修業の爲めに働き、女子の多數は實務的才能あるの故を以て、地位ある實業家の夫を得んが爲に働く、と先づ男女の天職の異なる所よりして、兩者の傾向の相違を擧げ、更に男女兩者に相當する事務の部署を示して曰く、予の諸品部別商店には七千人の男女店員あり、之を男店員の部署と女店員の部署とに分つ、而して女店員は稍や男客にカラカワるゝ氣味にて商店管理上面白からざるのみならず、男客の多くは男店員の部署を喜び、手袋及び手巾の如き男客にも女客にも使用せらるる物品も、亦多く男店員の部署にて求めらるゝものゝ如し、たゞ婦人の下着及び胸當の如き婦人專用の物は、多く女店員の部署にて販賣せらる、と、シリトー商會の支配者ダウソンは曰く、予が商會には男子三分の二女子三分の一を使用す、而して女客は多く女店員と取引するを好むものゝ如し、蓋し女子は女子の要求を推察すること速かなればなり、と。

女子の勢力

女子の販賣員たるに適することは以上述べたる所によりて明かなり、而して女子と男子とは其販賣的能力相等しきに拘らず、女子は男子に比して常に少額の報酬に滿足するの傾向あり、而かも商人は何れも少額の報酬を以て多量の効果を收めんことを希ふものなるが故に、將來に於ける女子は、販賣員として男子の爲に侮るべからざるの强敵と爲り、男子を凌駕して大に商店會社の歡迎を受けん、予輩は今日に於て女子商業學生の大に自重せんことを望み、世に一般女子が徒らに詩歌管絃に耽るの暇を以て、盛に實學に志し、實業界の賢母良妻と爲り、依て戰爭によりて高め得たる我國威と並びて、我富力の多大を作出せんことを切望して止まざるなり。

事物整理の心得

男爵　細川潤次郎

散亂したる物を取集めて、之を各其の置くべき所に置き、其の用に立たざる物は、之を棄つる等の事を俗に片付けると云ふ。物を置くべき所に置くことは、尋常普通の事にして、簡易なるが如く思はるれども、其實複雜なる事柄にして、頗る研究を要することなるべし。従つて此事は、家政學に於ても尤も緊要の部に屬す。

一家中の庶物には各其の置くべき所あり、其の置くべき所に置くときは、萬事に付けて都合よきこととなれども、之に反して置くべき所に置かざれば、萬事不都合にして、種々の不利を來たすべし。例令ば米穀は米穀を置くべき所あり。薪炭は薪炭を置くべき所あり。衣服は衣服を置くべき所あり。金錢は金錢を置くべき所あり。米穀を其の置くべき所に置かざれば、雨露に濡らされ鼠に食まるべく、薪炭を其の置くべき所に置かざれば、或は厨房に遠くして不便を感ずべく、或は厨房に接近して發火の虞あるべし。衣服も亦た其の置場所を誤れば、塵埃に穢るゝことあるべく、金錢に在つては紛失の危險あるべく。此等は必ずしも說明を要せざるなり。

又室内の裝飾に至りても、適當の位置に物を置くことを以て要訣とす。掛物は掛物、香爐は香爐、生花は生花、其の他料紙、硯箱、卷物等の器具も、亦各其の所に在るべきは勿論、書院、居間、茶席等の別に從ひ、各其の適當の位置を撰ばざるべからず。然れども此等は尙ほ未だ甚だ複雜なるものに非ず。若し夫れ一家の家具若くは書籍の如きに至りては、其の數夥多なる丈、之をして各其の所を得せしむること頗る困難なり。此等の物は、時々有用の際取出すべきものなるを以て、米俵を積むが如く刺身を列べたる如くするときは、場所を要すること少き換りに其の不便言ふべからず。一見して其の物の何物たるやを辨識し、直に取出し得べき樣豫じめ其の便利を計り、夫々適當の場所に置かざるべからず。入用の時使用するを得ざる不便あるときは、其物を所有する甲斐なくして、有れども猶ほ無きが如くなるべし。

尙ほ一層適切に其の例を示さんに、何れの家庭にても婦人が絹布木綿類の小切を集めて、之を一箇の箱に

納め、或は風呂敷に包み置くを常とす。斯くて入用の時には、一片の切を求むる爲めに、一箱一風呂敷に納め在るあらゆる小切を點檢せざるべからず。百枚あれば百枚、二百枚あれば二百枚を一々點檢せざれば、入用なる一片の切を探し出すこと能はず。不便も亦甚だしと謂ふべし。若し之を區別して大中小に分ち、之を各種の紙袋に入れ、更に之を箱か風呂敷に納め置くことゝせば、入用に應じて容易に尋出すことを得べし。凡そ何品たるを問はず、豫じめ能く類を分ちて之を適當の位置に置くときは、必要の時迅速に役立つものなり。

之に依て見れば物品を整理する方法は、即ち物を置くべき所に置くことにして、大要右に述べたるが如し。然れども獨り物品のみならず、百般の事務に對しても矢張同じ道理にて、能く百事をして各其の所を得せしむること甚だ肝要なり。古人は事を處すと云ひ、處置すと云ひ、處理すと云ひ、處分すと云ひ、處辨すと云ふ。此等の處と云へる字は、置くと云へる義にて、皆物を置くの意義より出でたるものゝ如し。蓋し人の萬事を整理するは、猶は人の萬物を整理するが如く、又人の萬事を處して適當の度に中らしむるのは、猶は人の萬物を適當の位置に在らしむるが如し。萬事適當の度に中り、萬物適當の位置に在るを得て、始めて萬事萬物を整理し得たりと謂ふを得べし。

人の事物を整理することは、素と是れ智力の作用にして、人生の能力中最も貴重すべきものとす。苟くも萬物を處理する才あり、萬事を處辨する能力ありと云はゞ、其人や必ず智にして愚ならざることを知るべし。

但だ物を置く位置は有形的にして、其の適不適は、容易に看出すことを得れども、萬事を處する適當の度は、無形的にして之を測知し易からず。是れ頗る研究を要する所以なり。右の如く物品を整理することも智力の作用なるを以て、之を小事と思ふべからず。萬事を處すると同じく、考慮を加へて之を適當の所に置くことは肝要なり。碁將棋の上手と稱するものは、他なし碁石と將棋の駒とを適當の所に置くことに熟練したるものなり。書畫の上手も、畧ぼ同一理にて、筆墨を適當の所に置くことに熟練したるものなり。家政者夫れ思はざる可からず。

▲活人畫

「妾の級でねシンドレラを活人畫にするんですって、妾あの意地惡の姉になるんですよ、仕方がないから面を被らうと思つて、」

「面なんが要りませんよ、貴嬢よく似合つてよ」

子供の年中行事

二葉幼稚園主幹野口幽香子女史の談話に曰く「私は小供に年中行事といふ樣な事を定めてこれを家庭に實行したいと思ひます年中行事と申ますと餘り大袈裟ですが、實は一年中の重なることに就て、何處の家庭でもあり、また出來得ることだらうと思ひます（趣味の養成と自尊の念を生ぜしむることを主眼として）

▲元日　こは云ふ迄もなく一年の第一日で、何處でも祝ひます、其折小兒にも大人と同じ樣に膳を供へてやり、衣服も大人が紋の附たのを着るならば、小兒にも木綿でよいから紋のあるのを着せる樣、つまり全く大人と異る所ない樣にしてやるのです、これは大人から見ればつまらぬ事の樣ですが、實は小兒の自尊心と申すことに少からぬ影響を與へます。

▲雛祭と五月幟　其致し方の如何は兎も角も、家庭で之を實行せよとは私の主張であります。小兒の生れた年から實行して其飾つた人形などが、後々まで殘つて「これは生れた時誰人が贈つて呉れたのである」「誰が何處で買ふたのである」とか或は「此人形の疵は自分がまだ西東も知らぬ時につけたのだ」などゝ云ふことを思ふにつけて、孩嬰當時の事を伴想し、無限の感に入らしむるなどは中々に趣味があります。殊に東京の樣に借屋住ひが多い處では、生れた家とか室などを紀念することが出來ませんから、せめて是等を紀念品とする樣是非とも是等を實行したいものです。

▲誕生日の祝會　これは事新しく申述ぶる迄もなく、其小兒を中心として之を開き小兒を主人役として其友達を招がしむるなど種種の趣向が御座いませう。爰に一つ述べたいのは小兒の物を定めることです、譬へば七夜の祝ひに鯛をつけたならば、それを以て其子の物と定め、誕生日毎に之を供へることです、斯くして太郎の物は鯛、次郎の物は鯉、花子の物は金口魚などゝ定めて置くことです。僅かの事ですが隨分趣味あることであらうと思ひます。

▲クリスマス　即ち家庭のクリスマスは一家族擧つて何かの役目を持ち、小兒にも相應な役を割當る、そして式はどうするの贈物はどうのと云ふことを出來る丈自分できめさせ大人は其補助者となる樣にすることです。

▲天長節　には何か定まつた催をする樣にしたいものです。まあ家族の野外運動會などは良いだらうと思ひます、これもクリスマス同樣、成るべく小兒にさせて大人は相談役となるのです、紀元節なども親睦會とか文藝會などを開かば面白からうと思ひます。

猶ほ日曜日のことなども大概定めて置て家族の團欒を計る樣にしたいのです。

其他家庭に思ひ附た事を定めて置くやうにしたならば小兒の教育上にも少からざる影響を與へるであらうと思ひます。さて斯く云ふ所以は我國では一般に小兒の存在を認めぬ風があるからで御座います。



清藤女史の支那婦人談

婦人記者

清藤女史、名は秋子、才あり識あり經驗閲歴に富む、而して纎柔幽婉の資を以て、東洋婦人會を代表して清國に遊び、各階級の婦人情態を視察し、舊臘歸京して中六番町に在り、記者頃日女史を訪ひ、聽き得たる所左の如し。

△渡清の主意

東洋婦人會から任命されました主意は他ではありません。方今日本人が支那國民を開發するに汲々たるは著しい現象で、あらゆる方面から誘導されつゝありますが、彼國人も日本の文明に刺戟されて學校教育に心を傾け、日本に遊歴して國情を探り、留學生の派遣も日を追ふて盛になると云ふ有樣で御坐います、けれども是れは男子方の側に止まり、未だ彼我婦人の交際は少しも道が開かぬと申しても宜しい、これと申すも深宮に閉ぢ籠められてある支那婦人に交を求めるのが極めて難事である爲めですが、此儘に過せば會の目的を達し得らるゝ時もありませんから、奮つて彼に交際を求め、彼を開發して親睦の基礎を固めたいと申す會の主旨でありますから、昨年の七月私は會長から渡清を仰せ付けられ、大喜びで河原(虎子)さんと共に八月十三日東京を出發致し、神戸に十日間滯在致し、二十三日に日東丸へ乘り込みました。

▲芝罘瞥見

釜山には一泊、仁川には二泊、何れも船内で致しまして、初めて上陸致したのは芝罘で御坐います。此所にはチヨツト二時間ばかり滯留して歩いて見た丈ですが、往來の婦人を見、略下等社會の樣子だけ分りました。賤民の妻は矢張り日本の勞働者の妻のやうに、夫の手傳をして働いて居るのがあります。私共は側へ寄つて善く觀察しやうと存じても、暑い折ですから、不潔の臭氣が酷くて、耐へ切れませんでした。此程度の婦人は肌こそ現しませんが、店の鼻先で食事して居るのも澤山あります。私共が市街をズツト見て歩いて行きますと、女子師範學堂と云ふ札を掛けた家が御坐いましたので、直に入つて見ますと、出て參つた敎師は、天主敎の童貞女でありました。其人の話に據ると、生徒は各國の女子ばかりで、支那女學生は僅一人であるとの事でした。それから正金銀行の營口支店長中村さん御夫婦と御同船申した緣故で、同地の支店にチヨツト立寄り御話を伺ひました所、日本の貴婦人八十人ばかり毎月一回茶話會を開いて居り、又一の手藝學校を設けてあつて、支那の女生に刺繡編物なぞを敎授さるとの事でした。私共は二階で暫く休息致して居りますと、下を通つた美しい二人の西洋婦人は、袖だけ長い日本の浴衣で他は洋裝でありましたが、これは賣淫婦であると聞きました。

▲北京の女學校

芝罘を出發して大沽に着したのは、神戸を立ちましてから十一日目で御坐いました。私は腦を少し痛めました爲め、天津に一泊致し、九月二日に北京へ到着致したのです。停車場へは服部博士御夫婦、川島浪速さん、木村芳子さんなどの方々が御迎へ下され、公使館へ入りましたが、木村さんは『貴女方丁度よい所へ御出でになりました、二年間計畫しつゝあつた支那女生を敎育する女學校は昨日を以て開校式を擧げました』と仰しやり、服部さんの夫人も『均氏の設立に係り、私共が敎鞭を執りまする、專ら支那高貴の婦人を敎育する女學校も昨日開校式を行うたのです』と仰しや

り、丁度好い折柄ゆゑ行つて精しく觀て與れとの事でした。學校の御話は後廻しと致し、貴婦人訪問に就て御話し申し上げませう。

▲訪問の馬車と行列

これを御話し致す前に氣候をチョット申し上げねばなりません。御承知の通り炎暑と塵埃の烈しい所ですが、參つたのは丁度暑い盛りの頃でしたから、慣れぬ身體にはチョット弱りました。北京停車塲へ遣はされた公使館の馬車は戸を閉めて周圍を紗で卷き、薄暗くしてありますので、何だか欝陶しい事と思つて居りました。それから公使館で私共の部屋として下すつた離座敷も窓



を閉ち戸帳を垂れ、薄暗くしてありましたので、欝陶しくて耐らず、勝手に窓を開け放して風を入れて居りましたところ、顏から身體が汗ビッショリになり、苦しくて庭へ出る勇氣もなく弱つて居つたのです。スルト公使夫人が御出になつて、何故本館へ御越しが無いのですかと御尋ねになりましたから、『御耻かしい事ですが、氣候に負けまして……』と申し上げると、『斯樣な事を成さるから御苦しいのです、此炎天に窓を開けては暑くて耐りません第一塵埃が入つて可けません』と仰しやつてピシ〳〵閉めておしまひに成りました。斯樣な鹽梅ですから、何所の家へ參つても薄暗いので

す。訪問の馬車は御承知でもありませうが、御輿のやうな妙な形の物で、周圍を紗で全然包みますので、これは暑氣と塵埃を避ける爲め、また公衆に面を晒さぬ爲めです、貴人の行列には澤山な御伴が附きますが、私共が訪問に出掛けますにも、名刺持は必ず附けました。此名刺持は騎馬で眞先に進んで行きますのですが、訪問は内田公使夫人御病氣の爲め、服部博士夫人に御世話を願ひ、通譯其他萬端御引廻しを願ひましたので、夫人は毎日九時から二時まで女學校に教鞭を執られ、御歸りになると直ぐに訪問の御周旋を遊ばされ、非常に御盡力下さいましたから、御蔭樣で容易に出來ない任務を成功致した次第で御坐います。

▲取次

名刺持が訪問先の門前で馬を下りをとなひますと、宦官一人出で來つて名刺を受け取り案内を致すのですが、敷石を歩んでは幾つかの門を越えて進みます。土間ですから、私共の目には門と見えますが、畢竟日本の唐紙と同じ物でせう。四角に取り圍んだ所を廻つて參り、表と奥の境とも思はるゝ入口の所に女中が迎へて居り、案内の引き繼ぎを致すので、又少し進んで、應接間より二つ三つ前の戸口に貴夫人が出迎へて居られるのです。これは妃殿下でも同樣で御坐いました。こゝからは御附の女中が大勢で、ぞろ〳〵と應接室へ入り込むので却々賑やかであります。

▲鐵路大臣胡燏芬夫人を訪ふ

北京で訪問した貴婦人も澤山でありましたが、一々申し上げると冗長になりますから、主なる方を二三御話し致しませう。初めて訪問致した貴婦人は、鐵路大臣胡燏芬夫人でありました。夫人は四十七八歳位、南方の人で足は小さう御坐います、極沈着いた儼然した方で、先づ私共の年齢を尋ねられました、第一に年を尋ねるのは支那婦人一般の風習で、長者を重ずる爲めに、年に依つて席順を定める都合もあり、一つにはマア御若いと御世辭を言ふためであります。それから夫があるか、子があるかなぞ尋ね、遠來の勞を謝するのですが、一々褒詞が上手、總ての御世辭が巧みなもの

です。左樣するうちに、臺所から數々の御馳走を運び、卓に列べて饗します。支那婦人は突然に訪問しても決して會ひませんのは、御支度が叮嚀であるからで、髮や化粧は平生整然として居りますが、何樣な貴人でも常着の衣服は金巾の綿服斗りですから、來客の日は晴の絹服に着換へますが、この身繕に時が掛りますし、又何時でも客に素茶で返す事はせず、必らず御馳走を出しまする、この支度も大層ですから却々突然に客を受けられません。ですから何日何時と豫め通知して訪問を致し合ふのです。胡燏芬夫人の側に初から十七八の美しい婦人が附いて居りまして、夫人と共に御亭主



役を勤めて居ります樣子が、女中とは違ひますから、妹か娘か何であらうと內々考へて居りました。服部さんも私共には此人を紹介しませんでしたので、夫人に一寸尋ねますと、第三の妾であるとの事でした。夫人と一緒に列んで居ても一言も口出しは致さで、飲食の取持だけを務めて居る工合が餘程階級的に見へました。夫人は東洋婦人會の旨趣を聽き喜んで賛成致されたが『私の家は非常に用務多端で、子供も多し緣付ける娘も澤山あり、且妾達の取締り等を一切私が擔任して居ますので、會の爲に働く時間が殆んどありません、併し良人とも善く相談致して』との話しでした。

其内胡憍芬氏も此室に來り談話されましたが、例の妾には一言も交へませんで、始終夫人とばかり談話し、會の相談なぞさるゝ樣子が却々整然としたもので、夫人の權威の程も推測られますのです。

▲實業學堂監督紹英夫人

此夫人は滿洲人即ち北方の婦人で、足も大きく體格も堂々として居ります。此家には慶親王殿下の御令妹を始めとして七八名の貴婦人が來會して私共を歡迎されたのですが、髪飾から服裝の立派なこと驚く程で、例の厚化粧に頰紅をさし、ずらりと列ばれた美しさ。

私共の質素な服裝が耻しいやうでありました。白粉なぞ如何程私共が塗りましたとて側へも寄れません。加之飾り立た燦敝の品々何れも立派な物ばかりで、此華麗の室に入つて此華麗な婦人方に圍繞された私共は、何ですか天上の別世界へでも入つたやうな心地がして、非常に嬉しく感じました。胡憍芬氏方では舊式の蓋付茶碗で茶を出されましたが、此家では珈琲茶碗へ支那茶を入れて出され、御馳走の折は三鞭酒を饗されたなど、萬事西洋風でした。初對面の挨拶振りは、樣兩袖を張つて禮するもあり、唯御辭儀するもあり、樣樣でしたが、矢張年を尋ねられました。それが濟むと夫人は『此度貴女方が我國婦人を誘導する爲めに、遙遙と渡來せられた御厚意は何を以て報ひませうか、私共不肖にして貴女を迎する道を知りませぬが、唯一の赤心を傾けて歡迎致すのですから、宜しく御諒察あつて、今日はゆる〳〵御話あられるやうに』と述べられたので、私共は餘り辭令の巧妙なのに膽を拔かれて答へる術も知らぬ位でした。私は日本に來遊を勸め、東洋婦人會の事をも話しました處『願てもなき幸福で是非共御親睦御開發を願ひますが、日本へ出遊するのは語も通せぬ事とて難かしいのです』なぞと如才なく答へられました。主人側の食卓へは當家夫人だけが着いて、他の貴婦人達は食事を共に致さず、周圍の椅子に掛けて居りました。此邊が日本と異つて妙に感じました饗應終つて内房の部屋々々を見せられましたが、中庭に奇麗な草花が澤山植ゑてありまして、私が褒め

ましたら、直に取て澤山の花束を與へられたのです。總て何んでも褒めますと呉れると云ふ風であります。

▲鎮國將軍毓朗夫人（皇族）

これも北方即ち滿人で、風采氣高い夫人でありまして、先づ私共に『貴國と露國との講和談判は如何なりましたか』と尋ねられたので『未だ私共出發の際は、小村大使派遣されたばかりでありましたから、結果は分りません』と答へますと、今度談判の結局は必ず貴國が大成功なる事疑ふまでもなく、私共は貴國の爲めに大慶致して居りますなど、實に立派の應答をされ。尚貴國の議會は何樣な樣子、教育は如何と種々の質問がありました。夫人は始終新聞に眼を注ぎ、國家的觀念の盛んな方である事が分ります。而して『貴女方は支那語を研究されては如何』と言はれ『實は言葉も辨へずに斯く參上するのは恥ち入る次第ですが、俄かの計畫で研究の暇もなく、此度は服部夫人に通譯の勞を願ひましたれど、語學は是非とも研究いたす心得であります。私共も語を知らずに參上致したのですから、何卒貴女方も日本へ御來遊なすつて下さい』と勸めました處、私共は西太后の許を得なければ踏み出すことは出來兼ねますからとの御話でした。



▲外務大臣那桐夫人

此家は支那には珍らしい一夫一婦制度であります。外交官に嫁して居る令嬢は獨逸語が上手と聞きました。流石に那桐夫人は外務大臣夫人だけに、交際に熟練されたもので、東洋婦人會に入會を勸めますと、「私共夫婦は職務の上からして、此方から求めても入會致したい考へで居りました」と述べられ、那桐氏諸共非常に歡迎されたのです。

▲堃公爵夫人

此御夫婦は結婚して未だ間のない御若い方々で、妾なども置かれず、美しい家庭であります。夫人は二十二歳で花のやうな可愛らしい風姿でしたが、黒い喪服を着けて、質素なお作りでありました。其理由は兼て病氣であつた公爵の母堂が、結婚の翌月に薨去され、其忌服中との事でした。一體に忌服の規律が嚴重の國風であります。夫人に向つて、御夫婦は毎日如何なる事をして過さるゝかと尋ねましたところ、朝食は共に喫べ、良人はそれより書齋に入り、晩食は又共に致すとの事でした。公爵も共に話されて後、御自分の書齋に案内されましたが、樂器が澤山飾つてあり、公爵も音樂に堪能と承りました。支那では音樂を下等婦人の手藝としてあつて、貴婦人は決して手に觸れません。音樂は總て男子の娯樂――隱し藝のやうになつて居りますから、夫人の室には樂器類を一切備へてないのです。

▲座敷の飾付

何處の座敷にも必ず飾つてあるのは、大きな姿見と如意とであります。私は今度初めて本當の如意を見ましたが、大抵玉で拵へた實に立派なものであります。それから畫幅も掛額も立派のがあり、天井には燈籠を澤山吊してあります。卓子は大抵紫檀で卓子掛は用ゐません。婦人の寢部屋には化粧道具を備へてあります。

▲御化粧

貴婦人は起き出てから正午までは御化粧にかゝるので、實に念の入つたものであります。如何ほど年を取つた婦人でも、良人のある間は厚化粧で頰紅を差すので、往來を歩いて居る賤民でも、化粧して頰紅をさし

て居ますし、縦令化粧せずとも、頬紅だけは必ず差して居ります。支那婦人は滅多に御湯に入りませんから貴婦人の頸元は美しいですが、下等婦人は顔だけ眞白で頸は垢だらけ、丁度面を被つて居るやうです。上下とも未亡人はイクラ若くても化粧をしませんから、一見して分ります。私共招かれた席で、大勢集れる貴婦人中に未亡人もありましたが、化粧なしの青い顔が目立つやうでした。支那婦人は總て食物の加減か手先まで脂肪ぎつて美しく、厚化粧が善く似合ひますが、私共が訪問の際、如何ほど濃く白粉を付けましても、列んで見ると薄う御坐いました。彼地では素顔を不吉として忌むので御坐います。



▲衣　服

支那婦人の服裝は一體に立派ですが、特に滿洲婦人の服裝の立派なこと、目を眩ますばかりです。先づ日本の昔の大奥の模様物でも着ましたら、立ち列んでも釣り合ひませうが、唯今の服裝では實に見すぼらしく見えます。在留の日本貴婦人が西太后へ謁見の際には、皆で縫模様の華美姿で參内になるとの事です。それから御承知の通り貴婦人ほど長爪で、皆爪袋を穿めて居ますが、これは金銀珠玉を鏤めて立派のものであります。

▲貴婦人の娯樂

は如何いふ事かと尋ねて見ましたところ、「半日の化粧を終れば、書畵を揮毫したり讀書したり、折々互に訪問して饗應を受け合ひ、隔てなき談話に夜を更すなぞを樂みとして居るのです」と某貴婦人は答へられました。想像したよりも交際が開けて居るやうです。

▲土産物を喜ぶ

貴婦人方に持つて參つた土産物は、西陣織友禪染ハンケチ、蒔繪の漆器類、千代田の御奥なぞの種類の古風俗錦繪なぞでありましたが、何れも非常に喜び受けられたのです。彼地では客の眼の前で直ぐ水引を取り開いて見て喜ぶのが、一般の風で御座いまして、紹英夫人の如き、差し上げた西陣織のハンケチを直ぐに膝に載せたり、腰に當てたりして、一方ならず愛されましたが、包みの儘仕舞ひ込まれるよりは、此方の感情が遙かに愉快なもので御座います。而して何處でも談話の終りに名刺の遣り取りを致すので、日本婦人の名刺は、大層珍重すると聞きました、支那婦人の名刺は大きい赤紙で、在留の日本婦人は、矢張り赤紙で名刺を拵へて居られます。

▲女中の通弊

彼地貴婦人の左右には、大勢の女中が附き添ふて、煙草を煙管に詰めるから、吹殻を落す世話まで致して居りますが、唯だ少し厭なのは、ペチャ／＼と主人や客の談話に喙を容れる事で、五月蠅くもなり、無作法にも思はれました。私は『斯樣な鹽梅では秘密の御話が少しも出來ませんから、女中は側を遠ざけられ、呼鈴を備へられた方が宜しう御座いませう』と勸めて置きました。

▲死は鴻毛より輕し

御承知の通り儒教で固まつて居りますから、孝貞の爲めに生命を捨てるのを何とも思つて居りません。許嫁の男子が死亡すれば、直ぐに自刄して節を全ふするのを美徳と稱へてあり、現今でも之を行ふ婦人が、イクラもあるさうです。彼地では蓄妾の多いのを妻の手柄としてあり、妾を携へて嫁する婦人もある位ですが

波風立たぬ家庭ばかりで無いから、良人の愛を妾に奪はれ煩悶遣る方なきも、離婚は出來ない國風なので、堪え兼ねて自殺する妻女も隨分あると聞きました。何れ憐むべき境遇ではありませうが、又感ずべき美德も多いので御座います。

▲豫想外

彼地の貴婦人に接せぬ以前は、禁錮同樣の境遇に沈んで居る憫れな婦人達を救ひ上げたいと云ふやうな見下した的態度であつた處、實際接して見ますと、本當に豫想外で、其物慣れた交際上手な具合から、精神の確乎して居るところ等、却つて恥ぢ入る位であつたのです。無論新智識は我國婦人より數等劣つて居るに違ひありますまいが、頑冥にしろ孔孟の教を深く信仰して居るから、德義節操を守る鐵心石腸は、ブク／＼として信念の固くない者に優ること萬々であると私は感じました。尙ほ南方婦人の話など種々ありますが、其内に又申し上げませう。



▲勅題菓献上

京都の菓子司龜屋良則は勅題菓の元祖として名を知られ昨年其所製を皇后陛下に献上して御感に與かりしが、本年も勅題に因むもの十種を選みて目下沼津御用邸に行啓中の陛下へ献上し、併て凱旋と題する新菓をも献じたりと、凱旋は唐櫃形の器に兜と菊花櫻花をあしらひ、極めて美麗なる飾菓子なりといふ。

社交界の東鄕大將夫人

婦人記者

一昨年二月八日旅順口に三隻の敵艦を撃沈して敵將スタルクの膽を奪はれてより、昨年五月二十九日對馬沖にて波羅的艦隊を擊滅して、敵將ロジエストヴエンスキーを生擒せらるゝまで、東鄕海軍大將の心勞一方ならざりしは言ふ迄もないのですが、同大將夫人も同程度の心勞をなされた事と存ずるので御座います。而して東鄕大將がネルソン以上の偉勳を奏して凱旋なさいましたから、同夫人に對する國民の感謝は同大將に對する感謝と異ることは御座いません。併しながら偉勳を奏されて毫も其功に誇らるゝことなく、益々謙讓の德を守らるゝ大將と同じく、夫人も謙遜で遠慮勝で居らつしやるので、新聞雜誌記者の訪問は殊に御迷惑なさると承りました。記者も豫て夫人の御迷惑をお察し申上げて居りながら、切て五分間の拜晤を得まほしと某貴婦人の御紹介を得て、今茲一月十一日の午前に上六番町の御邸へ伺つたのであります。此日は前夜來の豪雨ガラリと上つた日本晴、半藏御門の土手に印せる松の投影蕭然たるも心地好く、麴町通りを番町へ入り名にし負ふ東鄕坂へ出ましたが、黑板塀を繞らした冠木門に古い小さな御表札を見上げて御玄關に訪ひ、取次の方に某貴婦人の紹介名刺と記者の名刺を渡し、直ぐに應接室へ導かれたのです。此室には大小二脚の卓子に倚子長椅子を備へられ、床の間には大神宮神饌の白木筐を恭しく飾りて壽老人の一軸を掛けられてありましたが、盆栽の紅梅は早く笑を漏して、淸香を放ちつゝあり、掛額は皇太子殿下、皇孫殿下の御眞影を始め奉り、海軍將校の寫眞、旅順積雪の大寫眞、及び伊東大將の揮毫に係る「武運方昌」四文字の額などで御座いました。記者が御茶を啜る間に夫人は出で迎へられ、御氣輕に御挨拶あつて後、南の御椽を開け拂はれましたので、見晴しの好い日當りの好い御室の中に隔てなき御話しを伺ひました。

▲愛國婦人會の巡廻

愛國婦人會へ入りましてから、未だ日も淺う御座いますし、何も辨へぬ不調法者で御役に立つところでは御座いませんのに、會長樣から是非と仰しやつて下さいまして、御伴申し上げたので御座います。ハイ丁度六縣ほど巡りまして、何處でも盛んな歡迎を受け、有難いことで御座いました。私は唯だ御伴致したばかりで御役に立ちませず、會長樣は一々の御挨拶で嘸御疲れであらせられましたらうと存じます。會員は樣々の御方で一々記臆は致しませんが、何れも却々御熱心で、中には草鞋がけで山を越えて參會される方も多く見受けました。ハイ松島では伊達樣の御別莊へ一泊致して、燈籠流しを見せて頂きましたが、波に搖らるゝ風情は譬へられぬほど美事で御座いました。ハイ歸京後會の實況奏上に參内致した節、恐れ多くも　皇后陛下に拜謁を賜はりましたので、萬事大山の奥樣が御奏上なすつて下さいました。

▲地方の新聞と婦人記者

仙臺の新聞で御座いましたかと存じますが、會の實況を書きました中に、巡廻の方は何々の衣服に襦珍の帶を締めて居たと出て居りました。會の服裝は御承知の通り綿服で、帶地も木綿でありますが、男の御方の目には襦珍と見えたものと存じます。それから又御袴を召した可愛らしい御孃さんが、始終私共の側に附いて御出でしたのを、御同行の三輪田さんの御生徒だと存じて居りました處、それが矢張り新聞記者で視察に隨て御廻りの事が判りましたので、御若いのに感心な事と存じました。併しそれが判りましてから、大變に窮屈なやうに思ひましたの御座います。

▲ノーエル大將の歡迎

彼時はノーエル大將の夫人が御到着早々で、御出席が無く、御孃樣が御出席になりました。私は不調法者ですから、後の方へ隱れて居りましたところ、たしか島村さんでしたかゝ一寸御紹介になりまして「奥さん皆さんが褒めて居らつしやいますから……」と仰しやつて下さいましたが、私には何が何ですか御容子は判らず、其うちに彼國の方が大勢代る〳〵握手なさいま

した。私は最早言葉は存じませんし、一々御答へも出來ませず、ドギマギ致すばかりで、誠に失禮ばかり申し上げたので御座います。アリス嬢の折で御座いますか。彼の時は愛國婦人會からの御申付けで、私はたつて御斷り致しましたけれども、唯だ玄關まで行つて名刺を出しさへすれば可いからと云ふ事で、御玄關まで參つて退らうと致した處が、チヨットなりとも上れとの仰せで、武田錦子さんの御通辯で御目通り致したので御座いますが、前申上ぐる通り言葉も分りません次第で、萬事武田さんの御厄介になりました。私のやうな者を皆樣が兎や角仰しやつて下すつて、勿體ない事と毎時恐れ入つて居ります。

▲凱旋軍隊の歡迎

麹町區の有志婦人は、新宿停車場に到着の凱旋兵士を迎へに參ることに定めて御座いまして、係の筋から時間の通知があると、毎時市谷から電車で出掛けますハイ軍隊の方へは一々御煎餅と地圖とを差し上げる事になつて居ります。地方の婦人方は徹夜して迎へらるるので、兵士方が大層喜んで居ると申します。私共が午後七時までに到着の兵士を迎へて歸ることにしてありますので、夜分着の迎へに殘つて居りたいと存じても、鐵道の係員が「貴女方に夜分立つて居て頂くと私共が心配ですから」と斷りますから、夜分には鐵道の係員に賴み、差し上げる品を任せ置いて歸宅致すので御坐います。ハイ明日奧大將と御一緒に私の妹婿(砲兵部長陸軍少將稅所篤文氏)が歸る筈で御坐います。

▲大將凱旋の際

一昨年の暮にチヨット歸りました際は、子供や親類の者と一緒に海軍省へ參つて居りましたが、昨年十月の時は參りませんでした。市の歡迎會の際で御坐いますか、彼の時には親類の者が折角の事に家に居るのを惜しいからと勸めますので、天賞堂の二階へ子供と一緒に參つて見ました。イヱ最早誠に難有い事ばかりで、何と申し上げやうも御坐いません。

▲大將の平生

長男(彪氏)は取つて二十二歲、次男(實氏)は十八歲、

娘(八千代子)が十六になります。イエ私が行屆きませんから、皆御耻かしいので御坐います、ハイ娘は華族女學校へ通せて居ります。よく皆樣が主人は平生何樣な事が好きで、何が嫌ひかなぞと御尋ねで御坐いますけれども、別に際立つて御話し申し上げる程の事も御坐いません。矢張り新聞や雜誌に書いてあります通り、冬は獵をして夏は釣を致す位の事で御坐いませう。如何して記者の方が御調べになりますのか、東郷の家に就ての事で、私なぞ少しも存せぬ事まで書いてあります。それで知己の方が「斯樣な事は實際か」と主人に御尋ねなさいますと、主人が「それは知らない」なぞと申す事も御坐います。

▲夫人の謙讓

イエ貴女方に其樣に仰しやつて頂きますと、誠に恐れ入ります。東郷は宜しう御坐いませうが、私に於て何の誇ることが御坐いませう。又誇る謂れがないで御坐いませんか。凱旋の當時は私に逢ひたいと仰しやつて下さる方が澤山入らしつて、忝けない事では御坐いましたが、斯樣な不調法者ではあり、何でも前後揃はず御話し致す性質ですから、なまじ御目に懸つて粗忽な事でも申し上げてはと心配致して、失禮ながら御斷り申し上げ、應接の者一人に返事を頼んで置きました。ハイ婦人記者の方もよく御出でになりましたが、髮の格好、衣服の性質まで明細御書きなさいますから、私は失禮と存じながら成るべく應接の者に任かして置いたので御坐います。

▲夫人の御心持はとの質問

御出での記者の中には、波羅的艦隊東航中の奥さんの御心持は如何で御坐いました、唯今の御心持は如何で御坐いますか、之を聞かして戴きたいと御尋ねの方が御坐いましたので、應接の者が、何樣も奥さんの御胸の中まで、私に知れませんと申上げた相でしたが、後で『それは皆樣と同じ心持、貴君方の御胸に御尋ね下されば御分りでせう』と御返事を申せば宜つたと話したとが御坐います。又よく私に何でも可いから一つ書いて呉れなぞと仰しやる方も御坐いますが、如何致

して私に其樣な嗜好なぞが御坐いませう、何でも最早御耻かしい事ばかりなので御坐いますよ。貴女には〇〇さんの奥樣の御紹介に對して御目に懸り、下らぬことばかり申し上げましたが、折角の思召ですから、御書き下さるのを御斷り申すでは御坐いませんけれども、何卒御手柔かに願ひたいので御坐います。

夫人は舊臘羽根田なる黒田侯爵御別邸で、御主人東郷大將が鴨狩なされし時の寫眞を示され、黒田さんの御承諾を得なければ、公にし難いとの意味を話されました。

夫人てつ子は子爵海江田信義氏の長女にして文久三年生れなり大將との間に二男一女を擧げ家庭雍々春の如し夫人の妹君えい子は税所陸軍少將夫人にして慶應元年生れなり海江田子爵の佳婿に富める亦快事と謂ふべし

小供の活動力

いたづらをする小供は活動力のある小供で何でも小供の間はいたづらをせなければ、居れぬといふ程の子でなければ本統ではない此頃英國の或小兒雜誌に小供が一時間に於ける惡戯の數を掲げました、尤も之は或食客が留守番を妻君から托された間に小供の守をしながら書上げたものです。

▲息の切れる位十五分間續けさまに泣き通した。(何分間位泣くものかと予は默つて見てゐた)

▲優に毛枕を作るどが出來る程予の頭の髮と云はず髯と云はず無闇にむしつた。

▲火箸を持ち出して來て自分の體の届く丈四方の壁を引搔つた。

▲大洋杯の上へ坐つて壞して仕舞つた。釦を六個嚥下した上に糸卷の糸を大底喰べた。

▲母親の裁縫箱を火の中へ投じた。▲大洋杯の中へ猫の頭を押込まんとして猫に酷く引搔かれて泣出した。

▲姉の人形を荷車(玩具の)へ乘せるのだと云つて到頭人形の頭を缺いて仕舞つた。▲ソファーの端を壞してそれから棚から下すと云つて上等の皿を二個壞した。

▲伯父の洋杖で窓硝子を二ツ壞した▲石炭場に轉げ込んで白い衣服を眞黒にした。

▲鳥渡眼を離してゐた間に敷物へ火を落して燒いた。▲ソファーの下へ這入込んで何しても出て來ない菓子を遣て漸と出て貰らつた。

▲母親の上靴の中へ牛乳を注込んだ。▲椅子の下へ拗まり込んで仕方がないので椅子を壞して出した。

▲母親の聲を聞付けて玄關へ飛出した時、敷石でイヤと云ふ程鼻端を擦りむいて其上に着物を針に引掛けて一尺計り裂た。

觀察

米國の婦人に就いて

女子高等師範教授　岡田みつ子

婦人の數が特に多いと云はれて居るアメリカの東部の内でも、自分が居つたウェルズレー位婦人の多い所は他所には澤山ありますまい。と云ふのはウェルズレーは、即ちウェルズレー女子大學と、デナハゥルと云ふ私立の高等女學校との二つで維持してゐるやうなものだからで、ウェルズレーの往來を歩いて、行き遇う人は妙齢の學生でなくば、中年の女教師で、ウェルズレー停車場へ汽車の出入する毎に、上下する客の多くも亦女學生か、女教師か、下宿屋の主婦か、但しは下婢であります。男子の數は大學内百人程の職員の中に僅かに八九人、女學校の方には全く無いので、普通の家でも寡婦が獨身者の家庭の方が澤山あるのであります。この村の郵便局へ行けば局長は男子ですが、他の役員は何れも婦人で、村立圖書館の掛員三人も亦婦人であります。唯町の角の藥店と、その隣りの果物店や肉店の主人が男子なのが不思議位なものです。

かゝる女人島みたやうな村に、三年半も居つた自分が、婦人に接する場合が多かつたのは自然の勢で、殊に自分は寄宿舎生活をせずに、普通の下宿屋に居りましたので、教師や學生と交際したのみならず、娘さんにも妻君にも母親にも獨身者にも接する機會が澤山あつて、從うて米國婦人について多少の觀察をもする事が出來た次第であります。

茲には、私が始めて風俗習慣の異なる外國婦人の中へ入つた當時、日本婦人と違うと深く心に感じた點を四つ五つ擧げて御話したいと思ひます。

△交際上手

第一に目につく事は米國の婦人が

な事です。之は自分がこゝに取り出して申す迄もなく、彼等が親しみ易いのは世界に知れ渡つた性質ではありますが、交際して見て自分は更に深く感せずには居られませんでした。正直に申せば、自分は從來日本婦人の催される懇親會とか園遊會とかいふ會に出るのが嫌いで、成る可く出席しない工夫をしました。といふのは、知己でも多くあれば兎に角、さもなくば出席しても手持不沙汰である、知らぬ人と睨み合ひをして小數の馴染の人と簡單の挨拶をして、知らぬ人はヤハリ知らず仕舞で、時間を費した割には益する所もなく面白い思もせずに歸らねばならぬからでした。

所が、アメリカでは自分があまり饒舌らされて困つた覺えは澤山あるが、話し相手がなくて閉口したという記憶は更になく、又他の人がツク然と立つてゐたり仲間外れになつてゐるのを見た經驗がありませぬ。之は主人役の人が氣が利いてゐて、來客に不興を感せしめぬやうにする點もありますが、客人同士が人に接しつけてゐて調子を合せるのが上手だからです。甲と乙とが話をして居る所へ丙が來て、甲に挨拶をすれば、何はさて置き、甲は乙に丙を紹介します。そこで忽ち甲乙丙は、三人一所に話をする事が出來るといふ風に相互に紹介の勞をとつて一室中に未知の人がなく、一座みな融和することを主客共に務めるからで、一寸した世間話から意氣相投じて將來の親友となることもあり、其れ程でなくとも、數時間を愉快に過ごし見聞を廣める功益はたしかにあります。

日本の若い婦人のやうに、對面の挨拶がすめばあとは遠慮がちで物もろくに云はぬのはあんまり花でもありますまい。大勢の集まる席では尚更のこと、遠慮も程々にして相應に膽面なく立ちまはられたいものです。「日本の方々にアメリカ人の會合の樣を見せたい」とはよくボストンで友達同士の間で申し合うた詞でした」自分がことに親しく教を受けた一人の婦人は、實に人を接待する事が上手で、この婦人の許へ幾人といふことなく、自分は日本人を連れて行きましたが、交際下手のしかも英語のよく出來ぬ人をつかまへて、三

十分なり一時間なりを少しも座を白らけさゝずに接待します。客が歸る時には愉快であつたとキット厚く禮を述べてゆきます。始のうちは自分はさまで注意もしなかつたが、一體どういふ方法であのやうに角がなく自然に面白くするのかと、フト考へ初めて、それから觀察して見ると、話をしかけるのに客が興がる事は何であるか、如何にしたらば客が我しらず話につりこまれるかを發見しやうとするので、日露開戰になつたからは、先づ戰爭のことを云ひ出して、二三度問を試ろみ、意見を尋ねたり自分が日本に同情してゐる事などをいふて見る。それでも客がさまで乘り氣にならぬと思うと、やがて話頭を一轉して、當人に最直接に關係のあること、其人の學校のこと、もしくは職業のこと旅行のことアメリカに就きての感じ等を聞き始める。是程の事を尋ぬるうちには何れか客の氣に入る問があるので、こんどは自分が聞き手になつて、客のいふ所をうけて面白く熱心に挨拶をする。さもなくて主人公よく〳〵窮した場合には、自分の所持してゐる日本品を示す、知つてゐる日本語の一言二言をいふて聞かせる日本の着物を引かけてまでも見せる。いひかへれば全力を盡して客を愉快にしやうとするのです。或時自分はこの婦人に向うて、どうしてさう巧みに人をもてなしなさると尋ねたらば、その答に、要は自分の身を客の位地に置いて見るので、御客が我を忘れて興がるやうになれば自分のやり方が成功した證である。とにかく客に接したらば、自分の胸には常に話題の絕えぬやうにするのが肝要であると。

歸朝以來自分もいろ〳〵の人に遇ひますが、一番接待に困る、即ち骨が折れるのは、若い婦人がたで、一通りの挨拶の後は、何もいはずで、しやべるのは一切主人に押しつけて、僅かに然り否の返事をするばかり茶を飮ませるにも、菓子を食べさせるにも、何度といふことなく口數をきかせます。何の爲に訪問に來たのだらうとツク〳〵いやになるのみならず、この種類の御客が三人も續くと、根氣がつきて口を開くのも物憂くなります。どうかモット快活に自然のまゝに臆せず

人に接する癖を今のわかい方々につけたいものです。自分勝手の時には御饒舌家で、人中へ出ては御辭義ばかりのダンマリは自分だけならこれで濟むかも知れませぬが、一家の主婦になつて客をもてなす責任の出來た時分にはどうする氣でせう。米國婦人は亦

△趣味が多方

です。從うて話の材料を豐富に持つてゐるから、人と談話もしよくなるのです。音樂でも、繪畫でも、文學でも、その他政治、宗教、演劇、運動についてゞも一通の智識があり、亦多少の興味を必らず持つてゐます。だから如何なる種類の人間に出遇うても、話の題に事を缺く事がありませぬ。自分でピヤノが彈けなくとも、有名な樂師の彈奏はきいてゐるし、有名な曲は耳で記憶してゐます。自分に畫が出來なくとも、古今の名畫や、畫家の名位は承知して、好き嫌いに關して立派な考をもつてゐます。世界の出來事についても、重大な事ならば、新聞紙か雜誌で必らず目を通してゐるから、自分の意見を述べぬまでも、人の相手をして面白く先方の話をうけ入れる事は出來る。旅行の話、書物の話、下婢問題、家庭教育等は御得意の話題で、滔々數千言且つ言ひ且つ聽き、いつ終るか知れない程に面白氣に語ります。かく材料に豐富だから人と話がしたくなる、話をするから新しい事をきく、新しい考を得て趣味がます〱多方になる。双方相俟つて、米國の婦人を交際上手にさせるのであります。日本のわかい婦人だつて、相應の教育は受けて居られて、音樂や繪畫や文學に對して基礎の智識は持つて居られる筈なのだが唯其れを發達させてゆかうといふ餘裕をもたず、氣力をもたないのが米國婦人と大に異なる處なのです。同じく廿四時間しかない一日を、一方の人は目のまはる程多忙の仕事をしながら其中から餘裕を作つて、快樂的に自分の業務以外の事を何かするし、他の一方の人は、朝から晩までたゞ身のまはりに起る些細の用事に追ひ廻はされて日をくらして仕舞う。半年一年の終りに至つてその損得を計算して見たらば、果

してどんなものでせう。米國の人は

△規則ある生活

を好みます。而して餘裕を作り出すのが上手です。一定の業務のない大富豪でも、何かきまりをつけて一日を暮さないと不愉快だと見えて「私は何時には新聞を讀んで何時からは倶樂部へゆくのだ」と事々しく話してきかせた老人がありました。

　自分の作文の教師であつた人は、投書や著述をして時間に束縛せられる生活をしてゐる人ですが、やはり自から規則を設けて、日々の仕事を區分して居ます。七時半の朝飯がすむと自分の部屋の掃除をし整頓をして、それから正午までは机に向うて一心不亂に書きものをする。今日は氣が進まぬからといふやうな理由で止めた事は更にない。晝食がすむと二時半頃までは部屋に退いて晝休みをして、三時になると人を訪問しても、人の訪問をうけても差支ないやうに衣服をきかへて出て來る。それで六時までは運動にゆく事もあり、編物をしてゐる事もあり、樂みの讀書をしてゐる事もある。夜食後は夕刊新聞に目を通して、あとは家内の人に打ち交つて十時ごろまで過ごします。日曜日は午前は會堂へいつて、午後は手紙をかくと定まつてゐる自分がこの人と別れる時に「必らず毎月第一の日曜には手紙をかくからその積りで待て」との事でありましたが、果して月のはじめの日曜ごとに書いた手紙がかがさず來ます。

　それから自分が下宿して居つた家の妻君で之も忙しい家政をとつて居る人ですが、人の起き出でぬまへに一定の仕事をして、朝飯のあと片付がすむと、自分と自分の子息の部屋の掃除をして其れから肉や野菜の買出しにいつて、戻つて來て午飯までに暇があれば繼ぎものか縫ひものをする。だから時計によつてこの妻君は今ごろは二階だらう、今ごろは買出しだらうとその所在を推定することが出來ました。午後はヤツパリしばらく休息をして、其から着物を代へて、散歩や、訪問に出掛ける。夜は何も用事をせぬのがこの人の主義

で、相手がなくば新聞か雜誌をよみ、相手があれば、カード遊びもするピアノも彈く、劇場へもゆく、音樂會へも行く。それでその翌日はまた早くから例のやうに立ち働いてゐます。

右を見ても、左を見ても、規則だつた生活をし難さうな人が皆してゐるので、之でこそ仕事も捗取り遊ぶ時間もある筈だと思ひました。日本へかへつてからは食事の時間にだらしがなく、訪問時間にだらしがないので、豫定の仕事も豫定通りには出來ず、何だか始終時間がなくてしかもつまらなく日を暮らすことが多い、之はまだ規則をたてゝ仕事をする程に日本の社界が忙しくないせいでもあらうが、追々には改良したいものであります。最後にアメリカの婦人は

△氣が若い

といふ事を申して終りませう。米國人は六十の老女も十六の娘も或點に於ては同じく子供です。ウエルズレー大學の學生が一方には論文だとか作文だとかに追はれて參考書類の中に埋まつて居るかと思うと、時には全く子供にかへる事があります。例へば五月の一日などは朝、禮拜堂へ臨むのに最上級の生徒は制服を一樣にきて列を作つて大きな輪を一人々々廻はしながら繰り込むのが例で、この日の稽古が終るとチン〱に膝までよりない赤や桃色の短かい着物を衣て、髮の毛を下げて七八才から十二三才ぐらゐまでの子供の風を裝うて、メイポールのまはりを跳りあるいたり、風船玉を飛ばしたり、菓子を食べたりして校内の芝生の上で日の暮れるまで遊びます。日本人にはとても馬鹿々々しくて仲間へ入らうといふ氣にもなりませぬが、之をまた校長はじめ敎員等が態々出て來て見物します。

それから一年に一度は、敎授達の素人演劇があるので、之には平常すましきつてゐる婦人連が出るので、舞臺へ出てずいぶん思ひきつた滑稽な事をします。

生徒や學者が氣が若いのみならず、六十に近い普通の婦人達が今晩はカード遊びをするからとか申して同士を募つてゐることもあるし、四十位の人が始めて氷

すべりを習うて面白いというて騒ぐし、年五十をこゑて密かに教師について作文の稽古をする人もあります。自分の知つてゐる八十餘の老女は、不幸にも年をとつてから盲目になつたので、急に、凸起した盲人の使ふ文字をよむ事を習うて、今ではどんな書物でも讀めるやうになつて、無聊を感ずることが少なくなつたというて喜んでゐます。それから女醫でこれもゝう六十位の人ですが、暇には原へいつて、若い女學生と一所にかけまはつてゴルフといふ遊びをしてゐます。

しかし一番かはつてゐるのは、ウエルズレー大學の圖書掛りを長くして居つた婦人でせう。この人は、ここに職を奉ずること廿年、もう働かなくとも生涯を樂に暮せるからというて辭職をして、それから豫てからの希望であつた事を實行し始めた。第一にカリフォルニヤに遊ぶこと一年半ばかり、歸つて來てからはボストンの美術學校に入學して、特に室内裝飾法を研究してゐる。自分が最後に逢うた時には、圖を引くのがまだ下手でなどゝ云うてゐました。この人はかういう風がはりですから、衣服のことなどは少しも構はず、交際が大嫌いで何所へ招かれても免れらるゝ丈は免れて出席せず。そのかはり娯樂はと尋ねると、馬に乘つたり、寫眞をとつて歩いたり、馬車を自から馭して運動に出る事などが一番愉快だというてゐます。

右に擧げたやうに、米國人の意氣の旺なこと、種々の方面に樂みをもつてゐること、何歳になつても老い込まぬこと、之を我國の婦人の、無性で、引込み思案で、家事の世話に追はれるとか、子供があるからというて愚痴してゐるのと比較したらどうでせう、豪いではありませぬか、氣を若く持つのは單に心の持ちやう一つです、皆様奮發して米國人の眞似をなすつてはどうです。

獨逸帝の攝生

カイセルは御氣に入りの侍醫に勸告された「生活の法則に從つて攝生を務めらるゝと云ふ事だが、其生活の法則と云ふのは、朝飯の時に果物を食すること、晝食にも同様なること、饅頭類又は糖分過多の菓子類は避くること、一日に一度葷類を食し茶、珈琲は飲む可からざること、晴雨に拘らず一日に四哩の歩行運動を怠らざること、過浴は毎日之を取り尚毎夜鑛溫湯にて顔面を洗ふこと、睡眠は毎夜八時間より少からざること稱である、皇帝は健康狀態が大に佳良なのは全く此法則を遵奉して措かざる故だと謂られて居る。

婦人と肩掛

當今婦人社會で專ら用ひられてゐる肩掛ですが、此物は寒さを防ぐ爲めに使用するもので、嚴寒の地には已むを得ませんが、内地の樣な氣候のよい所では皮膚の弱い小兒や老人は別として其他では實際不必要なものと考へます、人の身體は大切にすればする程弱くなるものですから出來るならば肩掛などさせずに、寒風にさらして强い身體にきたへて置かなければなりませんが、之は別問題として今こゝに肩掛を用ふるについて、注意すべき點をあげて見ませう。

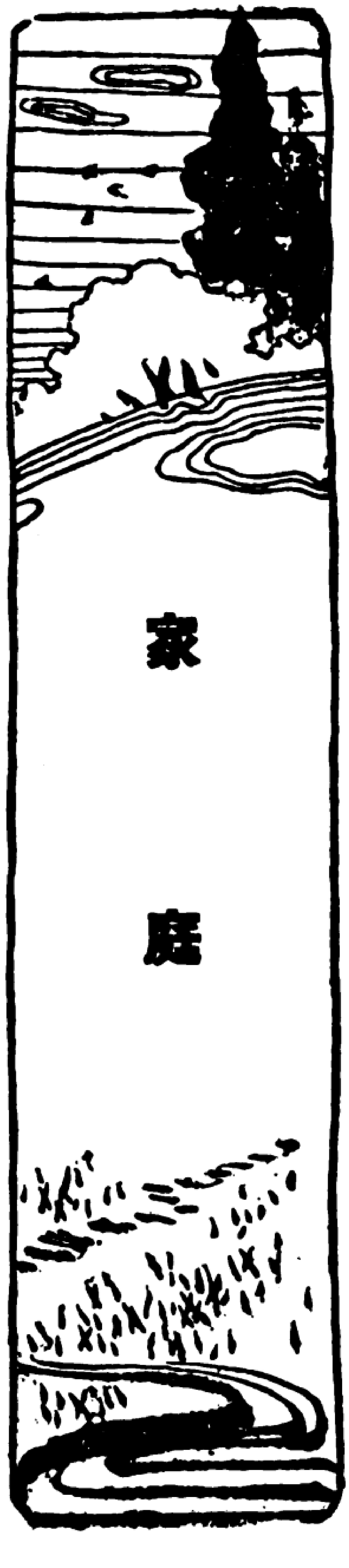
近來いろ〱變つた種類の肩掛が流行して參りましたが、實用に適するものが少ないのみならず其價の高いことは、實に實用に對しての價に數倍して居ります。我々見す〱こんな不經濟なことはしたくないと思ひます。それで之を求むるに當つては、何を目的として撰定したらよいかといひますと、大體次の事項を標準とすればよからうと思ひます。

第一、防寒　第二、保存の期限　第三、實用に比較する價　第四、形狀及び色の配合

肩掛の目的は寒を防ぐのですから、それを用ゐて寒さの防げぬものは、用ふる必要がないとおもひます。故に地質は毛織物が一番よいとおもひます。之は氣孔に空氣を包むことが多い故、從つて温を保つことも多いのです。以前に流行した毛織の廣く大きいのは、温かではありますが、之を着て歩くのはあまり不格好で、それに身體が自由になれませんから、今少し小さくてもよいとおもひます。それには三角な形が一番よかろうとおもひます。あれは襟をまくと共に、背の方も一所に被ふ樣になつて居りますから、輕くつて温かで、手も自由に働けます。近頃流行する長い肩掛は、温を取るは頸ばかりで、前の方へ長く下つてますから、全體のつり合がとれず、それに日本の着物は、前ばかり非常にあつくなつてゐますから、其上にこんなものが前へ下ると、自然姿勢もわるくなり、何れの點から見ても之は無用の長物だらうと思ひます。

色は其人によく似合ふ樣なのを撰ばればなりません、いかに流行でも眞黑な顔の人が、眞白な肩掛をするのはよい配合ではありません。肩掛ばかりでなく、凡て自分にはどんな色が最もよく似合ふかといふ事に注意するのは必要な事です。

以上は一般の婦人の常用に就て申しましたのですが、學生などは、ことに毛糸でいろ〱工夫して、目的にかなふ樣なものを編むで用ひるのが至極よろしい。價も至て低廉で、防寒の目的は充分に達しられる上に、手細工の練習にもなり、意匠の助けにもならうかと思ひます。



村居 家庭雜記

齋藤弔花

▲小さき家族

家庭はわが爲めに慰安の牀なり。われは多くこゝに趣味と品性とを養はれぬ。都にありし時は、風雲に心動いて、やゝもすれば沈思の興を空しくせんとせしこと數次、村に入りて、はじめて靑山白雲の趣味を得たり、自然の配置、運動によりて、默示と封讀とを得たるわれは、家に入りて、月光窓より射す爐邊に坐して、近親にこの感想を語るを樂しみとせり。わがこの言語の會に會して、わが一顰一笑を、心ありげに仰ぎ見る異性の家族こそあれ。一は久しくわが厨に養はれたる黒ろき小犬名を「寵兒」といふ。これわが小さき婢のつけたる名なり。いつも夜は竈の灰に身を伏せて、朝炊にとて庭にでる小婢を驚かすが常なれば也。彼はわれに十年の友なり。この小さき動物、わが姪なるが、さる山寺の椽下に之を認め、懷かしげに慕ひ寄りたるを、小屈みに、頭撫でやりたるが縁にて、人に隱れて、七辰のお茶うけなど、この新しき友に運びたりしが、親犬の、いつも傍より之を奪ひ食ひて、小さきものゝ口にも入らず、淨進嚴しからぬお寺ながら、肴は圓顱の人の口に骨まで漁られて、椽下の家族には一臠の好餌も覺束なからんとて、袂に彼をつゝみて、私かに飼

はんとせしが、夜に入りて友なつかしく、母戀しさにかしましく啼きたるより、わが母上に悟られ、つゝまんに由なく、涙を流して、黒犬の辯護と紹介と歎願を兼ねて、漸う許されたるものなり。性聰うして、一家に馴染み、ことにわが愛姪には舊恩肝に銘じたらんさまにて薄暗がりの足元につきまつはりては前足踏まれて怨めし氣にけたゝましく吠立てたることもあり、わが歸省の折は門に出でゝ先づ之を迎ふも彼。わが車上の別に、村のはづれまで送り來るも彼なりければ、畜とも思はれず、霜に、雪に、花に月に、時々この「竈兒」のことを書き添ひたり、こたび歸村して、小廬の主人となりて、わが汗もて彼を給し得るに至りてより、主從といはんよりは、友として、彼を見るに、慈み日に累りぬ。一は近ごろ、ペストを怖れてに非ず、近郷にて產したる猫兒の餘りに愛らしきに、わが性深くこの動物を好むに非ねど、淋しき家族の笑ひ艸にもやと、手鞠など轉がして、賺しき彼の性など時の慰みに翫びしが、先客たる同類とは、いつか馴染みて、打戲れなどする迄になりて、われは太くその柔順なる一面を愛し、自づから彼が陰險の性を忘れ、山陽外史が、猫にあつくして犬に薄き誹にあはぬ程の度にて、各その性に應じて、娛しき世を彼等に與へんことを謀るまでに用意をつくすに至りぬ。たとへば一尾の魚も、庭に投げたるは、これ羨まずといへど犬をさげすむに非ず、領分違ひとの顏色おかしく、椽上に置きたる皿には、彼そを妬まず、優しき猫の領を侵さんことを愧づる樣なるも愛らし、この夜會團欒の席には、隣の甲乙、話し興じて央に至れば、袂より、必ず燒芋、煎餅など出すが例なるを、まづ小さき家族にもその一片を勸むる習慣に、いつとはなく、眼を皿にして一同の顏色いかにと覗ふらんさまなる。主人の心、人と獸とに差別あらず、博く愛することを樂しめば、まして、同人が樂しき語らひにと尖らしての辯難なく、米麥の談必ずしも退けず、當世の事必ずしも論はず、夜話は興趣を專らにして、たとへば窓白くさし入る月の翳なきを愛で、打並ぶ爐の圍きを主として、顧みるに柱に時計なけれ

ど、月の影に夜更を知り、明日は栗林白むころ、田に下る身ぞ。など打どよめきて床に入れば『竈兒』はわれもと急はしく、温き灰床にもぐり込み、猫兒は、娃が床に抱かれて、安き夢、一家をめぐる。

犬と猫。これぞわが家の少さき家族の主なるもの。その外に五羽の鷄あり、一羽の小雀あり。

鷄は子飼なれば、家族に懷き、柑子畑の霜どけに、餌漁り懶げなる面相して、霰誘ふ峰の雲など眺め合へるも、われ等が足音聞きつけては、急ぎ、羽ばたきして、われ劣らじと駈け寄るなる。小さき雛なりしきのふと、尾羽整ひたるけふと、其形こそいたくも變りたれ、心はいつも稚うして、愛に懷き寄るさま、誰れかこれに一握の米を吝むべき。わが母上はことにその肥えて雄雄しき名古屋支趾といふを愛でたまひ、妻は白きプラマを寵しぬ。朝は畑に出でゝ、蘿蔔、胡蘿蔔、根こぎにして葉莖を與へ、籾倉の扉を開きて、彼等の朝餉濟までは、われ等膳に就かず。日、柚の葉かげより、強く射して、五條の光線、窓より來れば、食卓に對座する一家の心、希望の花さきて、一皿の菜香も、玉食の味あり。



なほ拙なき節ながら、自がしゝ、競ひつゝ、辰告ぐる聲逞ましう、杉籬のあたりより聞えぬるころ、村の少女達が、征露の歌を美しき聲にて、誦しゆくなど、村

の興は、またその鄙びたるところに溢れたり。この生立よき鳥を見るたびに、夭うしてみまかりし彼等の友鳥を忍びて、薄命は人のみかは。かゝる輩の上にもあれなど、打歎かれ、われにもあらで、木かげに馳け出でゝ、さきつ頃、小童の、亡き彼の雛葬りし小塚に展じて花を供する心も禁じ得ざるなりき。われ等の里人は、わが五羽の三羽まで雄鳥なれば、二羽は要なし、市に鬻ぎて、卵產む雌にこそ代ゆべきものなれなどいふ。卵はわづかに身を養ふのみなれど、われはこの鳥に精神の糧を得たること、百顆の卵の比にあらず、敵にも別れは惜しまるゝ習ひを、などでわが師を情薄き市の俎上に載せて酒のむ人の唇に味を上下せしむるに忍びんや。と獨り肯んぜざるなりき。鷄につきて思ひ出づるは、二とせの昔、この峯時雨、里に淋しきころ、友の不孤子がわが家に客たりし時、國の爲めに、召されて海を渡る兵士が、一夜の宿に、何をか饗せむ。僕して、市に一獸の肉を求めしめしも、人に先たゝれて空しく歸りぬ。所在に困うじては、人々の趣向、わが東籬の小舍に向ひ、僕の手は、わが曾つて愛養せし小さき家族の一羽にかゝりつ。人は、われ等の心づくしを謝して醉うて歌ひぬ。不孤子涙を催して「あゝ戰爭の災は、里に手飼の鷄に及びぬ。」と相顧みて、暗然たりしが、はしなくもこの時の情景を偲ばざるを得ざりき。

鷄舍の扉、日あたりよく、それに釘うちて、小さき籠を挂けたり。この籠は、今年初秋、一番巢立の山雀の宿なり。囚はれ人のそれに似て、はじめは虛空打仰ぎて悲しげに騷がしく打萎れたりしも、やがて馴れて巧みに、身を飜して、その出來榮ほこり顏なる。去る月備中の泣菫子が戯れて「この鳥主人に似て藝なし」と口惜しくも貶したるに、鳥ならぬ主人の心外なりしが、今日のさま見せたく覺ゆ。

日和よき朝は、小さき鳥も心のびやかに、影を鎖めて、囀ること頻なり。窓近き机に對して、この清き囀りを聞くごとに、われは他事と思はず、自然に飄遊すべき詩人の、生活の鐵鎖に繋がれて、やがて、社會の

冷酷にも一皿の粟と水とに枯腸を養ひつゝ、聞かせ、歌へと、强らるゝことと、人のこい鳥に於けるよりも急なる。鳥は歌ひ身を忘るゝことすらあれど、人は心にもあらで、泣いて、笑ふの藝に老ふ。鳥もいさゝか慰むところあるべしなど物思ふ耳元に、百千鳥など成丈長に啼くあらば、空想は破れてかの鳥いかにと心を惱ますが常なり。

この物語書き綴りし時、わが隣に住む婦の、野にて、雀を捉へ來れりとて、慌たゞしく、わが家の閾際に叫ぶに、出でゝ見れば、雀にあらず。深山頬白、右の羽を傷めたるが、尾は何者にか奪ひ去られたるなり。野良の風にも堪えぬこの態して、畦にもあらば、鼬の腹にも葬らるべきものなるべし。と、われは憐れに感じたり。新しき鳥籠を庫より取出で、之に移し、米を撒きて、拾ふに任せつ。弱き鳥の、一時は氣を失ひたらん樣なりしが、やがて、足元なる粒を啄みそめたる、誰が家にか馴れ飼はれたるあとも見え、人行知りせぬが中々に哀なり。風呂敷を蔽ひて、小闇き室の隅に置きしが、いかにしてある、心にかゝりて、われはそと寢床を出て、小ランプ捧げて思ひより、輕く蔽の隙より覗けば、この小さき女童、細目を開きて、怪しき樣をいふかけしげに眺めたる、野山の夢を破りてもあらんには、われは罪深きものなりける



よ。忙ぎぬき足して、床に入りぬ。去年のこのころ、巣立忙しく、心亂れて、一羽の鶉、電線に觸れて、眩ひて野に仆れありしを、雲雀ふゝとわが家に齎らせしもこの婦なりき。水、まき餌に蘇生りたれど、野鳥は遂に葦生ふる汀を忘れず、この鳥の常とて、羽つくろひして、低く鳴き、雲を衝くべき勇ましき翔りざまに、低き鶏籠に、面を傷けたる痛ましさ、見るに忍びず、放ちやりしに、程經て、芹の小川に、亡き軀見出したりと童の語りき。何となく哀れに悲しき思して、物の本など漁りて、この鳥のこと讀むことに、いつも、この日を思出でざるはなかりき。里遠く水田のほとりを歩みて、わが足音に驚ろきて、飛び出づる鳥に會ふごとに、これわが友に非ずやなど、「思ひわづらひ、彼の世に亡きものなるを思ひ出でゝ、うなづくこと數次なり。今宵も不圖彼女の上を家人に語ることとなりぬ。鄙に下りてより、むかし深く語ひし友日に〳〵疎くなりゆく世に新らしき友の、また思はざるに親しくなりまさるもあり。人はわが住居を寂しと見切も、新知、舊友、わが小さき胸の家に、樂しく囀音する小さき家族の上の幸思ふにも中々に忙しき身とはなりけり。

▲小さき庭

昔は、ウヅの地に聖人アブラハム、神の試錬にかゝり、其愛子イサクを燔祭の犠牲に召されし時、ますます神を敬愛する精神に驅られ、手づから一株の柳を植ゑて、その影に坐し、心靜かに祈りて捧げきとは舊約の記るすところ、われは讀みてこの詩趣ある一章に及ぶごとに、その光景を四千年後の今日に思ひ浮べて、今もなほ上古の園に遊べる心地して、懷しさ、床しさに心躍るなりき。小庭に立ちて、生々たる菜畝、樹蔭、鳥の聲、松の籟などに接する毎に、われは、少くとも、濁世にある身を忘れて、思はず、憂ひぬ境に溺るゝこと屢々なり。淵明が五株の柳を植ゑ、寒菊に培ひし心とは異れど、同じく、一種自然の聲色を迎ふる快さに、われも、家をめぐれる空地を耕して、萵菜、「ほうれん草」水菜、葱など食餌の料を植ゑ、傍ら、伊丹の商人

召して、數々の薔薇、芍藥、牡丹を處狹きまで植ゑ込みたり。なほ、野山にそゝろ歩きの道すがら、黄昏堤朧ろなる月草、すみれ、蒲公英、佛の座、手に任せて、わが庭に移し來り、一歩の外、自然の按排に心酔ふまで今年は成効した嬉しさに、われは、都の友に寄する手紙の中などに巻き込めたる、強ゐて風興を衒ふにあらで、われ知らず、歡を分ちたさにかくする也。

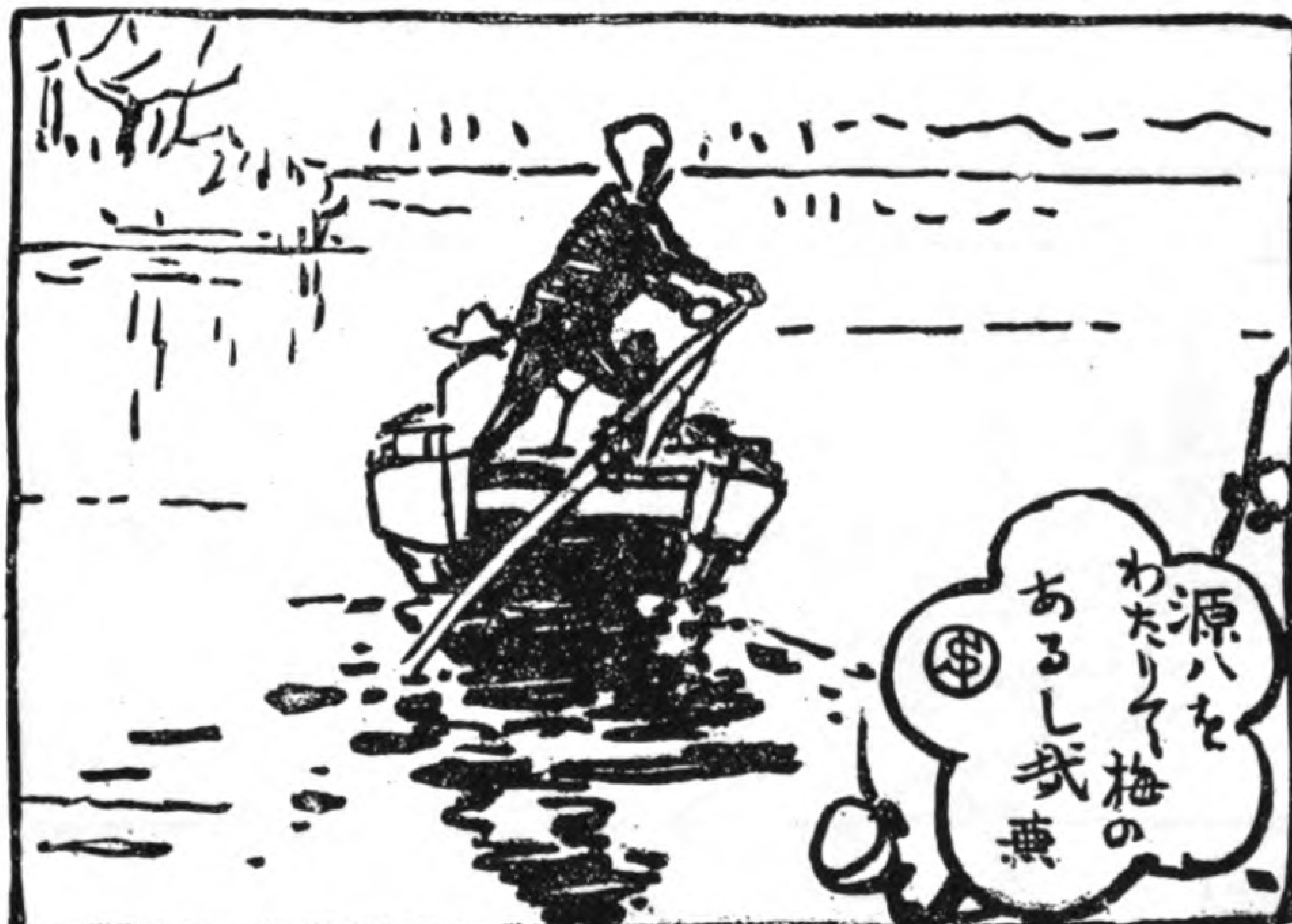
いつぞや「はがき文學」にて、宙外氏が夏蜜柑の種を庭に下して、その成長心にかゝりて、都住居の夢も、磐城の奥なる柴の籬の邊に飛びたり。とやうなること記されしが、われもかゝる



消息に會することなきにあらず。今は霜にをされて、若芽もいと、弱り果てたれど、雲雀啼くころには、新芽を擴げて、生々したる色園に溢るゝ一根の撫子。一昨年、摩耶の峰に上りて、六甲の谷間に輿を傭ひ、仰ぎては、雲鮮かなる峯々の色を望み、俯して栗黄ばむ林の流れを見れば、しほらしき花の數々、たとへば、闇の夜に、星ぐつの亂れ落ちたらんごとく、或は畫工が朱の彩汁、點々と染め散らしたるがごとく、わが眼鮮かに映れるまゝ輿を引止め、身をのり出して、摘み來れるはこの花なりしを、歸りてわが庭に種を下し、今日か明日かと樂しみにせしこ

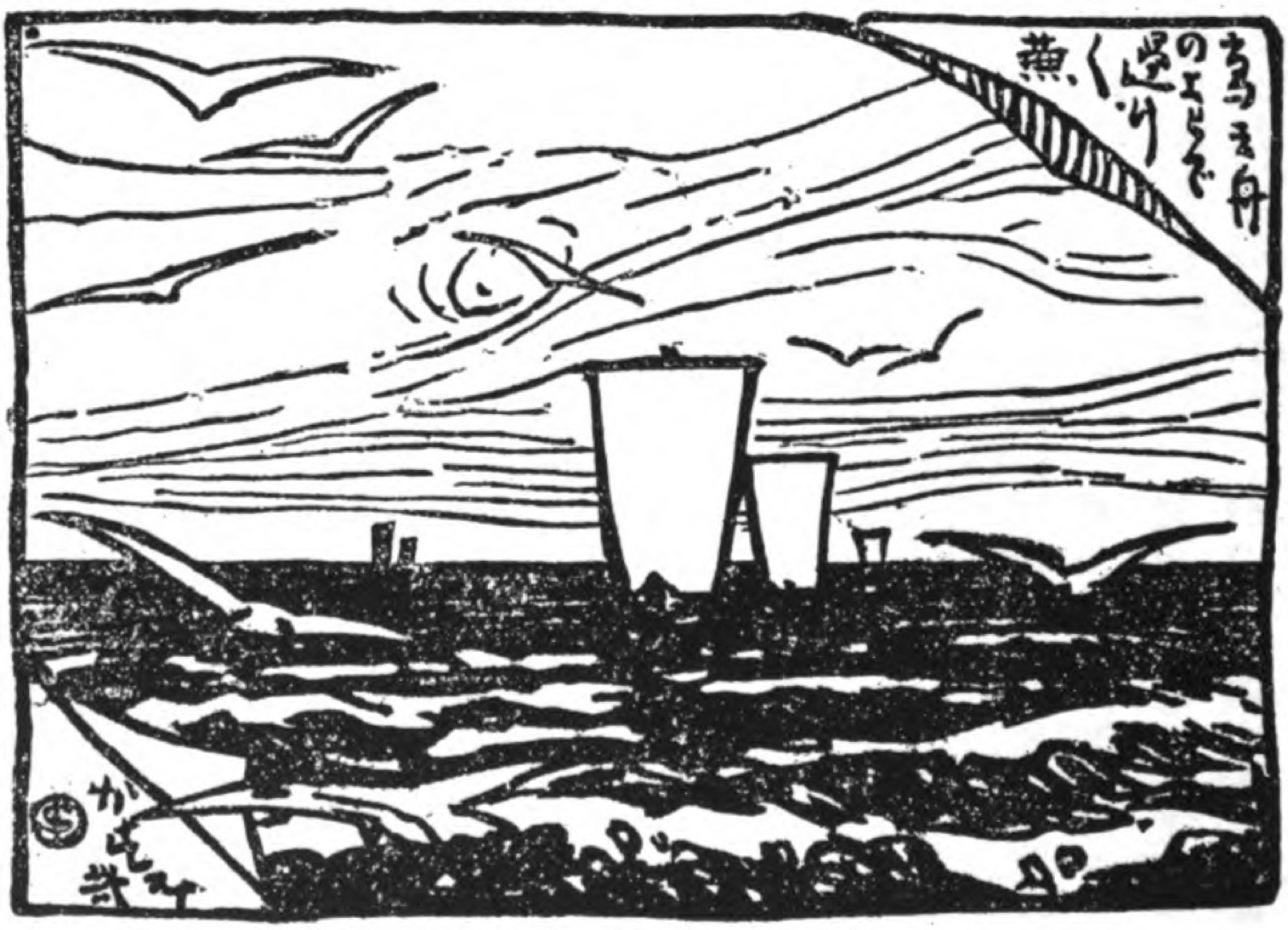
と幾日、聽て、一莖、黒土を擢んで出たる。これぞ、一粒の辛子種も、鳥の巣を架るに足るべきに譬ふべし、今年は、百に近き花さき出たる。わが喜び胸に餘りぬ。彼岸の中日、家人と園に下りて、その莖より莖を剖き、根より根を分ちて、親しき友許に贈れるに某氏は態々その一花を封中して、君が惠の露は、かくめでたき色を飾りぬ。書窓、日光眩ゆき邊り、われに怡顏を捧たるもの、この君なり。云々と書き送られたり。

それに隣りは一隴。こは、わが親しき人より贈られたる西洋花フリジア。曾つて、初夏、この種下せしに、日を經れども出



芽せず。種々の書をあさりて、やうやう、播種期の早きに心づき、態々下せし種、ことごとく掘出し、水に洗ひ、日に曝せしに、用心あしく、わが家のいたづらもの、鋭き齒あと無慘に、その半を戯れて餌み去り、狼藉たる外皮打眺めて、わが心悲しみ亂れたり。月を超えて、柑子色つくころとなり、この種根分せし友の、やうやうフリジア、數芽催したり。あまりの嬉しさに、まづ本家本元に一芽を齎らすなり。といふ。さてはわが心いそがしく、いらだちて、かの根こきせし愚かさ、播きたる種の朽ちてあらずば、いつしか芽さゝでや？　あるべき、この理

すら辨へで、わが荒々しき無法の手つきを自から愧ち、その鉢植珍らしげに、日あたりよきに移し、水を漑き、肥料を加へて、この一株、人の命よりも尊げに守立て居りしが、一日、妻の「かたばみ草の根分るとて、小鍬とりて庭に下立ちしが、こゝやかしこと漁りしに、俄かに物の具打すて「フリジア、芽ぐみぬ。珍藏の一株。これに比へては顔色なかるべし。四株、五株。否小さきを加へて十指に餘るが、落葉かげに萠出たり。」と。われは狂喜して、草鞋片足、片足に雪駄、驅けいでゝ物珍らしげに、一株、二株と自づから聲高らかなる、傍人の笑ひ、顧みるべく



もあらざりけり。人に遭ふごとに、フリジア萠芽ぬ。君にも頒たん。君にも。と小鉢に移して、知れる甲乙に贈りしに、わが里にフリジアの名知らぬはなく、誰が家の花、まづ、馥郁たる香を放つべき。など、競ひ合ふもをかし。花、媒をなして、人、稚子のごとく、貧富長幼のけじめ忘れて、いづれも、園藝家ぶりの、鬚面自づからさし出で、家の子に、一指ふさゝせぬさま、をかしともをかし。この花、いたく冬をおそるゝと聞けど、地に下したれば、俄かに、故郷奪ひて、温床に入れんもいかゞ。と思やりて、一日、家人、惣かゝり、藁よ、苧繩よ。竹よ、柱

よと、にわか造りの霜除けに熱心の度あらはれて、わが住む家根より美しく新しきを愛花の上に造り上げたる。成功の祝とて、あたりの藁しべ、繩きれなど、打集めて、マッチを擦りて、火をあげ、大工一同、掌かざして、そのまわりに集ひ、話は、この花の上にのみかしましきを、裏の背戸より、ひそかに忍より、さし覗き、敏しこく身をかはしたるものあり竹笆より、杉垣に、小さき影、見えつ隱れつ。これ、わが里に珍客ぶりの鷦鷯、歌一つ案じ出づべき境なり。

實驗教育 隣の先生

藤のや女史

私の家の兩隣に先生があります、それは五十餘りのお婆さんと、其嫁に當る二十五六の若い婦人、又此方の隣りには三十近いお嫁さんと其姑に當る方と而して今年三ッになる女の子とです、之れは私の日頃大事に思ふ先生であります、何故かと申すと此人々には私に種々な事を毎日代り〳〵に教へて呉れますから。

まづ私が此處に來て第一番に敎はつた事は、壁一重の長屋に住む時、余り高聲に話をしてはならぬと云ふ事でした、而して如何な害があるかと云ふ事を、實地に敎へて呉れました、さて其害と申せば、先三度々々のお菜は何であるかと云ふ事が皆人に知れます。くだらない内輪喧嘩のはしたなさが皆他人に聞えます。其家が如何な暮しをして如何な性質の人が寄り集まつて又其家の家が温いか、冷たいかが皆他人に解ります、外聞の其家の人より他に聞かしてはならない秘密や、惡い事が皆人の耳に這入ります、成程其家が大變によく治まつて居れば美はしく、聞き好う御座いますが、大抵の家が一から十迄皆圓く行く處は無いもので、其世間に聞えて恥づかしい處が自然に暴露されて、成程見かけは大層好さそうだが、内幕はあんなものかと竊に卑しむ心が出て來ます、まだ之れ位ならば宜いですが、世間には往々容易ならぬ秘密のある家も無いとは限りません、若し其家の人が常に氣なしに大きな聲で

話をしつけて居れば、ふとした事から大事な事も漏れて、家に關係する樣な事にならないとも限りません、夫れ故話は何でも其家内に聞えるだけの高さで話すべきものですと。

次には御用聞きに來る酒屋。八百屋。魚屋などをつかまへて喃々と喋るものではありません五厘や一錢の事を口ぎたなく高いとか、負けよとか云ひ罵るのは誠に見惡いものです、經濟上の事を考へるのは、誠に必要ですが、已に斯うやつて御用を聞きに來るのから買ふのは經濟にはづれた事で第一品物の善惡を見る事が出來ない、自分の思ふ時間に間に合はない事もある、而して手數が掛つて居るだけに必ず高いのである之れに向つて五厘や、一錢負けよと云ふよりか自分で出掛けて行つて、自分の思ふ通りの品物をゑらんで、而かも安く買はれる方が幾ら増であるか知れません。

まして若いお嫁さんが、無敎育な小僧や若者を捕へて下らない事を何時迄も喋つたり嘲つたりして居るのは側で見て誠に見惡いもの、其人の品性が二等も三等も下がつて見える夫れが何れ程の益になるか、貴重な時間を徒に費して小僧も家へ歸つて叱られ、お嫁さんは仕事が出來ない誠に馬鹿氣た事であると。



其次ぎに年寄りの先生が、毎日不平は云ふ可らず、日々の事に滿足せよと敎へて呉れます、而して其實例としては何でも國のものは好いが、東京のものは惡いと云つて頭から毀しつける。まづ第一に酒屋の持つて來る醬油が惡い、國のは色が薄くて甘味が有つて、何を煮ても美味しいが、東京のは何故か色は眞黑で、其割合に甘味が無く、奴豆腐を拵へるにもかつぶし無しでは如何しても食べられない、而して煮物に色が着いて誠に體裁が惡い、夫れから味噌も其通りで、此方のは只辛いばかりで味噌汁にしたてゝも味噌くさくて本統に不味い。

米屋が糠を持つて來た、夫れに向つて此方の糠は何故こんなにぼろ〳〵、恰で砂でも交ぢつて居る樣に粗くて、糠味噌に漬けても美味しくなければ、顏洗つても氣持ちが惡い。魚屋が來た其魚は何程か？　おゝ高い、而して目の色が變つて居るではないか、國に居ればこんな魚見たくても無い、如斯だから此方の魚は食べる氣がしない。

やがて肥料取りが來た、狹い家とて臺處と便所と隣合つて居る。ほんに國に居れば廊下傳ひに便所が着いて居るので、何時肥料取りが來たか知らない程であるに、東京のはすぐ鼻の先きにあるから家の內中臭いと云つて、さも怨めしそう。斯う云ふ風に、一日の內に何度となく事に當る每に小言を云はない事は無い、而して少しも愉快らしくない、常に不平そうである、食べるものに付ては勿論何でも皆東京のものは惡いと云つて不平ばかり云つて居る、誠に損な性分で、人が美味しく食べられるものも自分は不味い、人が愉快と思ふ事も自分は不愉快である。斯う云ふのは人間一生の損で、不愉快の事も自分の心掛け次第で、如何にでもなつて行く、又强いて愉快にする樣に勉めて行かねばならぬものです。其土地が不便で有れば有る樣に、不便な內で出來るだけ便利にして行くべきである。食べ物が不味ければ如何かして之れを美味しく食べられる樣と、或は料理に氣をつけ、或は身體を運動して、種々に試みるべきである、決して每日の事に不平は云ふ

べきでない。人は限りない慾望を有して居る動物ですから、物事を不平に思ひ出したなら恐らく錦衣、玉樓、山海の珍味の生活をしても猶飽き足りないでせう、何でも人は其日の生活に満足して、愉快に暮すべきもので有りますよと自ら證據立てゝ教へて呉れます。

次ぎは小さい子供ですか。凡て子供は餘り口喧ましく叱り付けると天眞爛熳たる處が無くなつて、早熟な少しも子供らしくないものが出來ると云ひます。殊に女の子などは猶更で、三ッとは云ひますが誠に大人も及ばない様な利口な事を時々云つたり、したり致します。然うかと思ふと自分で承知して居ながら甘へて人の歡心を買うとする様な事をします、昨日も障子を破ぶつたとかでひどく叱られて居ましたが。後で聞けばお灸をすゑられたのだとか。凡て頑是ない子供に體罰を加へてこらすのは教育の拙なもので、たとへ其體罰を加へられたからとて夫れ切り止めると云ふものではない、夫れよりかもつと外の和しい手段で幾らも善良に導く事の出來るのを、餘り口喧ましく叱ッた爲め却つて其反動として云ふ事を聞なくなり、强情になるものです。何でも親の云ふ事に從はせるのは必要な事ではあるが、其方法が悪るければ却つて頑固な子になつてしまふ、實に子供の教育と云ふものはむづかしいもので、中々學校で育兒法とか兒童の教育とか、口では立派な事を云ひますが、實際は誠



にむづかしいもの今の内によく見て置けと云はれます

老人同志が寄つて何かひそ〳〵と話をして居る、聞くともなしに臺所で聞いて居ると、ほんに今のお嫁さんは昔とは大ちがひで、學校にも行き何も彼もよく承知で居て、あんなのだから仕方がない、彼れが當世の風とでも言ふので有りましよう、私達の若い内はあれでは濟みませんでしたにと、二人は頻りに歎息をして居る、何を隣のお嫁さんが爲たのか、夫れは聞えませんでしたけれど、表面は仲好さそうに見えて居るが、矢張り老人は老人で、今の若いものを惡く思つて居るさればこそ彼して年寄同志寄れば愚痴も出るのである年寄りには又夫れ〳〵の考へがあるものですから、たとへ今の若い者に一廉の見識や理屈が有ッたにしても夫れは中々一時に實行さるべきものではありませんからなる可くは年寄らしい考へを持つて餘り新しい事を口にせず、利害の關係の無い事は何でも年寄りの云ふがまゝにして置べきものと云ふ事を悟られました。

斯くて私は毎日臺所に用をしながら、高い月謝も拂はず、雨風や寒さ暑さの通學の苦痛も無く、而も實地に丁寧に毎日〳〵入り代はり、立ちかはり五人の先生が壁越しに種々な(私に取つては最も必要な)事を敎へて與れます、何と仕合せな事ではありませんか、皆さんも定めし種々な先生をお持ちでしよう、一口に長屋住居と人は仰しやるけれど私にはこゝも又貴い知識の研究所と有難く思つて居るのであります。

生理學的夢判斷

糸 左 近

洋の東西を問はず。世が文明に進まねば進まぬ程、夢に關したる物語は多くある、これ夢は如何なるものか、又何うして夢を見るものかといふ原因を知らぬ結果である、知らぬ爲め夢を非常に大切なるものと思ひ、迹に夢を掌る夢主、神なる者があり、其神が人間の吉凶禍福を夢に知らせるものとまで妄信し、夢合、夢解、

夢判、夢買、夢換、夢違惡い夢を見たる時災ひ無きやうに祈禱などするをいふなど云ふものさへ有つたのである、否今も尙是等の事を信じ、正月二日の朝夢を見んとて、寶船を枕の下に入れて寢る樣な未開の人もある、然れど、其の寶船に書いてある廻文の歌廻文とは上から讀んでも下から讀んでも其の文同じきをいふ

ながきよの、とおの
ねぶりの、みなめさめ
なみのりぶねの、
おとのよきかな、

は、作者詳かならぬさうだが、兎に角佛者の詠んだものらしく、然うして毫も斯樣な事に因緣無きのみならず、却て夢の世の中を笑つて在るや



うである、余は固より國學や佛道に暗いから、或は間違あるかも知らぬけれど、先づ其の大意を解釋して試るは、後に言はんとする夢の判斷に甚だ都合好ければ、敢て無用の辯でもあるまいと思ふ。

偖「とおのねぶり」は十眠で、十の假名は「とを」なれば、これは廻文ゆゑ已むを得ぬ次第である、されば長き夜即ち長い間佛法の所謂十惡殺生、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、偸盜、貪、瞋、癡などいふの夢をみてゐたが、夫等は皆目覺めて、今や法の船に乘る心地、即ち轉迷開悟の境界に達すれば、實に樂

しいことであると、斯く此世の中をさへ墓無しと觀ぜる歌を以て、夢の夢を見る材料にせんとは、返す〴〵も迷の迷と謂はねばならぬ。そこで余が今爰に述べんとする夢判斷は、斯の如く無常觀的でも無く、又彼の駄法螺判斷即ち一富士二鷹三茄子流でも無い、根據を悉く心理學生理學等から取るので有る、されば夢の原理から述ぶるが順序なれど、それでは說くに甚だ困難なれば、面白き一二の實話を掲げ、然る後それに就いて夢を說明し、次に判斷に入るが、却つて能く解し易いと思ふ。

都の田舎ともいふべき小石川の片隅に、「露と明け露と暮るゝや草の庵」とでも言へば如何にも風流に聞ゆるが、イヤハヤ何とも形容の出來ぬ汚い家に、露命を繋いでゐる坂本吉五郎といふ貧乏な植木屋がある、年は七十の坂を二つ三つ越えてはゐるが、今より三十年程以前、世が世で有つた折、雇ひおきたる乳母のお何が、二日の朝夢に傳通院の墓場の中に、一つの瓢簞がぶら下つてゐる、若し之を拾へば、末々まで富貴繁昌疑ひ無しといふ聲の聞ゆるや否や夢は覺めた、そこで早速この由を主人に告げ、未明に右墓場の中を搜せば果して五合入位の瓢簞を小枝に懸けてある、さて不思議な事も有れば有るものだ、併しこれも夢では有るまいかなど疑ひつゝ、之を振つて見れば、尙幾らかの酒がドッコ〳〵殘つてゐる、兎に角之を持ち歸ると、主人大いに之を奇とし、何うか其の瓢簞を讓つてくれと云ふ、お何は甚だ惜いとは思つたれど、當時我が夫は非常に困窮して居るから、之を五十錢に賣つた。所が人の運命は面白いもので、これよりお何の夫はこの五十錢を基本とし、魚賣を始め、する事爲す事圖に當り、今は小石川でも名高い財產家、それに引換へ、主人の吉五郎は萬事萬端に損を招き、數萬圓の富も遂に現在の如き有樣、何でも此の瓢簞が惡いに違ひ無いと更に之をお何に讓渡し、元金に利子まで添へて受取つたれど、矢張貧乏は何處までも貧乏である、話變つて或日の事、立派な紳商體の人が吉五郎の宅に訪ね來り暫し世の榮枯盛衰を感歎したる後、「その瓢簞は我の所

有物である、今お何殿は何こに居なさるか、我は今より三十年前に非常なる放蕩の末、親先祖にも申譯の無い所から、斷然死を决し、世間は大三十日で忙しい日に、傳通院の墓場に行き、一瓢の酒を此世の名殘に傾け、いざ之よりと、繩を木の枝から下げてゐる處へ、偶々墓參に來たるお何殿に見附けられ、懇々說論を受けた時、大いに悟る所が有り、首の代りに瓢簞を括り附け、之より大阪の知己を便り、一心不亂に勤儉貯蓄をしたる結果、今では數萬圓の富、これも全くお何殿の賜物である云々」そこで早速に吉五郎同道してお何の宅を訪ぬれば、お何は何不足無く暮しては居れど、常に血の道に惱まされ服藥の斷えたる事が無いとの話。今一つは西洋のを左に、



米國の紐育附近にジョンボルといふ金滿家があつた、此人は非常な拜金宗で、數多の金銀貨を貯へ、之を日々〳〵並べ見ては樂しみつつ有つたが、或夜强盜忍び入りピストルを指向けて「さア何萬圓を渡すか渡さぬか」との凄い文句、斯うなれば、如何なる拜金宗も、命には換へられぬから、唯々諾々之を渡せば、又數日を經ぬ中に、又々同じ强盜、刑事巡查も色々之を探偵すれど、何うも其の行方が巧妙で、更に其の手掛が無い、斯くして此家は如何に嚴重なる戶締してお

いても、多くの收入金ある每に、必ず强盜が忍び入るので在つた、そこで巡査は、此家に徹夜して密かに之を窺ひゐたるに、豈圖らんや賊は主人公である、卽ち主人公自ら戶締をはづし、自ら强盜になり、自らの金を奪ひ、之を庭園内に埋め、それより靜かに就寢し、鼾聲雷の如くに響かせてゐる、巡査も事の意想外なるに驚き、明朝早々尋ねるに、主人は大いに殘念がつて、同じく昨夜も刧かされ、已むを得ず數千金を取られたと涙潸然と下る、其有樣故意とも思はれねば、主人に前夜の由を告げ、右庭園内を掘れば、最初からの金圓悉く有つて一厘の紛失は無い、これは愈々不思議と某醫の診察を請ふ、醫師曰く、これ强盜の夢を見たるが原因となつて、夜遊病に罹つたのであるとの奇談。

偖て前者のは恰かも神が知らせたかの如き如何にも不思議な夢なれど、之を生理心理から說明すれば不思議でも何でも無い、何となれば彼のお何は最愛の我子に別れ而も家の貧困なる所より戀しき夫とも打別れ乳母となつて他人に雇はれ、其上血の道卽ちヘステリー性の婦人であるから、精神鬱々心緒散亂してゐたものに違ひ無い、然るに人の死せんとするを見て、己れを忘れ之を助けたは助けたが、己れも無常を感じ、忙がはしい日に墓參までする人なれば、其の注意力或は記憶力は極めて不確實であつて、其の瓢簞の如きは眼には見たが心には深く印象せずして、一時忘れて了つたものである、けれど夢とても心理學上の所謂再現叉聯想の一種であるから、爰に其の瓢簞が、二日の晉い朝夢を見たいといふ欲望と相關聯して再現し、斯る妄想力と變化したものである。今更に心理上の事實を舉げて之を證明すれば、彼のヘステリー性の人が俗に云ふ狐憑病に罹り、嘗て何心無く聞いてゐた古人の名吟などを一字一句違はず暗誦することがある、斯の如く精神の錯亂せる時に却つて不確實の記憶が再現することの有るものなれば、此の道理よりして、夢卽ち妄想力に嘗て注意もせず殆んど忘れてゐたる事實を其儘或は色々と構造して見るは甚だ珍らしき例では無い。後者は腦或は神經に幾分か異常ある其人が斯る大切なる金

銀貨を強盜に取られはせぬか或は之を土中に埋めおかんなど取つ置いつ腦力を刺戟して其の揚句に就寢したのであるから、それが一つの夢と變化し、延髓脊髓の反射作用より斯る夜遊病を惹起したのである。夫れ眞に熟睡すれば腦力更に働かぬものであるから更に夢を見ぬものである、然るに小人は就寢に際しても、色々と愚なる想像をしたり、クヨ〳〵心配したりする故、睡眠中と雖も腦力は幾分働き、左なきだに愚なる想像が、不確實なる記憶聯想と關係して愚なる夢を見るは理の當然である。その外疾病殊に腦病或は神經病の爲にも夢を見、甚しきは起き出でゝ飛び歩くことさへある、これ疾病時は其の苦痛の爲に腦を刺戟せられ、熟睡せぬからでもある、諺に夢は五臟の疲れといふが幾分か道理の有ることである、



されば如何なる夢も更に見ぬが善良なる人健康なる身體と謂はねばならぬ。斯く論ずれば夢の善惡を彼是言ふは實に愚なる事かと反問を受けんが、こは又一概にさうとも限られぬ、成程夢を見ぬ方が宜いには違ひ無いけれど、人世誰か夢無しに終る者有らんや、故に若し之を見るとせば腦力の反映であるから、其の善惡を判斷出來ぬとは勿論言はれぬものである、左れば余が所謂生理學的夢判

斷を左に列記して見よう。
(問)山水を眺めたる夢は如何。(答)善なり。
(問)花を觀、或は折などしたるは如何。(答)上等なり。
(問)金錢を拾ひたるは如何。(答)惡なり。
(問)試驗に及第したるは如何。(答)半吉なり。
(問)落第したるは如何。(答)惡なり。
(問)齒の拔けたるは如何。(答)惡なり。
(問)鶴でも舞ひ込んだ樣な目出度夢は如何。(答)大惡。
(問)人に戀されたるは如何。(答)戀すると共に惡なり。
(問)湯に入りたるは如何。(答)感冒に罹る徵と云ふは理あり。
(問)火事盗難の夢は如何。(答)善なり。
(問)親戚に死去或は病氣のありたるは如何。(答)善。
(問)死したる人に逢ひしは如何。(答)惡なり。
(問)馬に追はれ或は蛇に纒れたるは如何。(答)惡なり。
(問)山に登るは如何。(答)登り詰めたるは善なり。
(問)山を降るは如何。(答)緩々降るは善、落るは惡なり。
(問)風雨雷電は如何。(答)大惡なり。
(問)喧嘩口論したるは如何。(答)惡なり。

右は唯その大要の大要を述べたのみで、此の外曰く何、曰く何と問答したらば千萬無量で、到底言ひ盡さるゝものでは無い、然れど余の斯く答へたる標準を申せば、之をすべての夢に應用し、聊か判斷の材料にならうと思ふ、今右夢に就いて説明すれば、山水花木の如きものを眺め悠々樂しんだる夢は其の心身に何等の苦痛も無く、最も平々淡々たる時で無ればならぬ、次に金錢を拾ひたるなどは、其心に疾しき事あるに非んば夢にとても再現する筈が無い。試驗に及第する夢は優等生に見る筈のものでは無くて、幾分心に憂へたる心象なれど、其の及第なる愉快はそれ丈精神に苦痛を感せぬ所あれば、これ半吉と判ずる所以である。その他はこれに準じて知る可しであるが、凡て痛苦を感ずる夢は概して惡しく、愉快を覺ゆるは大抵善い、が併し、鶴の舞ひ込む如き僥倖的は、此の反對なる心の幻影であるから惡いので、風雨雷電喧嘩口論等は心身

の病的なる時に夢みる道理なれば、これ亦惡と判斷せねばならぬ。終りに臨んで一言すべきは、心は或る事物に接し、其の正反對を連想或は想像する作用あるものなれば、夢も亦この道理に從ひ、思ひもせぬ事を見ることの有るものである、例へば貧困者が富貴の境涯を夢見、富貴者が零落極る位置を見るやうな譯である、兎に角心身の關係は妙なもので如何なる夢も心の連想幻影、身體の刺戟感覺から來らぬといふことは無い、尙言ふ可き事澤山あれど、寳舟の歌の如く、十惡に迷ふ小人の境界を脫すれば夢を見る筈のものでは無い所謂聖人夢無否女學世界の讀者夢無しになつて頂きたいのである。

實驗育兒

江崎牧子

年頃折にふれ事にしたがひて思ひつゞくる事ども、いとまある折々少しづゝわすれがたみにかきあつめおけることのは、やう〳〵つもりたるを、このごろ親しき友のふと見つけて、いかでこを徒らにちり塚の土となしはてむやは、人にも見せてなどせちにすゝむるまゝに、さらばとおもひなりて、つひに雜誌にのする事とはなしぬ、もとより物かくすべもしらぬ、あやしき筆づかひなれば、いかにちりあくたの多かるべきを、見ん人さるかたにゆるし給へや。

▲溺愛の弊

よに子を慈しまぬ親はあらじ、わきて母の慈愛こそたぐひなきものなりけれ、さるにこのたぐひなくたふとき愛は、なか〳〵にその大切なる子をあやまりて、おもはぬ方に導くためし少からぬは、くち惜しといふもおろかなる事ならずや、わが友某われにかたらく、よにはさま〳〵の物ありてそれ〳〵製造の法、沿革の歷史等あり、耳にきゝさらに目に見れば興多くまたわが心のたすけとなる事多かり、此頃われうとからぬ人の方にて放蕩息子の製法　順序を見たり、しかりいと明かにこそ見つれ、と今更びて語りしは珍らしげなき事ながら、われも目に見ること〳〵ちしていとをかしかりき、凡そ世の親の心、吾兒かしこかれ正しくあれと祈らぬはなかるべけれど、生れて一とせが程はたゞ愛らしううつくしう生ひたつがうれしくて、荒風ふせぐにのみ日は明暮ぬべし、やうやう月日たちて三ツ四ツにもなれば、一寸の虫にも五分の魂てふ諺の如く、身長にふさはしき程の考も出來て、彼よこれよと親の心にもまかせぬ事多くなりゆくめり、こは發育の順序にて聊も不思議の事

ならぬを、親は欲目にやあらん自惚とやいふべき、まことにわが子は人には生れまさりつらん、この智慧の早さよ、今にしてすでに一ト廉の考ありて其氣われ〳〵大人をのむめり、旃檀は二葉より香しとはかゝる兒をやいふらん、鳳雛とや名けん、麟兒とや呼ばん、とうれしさに目もあかれず、人に逢へばまづわが兒手剛くてわが手にあまると告ぐ、賢くてとはさすがにあからさまにいはぬこそ、いふにはまさる思ひなるらめ、はや學齢ともなればよの同し程なる兒らに交へていかでおくれをとらせじものと、甲をとらば何かひてとらせん、優等ともならば何方へ連れ行かんなど、さま〳〵なる奬勵法を設けて其勉强を促がす、知らずやかの試驗點數の奴隷となりて汲々たるの學生輩は、皆此鳳雛麟兒の成長したるものなるを、されど猶この奬勵に堪ふるはよし、さらぬは過度の勉强にてまだきに頭腦の働きを疲らせ、十歳の神童三十にして凡庸の人と化するの憾なき能はず、愼まざるべけんや、親にしてまことに自尊の心あらば、吾兒たるべきものよの人並にまされるはもとよりそのところなれば、僅に小學校の成績の如き、優等甲乙何かあらんといふ如き見識を以て、あきらかに利害長短を辨へ、徐ろに大器を完成せん事を期すべく、さらんには其兒らも亦從て其志を大にし、區々たる小成に安んずるが如き事なきに至らん、されどこれらは才能に於て多少人にはうまれまさりたる兒らの上にこそ、これより劣れるきはに至りては、親の愛にあやまられて、必要の時期に於ける大切なる修養を怠り、身治らで終には家の名をも下すに至る、親も其初こそあれ、終に其非を悟れども、時後れては悔ゆるも及ばず、人生の後半まさに安樂なるべき時に於て、煩悶心痛の苦境に陷ゐるに至る、愍むべしといへどもかも其源の己れに出たるをおもはゞ、甘んじて當然の運命に隨ふの外なかるべし。

▲三ツ兒の敎育

近來家庭敎育の大切なる事、漸う廣くよの人に認めらるゝに至りしは、誠によろこぶべき事にこそ、されどこは多く兒童の學校時代に於ける家庭の敎育法をいふ如き傾きあり、さりながら夫より前世にいふ三ツ兒の時代に於て、旣に親たる者の心をつくべき事多かるべくやとわれはおもへり、抑も小兒生ひ出てより一年が程は、五官の働き大體備はれりといふまでにて、殆ど何事の考もなかるべきが、三ツ四ツとなれば敎ふともなく親同胞のなす業をまねび、時に心に叶はぬ事あればうちかへり、足ずりして泣きたけろ、よにたゞをこねるなどいふ一種の我儘は、此時より早く芽をば顯はすなり、かゝる惡しき癖は、いかにもして二葉のうちにつみ棄つべきを、あやしきは世の親ごゝろよ兒の泣くがいかにかなしき、怒るがいかにかおそろしき、及ばん限りは枉げて其心に從ひ、已むを得ざるも猶かにかくと取なして、なごめなぐさめんとすさるは大かたいわけなき程のしわざよと之も懲らさで、等閑に見過しつゝあるひまに、たゆみなき駒の足搔はいつしかと早く過行て、年と共に生ひのびし我儘は、終にやさしき母親の手にも心にもあまる斗の丈とはなるぞかし、われ甞てよめりし書に「小兒に從順てふ事を敎ふ

ろに未だ早しといふ時節は決してなし」といふ詞を見たりき、いひ換ふれば如何にいわけなき程の兒なりとも、扱ふ人の心を定めて制しなば、從はぬといふ事はあらじ、といふなるべし、僅に一句の言のはなれども、殆ど小兒敎育法の神髓ともいふべくや、元來親の兒に對するは、朝夕の關係あまりに密接なるが爲に、其取扱ぶりに何時を境として寬嚴の差列をたつべきや、殆ど念頭にのぼる時期さへなくして、不知識らず機をとり外し、終に永久の悔をまねくにも至るなるべし、されば如何におさなくとも、かにかくとわがおもふ處を貫かんとむづかりたける程の心いできたるを見ば、かの從順といふ事を敎ふべき時期の到來せしものとおもひ、此機を取失はぬ樣に充分決心して處置しなば、最初の一兩度こそ苦しとおもふ事もあらめ、後には習慣となりておもひしよりもたやすかるべきぞかし、其他何等の意味ありてなす業ならねど、かの「甘酒しんじよ」と呼て小兒を招くが如きは、幸ひに兒が言葉の意を解し得ればこそあれ、實は小兒を欺くに非ずや、又小兒まろびて柱などに身を打あつる事あれば、柱にくしと唱へてこれをうちかへし其うち泣くをすかすめり、これらもさゝやかなる事に似たれどまさなきわざなるべし、その手足の働き未だ心のまゝならぬ幼な兒に、あやまちあらせじと心をつくるは、親又は附添ふ者のつとめならずや、さるを己れが怠りはよそにして、罪なき柱に罪をおはす無責任にも程こそあれ、柱もし心あらば如何に腹たちいかるべき、又小兒にとりては復讐して思を晴らすてふ性質を養成するに似て、他日其人格に傷つくる事なか



らじやは、かゝる事は親自らすまじきは勿論、召使ふ者等をもよく戒めおかん事こそあらまほしけれ、又「よき兒なれば」とほめ、或は「褒美給はん程に」などすかして、さゝやかなる用を辨せしむる事あり、是等も一種の奬勵法にはあれど、度を超ゆる時は猥つる樣にもなり、又喰はすに利を以てすといふ如き意味をも生ずる嫌ひあり、これらは少しく成長し、稍理解力を備へたるものには、人には各々自己に相當したる業をなすべき義務ある事を說き聞かせ、從て己れを用立つる事を喜ぶ樣に敎へ、好く從順なりし結果によりて褒美をとらすといふ順序にぞせまほしき、かくいはゞ人或はさるいかめしき理り說き聞かせたりとていかで解すべきや、といはんが、われは實驗上必ず解し得といふを憚らず、さはいへ小兒の事なれば一度解し得たりとて、永續すべきものならねば、幾度も同じ事を繰返す覺悟勿論必要なるべし、其他小兒は癖つき易きものなれば、絕えず注意して諸事不規則にすまじきはいふを俟たず、已むを得ずして平素の埒を崩したる折にも、癖つきたりと見ば、全力を竭してそを矯め正さまほしき事にこそ、又一般老人の如きは、小兒に與へ得ざる物を目に觸れさするは罪なりと稱ふれども、わが見る所はまさにこれと反對なり、何となれば、小兒の爲に一家の必要を廢する事は難し、例へば小兒に見せ難きが爲に、賓客に茶菓を供するの習慣を破るといふはなし難く、又小兒の好む物ありとて、あるがまゝに請ふまゝに與ふれば、如何にしてかは物品を貯へ得べき、且ツおもふに兒等が、其欲する所のもの、目に觸れざればさてあらん、一度觸るれば理非の別なく必ず得ざるべからずといふ如きむくせをつくるはいと心許なき事なり、こは平素つとめて克己の習慣を養成し、手に入れ難きものは見るとも欲しと忍はざる樣に敎へおかば、他日成長して此誘惑多き社會に立つの時、超然として身を處するを得るの階梯ともなるべからんかし。

實地經驗

出產問答

柞葉女史

△貴妹、御姙娠遊して？　其はマア御芽出度う御在ます、御姙娠中は養生が大事ですから、御大切になさいましよ。御夫婦とも御縹緻がお美しく入らッしやるのですから、嘸ぞかし玉の樣な奇麗な可愛い赤さんがお產れ遊ばすことで御在ませう。否え、お世辭では御在ません、全く御立派なんですから、どちらにお似遊ばしても宜う御在ますわ、男の子さんか女の子さんか、早く拜見致したう御在ますこと、其は仰有るまでもなく、初姙てゞお在んなすッては、御樣子がお分りにならぬのも御無理の無いことですから、御參考までに、

私の經驗をお話し申さうでは御在いませんか。

▲難有う存じます、是非どうぞ、伺ひたう御在ます。十分御經驗のお有り遊ばす貴姉から、敎へて戴けば此上もない幸福。どうぞ、何も知らない妹に話して聞かすと思召して、詳しくお敎へ下さいませ。

△宜う御在ますとも、では申上ますが、先づ差當てお心得の要るのは姙娠中の養生、是は仲々大切な事で御在ますから、能く御注意なさいませ、召上物は可成く消化の善い、輕い物を選んで食るやうになさい米飯も成丈けやわらかに炊いたのが宜しいので、麥や粟なら少し位は混せても搆ひません、副



食物には、淡泊い魚肉、野菜の類が宜しく、脂肪の多い鳥獸肉の類は、宜しう御在ませぬ、魚は鹽引や乾物などは不可ませんし野菜も鹽漬や乾物は不可ませぬ、又た胡椒、芥子、生薑山葵と申す類の辛い物を、食べては不可ませぬ、それから姙娠したてには、芹、獨活、冬瓜、水瓜、芋、豆、南瓜、大根、蕪の樣な物は召上らぬ方が宜しう御在ます。又た梅實、橙實などの餘り酸ぱいものを召上ると、胸が燒けますから御氣を付けなさいませ、尤も善く熟した葡萄とか、蜜柑、梨、桃、柿、林檎、覆盆子の類なら、少しづゝ食る分に差支ありませぬ、而して三度の食事は、ちやんと時間を

極めて、分量も一定して、召上るやうになさい、無論間食は御愼しみなさるが宜しう御在ます。私共の經驗によりますと、姙娠中は食物の嗜好が不斷とは全然變つて了ひまして、常には其程でもなかつたものが、無性に喰べたくなるので御在ます、ですけれど幾ら口に適ふからと言つて同一品ばかり、續けて喰べては不可ない相ですから、初中品物を取換へて喰べるやうに致して居りましたが、成程さうすると不思議に氣分が快くなるので御在ますよ、オヤ貴妹も矢張然うで御在ますか、シテ見ると何方も餘り變りはないものと見えますね。

▲私は甚ろしく渴性ですが、飲料は何んな物を飲んで宜しう御在ませうか。

△飲料には、淸水が一番宜しい相ですが、平生飲りつけないで厭だと思召たら、白湯でも麥湯でも宜しう御在ます。茶や珈琲は多分に召上つてはいけませぬ、又た餘り澁いのは宜しく御在ません。お酒は葡萄酒といふものか、麥酒といふものか、日本酒ならば極く上等なのを、晝食の時少し位飲るも宜う御在ますが、酔ふ程に飲んでは害になります、また燒酎、泡盛、火酒などの強い酒は、身體を傷めますから、決して飲つてはなりません。

▲腹帶は何の爲に締めるのでせうね？。

△あれは腹と腰を温め、胎内の子を適當の位置に保ち又た腹の皮の撓むのを防ぐ爲めに締めるのです、所が我が邦では胎兒が育ち過ぎて、產む時に骨が折れるから締めるのだと心得、緊しく卷付けますが、之は間違つた話で御在ます。設へ然うしたからとて胎兒の發育つのを防げるものではありませんし、それに腹帶を堅く締めて居ますと、血の循環を妨げて、胎内に居る子の位置を惡くし、其の結果お產が重くなりますから、決して緊く卷いてはいけませぬ。御自分でお締めなされても宜しう御在ますが、成らう事なら產科醫か產婆に締めて貰つた方が安心で御在ます。腹帶の片地には白木綿「フランチル」などが宜しいのです。それから着物は柔軟な質で仕立も緩としたのが宜しう御在ます。

何、貴妹、懐姙中は外觀も體裁も要つたものではありません、只々、御腹の子を大事にするのが、肝要なので御在ます。序に履物の事を申して置きますが、外出の時分には成たけ輕く緩りした履物をお穿きなさるやうにし、又た御家に居らッしやる時も、足を冷さぬやうに足袋を穿いて居た方が宜う御在ます。高下駄や重い駒下駄を穿いてお歩きなされては不可ませぬ、萬一、石にでも躓いて轉倒んで御覧ぢやい、掛替のない大切なお子さんを、流産といふ不幸な目にお逢はせ申す樣な事になるまいものでもありませんから、呉々も御注意なさいませ、それから御懐妊中はお髪も時々、櫛を入れて清潔にして置き、成可く緩るくお結びなさいまし根を結めて固くお結ひなすッては、御毒で御在ます。



▲運動は致した方が善いと云ふ事ですが、何でも宜いといふ譯では御在ますまいね、どうか、其の方法や心得を敎へて戴きたう御在ます。

△運動は無論必要で御在ますが、さうかと云つて、御無理をなすッたり、餘り荒々しい擧作をなすッては不可ません、只、毎日善い加減に、怠らずなすッて入らつしやれば、宜しう御在ます。運動の方法を申せば、先づ起臥の時間

を正しくし、朝は可成く早く床を離れて、嗽を致し、室內の掃除も下女に任せないで、御自身に遊ばし、家の中の種々の仕事も、出來る丈は御自分に遊ばすやうにし而して身體に閑暇が出來たら、戶外に出て、散步をなさいませ、步行くのは、身體を平均に働かしますから、一番善い運動です、ですから每日三十分なり一時間なりを散步に用ひて、餘り遠くない所の公園とか宮寺とかへお出掛なさいまし、若し外出が御退儀でしたら、詰てお庭の內なりとお拾ひ遊ばせ。點茶、挿花又は音樂のお稽古などにお出掛け遊ばすのは至極結搆で御在ます。尤も步くには身體を眞直にして、正面を見ながら、緩々とお步行きなさい脊を屈め首を垂れて、下駄の鼻緒を見ながら步くやうなのは宜しくありません、又た疲勞を覺ゆる迄に步行いては體に障ります、それから雨天や、風の寒い日などは御出なさらぬ方が宜しい、又た雜沓の中や、塵埃の舞つてる樣な場所へは立ち入らぬやうになさい、左う云ふ所へ行く位なら、寧そ家の中で御用を足して入らしッた方が、遙かにお爲に宜しう御在ます。それから夜分は、無益のお饒舌や、世間話に夜を更かさないで、早く寢床に這入つて十分にお安眠なさいまし、たとへ橫にお成りでも、無益の妄想などに耽つて、心を痛める樣な事が在ては、お體に障ります。尙ほ御注意申して置きますが、高い處に登つたり、高い處の物を爪立足で、手を擧げて取つたり、二階の階子段を駈下りたり、馬車で凸凹の道を走けたり、馬に騎つたりなどすべて危い事や激しい擧動をなすッては、宜しく御在ません。

▲劇場などへ參つては、宜しう御在ますまいか。

△さうですね、餘り感心致しませんね、劇場に限らず寄席でも會堂でも、すべて人密の中は空氣が不潔ですから入らッしやらない方が宜う御在ます。

▲姙婦の淸潔法を伺ひます。

△誰樣だからとて、淸潔にすることの宜い事は申すまでもありませぬが、姙婦には殊に淸潔が必要で御在ます、先づ肌に着ける衣服を淸潔にし、臥床を淸潔にし上敷なども總て白布を用ゐるが宜う御在ます、又た居

室庭園等もすべて清潔に掃除して、塵埃の無い様になさいませ、それから飲食物は可成く新鮮しい物を選んで、奇麗に洗ひ濯ぎ、清淨な鍋釜で煮まして、煮たら蠅などのたからぬやう、塵埃などのたからぬやう、よく蓋をしてお置きなさい、尚ほ又た、身體を清潔にすることが肝要ですから、毎日一度は必ず入浴するやうになさい、デスが浴後に風に吹かれて居ると湯冷がしますから、出たら直ぐと衣服をお召しなさい、又少しでも、感冒の氣味のお在なさる時分には、坐浴だけになさいませ、夏の間は毎朝冷水を手拭に浸



して、身體中を赤くなる程、お摩擦なさい、斯うすると身體が丈夫になつて何れ程宜しいか知れませぬ、それからお化粧も、毎日缺かさずなすつた方が宜しう御在ます。

▲懐姙中は胎敎といふ事に注意せねばならぬ相ですか其には何うすれば宜しう御在ませうか。

△懐姙中胎敎の必要な事は、私が茲に申上るまでもありませぬ、善い子を設けたいと思へば、何うしても母親の身持を愼まねばなりませぬ、母親正しければ生るゝ子も正しいのですが、之に反して母親正しからず、耳目口腹の欲を

恣にして、言行を濫りにした日には獨り自分の身を損ふばかりでは御在ません、延いては胎の中の兒にまで害を及すのですから、胎敎といふ事には餘程注意致さなければなりませぬ、列女傳と申す本にも『古婦人、子を妊めば、寢ぬるに側らず、坐るに邊らず、立つに蹕せず、邪味を食はず、割正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聞かず、夜は則ち瞽をして、詩を誦し、正事を言はしむ、此の如くなれば、生るゝ子、形容端正にして、才、人に過ぐ』と、斯う申してある位胎敎は大切なものであります、ソンナラ何うしたら胎敎に叶ふかと申すに、先づ體を淸潔にし、心氣を和平にし、起居振舞を愼んで、假りにも我儘の行爲のないやうに氣を付



け、又た嫌惡らしい物や、怪しからぬ物は、見聞なさらぬやうにするが宜しう御在ます、世俗の話に、姙娠中に兎を見ると、其兒が缺脣となり、薑を嚙へば、指が屈つて、薑の狀を爲すなどゝ申して、假肖ると云ふ事を能く申しますのは、取るにも足らぬ馬鹿氣た事ではありますが、併し又たよく考へて見ますと、昔の人が姙婦に身の愼を敎へたもので、つまり胎敎の大切な事を遠廻しに諷したものでもありませうか、其は兎に角、姙婦が心に感じ五官に觸れた事は、やがて胎兒に

感應して、善くも惡しくも生れるのですから、何より　つゝしみが大事であります、故に心に感動を與へる樣な書物、淫猥な小説を讀んだり、悲哀つぽい劇を見たり、悲しい淨瑠璃を聞いたり、或は精神を騷がす樣な談話を聞いたりしてはよくありません、それから又た憤怒の心嫉妬の念に乘じて、罵詈惡口、亂暴惡行をなすが如きことは最も愼まねばなりませぬ、其他危險の地に臨んでヒヤ〳〵する事や、恐い物を見て動悸を高ぶらせる事や、人の事を頭痛に病んで、朋友の難儀を心配するやうな事は何れも宜くありません。

▲衛生顧問▼

注意――今回答ふる分は曾て屢々答へたるが多けれど、年々歳歳同相似なり歳々年々人不同であるから、舊き愛讀者は之を諒とせられんことを乞ふ。

（白帶下の治療）

（問）私は數年前より白き粘液何時も斷ゆる事なく、方方のお醫者に診察を乞へば、或は子宮病或は白帶下或は膣加答兒など言はれ候が、果して何でありませうか敎へ下されたし。（横濱の玉惠女史）

（答）白帶下とは子宮粘膜炎、膣加答兒を總稱したる名であれば、貴女のは子宮、膣何れに屬するか、こは今少し病狀を詳しく書かれんことを乞ふ。

（問）白帶下の治療法を御教示下され度候。（丹波の山中女）

（答）急性の白帶下ならば勿論安臥して運動を禁じ、冷水を其の部に注ぎ、內服藥を用ゐねばならぬけれど、慢性に在つては屢々入浴して局部は言ふに及ばず、身體一般を淸潔にし、左の藥を以て洗ふか、或は塗布するが可い。

1. 撒酸　五、〇　溫湯　六〇〇、〇（大凡三合）
   右液を以て一日數回洗ふ可し。
2. 明礬末　五、〇　水　三〇〇、〇
   右一日數回洗滌
3. 鞣酸　二、〇　格利設林　五〇、〇
   右塗布料
4. 沃度仿謨　一、〇　格利設林　三〇、〇
   右綿に浸して挿入
5. 沃度加里　一、〇　沃度　〇、一
   格利設林　五〇、〇　右綿に浸して挿入

右の中4 5は劇藥なれば御地の醫士に就き御相談の上用ゐられたし。

全體、子宮病、或は異血、或は白帶下など申して、治療を受け居れど、餘り捗々しく治らぬ所から、專門の名醫に診察を請へば、何ぞ圖らん子宮癌にして、療治大いに手後となつたなど申すこと往々あるものに候へば、素人療治をなさらずに專門醫の診察を受けらるゝこと極めて肝要である。

(問) 娘八歳が陰部より白き粘液下り、陰唇爛れ、治療を受くれば一時治るけれど、又再發し、根治致さず候、斯の如き幼者にも子宮病有るものに候や、及びこれが治療法を承はり度候。(但馬の其父占)

(答) 如何なる幼者にも有之候。併し貴娘のは淋加答兒にては無之候や、兎に角、前者と同じき治療然る可くと存じ候、再發するは治療を受けらるゝ日數の短かき故でせう。

【瘦せる方法】(問) 私は非常なる體格肥滿にて歩行呼吸何れも甚だ困難を感じ候が、何か瘦る妙藥これ無く候や御示教を乞ふ。(大和の人の知らぬ常陸山)

(答) 藥用法は絶體的に無しとは申されれど、若し瘦るまで實行すれば、顔色蒼白くなつて、身體多いに衰へます、故に方法を試みられたし、即ち脂肪の食物を嚴禁し、澱粉を大いて減じ、蔬菜類を多く食し、登山、乘馬、擊劍、柔術等の激らか劇運動をなし、その割合に多く食物を取らぬのである、換言すれば勞働をしながら、減食するのであるから、常に饑餓を感じ、仲々忍耐の出來るものではありませぬ、然れば肥胖病で無い限りは行はぬ方大いに善し、兎に角脂肪類を愼まねばなりませぬ。

【色を白くする法】(問) 私は餘り印度人的に候ゆゑ、素人藥物學中に御記なされ候薔薇油を購求致さんと欲し、本市の藥店に屢々尋ね候へども無之候が、何卒その買求方及び其の價を問ふ。(靜岡の欲白娘)

(答) 大阪或は東京などの藥店へ直接御註文なさるか或は御地の藥店に其の取寄方を御依頼なるが宜し、價は一瓦(十四五滴)にて大凡一圓程の高きものに候、併し余は某醫の說を御參考までに述べたので、果して功あるや否やは保證せぬと藥物學中にも書いておいた筈である。

(問) 果して亞砒酸を連服すれば色を白くするものに候や、又その結果如何なる中毒症を呈するものでせうか、何卒沒書せずに二月の誌上に御揭載を乞ふ。(京都の三十三間堂女)

(答) 嘗て某化學者の極めて色黒き人(男子なり)熱心にも三年の間(時々一二ヶ月休みては)漸次に其の量を增しては連服してゐたが、白くなつたといふよりも寧ろ青くなつて、食欲大いに減り、寢汗をするやうになつたのを僅か一人經驗したのである、けれど亞砒酸は變質强壯劑であるから、青白き人が、之を鐵と伍用して連服し花々と立派な顏色になつたのは屢々實驗したのである。

(問) レモン十冬瓜の液汁を塗布すれば顏色白くなるとの事、果して眞實に候や。(信州の田舍女)

(答) 何程塗布した所で害も無ければ又その價も極めて廉きものなれば、私に尋ねらるゝよりも寧ろ實驗に尋ねられよ、實驗は智識を生む所の母であります。

【逆上症の治療】(問) 私非常に逆せ症にて、それが爲め腦痛く髮ぬけ從つて頭部痒く候、何卒その治療法を御高教の程願上候。(肥後の十七年學生)

(答) 勿論診察せねば分らぬことに候へども、腦充血病か便秘症かでありませう、何れにしても便通のあるやうにして、夜は能く眠り、刺戟性の飲食物例へば茶珈琲酒類芥子山葵などを嚴禁し、心配をせぬこと肝要であります。便通を附るには左の藥品等は良好でありませう。

1. 硫麻 一五、〇 稀鹽酸 一、〇 單舍 一〇、〇 溫湯 一〇〇、〇 右一日三回分服
2. 人工加爾々斯泉鹽 一五、〇 水 一〇〇、〇 右一日三回分服

【髮毛に就いて】(問) 私の髮毛はその生際甚だ薄きのみならず、赤く且つ處々に白毛交り居り候、年漸く二十八歳に候へば何卒その療法詳しく御示を乞ふ。(米國にてAS女)

(答) 余衞生顧問を擔當して以來繰返々々この問の多きこと殆んど其半を占めてゐます、これ程女の方は髮を氣にせらるゝものかと驚いてゐるのであります、然れば毎號述べて居りますれど、今一回私の知れる限りを述べて見ませう、成程と思はるゝ節も有之候はゞ飜譯して米國婦人にも御傳聲を乞ふ、偖髮毛は皮膚の變形物なれば皮膚を強くする法を髮毛にも應用せらるゝ事尤も肝要に候、故に今之を一點書にすれば、

一、頭部を加里石鹸を塗けて時々清潔に洗ふ事。
一、刷子を以て毎日雲脂を除く事。
一、頭部に汗を出さぬやうに注意する事。
一、重き帽子などを冠つて空氣の流通を惡しくせぬ事。
一、時々毛尖を切つて其の發生を促す事。
一、運動をなし滋養の食品を取り、身體を健康にする事。
一、心配をせぬ事。
一、腦病便秘、寄生蟲、皮膚病等の症狀あらば直ちに治す事。
一、不潔なる空氣の中、例へば塵埃を吹き上る如き暴風の日などは必ず帽子を頂く事。
一、日光を直射せしめぬ事。

右の如くに髮毛の養生なしても遺傳的の白髮、或は癩病或は先天的の梅毒、或は結核或は貧血諸症等有之者は殆んど絶望に候、倘藥品に就いては屢々記載したれば今は之を略す。

(問) 私はトラホームにて三四度治療を受けなり候がはか〴〵しく治らず何卒早く全快いたすやう御教授を乞ふ。(芝の心配女)

(答) 三四度といふ文字から考へれば治療しても中絶なされたに相違

無い、トラホームは捗々しく治らぬ病にて、氣長く專門醫の治療手術等を受ければなりませぬ、迚も誌上にて述べらるゝやうな輕い治療法はありませぬ、何人も本病に罹つたら、醫者が治つたと申すまで中絶せぬやうにするが、却て得策であります。

（問）この頃眉毛が脫けて哀れに以前の面影を止めてなります所から入月の誌上に御示になつたレゾルチン(五、〇)マツシ油(三、〇)ベルガモツト油(二、〇)亮菁丁幾(一〇、〇)アルコール(二〇〇、〇)の混合發毛藥を藥劑師に調劑方依賴したれば、その樣な劇藥を塗布すれば腫れ上るとて、求めに應じませぬ、果してその通りでありませうか御示しを乞ふ。(江戸の十七女)

（答）その中の亮菁丁幾などを其儘塗布すれば腫れ上るけれども、酒精二百瓦を以て稀釋にしてあれば、決してその心配はない、藥劑師は劇藥を賣ることの出來ぬ規則ゆゑ體よく斷るのでありませう、御懇意な醫師に賴まれた方が宜い、併し眉毛の脫ける原因を窮めずして矢鱈に發毛藥を塗けても宜しくありませぬ、眉毛の脫けるのは多くは寄生物等に依るのであるから、兎に角「藥物學」の章に述べたる加里石鹼をつけてよく洗ひ、イロチオール水を塗けられた方が宜いでせう。

（問）本年五十七歲なる者、頑固な遺尿症にて困難致しをり候、何卒これが療法の御記載を乞ふ、但し十年以前からの發病にて嘗て花柳病にも罹り、腦充血も病み大酒も致したることがあります。(愛媛縣新居郡某生)

（答）それならば手術を致されば到底治りませぬ、併し一般の治療法を言へば、刺戟性の飲食物殊に酒類を一滴も口に入れぬやうにし、午後二時以後は湯茶其他の飲料を禁じ、適當な運動をなして發汗を促し、時々膀胱部に氷囊をあてゝその部を冷縮せしめ、滋養強壯の食物を取つて鐵劑又は麥角の樣な物を服むが宜い、但し麥角は連服の出來ぬものなれば一時凌ぎと心得られたし。

（問）サンダウ體操法を行はんと存じ候が、或人は朝に行ふは宜しからずと言ひ、或者は起朝後直ちに行へと言ふ、何れが宜しきか御明示を乞ふ。(一青女)

（答）二說正反對なれども、何れも道理なり、何となれば前者は朝は營養食物の無き身體なるに運動をすれば身體を疲勞せしむとの主意、後者は朝は筋肉神經の弛緩鈍麻になつてゐる時であるから、運動をなして、之を活潑にし、然る後食餌を取れとの理由、それ故之を折衷し、朝起るや否や疲勞を來さぬやうに行ひ、午後又は寢臥には十分に行ふ方が最も適當である、殊に寢臥の運動は坐職者の最も守る可き事であります。

（問）姙娠をせぬ者の原因を御高示下され度偏に御願申候。(日本橋の三度何女)

（答）(一)子宮病(二)卵巢病(三)生殖器の異常(四)其他の病殊に梅毒(五)過度の交接(六)不明の原因等であるが、そこで質問なさるゝ位であるから、貴女のは大方(六)に屬するのでせう。或醫者は夫

婦の身體骨格等が同性質なれば大抵子を設けず、例へば男子も筋肉骨格の逞ましき偉大の身體、女子またこれに伴うたる立派な體質であるやうなものであると又某醫は日本女子にして、五尺以上の身長ある者は大概不妊娠者であると、併し是れ等の説は果して道理ありや否や余の疑ふ所である。

（問）嚏の出るを防ぐ方法ありませぬか。（小田原町十字女）

（答）斯様な事に就いて研究したることは無いが、元來嚏なるものは、何か鼻粘膜を刺戟するより起るものなれば、鼻中を常に清潔にして、鼻中へ塵埃などの入らぬやう注意し、且つ風邪を引かぬやうに豫防してなれば嚏の出ぬ道理なれど、それが實際に行はるゝや否やは六かしい問題である。

（問）肺結核は治療養生の方法だに宜しくば治らぬとも限りませぬか。（日本橋の博文館近邊女）

（答）然り。

素人薬物學（其四）

糸左近

【還元鐵】――一名水素還元鐵とも言ふ。今之を説く前に當り、一般の鐵剤に就いて概論し、然る後之に及ぶが便利であらう。抑々鐵は人間の身體に於ては、無くてならぬ所の大切なる一成分であつて、常に血液中の（赤色素）と結合して存するものである。ゴルプ、ベサネツといふ人が色々研究したる末、「中等の體重ある男子は身體中に三瓦餘即ち八分二厘位の鐵を有つてゐるものである、然るに或る病氣の爲に、赤色素の減少する時は、鐵も亦大いに減り、一瓦半以下にも及ぶことがある、然る時は顔色蒼白くなつて、見るも哀れな姿になる」と。斯う申せば讀者或は言はれん、「斯くも身體中に無くてならぬ大切な鐵なるに、我等は何時も鐵を食したる事は無い、豈夫に西洋人とても鐵を副食物にも爲まいが」と。成程御尤なる質問の様だが、其處は天の配劑宜しきを得てゐるもので、我等が平生用ゐる所の飲料水や豆類、肉類、殊に茶、麥酒、珈琲などに依て、斷えず供給せらるゝものなれば、色々と食物を取つてさへ居れば、毎日六センチ瓦以上の鐵を食ふものである。この鐵の効用は、血液に交つて肺臓中を流るゝ間に、酸素を吸收し、之を身體中の諸組織に運び、其の酸化作用を媒介するものなるが、何くより此鐵を吸收するかと云ふに、其の一分は胃腸より血液に入り込み、其の一分は大便と共に漏さる、故に鐵剤を多量に服するか、或は多量ならざるも、毎日連服すれば、大便を黒色に變ずるものである。若し鐵を貧血の人例へば萎黄病者などに、適度の量を毎日續けて與ふれば、唇、頬、歯齦などは、赤みを帶び、甚だ鮮かになり、同時に食慾も進み、消化力も強くなり、筋力心臓作用悉く活發となり、精神も亦爽快に赴く等の大効能あれども健康者が之を用ゐれば、血液中

に入り込まざるのみならず、消化作用を妨げ、食慾次第に減じ、頭痛鬱歪等の病的狀態に陥るものである、然るに近頃聞く所に依れば、男女學生が病氣でも無いのに、否多少の病氣があるにしても、其病の何たるを窮めず、藥の何たるを解せず、唯鐵は強壯劑であるとの單純なる名に迷ひ、大道に鬻ぐ所の鐵鑛泉を買求め、毎日飲んでゐる者がある、笑ふべきの至りと謂はればならぬ、成程鐵鑛泉其物は之を沸して入浴すれば、婦人生殖器の病に幾分の効能あるし、之を適度に内服すれば前に述べたる如く貧血諸病に或は宜からんも、彼の大道に賣る物は、數日數月瓶中に貯へあることなれば、其水の腐敗して如何なるバクテリヤの生じてゐるか計られず、況んや何くの水を汲んで來たものやらと疑ふに至つては、實に恐る可きの至りである。故に今改めて鐵劑の効用を列記すれば、（一）萎黄病、（二）貧血諸症、（三）急性病後の衰弱、（四）大出血後の衰弱、（五）遺淫、（六）慢性下痢後の衰弱、（五）間歇熱に規尼涅と伍用して効あり、（六）腺病、等である。次に禁ず可きは肺病、心臓病、胃病等である。内服の用法は少量を與ふるが最も宜い、例ひ大量を用ゐても、徒らに消化を害するのみで、その血中に吸收せらるゝ量至つて少く、乃ち少量を用ゐると何の差も無いものである。又其の之を服する時間は胃液分泌の最も盛なる時、即ち食時中、或は食後直ちに用ゐるが宜い、何となれば胃液多ければ鐵の溶解吸收し易いからである。次に鐵泉に浴して多大の効あるかと賞歎する者も有るが鐵は皮膚より吸收するもので無いから、其効ある如くに見ゆるは、浴湯其物と其他の含有物との爲である。

右の如く鐵劑一般に就いて論じ然る後各種の製鐵劑に及ぼう。

還元鐵 は灰色の粉末で、胃液に溶解し易い所の最良なる鐵劑である。瓶中に容れ密栓して貯へぬと、空氣中の酸素と化合し、漸次に其効力を失ふ。其の効能は前に述べたる鐵劑一般と同じ。用量は一日數回、一回〇、〇五より〇、二位までの間である。

還元鐵　〇、二　規那皮末　一、五　枸櫞清糖　一、〇
右三包に分け一日三回食後一包宛

還元鐵　〇、二　規尼涅　〇、一　甘草末　適宜
右六丸と爲し、一日三回食後二丸宛

〔乳酸鐵〕＝帶綠白色の粉末で、還元鐵に亞いでの消化し易い鐵劑である、これも瓶中に入れ密栓して貯へればならぬ。その効能は一般の鐵劑と同じ、用量は一回〇、〇五乃至〇、三位である。

乳酸鐵　〇、三　甘草末　適宜
右六丸と爲し、一日三回食後二丸宛

〔林檎鐵丁幾〕＝これは讀んで字の如く林檎と鐵とを以て製したる稍色に黑みを帶びたる液體で、其の効能は矢張一般の鐵劑と同じ。用量は一日數回大凡一、〇位である。

〔沃度鐵舍利別〕＝これは沃度と鐵との合劑なれば、亦同じく二者を兼れたる功能あるものでは有るが、併し此の藥さへあれば、沃度も鐵

も無用かと言へば决してさうでは無い、即ち沃度劑のみを用ゐて奏効する症に本劑を與ふれば其効遲く、鐵劑のみを服して卓効ある病に、本劑を代用すれば、其功驗緩漫である、然れば兩藥の折衷劑とも云ふ可きもので、久服連用す可き緩漫なる病に用ゐて中毒の恐尠きやうである、兎に角其の効能を列擧すれば貧血諸症、萎黄病、梅毒、腺病、僂麻窒斯、肋膜炎の末期及び喘息等に一日數回、一回一、〇乃至五、〇を與ふるが宜い、余の經驗に依れば、小兒や老人に沃度加里或は他の鐵劑を與ふる代に本藥を用ゐる方が、大抵有効無害である、醫者に依ては頻りに之を賞用し、沃度鐵醫の綽號さへ有る人も有れど、余は左程の物では斷然無いと信ずるのである。

沃度鐵舍利別　六、〇　　單舍利別　八、〇　　水　一〇〇、〇
右一日三回食後に分服

注意――該藥は各國の藥局方大いに其の沃度鐵の含量を異にし、米國は十%なるにも拘はらず、佛國は〇、五%なれば、之を購求の際、日本藥局法といふ文字を能く注意せねばならぬ。

〔過格魯兒鐵液〕――一半格魯兒化鐵液とも云ふ、これを内用すれば、一般の鐵劑と同じ効能ありとは雖ども、消化機を害し、便秘を起すこと著しく、過つて大量を服すれば腹痛、嘔吐、下痢、呼吸困難等の危き徵候を呈することさへあり、故に内用に供するは甚だ稀にして、唯實布的里亞、丹毒等に一回量二三滴を多量の水に混ぜて用ゐれば大いに効あるなど、稱ふる醫者もあるが、これとても陳腐に屬する說である。外用には止血藥として賞用せらる、例へば衂血、創傷出血に用ゐるやうなものである、其他子宮出血に五六倍の水を加へて塗布する事もあれど、素人療治には甚だ危險であり、又、不潔なる創、及び壞疽的の潰瘍に三倍位の水を加へて塗れば、其面を腐蝕して、爲に奇麗に癒ることもあれど、これ又醫療を受くるの安全なるに如かぬことは言ふまでも無い。

右の外、鐵劑は甚だ多けれども、醫者社會にても餘り用ゐぬ品多ければ、先づ此位にしておきませう。

　鐵劑は貧血、過淫、急性の
　病後衰弱又は腺病

手輕西洋料理

○蠣のフライ

なる丈大きな牡蠣を撰びて鹽と胡椒とを散かけ麥粉の內にころがし又よくかきまぜたる鷄卵の內に浸し、次にパン粉の中にて再ころがし、牛あぶら豚あぶらいづれにてもよし脂肪の澤山沸立たる中にて揚ぐべし。

○ビフテキ

まづロース肉を五分位の厚さに切り、これに鹽と胡椒とをふりかけ、麥粉の內にてころがし、牛の生脂肪を揚鍋に入れ、其溫まりて溶解始めたるとき脂肪を壓しいだして絞り、殼を出し、脂肪の烟るほど熱したるとき牛肉を入れて揚げ、一方狐色になりたるとき他方をかへして揚げ、二三度かくの如くなして溫めたる皿に盛りたゝちに食すべし。添物には馬鈴薯の切揚などよし。

さてその手加減は牛肉を揚ぐるには火も强く、脂肪もよく、沸騰せしめざるべからず、豚の肉を揚ぐるには豚の脂肪の外用ふ可からず、又麥粉をかくるを要せず、且つ牛肉を揚ぐるより餘程久しく揚ぐ可し。

○魚のフライ

まづ何魚にてもよしよく洗ひて淸潔なる布巾にて水をふきとりて鹽をふりかけ、次に麥粉をかけ、揚鍋に脂肪を大匙二杯ほど入れてよく煮立たるとき魚を入れ一方狐色に揚りたるとき他方をかへして揚ぐべし、又魚を揚ぐるにはなるべく氣を長く十五分乃至二十分間揚ぐべし、之をいぢるにはよく氣をつくべし。

○魚の蒸燒

大きな魚を腸を去りて淸潔に洗ひ鹽をふりかけてスタッフキング(塡物)を腹につめ、燒鍋の底に脂肪を敷きて魚を入れ、魚の上に麥粉をぬりつけ、別に沸騰湯を一合ほど鍋に注ぎてオブンに入れ、十分間每に鍋の湯をすくひて魚にかく可し。さて其の火加減は二斤の魚ならば三十分間、三斤の魚ならば四十分間燒くべし、八斤位ある鮭を燒くには一時間を要す、燒けたら

は溫めたる皿に氣をつけて移すべし。

○ロース肉

ロース肉に用ふる牛肉は三斤位を適度とすべし、さて牛肉を燒鍋に入れて胡椒をふりかけ、小匙に山盛一杯の鹽を二合程の沸騰湯に入れて鍋に注ぎ、鍋をオブンに入て十分毎に鍋の湯を匙にて肉にかけて肉の乾くを防ぎ又二三度肉をひつくり返すべし、鍋をオブンに入れてより、三十分の後は肉一斤毎に十五分の割合にて蒸すべし（即ち三斤の肉なれば最初の三十分に、毎一斤につき十五分間宛即ち四十五分にして、總體にては一時間と十五分と知るべし。豚の蒸燒も同じ方法によるべし、但し豚肉は牛肉の倍長き間オブンに入れ置くべし。

○ミンスド、ビーフ（殘肉の料理）

煮若くは蒸燒にしたる牛肉の殘品を極細かに刻みて揚鍋に入れ、この肉一合毎に沸騰湯と大匙二杯、バターを大匙一杯、鹽を小匙に半分胡椒を小匙に一杯入れてよく、沸騰つまでかきまはすなり、これをトーストにのせて食するなり。

○ベークド、ハッシ（同上）

一度料理したる肉の冷めたるを何にても細かく刻み刻みたる肉が二合あらば同量の馬鈴薯を刻みて兩方共燒鉢に入れ、これに鹽を小匙に半分、胡椒を一杯、殘りたるグレービ、沸騰湯一合、とかしたるバター大匙一杯とを入れ、其上にパン粉をかけて、中位の火加減のオブンに入れて一時間位燒くなり、鉢より直ちに膳部に供すべし。

○ボイルチキン

二百目位の若鷄を撰び、よくこしらへたる後背を切り下げ、冷水にて洗ひ潔いな布巾にて拭ひ、鹽を散かけ鐵條にのせて三十分間、程よき火にて內側の方を炙り（始めより皿を鷄の上にのせ置くべし）今度はひつくり返して皮の方が狐色になるまで五分間炙り、熱き內食す可し。

○鳥のフライ

揚用には若き鷄のみを用ふ可し、鷄を清潔にして小

さく切り、鹽をふりかけ麥粉の中にころがし、脂肪を大匙に三杯掛鍋に入れて脂肪が燒り立つ時肉を入れ、三四十分間こがさぬ樣に、度々かへしてそろ〱揚ぐべし。

○ランチ、エッグ(辨當卵)

四粒の鷄卵を二十分間ゆでゝ冷水に二三分間浸し置きて殼を去り、半分に切りて白身と黃身を別々の皿に入れ、黃身をよくつぶして、鹽を小匙に半分と、芥子を四分の一と、胡椒をすこし加へてよく混せ合はせ、又之に酢を小匙に四杯入れて滑かになるまでかきまはし、ナイフ又は匙にて此黃身を混せ合はせた物を半分に切りある白身につめこむべし。右の法にて料理したる鷄卵は冷たき辨當にそえて食すれば味よく又魚と共に食して風味よきものなり又一法は前の仕方の如くに鷄卵をゆでゝ用意し、鹽、胡椒、芥子、酢の代はりにサラド、ドレッシング小匙二杯を黃身に加へて滑らかになるまで攪ませ前の如くに白身に詰めこむ可し。

○スタッヒングの製法

賽の目に細かく切りたるパンを鉢に入れ、又鹽を小匙に半分と胡椒を二振と、粉末にしたるセージを小匙に一杯入れて一緒によく混せ合せ、之にバターを一杯入れたる沸騰湯を入れて一寸混せ合はすなり。

○雞の壓肉

鷄をよく拵へて關節の處にて分ち切り、深鍋に入れて、鳥を蓋ふまで水を注ぎ、文火にて四時間位(骨と肉とが離るまで)煮る可し。さて始め二時間煮たる後鹽を山盛小匙に入れ、煮え上りたる時、鷄を鍋より出して骨と肉とを離して肉は分細かに剉み、骨は元の鍋に入れて鷄を煮たる汁が二合半位になるまで煮つめ、之に鹽と胡椒とを入れて調味し、これを剉みたる肉に掛けてよく混せ、皿に入れて其上に皿を上せ、重き物を置き、一晩冷たき所に置き、冷たく固くなりたる後皿より出して、膳に上す樣に薄く切る可し。

季節の總菜

△鮭の甘酒漬

まづ、鹽引鮭を丸身のまゝ水に浸け置き、鹽を拔きて、之を卸して適宜の切身にして、其から甘酒の堅煉をつくり、其儘鍋へ入れて火に掛け、能く煉りて冷まし、其を鮭の切身の上下に塗附けて、十分間程も漬けて置くと、極めて美味となるものなり、後甘酒を落して、別に取つて置き、入用の時に燒いて、膳に上す。

△鰤のたまり漬

鰤を適宜に切身にして、薄鹽を振り、半時間ばかり經ちし頃能く洗ひて水氣を拭取り甘口の味噌をザット摺りてこれを酒と味醂とにて少しづゝ溶し、柔らかくして、之に右の鰤を漬け十時間程其儘にして置き、入用の時に出して燒くなり。

△牛蒡の酢漬

牛蒡のやゝ大なるを二つ切、或は四つ切にして、竪は何れも一寸餘りに切つて、中心を少々切り取り、上皮を極薄く剝いて、鍋へ糠を少々入れ、其へ水を入れて、此鍋で右の牛蒡を茹で、柔らかく成りたる頃、水の中へ移して晒し、次に湯の煮立つた鍋へ入れて、ザット茹揚げ、後ち鹽酢の中へ一二日ほど漬けて置き、引揚げて、皮目へ火取靑海苔の粉を掛るなり。

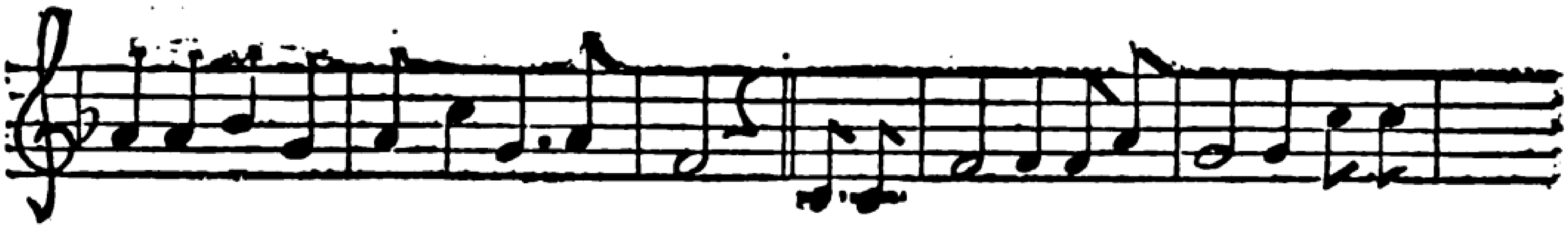
△干鱈の櫻煮

まづ干鱈は、一晝夜間浸け置き、鱗を除去り、腹部の黑き皮を剝去り、適宜の切身にして、鍋へ入れ(敷笊を用ゐるが宜し)ザッと湯煮をして溢し、煮出汁を充分加へて、落し蓋を入れ(小さな蓋を二重に入れるなり)煮詰つた頃、砂糖を適宜に入れ、醬油を度々入れて煮揚げ、少々汁を殘して置き、鱈を敷笊ごと引揚げ、その殘り汁へ、水で溶かして葛を極少く入れ、之を攪きませて、鱈へ掛けるなり。

△照りごまめ

田作を腹の方から頭を挘取り、コンガリと煎りて、目笊で篩ひ、別に砂糖に醬油を加へて煮詰め、鍋を卸して後、田作を入れて、手柔らかに攪混せるなり。

（ヘ調四拍子及六拍子）



3 3 4 2 | 3 5 2.3 | 1–0 ‖ 5 5 | 1–1 1 3 | 2–2 5 5 |

ユクミノ　サナオホ　シ　ヒビ　ロノミチ　シヘナミ

かーぜも　かなるら　ん　とし　ごろまな　びしなみ



5.3 4 2 | 3–0 3 4 | 5–0 3 2 | 1–1 6 6 | 5 1 2 5 | 1–0 ‖

ナノツト　メ　ツト　メ　マモ　ラムトキ　ハーキー　ヌ

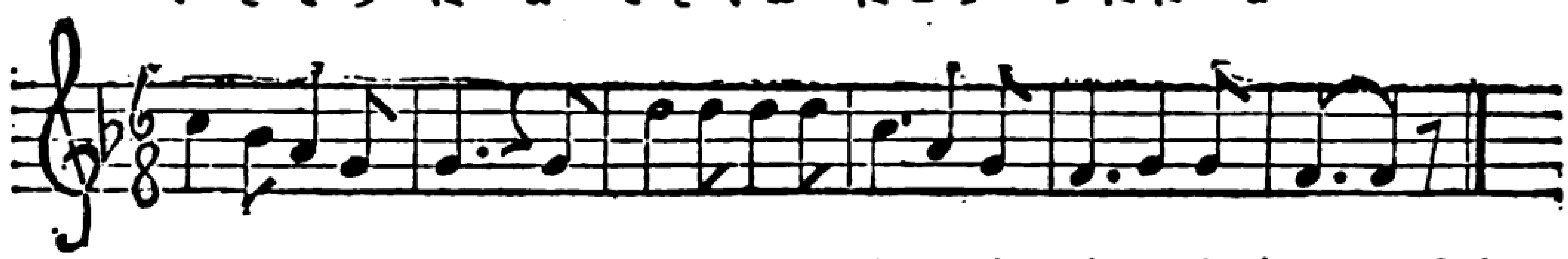
なのてわ　ざ　はげ　み　つと　めむとき　はーきー　ぬ



5 4 3 2 | 2. 0 2 | 6 6 6 6 | 5. 3 2 | 1. 2 5 | 5. 5 0 |

イザサラ　バ　マ　サキクオ　ハセチ　チハハ　ヨー

いざさら　ば　ま　さきくお　はせち　ちはは　よー



5 4 3 2 | 2. 0 2 | 6 6 6 6 | 5. 3 2 | 1. 2 2 | 1. 1 0 ‖

イザサラ　バ　マ　サキクオ　ハセチ　チハハ　ヨー

いざさら　ば　ま　さきくお　はせち　ちはは　よー

歸嫁の歌

作曲　山田源一郎
作歌　柴垣社中

（一）

二十年ちかく　柞葉の
はゝその蔭の　恩惠に
ちゝぶの山の　下かげに
人と成りたる　甲斐ありて
榮ある今日の　此の門出
嫁ぎ行く身の　幸多し
日頃の教訓　女の務
つとめまもらむ　時は來ぬ
いざさらば、まさきく在せ、父母よ。
いざさらば、まさきく在せ、父母よ。」

歸嫁の歌



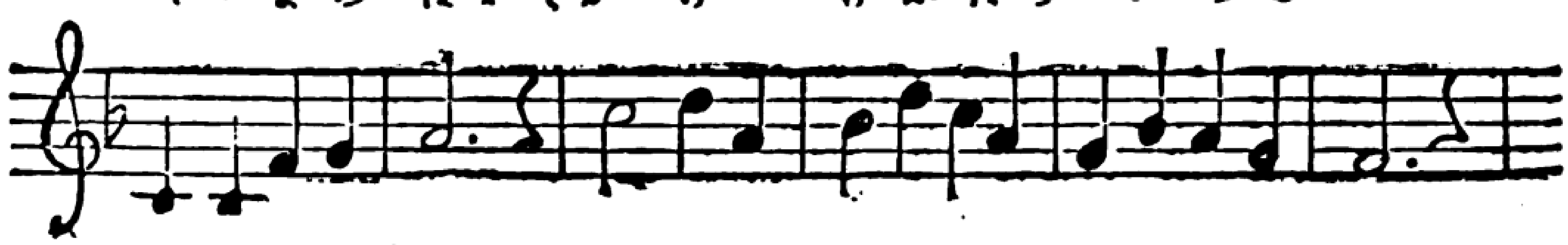
3 3 2 1 | 7̣– 6̣ 6̣ | 5̣ 5̣ 1 2 | 3– 0 | 5 5 6 3 |

ハ メ ト セ　チ カ タ　ハ ハ ソ ハ　ノ　ハ ハ ツ ノ
な さ け の　つ ゆ の　み に あ ま　る　ち ち ぶ の



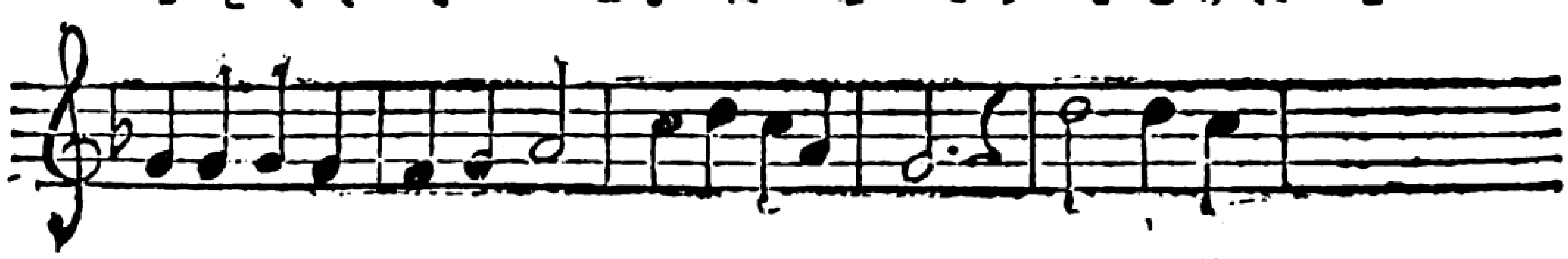
4 6 5 3 | 2 2 1 3 | 2–0 | 3 3 2 1 | 7̣– 6 6 |

カ ー ゲ ノ　ミ メ ゲ ミ　ニ　チ チ プ ノ　ナ マ ノ
や ー ま の　は ゝ そ か　げ　け ふ た ち　い づ る



5 5 1 2 | 3–.0 | 5– 6 3 | 4 6 5 3 | 2 4 3 2 | 1– 0 |

シ メ カ ゲ　ニ　ヒ ト ト　ナ リ メ ル　カ ヒ ア リ　テ
か ど で ぞ　と　お も へ ば　な ー ご り　な し け れ　ど



2 2 2 2 | 1 2 3– | 5 6 5 3 | 2–.0 | 6– 5 5 |

ハ エ ア ル　ケ フ ノ　コ ノ カ ド　デ　ト ツ ヤ
や が て は　り そ う の　そ の の う　ち　ま ど ふ く

（二）

情愛の露の身にあまる
ちゝぶの山のはゝそかげ
今日立いづる門出でと
思へば名殘惜けれど
やがては理想の園の内
窓吹く風も薫るらむ
年頃學びし女の手業
勵みつとめむ時は來ぬ
いざさらば、まさきく在せ、父母よ。
いざさらば、まさきく在せ、父母よ。」

史傳

鐵血宰相夫人

百島冷泉

今より十二年以前、紀元一千八百九十四年十一月廿七日日耳曼の鐵血宰相ビスマーク夫人逝きぬ。

日耳曼ガーゼット新聞之を吊ふて曰く、

「日耳曼全國民は、今や重撃を受けたる、日耳曼帝國の創立者の一人たる老大政治家に、切に同情を表す、その夫人が如何に公の家內的生活の大部分を占め、如何に理想的扶助者たりしかは、萬人の知る所なり、されば國民は須らくビ公一生の事業に對し、十分夫人に感謝する所なかる可らず、假令夫人の感化は外に顯はれざるも、公の事業を八方に貫流せしめたり、逝かれしビ公夫人は、今後永く日耳曼婦人の尤も高尚なる群中にその名列せらるべし」

げに夫人は日耳曼婦人の尤も高尚なる群中に其名列せらるべきものなり。

これよりさき、ビ公は夜を徹し、夫人臨終の床に侍し、その生命既に去るゝ側を離れず、自ら電報をうちて皇帝に飛報せり。この悲報全國に傳るや、爲に全國民は皆哀悼の辭を述べ、而して夫人の死は或はビ公の健康を害ふなきやを憂慮せり。

この一事公と夫人との關係、如何に深重なるかを指示してあまりあるなり。

ビ公は鐵血宰相と呼ばれたる程ありて、その數十年の公生涯は大波瀾の生涯なり、敵多き生涯なり、權略譎詐の生涯なり、公自らも懺悔して曰く、

「我事業の爲めに我を愛する者一人もあるなし、我はいまだ曾て我自身をも我家族をも、また他人をも幸福ならしめたることなし、然れども我不幸ならしめたる者の如何に多きぞ！　若し我なかりせば三大戰爭は起らざるべく、八萬の人は死せざるべく、父母兄弟姉妹及び寡婦等は近親の者を喪ひて喪服を着くるに及ばざりしなるべし」と、

されど公に一の靜かなる港ありき。之れは實にその家庭なり。げに公の公生涯の權畧譎詐多きに反して、家庭は清淨健全、絶好の模範を示めせり、されば公は常に、

「我をして今日あらしめしものは妻なり」

「我が妻に負ふ所の如何に大なるか、之を口にする能はず」と云へり、今少しく公の權略譎詐多き公生涯を避けて、清淨掬すべきその私生涯を味はしめよ。

公の晩年を送りしフレドリッツと、スルーへの林野は、伯林とハンブルグの中間にありて、靜閑なる別乾坤をなせり、家の周圍は不規則なる赤煉瓦を繞らし、門を入れば鬱然たる大木森立し、眼前に立つ家はその結構單純質樸を極む、家に入れば壁も天井も一面白く塗れて一の粧飾なく、玄關の一方は更衣室、一方は侍者室なり、尙進めば家中最も粧飾をほどこせる、公の常に客を延見する室に到る、室内には英國大宰相ビーコンスフィルド伯の畫像あり、之に對して佛國宰相チエール氏の畫像おかれり、また一方の隅には靑銅製のモルトケ將軍の半身像月桂の冠に下に埋れ、その半面を露はせるあり、その他書架地圖椅子卓子あるのみ、この室の隣こそ公の書齋にて、ウイルヘルム一世の畫像と、我夫人及び我子女の畫像かゝれり、これ公



の家の模樣の大略なり。

公は身長六呎二吋、重量は尤も重かりし頃は二十八貫に近く、その音吐鐘の如く、双腕鐵の如くなりき。かゝる體格なれば自から無比の大食家、痛飲家、喫煙家にして、或時戯れて曰く、

「我家族は皆大食家なり、もし國中にかゝる大食家のみならば國家は立ちゆくまじ」と、

されば一度に十一個の煮鷄卵を食し、また普佛戰爭の時の如きは、鷄卵五十個をもつて一大オムレツを造らしめ、片時に食し盡したることもあり。

公は元來田舍漢なれば、尤も田舍を好めり、少年の伯林學校にありて、一日散策の途、一挺の鋤を見て故郷の田舍を思ひ潸然として泣けり、夫人曰く、

「良人は所謂政治よりも、寧ろ一個の蕪菁に注意す」

公また云へり、

「我は遠く文明を離れ、よく膏ひきたる田舍靴を穿つを好む」と、

されば公は山林、田畠、灌漑、肥料、鷄豚飼養の法より、醸酒水車に至るまで熟知せざる所なかりき。

また公は甚だ交際社會を好まず、品行方正にして、此點に於て非難をうけたることなし、常に暇あれば家族と打くつろぎ、長煙管にて煙草を吹き〳〵、傍らに侍する巨犬の頭を撫でつゝ浮世談をなす。

公また甚だしく愛犬の癖ありき、一日その愛犬死なんとするとき、公その傍を去らず、犬死せし後、友人を顧みて、

「我日耳曼の祖先はその伴侶たる良犬に、死後必ず再び天の狩場にて出會すべしと信じたるが、我もまたかく信ぜんことを欲す」と云へり。

その嗜好は文學にてゲーテー、セクスピヤ等を愛讀せり、曾て曰く

「我れゲーテーの著作を携へんか、多年を荒れ果てたる島に過すも厭ふ所にあらず」と、

これ公の私生涯の一班なり。而してこれを滿足せしめたる者はその夫人なり。されば公は日耳曼帝國を思ひし如く、またその夫人を思ひこれを愛しぬ。或は要

務の爲め、或は遊樂の爲め、數日を夫人と別るゝことあれば即ち手翰を飛しぬ。或時夫人に書き送りて曰く、

「御身を伴はずして、種々なる奇麗なる景物を見れば我は良心の安からざるを覺ゆ」

と、夫妻の交情掬すべきなり。

而して夫人は單に料理の世話、酒掃の支配にとゞまる婦人にあらず、怜敏にして頓才あり、記臆力よく談話の伎倆を有しぬ、げに夫人は所謂政治的婦人たるの資格を有せるものなりき、されど夫人はその技量その心力此等を皆その夫の生涯をして、成るべく平和に愉快ならしめんために用ひ盡しぬ、彼の英國の大宰相グラッドストンの所謂、

「婦人は婦人らしくしてこそ、其天職を全ふすべきものと云ふべきなり」の位置に甘んじたるもの、この夫人ありて鐵血宰相の身邊、いよ／＼美くしく光あるを覺ゆるなり。



古來大人豪傑の事業をなす、多くは家庭の幸福これが助けをなすこと今更論ずる迄もなき事にて、ビスマーク氏のごときも實にこの助を得たるものなり、顧つて我國の政治家、實業家、文學家、等の家庭を見て、痛嘆に堪へざるもの非常に多し。

科學

動物の雌雄

梅薔子

凡ぞ生物に雌雄の區別あるは、何の爲めであるかと云へば、云ふ迄もなく之れは己の子孫を永久に持ち傳へて行く爲めに外ならぬのである。人類を初めとして凡ての生物の雌雄は實に巧妙なる方法に依つて相互に認識し、以て其目的を達しつゝあるのである。

人誰れか美を愛し、醜を厭はないものが有うか、感情の最も發達した人類に於ては此原則も亦最よく發達して、出來得る限り醜を避けて美を得ようとする。之れ天然の性質である。併し人類は只感情のみを以て左右せらるゝ動物では無いから、必ずしも形體の美にのみ心を奪はれる事は無い、人の性質の異なるが如く其好みも自ら異なつて、或は只肉體の美にのみ迷はされるものも少なくは無いが、又は高尚なる心よりして其心の美を愛し、又は性質の賢を愛する等の他の動物には無い所の愛美の情を以て居る、併し此愛美、嫌醜の念は、只人類の專有物では無い、此原則は又獸類、鳥類を初めとして、魚類、虫類に至る迄皆多少持つて居ないものは無い。

斯る非情のものでも矢張幾らか美を愛し、醜を厭ふの慾念を有して居るのである、夫れで之等の人類以下の動物で有つても多少人類に似て居て、丁度人類に於て其男子を女子が好む點は只其美なる容貌であるに止まらず、其雄壯なる、男らしい、活潑な處を愛するのである、夫れと同じく他の動物に有つても或は鹿の如きは牡は頭に大きな立派な角を持つて居る、體格も牝よりは大きく、如何にも雄壯に見へる、此點を以て其牝の心を引かうとするのである、又獅子の如きは頭に澤山の鬣が有つて、牝と比べると其容貌は如何にも雄雄しくて威がある。

凡て生物の中でも最も高等なる人類に近い獸類は、

矢張り人類の如くに只色の美しいのを以て滿足せず、其雄々しい處の容貌、威ある風采を以て牝の心を得んとして居るものゝ如くに見へる。

　次ぎに鳥類に至つては專ら羽毛の美を以て其歡心を得樣とする樣に見へる、即ち鳥の雄は大抵雌よりも美しい羽毛を持つて居る、即ち其最著しいものは孔雀を初めとして雉、山鳥、尾長鳥、の如き、又吾人の家に飼養せられる鷄にしても皆雌よりも雄の方が美しい羽毛と、猶其上に頭には殊に目に立つ冠毛や肉冠を持て居るものが多い、此羽毛の美麗なのは徒に鳥類の仲間に其美を誇るの目的を以て



▲冬の山村

飾つて居るのでは無い、實に其子孫を永遠に傳へる爲めに天然よりして得たのである。而して之等羽毛の美なる鳥類は只其美なるを以てのみ滿足せず、之れをなるべく多く雌に見せて雌鳥を惑溺させ樣として居る事は往往實驗する事で、彼の孔雀の雄が其美しい嬋娟たる錦の如き尾を扇子の樣に開いて、雌鳥の前に意氣揚々と頭を高く擧げて、美しき咽喉と胸の、或は青く、或は赤く、種々に光る羽毛の美を之れ見よがしに示しつゝ歩む樣は、之れ即ち其示美運動とも云ふべきものである。

　猶孔雀の一種にアーガス孔雀と云ふのがある、之れは主にマ

ラッカ、ポルチヲ島に多く棲んで居るものであるが、示美運動には最妙を得たもので、只其羽毛を擴げて美を示すばかりでは無く、一種不思議の舞を奏して、其歡心を得樣とするのである、夫れで將に雌の爲めに舞はんとする時には、先づ適當の平地を撰んで一二間の所を圓形に美しく、其羽毛を以て掃きならして、枯葉や枝を皆四方にはね飛ばして、淸楚なる場所を設けるのである、此間に雌は丁度其塲所の上、數尺高い所の適當の枝か、又は木の根に位置を占めて、今や己れの爲めに舞うとする舞を見るべく待つて居ると、やがて雄は地上に下り立つて翼を一齊に張り擴げ、其長い二本の尾を眞直に立てゝ舞ひ初めるのである、此鳥は矢張り孔雀に似て、羽毛に美しい眼球斑點がある、其上に或は斜に、或は縱に、黒い線があつたり、斑紋などが有つて、夫れが日光に映つる時は更らに種々の色に反射して其美しい事は實に譬へ樣のない程である、更らに可笑しいのは斯く舞ひながらも雄は時々首を羽子の間に出沒して雌鳥の歡心を覗ふ事である、此鳥などは最も進步した示美運動の術を知つて居るものであるが、其他の鳥にしても必ず之れに類似した所の運動をするに違ひない、彼の鷄の雄ですらも時々翼を下方に擴て雌鳥の前を横行するのは往々見る事であるが、之れも矢張り一種の示美運動である。

斯く羽毛の美麗を以て雌の心を得んとするばかりでなく、亦聲の美をも具有して居る、即ち雄は大抵大きな聲を以て鳴く、中には美しい聲で囀ずるものもある、彼の時辰雀は、毛の美しいのよりも聲の愛らしいのを以て多くの人に飼はれて居るが、之れは人の耳を悅ばせる目的を以て囀ずるのではない、矢張り雌鳥の注意を引かん爲めに歌ふのである、其證據には雄鳥ばかり籠に入れて置くと、盛に咽喉を膨らし、頭を上げ、そして愛らしい聲を張り上げて、或は高く、或は低く、色色に調子を變へて頻りに鳴くけれども、雌は一所にして置くと鳴かなくなる、即ち其囀ずるのは恰度自分の配偶を呼ぶかの樣に見へる、即ち鳥には美しい姿と、美しい聲とを以て雌の歡心を得樣とする性質がある。

動物には又、身體から一種の香を發して夫れで雌の注意を引かうとするものもある、即ち中央亞細亞地方に主に棲んで居る麝香獸の如き、又は麝香鼠の如きは只雄にのみ此香を發する臍があるを以て見てもわかる。

虫類にも矢張り此美形を以て雌雄相接近するの方法を取るものが多い、玉虫の雄は雌よりも大きくて、且つ非常に美しい、豹紋蝶の雄の羽子は雌に比して著しく美しい、又甲虫の雄は頭に厳めしい二本の角を持つて居る、さいかち虫の雄も亦頭に一本の角がある、即ち雄壯なる形を持つて居るのである、又蟬、鈴虫、松虫、轡虫等が秋に至つ



▲冬の山路

て美しい音を出して鳴くのも雄に限るので、只吾々は耳を娯ませる一種の玩弄物の如くに思つて居るが、之等の虫に取つては實に大切な目的を持つて居るのである、更らに面白いのは蜘蛛の一種が、其雌に近付かんとする時には矢張り一種の舞を奏して先づ雌虫の歡心を買ひながら進むと云ふ事である。

魚類に至つても其産卵の期には必ず雄は鱗に美しき色を増して來るのである。

以上擧げたものは皆動物の内でも猶高等に屬するもので多少意志を有し、完全なる運動器を俱へて、雌雄相接近す

る事は比較的容易であるが、同じ生物の內でも自らは殆ど運動しないものがある、例へば人の最厭ふ條虫の如きは人の腸の內に在つて、體內の養分を吸收して生活するもので、少しも自身には他のもの丶如くに運動しない、斯るものは雌雄接近する事なく、從つて子孫を永續する機關が無い樣であるが、此處には又夫れに適當した所の巧みな方法が設けられてある。即ち之等は到底運動に依つて雌雄相會するの道の無いものであるから、初めから雌雄が一ッ處に寄つて居るのである、否一疋の虫は雌雄の寄り集まつて出來て居るものである、夫れ故にある方面から云へば之等は最子孫繁殖の目的を達する上に於て進步したものと云はなければならない。彼の多くの節から出來て居る虫の一節は、巳に雌雄の寄り合つたもので、之れが次ぎの一節を生む、此一節も亦雌雄の寄り合つたもので、斯く際限もなく繁殖して終に何丈と云ふ程の長さのものに延びるのである。

一番最初に云つた樣に生物に雌雄の別のあるのは、詰まる所は子孫の增殖にあると云つたが、之れを最も適切に證明して居るものがある、彼の蜂類は丁度人間の如く一社會をなして、其內に各分業が行はれて居る、一番上に王蜂と云ふのがあり、其下に雄蜂、或は働き蜂、或は兵隊蜂など丶分れて居る、其內で王蜂と云ふのは雌蜂である、處で其內に居る雄蜂と云ふのは矢張り其子を生む爲めに特に居るものであるが、巳に雄蜂たるの義務を盡したならば、其他に別に働きもせず、徒らに食物のみを喰べる處から、終に働き蜂にさし殺されてしまふのだと云ふ事である。之等は實に只子孫を永續させると云ふ目的の爲めと一時生活して居るに過ぎないものと云はねばならない、斯ふ云ふ風な目的を以て生れて居るものは他にまだ幾何もある。

配偶の選擇

箕作博士

一月十四日學士會院例會に於て箕作理學博士は人爲淘汰の理より見たる配偶選擇に關する我邦の習慣と題して一場の講演を試みられしが其觀察頗る奇警にして偶々今日の婚姻問題に就て一大參考となるべきを以て聊か其大要を掲げん博士はまづ人爲淘汰の必要を論して曰く

▲動植物の人間生活に必要なるは勿論にして家畜的動物幷に栽培植物の改良進歩は、國民生活上に取つて尤も緊要の事業たるは何人も知る處なるが、而も其改良進歩は結局人爲淘汰の理法に依るものにして、人は淘汰の理法を應用するに依つて家畜蔬菜の種類を良好にし得るのみならず又新なる種類をも作出し得るものと知るべし。



▲由來日本人は巧に人爲淘汰の理法を適用しつゝあるは不思議なる程にして、彼菊、金魚等の培養飼養法の如き學理と一致せるは何人も之を認むる所なるが現に植木屋金魚屋の説明を聽くに其語調までダルウイン一流の學説と殆んど符節を合したるが如きものあり、彼の土佐地方の長尾鷄の如きは極端に淘汰法を用ひたる一例と見て不可なかるべく、此種類に付ては未だ學者間に一定の説無きも、予は昔時土佐藩侯が彼の參覲交代に用ひし毛槍に、可成羽毛參々たるものを得んとの虚榮心より、此種鷄の飼養を奬勵せしに原因したるならんと信ず又東京附近の二合半と稱する土地に非常に早き早稲を產するが如きも亦淘汰の法適用の著るしき一例ならん云々。

それより博士は西洋人と淘汰の實例を擧げ家畜蔬菜の飼養培養に就て種々なる成績を得たる實例を示し改良と改惡は淘汰の方法の宜しきを得ると否とにあることを論じ人種改良說に及べり。

▲要するに淘汰の方法其宜しきを得れば改良の實を擧げ得べく、宜しきを得ざれば改惡の結果に陷るを免れず、而して人爲淘汰の行はるゝは植物と下等動物とに限らず、人類に於ても尙此理法の行はるゝを見るなり、唯之を行ふには人の見て最も神聖視する結婚に依らざるべからずして、他の動物とは異り頗る困難なる事情存するは避くべからずと雖も、所謂人種改良も亦社會政策の一端たるべき價値は十分に之有りと思はる。



▲人類淘汰の實例　弗烈大王は其性癖として大兵を好み大男に大女を配して人爲淘汰を人間の上に行はんと試みたり、唯大王の威を以てするも結婚のみは强制して行はしめ難く、而も其効果は數代の後に表はるべきものなるを以て、成績の如何なりしやは姑く措くとするも、其着想に至つては頗る奇拔とせざるを得ず、米國の某地方には啞者間の婚姻行はれ子々孫孫に至るまで啞者なるより、遂に五官の一を缺ける人種を生ずるに至らんとて深憂を懷く者あり、とは曾つて聞ける所なり、此等は不良の人類淘汰と見るべきものならん乎。

▲配偶選擇の必要　婚姻が人生の大事たることは個人の幸不幸の上より云へることとなるが、配偶選擇の風習如何は國家國力の上より見て頗る重大の影響を有す

ことなり、風習の良不良より生ずる結果は數代の後にあらずんば觀測するを得ざるを以て、世人多くは之を閑却して顧みずと雖も、或意味に於て適當なる人爲淘汰を行ふは經世家の最も注意を要する所にして、此等をこそ眞に國家百年の大計とや云ふべきものならむ。云々

それより博士は配偶選擇に就て日本と西洋の風習の相違する處を擧げ、兩者の長所と短所とを指點して備さに說かれたり。

△我邦の配偶選擇法　婚姻の慣習は、國により所により多種多様にして、何れも歷史上の理由を有することなるが、我邦の現狀を見るに頗る意を強うすべきものあり、男女年頃に達すれば兩親兄弟親戚乃至朋友は夫々其配偶者を選擇し、本人の納得したる後にて取極を爲すこと我邦從來よりの風習なり、



而して選擇の標準とする所は、第一に血統即ち惡疾の遺傳無きや否やを吟味し、第二に技能即ち一藝一能に長ずるや否やを吟味す。素より財産格式等の詮鑿も之無しとにはあらざれども、一般より云へば是等は第二位に置かるゝものと見て不可なかるべく、藝術家の如き其門弟子の中より技能の優秀なる者を選んで女婿と爲すはありふれたる事實にして、某醫家の如きは嫡出の相續者あるにも拘らず、其養成せる子弟の最も技量ある者を繼嗣と爲すを以て不易の家憲と爲す程なり予は之を以て最も人爲淘汰の理法に適へる配偶選擇法なりと信ずる者なり。而して技量才能を配偶選擇の方法とすれば其子として生れ來る者の技量の優秀なるは自然の理數にして、斯くて數代數十代を經て子孫の智能其面目を一新するに至ること疑ふべからず我邦近代の進步發展

は其原因種々あるべけれど、予は配偶選擇に關する我邦從來の習俗が與つて多少の力ありしことゝ信ず、此點或は我婚姻慣習の長所として永遠に繼續すべき所なるべし。

▲大家の子に大家無く英雄は英雄を生まずと云へば、前陣の理論は凡ての場合に行はるとは云ひ難し獨逸の某學者の言に予は卓絶せる技量を有せざるは予の子供に取りては幸福なりとの奇語を吐るは、確に一面の眞理を穿てるに相違無きも、大家英雄の子は常に愚物なりとしも限らず團十郎の家は血統相續にて九代の名優を出せしが如き他に其の事例必ずしも稀なりとせざるべし、賢者の子に賢子なしとの西洋の俚諺は寧ろ例外の場合を示せるものと見て不可なし。



▲東西風習の差異　我邦は技能を以て配偶選擇の標準とし、之に反して西洋は戀愛を以て結婚の動機とす、我は冷靜に配偶者の良否を選擇し、彼は熱情の極動もすれば取捨を誤るに至る、其利害得失は必ずしも智者を俟つて後知らざるなり、然るに西洋人は往々にして我が婚姻の習俗を非難し、觀て以て未開野蠻の臭味を脫せずと爲すもの〻如く、而も我慣習の淘汰の理法に適ひ彼の慣習に比して一日の長所あるを知らざるに似たり、惟ふに、西洋諸國は個人を社會の單位とし、婚姻は各個人の權利にして父母兄弟と雖も其權利を尊重して濫りに容喙すべからずと云ふ觀念に基きて自由結婚の風習を打成せるが、之に反して我國家の單位は家に在り、親子の關係は夫妻の關係よりも重視せられ婚姻に父母の承諾を必要とするは勿論、長者たる父母の選擇に係る婚姻は子たる者多少其

意思を枉げてまでも之に服從せざるべからずと爲せしもの遂に現今の習俗を爲せし所以ならむか、理論の是非は姑く措き、實際上二者孰れを可とするやと云へば予は寧ろ我慣習を採らんと欲する者なり。

▲我慣習の短所　然れども一利一害は何事に付ても免るべからず、技量才能を配偶選擇の主要標準と爲す結果は容貌身體風采等を疎略にするの短所あるを免れず現に我國人は身體美に於て一歩を西洋人に讓る所あるは遺憾ながらも之を認めざるを得ず、ポーツマス條約に於ける日露兩國委員の寫眞を見て、今少しく我委員の軀幹偉大なりせばとは何人も齊しく感じたる所ならむ、近來西洋人は我邦人を賞揚して種々の賛辭を呈するも未だ日本人の風采は立派なりと云へる者あるを聞かず。

▲我習俗の一異例　身體美を選擇の標準とするより淘汰の理を現實にせる我邦の一異例は華族なり、華族には妾腹の子弟多く妾は美貌を以て選擇の標準とす、此結果にや所謂華族面と稱し他階級者とは特殊の面貌を有すと稱せらる、或は然らむ、但其技能の面貌に伴ふものありや否やは別問題なりと知るべし云々。

川村大將の家庭

大將の家族は今年五十二歳の夫人清子との間に五人の子あり長男景敏(卅四)氏は郵船會社の支店長として目下大連に在り其夫人久子(二七)は大將夫人清子の令妹松岡春子の女にして良人と共にあり長男敬友(九つ)長女かな子(六つ)の兩兒を擧ぐ又長女榮子(廿八)は砲兵大佐成田正峰氏に嫁して下總沼の邊なる大佐が留守宅を守り居れり次男弘(廿六)氏は學習院大學にて三男盾夫(廿三)氏は京都帝國大學理工科に在り次女照子(二十)は前記松岡春子の令息近衛歩兵第二聯隊第六中隊長松岡政寛氏に嫁し長女靜子(三つ)を擧げしも良人は昨年八月廿六日遼陽の役に名譽の戰死を遂げられたれば今は遺兒なる靜子を連れて大將の家に同棲し居れる良人を亡へる照子夫人の胸中思ひやられて氣の毒なり四男景一(十三)氏も學習院に通學し居り雇人は書生一人下婢四人なるがいづれも大將の前任地姫路より隨ひ來りしものゝ由、大將の夫人清子は至つて平民主義の且つ交際上手なる人なるが萬づに古風のつゝましやかなるを尙び然迄に洋裝などせしことは無く大將出征中は篤志看護婦人會、愛國婦人會等に關係あるも病氣勝なりし爲め餘り外出せしことなかりしと又大將は今年五十六の老將軍なれども壯健青年を凌ぐの槪あり平生最も遊獵を好み早曉より銃と愛犬とを携へ近郊に出獵を試むること屢々にて其他書畫骨董の類を愛し就中古刀劍の類は殆んど價を吝まず之を手に入れらるゝ程なりと。因にいふ今回同大將一家の寫眞を掲載する筈なりしも製版間に合はざりしを以て來月の誌上にゆづる。

歌まなび

翠香女史

歌題數則

▲題意を能く辨へて讀べき事　何の題にても其文字の意を確めて知る事肝要也、三字四字の題には虚字實字の輕重あり、譬は江上霞月下虫、又は月前擣衣等すべて上下前などの字は虚字とて輕く添へたるのみ、唯江の霞月に虫、月夜の砧と心得て可也、又花始開、草漸靑、雨後月等の題は三字共實字にて花の始て開く草の漸々と靑くなる雨晴て後の月、なれば三字を一もよみ落してはならぬ也、四字、五字或は詩句題、等皆此事あり、されば題を得ては先其讀方を能く問あきらめてよむべし疎忽にすれば存外の間違あるもの也。

▲題は廻して讀べし　譬は花林月、海邊千鳥などの歌よむに、花の林の春夜の月、海の邊に千鳥なく也と樣にいへば下句事もなく出來てしまへど、斯ては只題字其儘なれば何の風情も趣味もなし、題字其儘にならぬ樣にするをばまはしてよむとは云ふ也。

▲題は稱美すべき事　花題には散事をいはず、落花題にはあるといふとも惜む心をつよくよむべし、散りぬともよしなど云ふ言もあれど、夫は其ちりてもよきいはれ確なる事なくては云難し、月ならばさやかに照れる趣によみて曇るといはず、雪ならば花にたとへ面白き風情を賞して寒しと厭ふ意をいはず、又何題にても夜とか月とか云字なきに夜景をよむべからず、何に拘らず賞翫する方によみていとはしげにいはぬを題を稱美すると云ふ。

他の死を悼み、又は追悼の歌に悟り貌なる事をいふべからず、唯惜む心をつよくよむべし、或人南無阿彌陀佛の七字を句の頭に置て七日々々の追悼歌讀て贈りたるに、他の不幸を翫弄にすると腹立られたる事ありたとへ慶事の祝歌なりとも先方歌人にも非ず、又歌を乞ひもせぬに猥に歌を贈れば、高慢ぶるなどゝいはるる事あれば愼みてみだりに爲べからず。

▲傍題　何にても其主たるもの傍になり、添物の重くなるを云ふ、譬ば時鳥の歌に月をよみ合すとて、月重く郭公が添物となり、雁の題に秋風を讀入て其風にとられ、落葉と時雨と混じ花の歌を霞におほはるゝ等を傍題といふ、惣じて何にても結句にいふ事主と成易ければ、成べく讀合せの景物は上句に置て、主たる物を結句にいへば此難を発る、郭公ならば結句を山ほとゝぎす、又は郭公かななどいへば誰に郭公の歌と聞え有明の月山の端の月などゝおけば月にとらるゝ也餘もなぞらへて知るべし。

▲落題　初心の人ふと題を取違



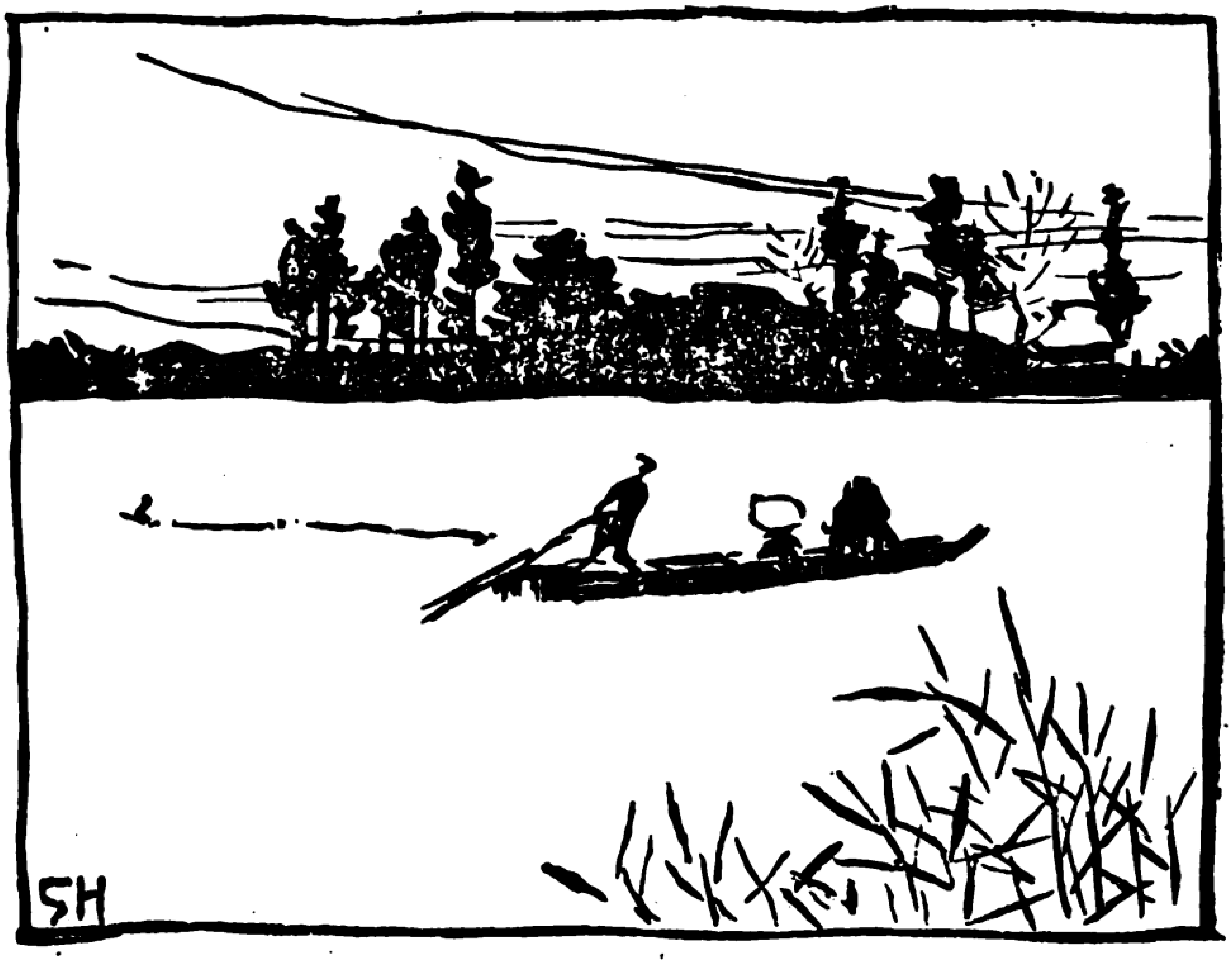
へてあらぬ事をよみ、又は結題にて物二ッ取合せたる題に、花に山を結て遠山花或は月に海を結び海上月の類　動ば片々の事をいひ過して一方をよみ落す事あり、是は初心ならでも餘り趣向に凝てアヽでもなし、コウデモなしとよみかへ〳〵する際ふと此誤を爲る事あり。

▲言がき　かな題とも云　古今集などの如くかくを云ふ之は題詠にならぬ實際に有し事を歌によむ時也、言かきに書たる事は歌にいはず歌によむ事は言がきにかくまじきなり、然るを言かきも歌も同じ事になりては双方共無用の贅言となる也歌は相應によめる人も言がきを甘く書得るは至てすくなし、僅一二行の中にも愆易

きもの也。

▲尾枯　一首のうちいふべき事を始にいひ竭して下句又は結句無用の言となるを尾枯といふ、又上句餘りに强過て下句弱き言となるを龍頭蛇尾とて尾枯と等しく譏らるゝ事也初心の人の文章殊に此事多し始物々しく書出して段々と勢ひ脱け末に何等の落もなく詰らぬ言にて終る、蛇尾處か蚯蚓の如き物多し、惣て歌にても文にても始は只形容詞にて末程强く確になり終に至りて所感を述るをよしとす。

▲同心病　一首に同じ事の重るを云ふ、譬ば思ひに火を云かけて又炎といひ、何々川と



いひ出して又川瀬と云ひ、上に初花と有て又咲そめにけり等いふ類也、但し枕言の様に態と重ねていふ格有、是はすみだ川々瀬の何々、白雪のゆきて等の如く、間に物を入れず直下に續けていふなり、功者にいへば却ておもしろし。

▲輪回病　是は一首輪の如く切所なきを云ふ、結句より上へ返る言なるに、他の四句も皆續きてくる〱廻るなり、句の中にけり、ける、らん、哉等の切斷言なき故なり。

▲二段切　輪回の反對に二所きれて續かぬを云ふ、譬ば上句に何々とみゆる哉ときりて又結句を何々成けりと切斷言

なるを二段切と云ふ、何句めにても切詞あらば結句は上句へ返りて續く樣にすべき也。

▲題詠と實詠との相違　歌は感情を述る物なれば、見る物聽く物、世上萬般の事に附て喜怒哀樂の情に任せ歌に讀み、文に作りて人にも贈り自ら心を慰むるも實詠なれば如何なる事にもあれ其見聞の儘をいひて差支なし、題詠は然らず、抑題詠なる物は畢竟實地の歌よむべき下稽古なれば、實地の思ひを爲してよむ可き事勿論也と雖、此題詠といふ事發りてより久しき今日に及びて、歌といへば先題を設る習慣と成て、實詠よりも題詠の方主と成たれば、題詠の心得なく實地と同樣によみては、



毎度難ぜらるゝ事有り、そは題詠は假に作意して人に見する物なれば、誰にても實然有らむと受らるゝに非ざれば、たとへ實際有し事にても、定則に背ける事、奇なる事は却て他よりけなさるゝ物也、世に有に相違なくても、歌には讀む間敷き事あり譬ば雨は四季共に降るなれど、昔より春雨は靜に音もせず、梅雨は長々と小止なくさみだるゝ樣、夏の白雨

は烈しく、秋は霖雨とて降しきるさま、冬はしぐれの降みふらずみ定めなきが、是古より四季の雨をよむ定則なれば、題詠は之に背くべからず、然雖實際は決して然らず春ははげしき大雨あれば、入梅中に晴つゞく事も珍しからず、白雨雷鳴すべき夏日に小雨ふり、秋冬も又霖雨時雨ならぬ事多し、されど是は變則なれば日記道の記などには有の儘に歌によみ、文にかくもよけれど、題詠にはよむまじき事、彼盜賊の事をば歌に白波、緑林とはよめども、屋尻きる、追剝、手弱女を猥り業する等はいふべくもあらず、されど實際は皆然爲るぞや、かやうの事ともいひもてゆかば限りなかるべし。

▲雜題　四季戀に非ざるはすべて雜題とす、雜題中又旅、祝、悼、と分ちて何にも拘はらぬを眞の雜と云ふ之には四季の詞の交らぬ様によむべき也、當季は許すとの説もあれど、成べく季をはなるゝを可とす、譬ば海邊眺望等に、實地よりみれば海上は四季共に霞も霧もあるに相違なしと雖、昔より霞は春の物、霧は秋の物と定まりあれば、雜の題詠にはよむまじき也、又故郷鳥などに、鶯、時鳥の類よむべからず、是又鶯は春、時鳥は夏、雁は秋、歸厂は春千鳥は冬、と各其季節の定有れば也、又春鳥、秋獸等、四季の一字付たるも春秋中の雜なれば、其心して季題中にある鳥獸（鶯雉等は春さた鹿は秋）を除て季に拘はらぬ物を其季の景色によみ合すべき也此事に附て諸説まち〳〵にて、春鳥に鶯、雲雀、夏に郭公、秋に雁、冬に千鳥、總てよむべしといふもあれど、當今御歌所を始、諸大家先生大かた前説の方なれば、季に拘はらぬ物をよむに如くはなし。

▲人の兄（後篇）　家庭小說家として新方面に立てる堀内新泉氏の作、白粉の臭味なくメヽの臭味なく、さりとて市塵の氣なく野人の臭なく、一篇すらりとして、厭味のなき小說なり主人公格一、貴美子等の性情より描かれて同情深しされど同じ家庭作者なれど菫花の如き淸艷の氣なきだけ小說として讀者の情を惹き寄せる力大ならざるは即ち氏作者の前途に大なる發展を見るの兆なるべし（成功雜誌社發行定價五十五錢）

前田侯爵家の婚禮

▲本郷區元富士町なる前田侯爵家にては先代利嗣侯の息女漾子(二十)と養子利爲侯(二十二)との婚儀は來二三月中に擧行せらるべしとの事なり。

▲花婿君は一家なる舊七日市藩主子爵前田利昌氏の四男にして今の子爵利定の弟なり、去三十二年十二月學習院中等科を卒業したる後士官學校に入學し去三十六年七月候補生となり、昨年四月二十一日少尉に任ぜられ近衛步兵第四聯隊へ入營す侯爵が入つて前田の本家を續ぎたるは三十三年六月の事にして漾子と結婚の約束なしたるは其一月の事なりし、故利嗣侯は成るべく世故に通じたる人を婿がれにせんとて一族中の最小なる一萬石の末家の次男を貰ひたる程とて利爲氏をも御大名扱ひにせず利爲氏亦た自から奉ずる事極めて薄く舊藩士の子弟が入り居る西大久保の敬義塾にありて極めて平民的の生活をなし居られたり。

▲花嫁君は華族女學校の卒業にして今日に於ても學問技藝に心を注がれ日頃細川潤二郎翁を聘して修身の講話を聽かれ佛語は之れを白耳義人なる佐藤陸軍大佐夫人ソフィー子に就き彈琴は斯道の名手山木千賀叟、習字は江間萬里、和歌は植松有經に就いて深く得る所あり、ピアノもまた名手として稱するに足る。

▲今回の婚儀は極めて古風を重んぜられ式は日本女學校敎師松岡止淺氏之れを司り、男子は烏帽子直垂、女子は袿にて花嫁君のは京都の高島屋之を製作したり、花婿君のは陸軍御用高田茂之を作るべし媒妁德川家達公のは先代將軍より傳はれるものを用ひんとしたれども色褪せて用を爲さず假受けんとしたる同格の近衛、鷹司、二條の三家のも天晴用に堪ふるは無きに就て新たに京都へ注文しても新調することに決したりと。

上野動物園の近况

▲象——これは牡種で當年が三十三歳、昨年興奮した爲めに觀覽者に大危險を與へたお馴染みのものであるが頃日は大層柔順しくなつたので目隱をして見せる事にしたけれど又興奮して亂暴をしないとは限りませんから見物する人は餘り近寄らぬ樣にせねばなりませぬ。

▲雛鶴——昨年六月十二日に孵化したもので今は尙親鶴と一緒に居ますが何樣二才となつたので大分大きくなつて餌を拾ふにも自分獨りの智惠で親鶴の敎へを受けぬ樣になりました。

▲赤熊——去明治二十六年に收容した北海道產のもので當時は僅か二才の其は〳〵少さなものであつたけれど今は十五才となり體格も太れば人にもひどく狃れて餌が欲しさに觀覽者が行くと御辭儀をして切りと愛嬌をふりまきます。

▲北極熊——グリインランド產のもので寒さを好む爲め毛が乾くと水を浴びる爲水たまりの中へ飛込で毛を濕す樣は見物です。

▲二頭の犬——絕えずワン〳〵吠へて中々喧しいですがこれは故西鄕從道侯が去三十三年に納められた米國ニユーヘンドランド種の牝種(四歳)又一つは昨年十月皇太子殿下より御下附のものです。

▲鸚鵡——去廿二年の四月に收容したもので空を飛んで居る鳥を見て切りと惡口をついて居ます。

▲讃岐產の猿、伊豆產の猿——の二つは箱入にしてあります、所で人を見ると餌を欲しさに力を込めて其箱をブラリ〳〵と橫振にしてはガタ〳〵騷ぐのは奇妙の見物であり又仲々の愛嬌者です。

▲福島氏の馬——アルタイウラルの深山を跋涉された單騎旅行の折から連れて行かれて去廿六年にこゝへ寄附されたアルタイ號は今尙健在です、其二ヒンガン號は去卅六年四月京都市動物園に寄贈され其三のウツリー號は三十年八月に當園で斃れました。

▲大寺氏の馬——これは去日淸戰役に第十一旅團長大寺安純氏が旅順で戰死された時愛乘された精華と呼ぶ陸奥產の馬ですが今年は午歳の所爲か分けて機嫌が可いさうです。

▲駱駝——從來二頭を合してゐた處へ昨年十二月第二軍の奥大將が又も二頭寄贈されて都合四頭となりました。

▲餌屋——園中三十三所の多き餌屋がある其中觀覽者から一番貰ひの多いのはお辭儀をする熊、ぶら〳〵函を動す猿、水禽室中の鴻の鳥等で珍らしい丈けに駱駝も中々貰ひが多いそうです。

江湖

手ふき紙

巖谷小波

○結婚は愛情本位とすべきものか、理性本位とすべきものか。これが動もすれば問題に成て成らぬ。所詮世が進めば進むほど、人は自然から遠ざかつて來る。自然から遠ざかれば遠ざかる程、情は理に席を讓らねばならぬ。ソレ其所で勢ひ結婚も、愛情斗りでは成り立たなく成る。否、よし成り立つた曉が、往々後悔を招く事になる。さりとは淺ましい世の中だが、さて今更致方も無い。

○人と婚す、これを愛婚と云ふ。家と婚す、これを閥婚と云ふ。金と婚す、之を財婚と云ふ。才と婚す、之を學婚と云ふ。此等總てを兼ねたもの、即ち文明式結婚ではあるまいか。

○夫を浮氣ならしむるは、妻の不行屆なるが爲め。女房を不貞腐らしめるのは、亭主の不實なるが爲めだ。

○夫の妻に於けるは、猿の猿曳に於けるが如く、その綱の曳きやうが惡いと、仕末に負へない、いたづら猿と成り。妻の夫に於けるは、馬の馬士に於けるが如くその轡の打ち様が惡いと、とんだジヤ〱馬に成つてしまふ。心猿と云ひ、意馬と云ひ、今更ながら甘い熟語た。

○敢へて御婦人方に申す。常に美しく見られやうとならば、心を美しく持ちたまへ、苟且にも心が濁つて、何かと面白からぬ事を考へて居る時は、御面相に乾度顯はれて來る。巾著切の眼の鋭く、百姓の口の明放しなのも、畢竟その證據である。

○

學問のある婦人は、醜い中にも何所やら威があり。分別の足らぬ女性は、美な中にも何と無く味が無い。

○

女が女を見て美とするのは、或は眞の美かも知れぬが、多くは京人形式たるに過ぎない。男が見て美とする女は、時に美ならぬがあるかも知れぬが、必ず何所にか味がある。女は飾つて眺めるを喜び、男は叩いて鳴らすを喜ぶ。

○

女の見て親切と思ふ男は、時として大に不親切なものだ。それと同じく、男の認めて貞女とする女に、動もすると大それた事を仕出かされる。所詮親切と云ひ貞操と云ふも、事に當つて見ぬ間は滅多に氣は許されぬ筈だ。但し刀の折紙は、必しも物を切つてからは付けない。世はそれでまた持つたもの。

○

尊い寺は門より知れる。立派な家庭は兒で知れる。要するに子は親の反射鏡である。取り分その母親の！

○

子供の耳は時として鬼のにも優る。その時は聞えない樣に見えるが實はその底にちやんと刻まれて、之がさながら蓄音機の如く、ある動機で繰り返へされる。其塲に至て口を閉たつて。所謂る駟馬も及ばずだ。

○

順境に生ひ立つた子供は智恵が足らいでも品が好く逆境を經た子供は、怜悧な樣でも下卑易い。晩成者は前者から出、早熟者は後者から成る。

○

學問は學校で得られる。が、智識は社交で無うては得られぬ。學校斗りで智識を得やうとするのは、飯斗り食つて滋養を取らうとする如く。社交斗りで學問しやうと思ふものは菓斗り食つて身を肥やすが如しだ。

○

所詮學問を修めるのは、學者になる爲め斗りでは無い、畢竟人間らしい人間に成る爲めだ。然るに學校でも卒業した婦人は、多く學者の妻たらんを期す。その

癖學者の多くは、學校出身ならぬ妻を求めるのに。

○

馬には乗つて見ろ、人には添つて見ろ！　なるほど添つて見ない以上は、ちつとも人の氣は知れる者で無い。それを自由結婚などゝ、一廉理想の妻を得た氣で居るのが、むしろチャンチャラ可笑しいとは、去る大通が仰せられた。

○

今日の如く女子教育を進めて、なまじ女に藝を仕込み、獨立心を養成するのは男を侮らしめるの基だと、大層心配して居た男があつた。成る程これも一理あるが、男がその居城を侵されるが恐さに、強いて女を抑壓しやうと云ふなら、その根性の下劣さ加減、寧しろ大いに侮つて可なりだ。

○

要するに女が進めば、また男も進むがよい。男の方へ進んで行けば、たとひ女が進んでも、決してその俤は受けぬ筈だ。それを自分は懐手で立ち止まり、頑で女に通せん坊しやうと云ふ様な、意氣地無しの男なら、どん／＼踏み越えて通るべしだ。

○

あゝ世は太平に戻つた。夫れ戰爭は男子の業、平和は女子の性である。所謂る戰後の經營は、一半を女子の肩頭に委ねて、大いに働いて貰はねばならぬ。年恰も丙午、これを女の厄年と云ふのは、實は役年の訛で役年！　即ち女の役に立つ年、役に立たねばならぬ事だ。願くは火の如き熱心を以て、馬の如く働きたまへ！

生存競爭の裏面

藤葉

凡て物には表裏と云ふものがある、善の裏には惡がある、樂の裏には苦がある、吾々が住む此社會にも亦裏と表とがある。

即ち何事も文明々々と云つて物事便利になつて行き凡ての機械は發明せられ、凡ての學問はいよ／＼其奥を窮め、醫學は進歩してあらゆる病氣は治療の出來ぬものは無い程になつて來ました、實に有難い世の中と言はなければならぬ。

併し此有難い便利な進歩した社會の裏面はどんなで有うか、冷靜なる心を持つて靜に考へて見ると實に多くの悲慘な事が潜んで居る、文明の裏面に泣いて暮すものは世が進んで來れば來る程多くなるので有る。

我こそは相模の國の住人、誰々の何代目の後裔と、氏や姓名を長たらしく名乘りあげて悠々と一騎馳せ出して戰へば其間敵も味方も其働き振りを見物して居た昔の戰爭と、進歩した今日の戰とを比べて見たらばどうでせうか、其武器は如何に、昔は飛道具と云つた所で弓位のもの、之れで幾干の人が殺せたでせうか、之れに反して今日では鐵砲、然かも精鋭な速射砲が發明せられ又機關砲や、破裂彈が出來て一時に何十人の人を殺してしまふではありませんか。

斯く激しい苦痛を受けて、多くの人は戰場の露と消えてしまふ、死んで行くものは先づ夫れで仕方が無いとして、後に殘つた者の心の内はどんなでせうか、夫を失つた妻、子を失ふた親、親を失つた子、我大君の御爲め、大切なる御國の爲めと健氣にも涙を呑んで笑顔をするものゝ、誰か人情の無からんやで戰場に死する程のもの皆家の柱石で無いものは無い、只人情に於て悲しいのみか今日の生活にも之から困るものがいくらもある、あゝ國民の義務とは云へ、恐ろしい鐵砲、地雷火や水雷が無かつたならば、かゝる無慘の死樣はしなかつたでせうに。

忠勇なる軍人達は肉飛び、骨砕けて死し、手を取ら

れ、足をもがれて病院に呻吟し、彼等の家族は人生至極の悲しみと生活の道とを失ひました。而かも其數は頗る莫大で日露戰爭だけでも實に二十萬を以て數へる程ではありませんか、是皆恐ろしい武器の發明されたからである。

多くの機械が發明される、夫れに付ては大きな工場が建てられる、今迄は手先でことことやつて居た仕事も、人の働きに何千倍の機械が出來て見れば、自然に手でする事は止めなければならない、さればとて遊んでは居られないから工場の職工に雇はれる、毎朝工場に通ふ職工の顏をながめて見ると、生き〳〵とした艶もなく、色は青ざめて居る、之れ何故かいふまでもなく食物の粗惡、空氣の不潔、日光の入らない處に長時間勞働するからである、殊にあはれなるは火夫である、終日薄暗いかまどの前に煙にむせび炭に埋まつて汗と共に顏と云はず、手と云はず、身につける衣服は更なり、全身黑くよごれて只目に立つものは眼と齒ばかり斯くて彼等に何の希望が有らうか、一日休めば忽其日の生活に窮する彼等は、只其日を生活せん爲めに其日を働くので、斯くして一生同じ事をくりかへすより外に道は無いのである、工場の窓に立つて、色青黑く、頰骨高く聳へて、光りなき眼に空しく世の榮華を眺むる彼と、黑塗の二頭馬車を驅つて意



氣掛々と過る世に時めける紳士とを比べなば、如何にも更らに哀れなのは礦夫である、地下何十尺の穴に這入つて、空氣は濕めつて一種の臭氣を發し、僅かに機械に依つて新しい空氣を送らるゝ暗黑世界に終日汗を流して石炭を掘りつゝ漸く其日を暮して居る、而も一つ間違へば瓦斯の爆發で助かる術はなく無慘の死を遂げなければならない、不慮の災難とは云へ、未開の昔にこんな無慘は無かつたのである。

醫術が進歩して凡ての病源が見出されて世に不治の病氣はなくなつたやうである、然し乍ら又文明になるに隨つて種々なる病氣が製造される、いろ〳〵の病氣が運搬されるのではないか。

次に又學問が盛んになつて來た、之れで身を立て樣とすればどうしても勉强しなければならぬ、殊に今日の時世、十年前に豪らそうに思はれた學士連など、もう一向に貴くない、ふる程ある掃くほどある、故に人並の勉强をして居ては到底追付かない其處で勢、無理な勉强もする、日光もろくにあたらない室の内にとぢ籠つて始終書籍を讀まなければならぬ、之れが第一身體の毒である、充分に日光をあび、太陽の光線に當らなければ顏色は次第に靑くなる、身體は少しも使はないで腦ばかり使うから腦病が起る、其處で腦と大關係のある消化器が弱くなる、胃腸病となる神經衰弱となる肺病となるのである。

維新の前にペストや、コレラなど云ふ恐ろしい病氣は無かつたのに交通機關が次第に發達して世界の諸國と交通をする樣になつた爲めにいろ〳〵の病氣が輸入された、平和で安全で有つた吾々人民の多くは此恐るべき病に斃れ、且つ不穩なる日を送らなければならなくなつたである。

物を搬ぶこと、衣服を織るにも、旅行するにも、何でも彼でも皆今では人の手足を勞する事なく便利な機械が發明されて、人の力の何百倍の用をする樣になつた、誠に便利な事で勞力は少なく、僅かの時間で何でも用が足りる樣になつた、夫れはいゝが今迄働いて居た多くの人、夫れに依つて生活して居た人々はどうで

せうか。

のみならず東京に電車が出來て以來幾千の人が或は殺され、或は怪我をしたかも知れぬ、汽車とても同じ事で、此間は忠勇なる兵士の長い間を戰場に苦辛してやがて錦を裝ふて故鄕に歸る道に汽車は其生命を奪つたではないか、毎日の新聞の三面記事を見る内に汽車が衝突して人が死んだとか、子供が怪我したとか、鐵道往生を遂げたとかそんな記事の一ツや二ツは載つて居らぬ事はない、斯樣に機械の爲めに或は職を失ひ、或は生命を失ひ、或は手足を失ふものは益々殖えて來る。

斯くて貧者は益々貧となり、富は少數の資本家に歸して富者は益々富み榮えて行く、其結果は如何なる事實を生み出して來るかと云ふに、あらゆる罪惡は益々殖えて來る、人として誰しも忌はしい罪惡を好んでするものは無いが貧が盜みを敎へると昔から云ふ如く、今日の生活の道が立たなくなれば勢、惡い心も起つて來る、衣食足つて後禮節を知ると聖人も言はれたが、身を切られる樣な寒空に單衣一枚で震へ、僅かに芋の切端や、粥の一杯をすゝつて飢を凌で居る人の心に先づ欲するものは何で有るか、着物が欲しい、食物が欲しい、而も夫れを得るに道がない、慾望が益々迫つて來るのを、只空しく坐して死を待つものは無い、竊盜、强盜、人殺、追はぎを初めと



して、あらゆる罪惡は皆此缺乏から起つて來るのである、其證據には米國は世界の富を集めた國である、富者は何億萬の富を有して、中には婚禮の衣服に八萬弗を費したと言ひ又或人は砂糖を以て大きな箱庭を造り其中に種々の寶石を埋めて賓客をして純金の鍬を以て掘らしめたと云ふやうな事があつた。實にいくら金が有るかわからない、恐らく其使ひ道に窮して居るのであらう、然るに此贅澤國の裏面はどうであるか或る處では白晝にも追剝が出る、乞食は群をなして市中を漂ようてゐる、之れ實に文明の餘波である、凡ての道理が明かになつて、人は喋々と其理を說けど而も無理なる、不倫なる罪惡は益々殖えて來るのである。

彼の終日野良に鍬をとり、鄙歌うたふて農業を營む百姓は實に幸福である、粗末なる家に住み、粗末なるものを食し、朝は早くから、夕はおそく迄、雨がふるから、寒いからとて休むでもなく、水の中に足をつけて田を耘し、暑いからとて怠るでもなく玉の汗を流して培ひ、草を取り、只其作物のよく實らん事をのみ願ふて居る、彼等に何の理想が有らうか、欲望が有らうか理想も欲望も無ければ心に煩悶も無い、斯くて彼等は家族打寄つて平和に滿足して生活して居る、然るになまじ文明の社會に乘り出して見れば世を不可解と叫んで死に終る青年も出來て來るのである、限りなき智識と共に欲望も亦限りが無い、目先にちらつく榮譽榮華を誰しも望まないものはない、心に欲望あり理想あれば從つて煩悶もあるのである。

學者たらんとしてもがき、富者たらんとしてもがき名譽を得んとして、もがきにもがく世の人、實に煩はしきは文明の社會である。

併し之れは世を悲觀的視したものに過ぎないけれどもさりとて只愚者の繰り言として一笑に附すべきものでせうか限りなき世の進歩は終に此悲慘なる裏面をも救ふの機會が得られるであらうか。

◎婦人は社會の審判官にして道義禮式流行等の問題は總て婦人に依りて解決さる

◎記臆せよ精神の奥底より輝く婦人の光明は一生を通じて磨滅消散する事なきを

女性美に就て

× × ×

◎近頃婦人間にヒヨロ長き襟巻をかけて歩くこと流行せり、しだらなく首筋からぶら下りたる様は見つともよきものにあらず、之を巻く爲に婦人らしき樣の見えぬのみか、却て小憎らしく見え、生意氣に見えて、美を損ずること甚しく、如何にも無趣味なる流行と云はざるべからず。

抑も我邦の温度は嚴冬の頃にても、華氏の三十度を降ること稀なり、第一凍傷に罹り易き鼻頭、耳朶ですらも、常に露出しながら曾て鼻を落とし耳を失ひしものなきに見ても、防寒具としての襟巻は、全然贅物と云はざる可からず、曾て長岡陸軍少將が體育に就て話されたる一節にも、日本人は誰でも襟巻をする、老人は勿論若者でも襟巻をする、斯る人に限りて少し寒いと直ぐ感冒を引く、頓と意氣地の無いものだ、自分が曾て獨逸に居た時、或日非常に寒かつたから市街を歩くに外套の襟を立てゝ居たが、途中で老人にも出會へで婦人にも出會つたが、誰一人襟巻などをしてゐるものがないから、耻かしくなつて、密に横丁に這つて人の見ぬやうに襟を折て歩いた」とあり、成程言はるゝ如く襟巻を用ゐる爲に却て皮膚の健康を害ふとは疑もなき事實なり、さて我邦にて襟巻を用ゐ出せしは明治以後の事にして、殊に女子の襟巻は近年のことに屬せり勿論以前には男女とも頭巾を用ゐたるも、是は防寒にあらで防風の爲めなりしなり、昔時は男女共に結髮せしを以て風荒き日に外出すれば、忽ち結立ての髮もメチャメチャに吹き壞さるる虞あるより、頭巾を用ゐて結髮を保護したるものなることはその原料に薄き秩父絹や縮緬位を用ゐたるにても知らるべし。

襟巻は啻に衛生上有害なるのみならず、女性的裝飾としても餘り見よきものにあらず、剩さへさらでも高き前胸部を、之あるが爲に一層高くして、他の裝飾を沒了する嫌あれば、何の道襟巻は用ひざるがよし。

◎又た女學生が眼鏡をかける事は近頃の流行の一つと

なれり、眼鏡屋の話によると先頃までは素通し近眼鏡とも、男子が重なる顧客なりしが、昨今は女學生の需用總販賣高の三割以上に達せりと、驚くべき現象と云べし而して女學生好みの品はと云ふに、重に鍍金やアルミ縁のものなりとかや、曾て美人法を説ける某醫師が女學生眼鏡の流行を罵倒しての言に、彼等は廂髪の下に近眼鏡を掛けて學者ぶり美人がつて、得々として其不具者たることを天下に誇りつゝあるなり、馬鹿とも阿呆とも名の附け方のなき話なり、眞面目に美人たらんと思ふものは、斯る愚なる眞似を廢して、天より受けたる視力を完全に發達せしめざる可からずと、これは生理發育上道理千萬の痛語と申すべし、又た單に女性的裝飾美の上より云ふも婦人が眼鏡を用ゐる事は甚だ面白からず、抑も人の顔には男女に係らず愛敬が必要なり、而も顔の愛嬌は口元と眼元にあり、パッチリとした眼付、すゞしき眼球は見るから愛らしきものなり、太平樂府てふ狂體詩にも「京都三條糸屋娘、姉者十七妹十五、諸國諸侯弓矢殺、彼等二人眼元殺」と謠ひある如く、假ひ他の道具は不完全なりとも、愛らしき双眼だに全からんには、優に他の愛戀を牽くを得べきを以て、眼は實に愛の泉源なり、美の焼點なりと謂はざるべからず、然るに世には斯くまで大切なる美の焼點を覆ひかくして得々たる者あるは、心得違ひの甚しきものと謂ふべし、殊にアルミ縁や鍍金縁を衒耀すに到つては、虚榮心の奴隷たるさもしき心情のみすかされて醜しとも醜し。

◎東京の女學生は高等小學時代より大抵靴を穿き居れり、隨て現今女學生間に流行せる靴と云ふを見れば、踵の細く、高きものにして、女學生と云へば殆ど此靴を穿かざるなし、然れども此の形の靴は米國にて嫁入前に令孃、或は交際社會の人が僅に使用するに過ぎざる種類に屬し、一般の婦人には用ゐられざるものゝ由なり、今この細く高き踵の靴の弊害を擧ぐれば第一運動に不自由なり、第二は姿勢を鷺鳥の如くし、徒に胸部の突出ると同時に叉臀部にも棚を作り、殊に我國の婦人の如き平生坐居の爲に脚部の發達不充分なるもの

は、この蹌踉け易き靴の爲に、只さへ臀部を振りつゝ歩く姿が更に左右に身を振り動かす習慣を作り出すに至り、且つ脚下の足首に壓迫を加へる爲め衛生上に害あること言ふまでもなし、飜つて我邦の履物を見るに世界中我が國ほど履物に進歩せる所は恐らくあらざるべし、我が國も最初は西洋の如く又支那朝鮮の如くサック仕立のものなりしが、遂に今日の如く鼻緒をすげたる履物を採用するに至れり、元來人の足は手と同じく五本の指あり手の拇指が他の四指に對して大なる働きをなす如く、足の拇指も



亦その働きあるものにて、足に力を入るゝ場合には此の拇指の働きを藉らざれば叶はず、仍て拇指と四指の自由に重きを置き、而も全身の重量を支へしむべきやう拵へられたるは我國の履物にて、誠に能く案じ出したるものなり然るに彼の西洋靴の如きは生理上全く足指を無視したるものにて且つ其の色も黒とか赤とか位に限られ其の裝飾また單純を免れず、今此の兩者を比較せば、日本のは足駄と云ひ駒下駄と云ひ雪踏、草履と云ひ、將た草鞋に至るまで何れもその美術的なる點

に於て、代價の低廉なる點に於て、遙かに西洋靴に優るものなり、かゝる善き履物ある以上は我が家庭にふさはしからで第一脱き穿きにも面倒なる西洋靴を用ふるには及ばざるべし。

◎數ある流行品の中にて吾妻コートの如く上下都鄙の別なく普く行はれたるものはあらざるべし、而も其價は低廉ならず、下等なるものも一着十圓を下らず、上等とならばなほ五六十圓を出るべし、而して其用は僅かに、雨具、風よけに過ぎざれば、履物、傘、帽子の類と同じく玄關先より奥へは着て通るべくもあらず、斯かる用途狹き物なるが上に、其仕立格好も甚だ不様にて、之を着用する時は婦人が被服の美は全部覆ひ盡されて、殺風景極るものなり、聞く三越呉服店にては先頃より譯ありて吾妻コート着流のお客を斷りて店頭限り脱て貰ふことゝなしたりしが、或日のこと如何にしてもコートを脱ぐことを諾ざる女ありしかば、店員は胡亂の女なりとて無理に脫がせたれば、下にはコートの立派なるにも似ず双子縞の粗末なるを着て居たりしとて、件の店員は却て赤面したりと云ふ、されば婦人のコートは、多少地位ありて外出に車を要ずべき婦人には全然不用品、又徒歩の外出に纏はゞ重きコートの、剰へ品質が絨製なるを以て、裳裾をゴリ〳〵と磨り立てる故、下に召したる晴衣を臺なしにすること請合なり唯だ下に双子織や木綿縞を着用するものは左様の感も少なく、所謂襤褸かくしとして調法がるも無理ならねど、偶々の外出など盛裝せる場合には、着用せざるをよしとす、又車に乘らんにはコートと共に羽織を臀下に敷きて、車の動搖に連れ、こすり立つることなれば、大事の衣物が皺くちやとなることは到底免れ難し、されば吾妻コートは實用に不便なるが上また沒趣味の骨頂なるべし。

◎婦人　裝飾は佛前の飾花の如くに、その前面のみ飾り立てゝ、後方を打棄ておく譯のものにあらず、乃ち後姿の調和は甚だ大切なる事なり、然るに、コートを着たる後姿は不格好にて見好きものにあらず、後姿にて注意を要するは、先づ頭部、即ち髮の結ひ方、襟飾

の整方にして、次は腰部、即ち帶、次は脚部、即ち裙の三點にあるなり、取別日本婦人の美は襟脚の通りたる、漆の如き眞黒き髪の生えぎわのクッキリとせるにありて、その艶なる風情は西洋婦人に絕てなき所なり古來風俗畵工の佳人を繪けるさまを見よ、如何に此點の描寫に入神せるかぞ、故に或る場合には襟元を以て女性美の焦點と云ふも敢て不可なきなり、又臼の如く太れる臀部は帶にて美化せられ、脚部にて引しまり、裙もてチヤンと底基の出來てゐるさま、即ち物腰の女子らしき所に婦人の美はあるなり、さるに今日大流行の結髪を見るに、前面は十二分に廂を築き出し、後方は蓬々と迷毛の亂生に任せ、着物の襟と云はゞ、いろいろ撰好みして高價の半襟などを用ゐるに係らず、筍の皮よろしくと云ふ鹽梅に首筋に卷き付け、後姿の美の焦點とも云ふべき帶を廢して、ダラシなく行燈袴を引づり歩く姿は、何とか言はん、形容に言葉なきを覺ゆるなり。

人情哲學

市の人

▲最後の談判

男「分りました、清潔お分れする事にしたら好いンでしよう、……夫では何卒私から上げた手紙を皆お返へし下さいましよう。」
女「好いぢやありませんか、決して貴君の御迷惑をする様な事は致しませんから。」
男「いゝへ、私も誰か外の人を搜そうとおもつて、差當りあれを下書に手紙を出して見なければなりませんから。」

▲機會

「分れたつて忘れやしまいれ。」
「忘れませんとも、けど成る可くなら思ひ出す様な機會を與へて下さいれ。」

▲新聞記者

新聞記者「吾輩は東京新聞の記者で、避暑地の視察に來た者だから、普通の客とは違ふよ、お前の處では如何いふ風にして吳れるれ。」
旅店の主人「へいへい勿論で御座いますとも、貴君方には現金で前拂に願ふ事にして居ります。」

▲文反古

稅關官吏「お嬢様、其貴いトランプを拝見したう御座います。」
外國から歸りし嬢「あら、厭ですこと。」
稅「御厭でしようが、法律ですから已むを得ません。」
嬢「まア厭ですれ、是は彼地に居る時分受取つた戀人の手紙ばかりなんですよ。」

▲コルセット

西洋婦人の締める「コルセット」(胸當)は番犬と同じである、何故と云へば晝は一日縛り付けられ夜になつてやつと解かれるから。

▲河口、河床

口を持ちながら語らず、床を持てども眠らざるものは何、河。

▲欲しくない搜し物

頻りに搜して見る、けれどもなければ好いと思つて搜すのは靴下の穴。

▲金の事なら

嬢の父「嬢は貴君には上げられませんよ、如何しても。」
男「私は貴君から其お言葉を聞いても驚きは致しません、結婚が出來なければ死ぬ分の事ですから、私はお嬢さんを愛して以來、此愛の爲めには世界の何者をも怖れないのですから。」

父「いや、私は決して貴君を如何し樣と云ふンではないンですよ、併し失禮ですが金で濟む事なら幾何でも上げますが、娘を思切つては被下ませんか。」

男「夫は、まあ一體幾何程御出し下さる。」

▲菫と月給

細君「貴君は口癖の樣に「朝な〳〵に菫摘らん」と唱歌を歌つてらしつたのれ、彼の時分の方が妾を思つて居たと見えますれ、婚禮してからちつとも歌はなくなつたンですもの。」

夫「だつて毎月月給を上げてゐぢやないか。」

▲動物學

「偖」と動物學の先生が説明を終つてから生徒に質問をしました「何故鷄は玉子を自分のお腹で温めますか。」

生徒の一人が仕たり顔に「夫は牝鷄は布團がありませんから。」

▲戸口調査

戸口調査の巡査「貴女のお名前、夫からお年齡は……。」

婦人「お隣の奥樣をお調べになりましたか。」

巡「えゝ、最早濟みました。」

婦「妾は彼の方より二つ下。」

▲獅子と虎

甲「君は獅子に喰はれる方が好いか、虎に喰はれる方が好いか。」

乙「何方もいやだれ。」

甲「併し何方も逃れられない塲合には。」

乙「其時には獅子に虎を喰はせる。」

▲辭書

甲「ラブ(愛)とヘルス(健康)とウエルス(富)とがあれば人間は滿足だ如何したら見附けられよう。」

乙「造作もないそれは字引で搜すさ。」

▲日蝕

若い寡婦は日蝕の樣だ、黑く(喪服の戀)なつても長くはつゞかない。

▲遠慮

母「お前夫にお金を貰ふ事を遠慮してやしないかい。」

娘「いゝえ、けれども良人では時々私に呉れるのを遠慮して居る樣ですよ。」

▲長い鼻

食卓に向ひ合つて食事をして居る一人の方は鼻が高いと云ふよりは長いとも云ふ可き人である、向ひ合つてる人。

「君、君の鼻の先に蠅が止まつて居る。」

鼻の長い人「左樣か、濟まないが君の方が近いのだから、追つて呉れ給へ。」

▲おしやべり

A「女と云ふものは饒舌で、年が年中饒舌り續けて居る物だが、少しは默つて居る事もあるかしら。」

B「あるとも。」

A「一番饒舌らないのは何時だれ。」

B「二月さ、何故と云つて日數が少ないもの。」

大力士の衣服

力士社會の偉人大砲と梅ケ谷、彼等の體軀の非凡なるは今更いふまでもないが、今この大砲の着物に就て一寸申上よう、其の着丈は四尺六寸と云ふのですから、他の寸法も之に準じて裄が二尺二寸五分、尋常の男から見ると五寸程大きい、身巾は前が八寸五分で後が一尺、又袖丈は二尺五寸だから、嬢さん方の中振袖に少しく短い位で、總ての規模が大きいから普通の反物なら一反半、若くは四丈で裁縫するが、如何な上等反物でも法外に裄は出ないから、力士の衣類に限り袖割と云つて、袖の所へ同じ裂を足して補ふのです。

△袖割　別に袖割の必要も認めない、玉椿――大崎の如き、小男の力士でも袖へ割裂を入れ、袖割は力士社會の習慣です、併し、着丈七寸の力士は袖割が這入なかつたら、裄が足ないので、衣類にならない、此袖割の關係から力士は三丈物以下では、實用に適さないといつて居たが、其の力士連中より一丈多いです。

△足袋　足袋も穿物も同じく大いから、之をきいて見ると、別に文數では誂ひません、九寸と云ふ足袋を誂文する、九寸とは足裏の丈の寸法で、穿物は此九寸の足が乘るのですから、九寸五分か一尺位は、ありませうと答たが、之が若し草鞋でもあつたら、仁王樣から故障を持込まれるかも知れぬ、それ故地方巡業には寐具で困難をするそうである。

△蚊帳と布團　今日の位置では別に不自由もないが、小相撲時代には暑寒ともに、寐具では困難をしたさうだ、大砲獨りで蚊帳を占領する譯に行かず、蚊帳を吊ると半身のみ這入つて、足の方へは浴衣を掛て、蚊を防いだ事もあり、又寒さの頃には普通蒲團では、兀然と足が二本出るので、已なく蒲團を二枚續いで掛た、今日でも巡業中は、依然と二枚蒲團は實行して居る、さて自宅の夜具はどうかといふに大砲の寐具は蒲團が六尺五寸で、夜着が七尺、寐る時には十疊の一間が一杯になるのである。

さて梅ケ谷彼は布袋の如く肥て居るその衣服を、裁縫するに着丈は四尺で大砲より六寸短いが、身巾が廣いので矢張り四丈なくては、衣物にはならない、先づ着丈が四尺――裄が二尺、身巾が後一尺――前九寸五分と云ふので、大砲よりは着丈が六寸短いが、身巾が廣いから足裂が多いので、矢張り四丈と云ふ勘定。

△縫方　四十二貫目の體軀を包む衣服ですから、縫方も他の力士とは違つて、襟型と袖附に特徴がある、あの太い襟元であるから、襟明が三寸五分で、夜着と同じやうな寸法、そして袖着の縫方は反比例で、其の裁縫順序がおもしろい、便々たる腹、俵のやうな乳の爲めに身巾が合ないので、袖附の所から工合をする、普通の袖附は人形附の所を縫ひ込んで扇附とし、衽と袖脇の平均を取るものですが、梅ケ谷のはその反對に、人形附の所から一寸宛縫廣げて往く、それでないと俵のやうな乳が衣服の中へ納まらぬ、着た所では格好はよいが、脱いで疊むと衽に袋がついて、不體裁。

△帶は一丈五尺　之を普通の者の一人半分で、一丈五尺と云ふ長尺の別誂ひ、博多の帶は窮屈だから屁古帶にして居る、それに臥寢する所の蒲團、其の丈にはかわらないが巾は四布蒲團で普通の者が二布半を着て寐たと、同じやうな程度ださうである。

男學生の女學生觀

角帽散士述
海老茶式部記

▲女に成りたい

二十五年の榮華の夢未だ覺めざりし平家世盛りの其昔、平大納言時忠といふ口先ばかり强らさうな男が居て、凡そ今の時平族にあらずんは人にあらずと自惚て喜こんで居た、それとこれとは話が違がへど、貴女方の御顔を見ると我々は覺えず、凡そ今の時海老茶にあらずんば人にあらずと云ひたくなる、イヤ決して戲談を申すのでは御座らぬ、煽てるのでも無い、冷かすのでもない、實際な話、正直な話、僕等をして眞のところを白狀させると、女になりたい、女が羨山しい、貴女の御言葉の通り、自由になるなら變生女子と云ふ術でも何でもよいから貴女方の體と僕等の體と、體を取り替へたい、貴女方が角帽子で散步をなさる、僕等は海老茶を穿いて散步をする、てなことにして見たい、實に僕等は男と云ふものに爲つて居たくない、男と云はれることを泥棒といはれ掏兒といはれた如く侮辱されたものと感じる、貴女はさん〲に僕等の兄弟を罵倒された、イヤ全くで御座る、僕は怒らない、實に御言葉通り、何とも面目は御座らぬ、就中節操の掏兒と仰言つた、痛絕快絕、冷汗背に洽ねしと申さうか、熱血面に上ると申さうか、何とも申譯は御座らぬ、平安朝時代の都男だといはれた、よい御見立、其通りで御座る、今の男子といふものは先づ槪して口で强らさうに申すほど、それ程腹が確かでない、膽が坐つて居ない、やつと日露戰爭といふ大試驗が有つたので、名將勇士といふ僅々の及第者が男子の面目といふものを保つてくれた丈である、ところがそれもあまり自慢は出來ない、大きに氣張らねばならぬ、大事な相撲の腰を碎かしてヨロ〱と寄切られたブザマつたら無い、これも貴方方から笑はれる種になつて居る事と信ずる、この間或御婦人の所へ伺つたら斯う云はれた、『ホント

に男子方つたら何故アンナに外面と內心と違ふものでせう、外面如菩薩、內心如夜叉とは男子方から女を見た目だが、何料男子方は外面如夜叉、內心如菩薩なら佳うございますが、外面如脫兎、內心如處女で居らッしやる、戰爭か開始つてからシキリに御自慢話、兎に角今度の一大事は男子の手でやりましたとそれは〳〵恐ろしい御權式、大に然うで御座います、實に男子方の御蔭で、國威は益々揚りまするとやら、このやうな嬉しいことは御座いません、と御禮を申して男樣々々と難有がつて拜んで居ると、結局があの始末ぢやア御座いませんか……」と、僕はこの位恐縮した事は無い實のところ貴女が千言萬語、雄辯滔々と御喋舌になつた男子退治の御演說よりは、この方が痛かつた、ところで社會はこんな風でせう、それを充分御承知で有つて、貴女が今日の男子へ對つての御註文は無理だ、則ち男子は須らく男子らしく成れといふ御註文、あれは無理だ、上は二頭立の雲の上人より、下はテク〳〵通の腰辨當に至るまで、下手に張臂をしたら最期飯の食上げを仕なければならぬ今日、滅多に男らしく成れますか、滅多に意地などが張れますか、それを搆はずに行つたものは見る〳〵社會から迫害され、地位は失なひ、飯は食へなくなるといふ始末、そこで胸の中ではこゝが男の意地の張りどころと思つても、まア〳〵溫柔しくして居た方か當世だといふ調子で泣寐入にして仕舞ふ、或は世間から騷がれたので已むを得ずイヤイヤながら威張つて居ても、腹の中はビク〳〵もの、若しも戲談から駒が出て取り返しのつかぬやうなことになりはしまいか、どうか男の顏もアマリ廢らす、飯も食ひ上げにならぬといふ位の處で、局を結ぶことは出來まいかと神へ掛け佛へ掛けての心願、祈つた甲斐は、、、、あらたかにて、忽ち耳よりの聲がゝりがあると、待兼山の杜鵑、諾應來で出してある辭表も取下げるといふ意氣地無し、耻とも何とも思はない、さうなるとまた世間も粹なもので、グッと通を利かして、多分さうだらうと鼻の先で笑つて、ムキになつて攻擊もしない、冷かす位で冤して置く、先づザッと世の中が斯うで御

座る、これで男子は須らく男子らしくなど〻云ふ御註文に應ずることが出來やうか、男子らしい男子でなければ惚れてやらぬと仰言れば是非が御座らん、貴女方に惚て戴かないのは身を切るよりも辛いが、何と致さう、また脇方のグッと捌けた御婦人の方を聞いて見るさと、まア彼等に云はせたら申すで御座らう、

▲女學者の崇拜者

男子の男子らしくなれない理由は上述の如し、として、飜つて貴女方の方は如何です、果して我々男子に向つてアレ丈の立派な口が利ける丈それ丈、御立派で居させらる〻か、無論今日の時代は、自分の頭に虻の居るのは棄て〻置



いて、他人の頭の蠅を追ふといふ至極虫の好い時代だから、男子の男子らしくないのを攻撃なさる貴女方が、女子の女子らしくないことを平氣で行つて居られるのを怪しまない、がさりとて少しく自ら反省なさつたらいくらか女子らしく恥かしい次第だとは御思びなされぬか、僕は前に申した通り、貴女方のえらいのを信ずる、海老茶にあらざれば人にあらずと云ひたい程御盛んなのを賀する、が是と同時に貴女方が少しく遣り過ぎては居ないかと云ふことを貴女方に忠告するの義務があると思ふ、だからと云つて元々貴女方をえらいと稱へ、貴女方を羨山しく思ひ、女子と男子との體を取替へたいと思ふ程

の僕であるから、決して世間一般の女學生非難者、海老茶攻撃者と同樣に、石も瓦も玉も金も無い、ごつちやませに女學生といへば御轉婆、海老茶と云へば不品行と斷定するやうな近眼者では御座らぬ、またこれに就いては隨分新聞でも雜誌でも、言はねばならぬことと思はれることは勿論、言はなくてもよからうと思はるゝことまでも言ひ盡してあるから、繰返し蒸し返し、僕等半文書生の口から申上げるでもないが、書生はまた書生だけの考が有つて、今日何人も未だ言ひ到らない或物を發見した事がある、貴女方が今日斯う云ふ風になつた一原因に就て動かぬ鑑定ちやと我ながら腮を撫でるに足る事がある、などと頻りに勿體を附ける、それは何であらう、泰山鳴動鼠の子一匹、曰く今日の女學生には崇拜者がある、是である、否と仰言るか、御隱しあるな、貴女方の崇拜者を當てゝ見ようか、女か男か、今の人か昔の人か、申すまでもない女で、去かも今の人である、ナインチンゲールや、四十七士の母などを崇拜するは極の野暮だと云ふので、貴女方の崇拜者はなか〳〵意氣に出來て居る、名を早く云へと御騷ぎあるな、申します、下田歌子先生に奥村五百子女史、どうで御座る、違いないの眞ん中、地を打つ槌は外づるゝとも、僕の目星は外れまい、……ナニ覺えがないと、まるで違がつて居ると、御惚ぼけなさるな、御逃げなさるな、且つ此二女史を崇拜なさるからと云つて、決して貴女方の耻になりはせぬ、去かも一人を一筋に御崇拜なされるのではなくて、兩女史を折衷して二タ筋かけての崇拜は、甚だ當を得たもの、御利巧な崇拜方法だと感服致すより外は御座らぬ、二女史の事に就てはこゝに僕等が局外者として說明致すまでも無く、大蛇の道は小蛇、貴女方が萬事先刻御承知の筈である、且つ其人物を批評するといふやうな不心得を致したら最期、褒めれば諛に聞こえ、罵れば祟が恐ろしい、先づ言はぬこと〳〵、

▲下田と奥村

下田さんは明治の淸少納言、それに一種の政治的手

腕も有つて、婦人界には偉大な勢力を占めて居る方、宮中に奉仕して夙に才媛の名が有り、宮を出でゝ半朝半野の人と爲るや、一代の英雄を掌上に弄し、門前公侯の車轍を絶たず、其應接所に入れば紅火燃ゆるが如き四邊の光景、知らず覺えず丈夫の心膓を萬斷せしむると云ふ、しかも其容貌は美しき眉、美しき目加之て一種の表情術は如何に女史に敵意を挾んで向ふ人も忽ちタヂ〳〵〳〵と腰を拔かさすると實際當つて來た人の話、それで學問も有り、才幹も有り、どこに一つ點の打處も無い古今の才女、貴女方が崇拜なされるは無理で無い、一顰一笑までも之に倣はんとせられるも無理で無い、奥村さんは女中の豪傑、若い時は姫御前のあられも無い男姿に身を扮して、兵馬の巷を往來したと云ふ大膽不敵、年を經るに隨つて益々づう〳〵しく、終に男もすなる遊説てふものを試み、立派な後楯があるを恃み、到る處男も女も煙に卷いて終に組織した愛國婦人會、何と云つてもえらいもの、また美擧たるに相違は無い天晴れ男優りの女丈夫、何とかいふ刷物に日本開闢以來第一等のえらい婦人だと書いて人に笑はれたものも居た位、男でさへこれだもの、貴女方が崇拜なされるも無理で無い、一擧一動恐くこれに倣はんとなされるも亦た無理で無い、決して惡いとは申さぬ、藝妓や女郎の眞似をするとは違ふ、跳ねつ返りのお俠の眞似をするとは違ふ、



立派な事、結構な事、殊に其兩方の長所を取つて折衷して居らつしやるは立派の上の立派、結構の上の結構だが、其處が拍子物で、過たるは及ばざるが如し、此二女史の成功には自づから二女史以外人の學び得られない特色が存し、なほ時と場合、運命といふ測り知られぬ或物まで加勢をして居る、それをも知らず只だ女史の外形だけを學んで、未來の下田奥村たらんことを期するは間違で御座るまいか、二女史と云つても神樣では無い、長所もあらうが短所もある、今日の女學生即ち貴女方は此二女史の長所だけを取つて折衷なさつたのでは無くて、二女史の短所だけを取つて折衷なるつたのではあるまいか、それでは二女史も泣かれるであらう、そんなことは無いと仰言るか、それならば結構、どうか然う無くして戴きたい。

▲水彩畫手引　（三宅克己氏）

三宅氏は水彩畫家中擅場の技家なり、風景花卉、意の趨く處ろ、手に隨つて成る、色彩の美、意匠の巧、いよ〳〵出でゝいよ〳〵新たなり、加ふるに其筆に一種の妙所ありて邦人眼にもよろしく、又白人眼にも喜ばる、爰に於てか、三宅氏一派の水彩畫大に世に行はれ、殊に學生社會に流行して寄宿舍の樓上、四疊半の小天地に自然界の美を擅まゝにせんとするの風益々大きを加へたり。此際に當りて氏の水彩畫手引（日本繪葉書會出版）の出づる眞に是れ烟に鍬といふべし。其の内容は一つ一つ一ついふまでもなく、一意專心水彩畫家を以て立てる三宅氏が多年の苦心と經驗によつて發明自得せる所を順序正しく說明したるものにて、繪の具、用紙、筆、の器物より、說き始めて、寫生の描法、順序、光線、位置、圖題の選擇、其他苟くも水彩畫を學ばんとするに必要なる、あらゆる方法、智識はすべて之を網羅し、實地の應用に遺憾なき樣說述したるものなり（定價上製九十錢並製七十五錢、博文館發賣）

▲人生の行路　（吉川潤次郎氏）

第一第二は既に紹介を終りたれば今回第三篇を紹介せん、此の篇は「生活の趣味」といふ題を以て專ら婦人の趣味を涵養すべく說かれたり、交際上の事、禮儀の事、實務の事、會話の事、家庭園藝の事、讀書の事、粧飾の事其外種々なる婦人日常の嗜みに向つて新らしき精神上の糧を與へられたるは吾人の尤も滿足する所なり、抑も人間の運命は貧富貴賤、種々にして外部より見る時は幸、不幸の懸隔甚だしきが如きも、人間の生活は必らずしも物質的一偏のものにあらずして要は其心の持ち樣一つにあり、生活上の快樂、慰安、福祉、滿足皆悉く其中心の如何によつて定まるものなれば、苟くも其の中心を定めて、信ずる所に居らんか、外界の勢力少しも恐るゝに足らず、諺に曰く「道を行くものは心安し」と本篇の如きは眞に道を行くものに向つて日常の糧を給するものなり吾人は著者吉川氏が這般の着眼を多しとす、讀者乞ふ一小册子といふを以て侮る勿れ、一讀三思して得る所大なるべし。（内外出版協會發行定價三十錢）



西洋花言葉

葉末露子

「心なき身にも」と嘆じた、あの西行法師をして

　願はくば花のもとにて我死なむ
　　そのきさらぎの望月のころ

と歌はしめた花！　また或る西歐詩人をして

我最愛しき可憐なる薔薇よ、我はたゞ御身が胸に置く露の滴りたらば、いかに幸福多きことなるよ、あゝされどそは過ぎたる高き望みなるべし、我はまたさまで美くしき死を願はじ、せめて御身が足許の塵たるを得ば足れり。

と詠せしめた花！　そも花は詩人に向つて何を私語き、何を默示すのでせうか？

　されど今述べやうとする花言葉は、詩人にのみ解せらるゝ意味、言葉にあらずして、西歐にあつては何處の家庭通信にも使用ひらるゝ趣味ある言葉です。この花言葉は、いまだ通信法の發達せざりし以前、既に土耳古に於て解釋され、十九世紀に佛國の秘密通信に用ひられ、終に今日に到つたものです。

　今こゝに水仙ありとすれば、水仙の葉はそれ自身「予は戀の爲めに瘠たり」といふ意味を顯はすのです。

　この水仙に就ては面白き神話があります。嘗て譯し置たるものを引用してみせう。

河の神が美くしい牧場の女神を娶つて、その間に生れた男兒を水仙と命名けて寵愛むだ。

男兒は容貌母に似て、その美くしさは年齢と共に増すばかり、森の女神や、牧場の女神達で袖裾引いて云ひ寄るものも多かつたが、水仙は少しも耳を傾むけなかつた。

戀してゐた女神達の中の、反響といふ一人は、戀の成就ないのを嘆き悲しむで、聲ばかりを殘して悶へ死んだ、だから今でも森中を逍遙くと、笑ふ聲にも歌ふ聲にも、反す悲しい反響をきくことが出來る。

終に戀を成就なかつた女神達の煩悶は嫉妬と變更り若者の無情に對して、神の刑罰の下らんことを祈るにいたつた。

一日、若者が野邊を逍遙いてるとき、女神達はかれに勸めていはく、

「あの若者さん、この先きの美しい泉で、貴下の未來の影を寫して御覽なさい！」

勸めらるゝまゝに、若者は泉に行つて、澄むでゐる水底を見ると、美くしい女が立つてゐる。

「あれ！」

と叫むで、若者は此時瞬戀に陷ちて了つた。……水底に寫ッてる影を我姿とは露知らないで、

けれど寫つてる女神は、たゞ若者の擧動を眞似るだけで少しもこまやかな愛情を含だ挨拶をしなかつた。

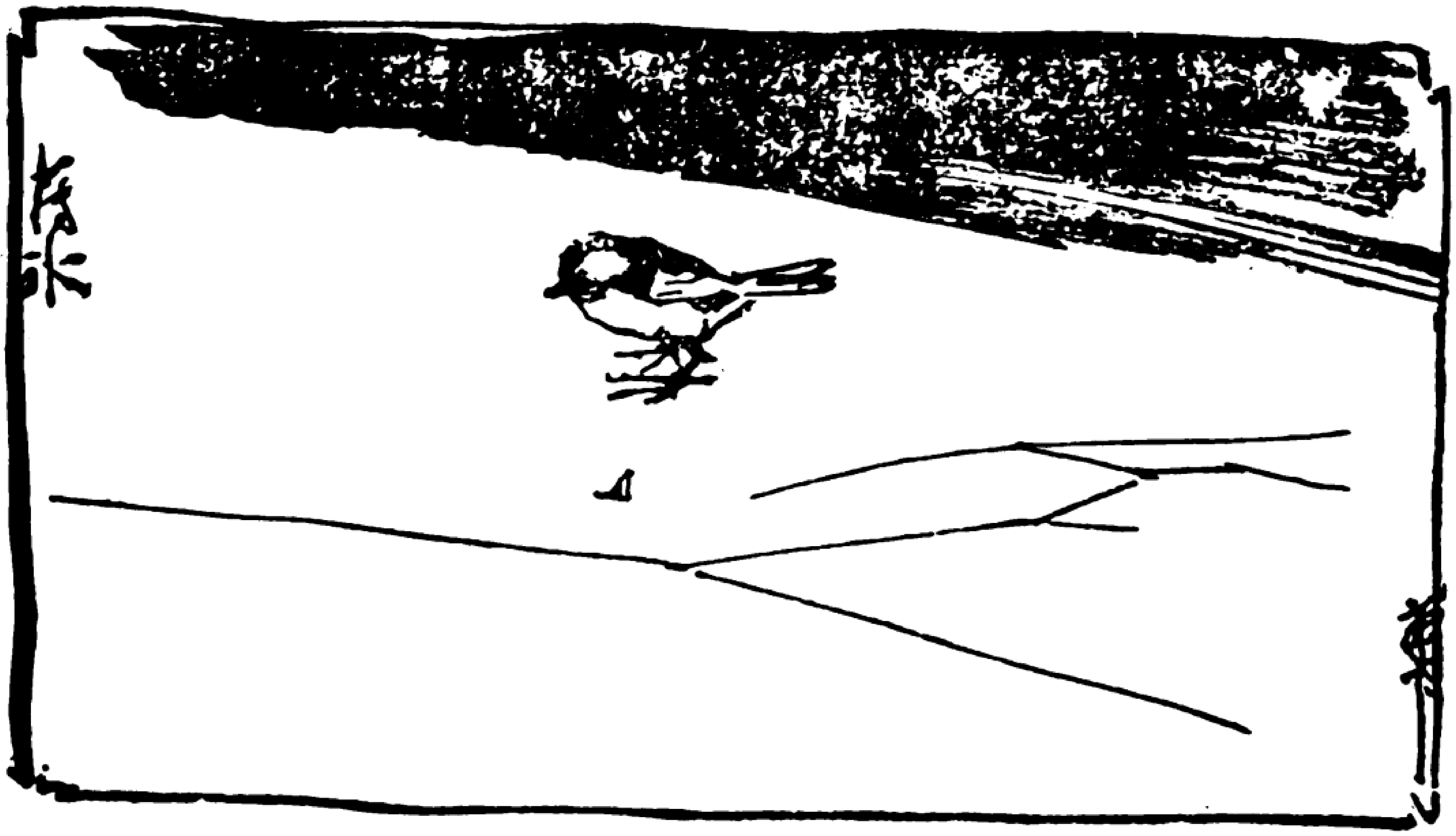
若者は數日間、岸邊に泣きあかした、容貌は漸次に蒼ざめて來た、身體は漸次瘦せ衰ろへて來た、そして終に死で了つた。

其後、其處に美しい黃金色の花が咲き始めた。人はそれを水仙花と呼ぶが、これは恐らく若者のこの世に殘した紀念であらう。

これより花言葉を錄てみませう。

茴蔯香……戀のなやみ
黃芳花……美術崇拜
十字科植物……安心
鬼臼草……戀の使
茅草……熱中

荊毬花……純潔なる愛情
鷄冠花……忠實
螢草……疑懼
莖菜科植物……嫉妬
椿……永續
黃楊樹……堅忍
桔梗……阿諛
玉蜀黍……豐富
水仙花……予は幸福なり
寄生植物……連絡
接骨木……謙遜
金蓮花……戀の災
小麥……富裕
矢車菊……燦爛
蓀……冷淡
白頭翁……背信の戀
野菊……障碍
萱草(赤色)……蘇生したる如き



喜悅
薔薇(日本種)……疎遠
風信子……優雅なる禮儀に反する諛言
水仙の葉……予は戀の爲めに痩せたり
菫……貞廉
虎耳草……友情
向日葵……卑陋
薔薇……美人
黃色薔薇……夫婦の愛情
白屈菜……苦慮
桃樹……愛の幸福
景天……小心翼々
百合(白色)……尊嚴
鬱金香……雄大
黃菫……予は舊友を忘れたり
遊蜂花……戀人の回想

ペロンク……予の心を汝に捧ぐ
葡萄……酩酊
白色薔薇……清淨
罌粟……睡眠
芍藥……汚辱
蛇苺……母の愛
橄欖……仲裁
烟草……戀の奴隷
蘆……輕忽
梧桐……兄弟の愛情
薄荷……高德
蒲公英……輕薄
蓮華花……變り易き戀愛
棕櫚……勝利
石竹……無慾淡泊
有刺石竹……英才
黄色石竹……傲慢
荊棘……不正



蕨……予は汝を信ず
覆盆子……二枚の舌
紫黄……憂愁
黄色百合……虚誇
野生地衣……同感に堪へず
柘榴……想思
金雀花……娯樂
黄色野薔薇……汝は善く語る
施花……纎弱
苜蓿……頌德
雛菊……無邪氣
錦葵……母の慈愛
薔薇科……廉直
翠菊……流暢なる辯説
牛蒡……懇願
野薔薇……希望
鳳仙花……およしなさい
紫蘇……貧窮

鳥頭……痛恨
泊夫藍……天然の害惡
狗骨木……幸福の家庭
忍冬……戀の羈絆
毛莨……愚弄
鼠尾草……驚愕
樓斗菜……精神錯亂
水松……落膽
虎尾草……善良なる性格
神仙掌……奇怪
棗樹……緩痛

等です、これらの花言葉にして、樂しき家庭通信に使用られなば如何に趣味あることとならんと思ひます。

贅澤なる玩具と小供

一記者

今日最も歡迎されつゝある教育的玩具といふを聞く



に魔術箱は磁石仕掛にて人形が自働する珍奇の物にて其價一圓五拾錢より五圓まで、▲自働反射花車は中央の花が車の全體に映り其美しさ得も云はれざるもの其價並製六圓特製拾圓なり又▲模型軍艦は切斷模型にして實物と異らず其價七圓より十二圓まで、水雷艇商船、帆前船等いろ〳〵あり、又▲汽船の酒精を燒いて池などを自由自在に運轉せしめ得るものにて大形のは五圓五十錢小形一圓五拾錢なり、▲汽車の同じく酒精を燃料としてレールを進行するものレール附にて十二圓五十錢より二十圓まで、レール無しにて一圓乃至五圓、ゼンマイ仕掛けの分はレール附にて六圓乃至十二圓レール無しにて一圓三十錢より二圓五十錢までなり、▲輕便玉突臺は並製五圓

特製トンチル附にて十圓、▲新式空氣銃二圓より二圓五十錢まで、▲幼稚風琴は五圓五十錢より七圓五十錢まで、▲鐵心琴は譜本附にて十音が三十五錢乃至五十錢、十三音七十錢、二十三音二圓と云ふ相場なり、

此等が先づ流行の重なる翫具なるが、その代價の不廉なる爲に中等以下の家庭には容易に需めらるべき品にあらず、然るに子煩惱の親達は往々にして此等精巧なる玩具を買ひ與へて嬉しがるものなり、さてこの事に就て某教育家の語る所によれば身分不相應なる高價の翫具を與ふるはよし惡しにて能く〳〵考へものなりと思ふなり如何となれば一たび容るさば一個の魔術箱、或は一隻の軍艦のみにては中々濟さるべきものにあらず、子供は何事によらず實に慣れ易きものにて、一たび親達の甘き顔を觀て取らばねだりさへすれば何物をも得らるべく思ひてせがみ、又最初に魔術箱を購ひ與へたる程の親達は常々から頑是なき子供心に卑劣根性を起させては可憐想なりとの懸念あるゆゑ、その第二、第三、と進次〳〵の要請に對しても無下に斥け兼ねて、ツイ小言言ひ〳〵子供の希望を叶へさすが常なり、されば子供は段々増長して他の持てる程のものを見て欲しがり果ては其子供をして珍奇なる玩具は他より先きに求めざれば承知の出來ぬ我儘ものに育て上ぐるに至るものなり、彼の身分不相應なる服裝をなし、柄になき贅澤なる眞似をなしたがりて、自らも苦み、他よりは指彈せられ、遂に不撿見を出して社會に貌出しも出來なくなる若者は、往々斯る慣習より養ひ來る事多きものなれば人々幼少の時より、不自由に堪へ艱難に堪へしめ翫具の如きは、賣物を買ふて與ふるよりも成可く自分に製作せしめて、工風と發明と意匠との心を養はしむるは小供の將來に就て大に益する處あるべし、細工の巧妙なる、且つ贅澤なる翫具を與ふれば、智識の發達は却つて阻害せらるゝの氣味多きものなり抑も人はその想像を逞ふするが一の快樂なり、子供の翫具に於けるも美麗に装飾したる刀劔、緻密に組立てたる軍艦なども、最初こそ大切にも爲し嬉しがりもすれ間もなく厭きはてゝ長くは同一の翫具に慰めら

る丶ものにあらず、然るに今一本の棒を得たらんには、棒は杖にもなり、刀にもなり、槍にもなり、鐵砲にもなり、天秤棒にもなり、蕎麥屋を眞似て泥を打伸べるとも出來くべし、又女子ならば一個の紅口猪が皿になり、椀になり、盃にもなり、茶碗にもなり、土饅頭を拵へる型にも代用せらるるなり、斯の如く種々様々勝手に想像上の形態を附加して其用途を變化せしむる餘地饒かなるを以て、子供は比較的複雜精巧なる翫具に厭き易くして、一條の竹片木枝の如き、一個の球や小箱の如き單純なるものを常に離さゞるも此の理あればなるべし。



さるを高價なるものであらば上戸の酒瓢を得て愛翫措かざるが如く、何時までも喜ぶもの丶如くに思ひて、倘さら壞してはいけないとか、打放つてはならぬとか翫具の保管に關渉する親達少なからず、此等は子供心を親知らざるの罪なり、要するに子供の翫具は穴勝ち精巧なるものを撰ぶにも及ばじ、又欲しからん持たせて遣りたしなど丶親達の羨むほどに、子供は翫具に憧る丶ものにあらざるを知るべし。翫具に限らず何物にても子供には贅澤なる物をば與へざるこそよけれ。

明治女學校のくりすます

野の花

東京の市街盡頭、巣鴨村の森の中に一棟の洋館あり、世の塵を避けた僧庵のやう、染井の墓地を前に控へ、飛鳥山を斜に眺めて横と後は王子、大塚の田圃、こゝ許は電車の響もきこえず人駈ける巷も見えず、朝の光が森を洩るれば、鴉が窓の外に啼きさわぎ、夕月が淡く庭をてらせば、野良歸りの百姓の鼻唄がかすかにきこえるのみ。と云ふ静かな境を占めた建物は、是なん明治女學校である。

此學校のクリスマス祝會と云ふのは昔から有名なもので、どこまでもホーム的。島崎藤村や北村透谷が此學校に教鞭を取つてゐられた頃から、明治女學校のクリスマス祝會と云へば、文學的に知られてゐたのです。

去年は丁度二十四日、クリスマス、イヴに催されました。先づ朝に祈りがあつて、午前が第一部、午後が第二部、私の見たのは午後の分だけです。

第一番に讃美歌(大和田建樹氏作歌、納所辨二郎氏作曲)があつて司會が聖書を捧讀します、それから祈禱、挨拶など順々に進みましてさて日曜學校の可愛い子供が手を引きつれて小さい口をあき乍ら「みなさんよーこそ、おさむいところを……」と、歡迎の歌をおぼつかなく歌はれたのは嬉しかつた、生徒職員、來賓みんな火鉢を圍んできいて居る人がにこ〳〵してゐましたつけ。

それからオルガン、ソロ－や、詩篇暗誦(日曜學校生徒)あつて、箏曲「かざしの雪」と云ふのをきゝました、(名手松川氏の三味線に小林孃の琴渡邊孃の琴)、さて又オルガンソロー、獨唱、英詩暗誦ピアノ聯彈などあつて、餘興の學校劇に移りました。

▲學校劇『女學生のたくらみ』 三場

八重子翻案

幕が開くと先づ女教師マリアの部屋、尼の様な扮裝で助手の女教師と對話の場、此頃生徒が怠けて困るが、あの菅野と云ふ女生徒だけはよく出來るなど云つてゐると、此時バーデン唱歌のこゑ。第二齣は女生徒菅野孃の部屋、此處に大勢の友達がどや〳〵入つて來る、「菅野さん私に作文を作つて頂戴」と皆なで頼む、そして菅野の作つたのを皆んなが寫す。第三齣、學校の教室、マリア教師が皆ンなに宿題の作文をよませる、と甲のも乙のも丙のも、丁のも皆ツな同一文である、そこで皆…たくらみが露はれて、女教師マリアは自分の生徒の怠惰を悲みて神に謝する様をかくしてこれにて終。仲々よく出來ました。

次に箏曲「嵐くらべ」、(松川、小林、小手川、板倉)、合の手もまことに巧くきかれました。次に、

▲學校劇「百姓問答」 三場

游子改作

是は實つて「中學世界」に出たものの由、それを改作して普通科二年生が演つたのです、カンボチャ國王が胡瓜大僧正に難問三題を課すると、百姓の爺か大僧正に代つて之に答へたといふ滑稽なのです。

それから休憩で、此間に茶菓の饗を享けました。

又日曜學校の可愛いのが「うれしきプレゼント」といふ唱歌を唄つて、次が活人畫「信愛望」、之はベルナード、プロックホルストの畫に基いて演つたので、中央に愛の女神、左に信の女神、右に望の女神、白衣、淡紅衣、黑衣、うす紫の雲に乘つて、まぼろしに見る心地が致しました。それからサンタクロースといふ歌曲や、「月出山」「天國」のつどひ」などの唱歌があつて、筝曲「吾妻獅子」(松川、小林、原田)。それから又、活人畫「馬槽のキリスト」、是は耶蘇が誕生の有樣です一年生と豫科生とが扮しました。次に

▲悲劇「ピグマーリオン」　二場

野の花翻案

是は次の史劇政宗と共に此日の餘興の白眉で、誠によく出來ました、希臘の彫刻家ピグマーリオンが自分の彫刻したるガラテーア女神の像に戀したといふ神話を基にしたもので、ギルバートの脚本から換骨脱胎したのらしい、第一幕はピグマーリオンの住宅、妻のシニスカといふ美人と卓を相對しての物語、當時アテンではピグマリオンの評判高く天晴稀世の天才とまで稱へらるゝが、惜しい哉その彫刻はどれも此れも顔が皆同一、それも道理、モデルはすべて妻のシニスカだといふ噂を耳にしての話である、此處に妻の實家より使者來り、父病氣との報らせ來る、そこでシニスカは見舞に行く、後でピグマーリオンは近頃出來上つたガラテーヤ女神の清く美しき姿に恍惚として、何故藝術家の刀には靈が宿らぬと思入のさまよろしく、此時大理石の女神は魂を得て者を云ひピグマリオンを呼ぶ、さてはとピグマリオン驚いて手をとり夢心地でガラテーヤと歌ひにかゝりて踊る、と此時妻シニスカ歸り來り驚いて夫にすがる、ガラテーヤはする〳〵と退りて又もとの石像となる。第二場はアクーア殿堂のほとり、ピグマリオン此頃は狂の如き狀態になつてガラテーヤの像の下に跪いては今一度魂やどれと祈る、露おける夏草の茂みに埋もれて今しも又泣いてると、妻のシニスカが尋ね來てとりすがる、御身は？　ガラテーヤか？　と聞く、シニスカは涙のうちに、はいガラテーヤで御座いますといふとピグマリオンは嬉しさの餘り天にも昇る心地して倒れる、之にて幕、二場の配合も書割も學校劇としては此上なき出來、高等科の餘興だそうですが驚くほどうまく出來ました。それから、ピアノ、ヴアイオリンの伴奏がありまして、活人畫「小楠公」、正行が父に別れて一室に入り自殺せんとする處に母刀自かけ來る處の光景、美しく出來ました。次に、

▲史劇「伊達政宗」　三場

渚子脚色

塚原澁柿園主人の作つた小說を脚色したのださうで、幕が開くと政宗の本城大廣間軍評定の場、正面に政宗を据ゑて、左右にズラリ裃の面々押し並んで、澁柿園一流の語で軍議をこらす所面白し。次は政宗の部屋、小十郞が毒を入れたる菓子をたべて死するあたりよし、第三齣、太閤秀吉の本陣、豪傑猿面郞殿下と剛毅俊秀の獨眼龍と相對せしめて、美姬淀君を點綴せしめ、おさやと云ふ女に「さんざ時雨」を歌はしめたる場面、大きく賑やかに出來ました。總じて之だけのものを教師の力を借らずしてやつてのけた生徒諸君の手腕驚くべし。昔から文學に名のある學校だけに、と感心して歸りました。

女學生の男子觀に就て

赤門の一生

僕はハイカラ式部とか仰せらるゝ御方が世界一の美人で學者でその上操行の正しい賢婦人であるかの如く、自惚れた方の夜迷言を眞に受けて、眞面になる程單純ではないが、前號の「女學生の男子觀」が果して正しいか、否かを考へて見ようと思ひます。

何んですて、「カラ無用な今日の男子の世話にならん」のですと。之だから女子の頭腦は粗雜で大事業をするに適せぬなどゝ云はれるのです、貴孃方のお父樣は男子ではないのですれ、恐れ多くも、貴孃方の生命財產を保護して下さる國家の元首樣は元より其補佐たる大臣大將、近い例が彼の野蠻な露西亞兵に日本を蹂躙させなかつた陸海軍の將校や士卒猶又衣食住の原料から、日用の器具、電信、電話、滊船、汽車に至るあらゆる文明の利器の製造者は皆男子ではないのでせうか、男子の惡口をいふことの出來る丈け學問をさせて下さつた學校の先生の中に男子でない方が幾人居られるでせうか。女子の專賣特許とも云ふべき割烹、裁縫まで男子に侵略されながら「男子の世話にならん」とは聞いて呆れます。

然し僕は男子が女子の世話にならぬとは云ひません、男子と云ひ女子と云ふも均しく人間ですから持つ持たれつは當然の事です、僕は男子が女子の世話になつて居るのを認むると等しく又女子が男子の世話になつて居ることをも認むるのです。

なに男子が蛇ですと、噓を云ひ給ふな。僕は男子はやはり男子、女子はやはり女子だと思ひます、蛇でもなければ蚯蚓でもない。そんなことを云ふよりは何故サタンがイーヴを先に誘惑してアダムを誘惑しなかつたかを考へて見給へ、女子は誘惑せられ易い故である。何故誘惑し易いのか、それは根本意志が弱いからである、智が足りないからである、男子の頭の蠅を敎へて下さつた御禮に貴孃方のおぐし(とやらの)上の蠅を敎へて差上げます。男子は蛇などゝ云ふて非常な警句でも吐いたやうな氣で得意がられるよりも御自分がイーヴの二代目にならぬ樣に

注意なさるがよろしい、序に申しますがサタンは人間ではない惡魔です、即ち人の邪念を惡魔に見立てたものでサタンがイーヴを誘惑したのは女子は邪道に陷り易いと云ふ事をほのかに諷したのです。又イーヴの爲めにアダム迄墮落するのは女子の惡くなつた爲に男子まで墮落するものだと云ふ事を暗示して居るのです、一知半解の失樂園などを振り廻はさずに御自身の品行を謹しむ方が善うございます。

「ナヘり何のかのと仰言つても妾共へはスグ御目が附くので御座いませう」と自惚も此位になると寧ろ可愛いです。ハイカラ式部孃は何んな御美人樣かは存じませぬが、此の模樣では定めし小野小町尻喰へ的の天女の樣な方でせうが、或は貴孃が餘りハイカラで雨が降つても傘不要的な廂髮に隣老大帝國の婦人の如き靴を御穿になつて香水の香を一町四方に溢らせながら堂々と街道を濶歩なさるので、衆人が呆れ返つて貴孃を見るのではありますまいか。

「昔の女は今の男」之は有難い、昔の女は今の女と違つて學校とか海老茶とか乃至は慈善事業とか演舌とかテニスとかいふものは夢にも見なかつたらう、靴を穿いて飛び廻はることも爲なかつた、因循と見ゆるまで柔順であつた、幸か不幸かハイカラ式部孃の樣な人も昔は無かつた。が然し因循と見ゆる中に凛として犯す可らざる威嚴と、牢として拔く可らざる意氣とがあつた、外征まで爲られた進取の氣に富んだ皇后も在した、夫の爲めに身を殺した貞婦もあつた巾幗の身を以て兵馬の間を往來した烈婦もあつた。

「節操の掏兒」成る程此樣な人間がないではない、然しハイカラ孃の尻を追ひ廻はす樣な奴が廣い社會に幾人ありますか。そんな奴は人間の屑です、僕は日比谷にも上野にも行くが幸にして未だこんな奴を見ない。

「體が取替たい」御親切は難有いが之ばかりは御免です。僕等は未だ重大な責任を持つて居ます、吾々は東洋の運命を左右する日東帝國の青年男子である、吾々青年は、愛だの戀だの頭髮がどうだのリボンが斯樣だのと騷いでチックや、香水鏡などをかつぎ出して邊幅を修るやうな腰拔ではありません。

▲昨今の結婚費用

結婚用の調度費用の大體を記さんに四ツ抽斗の簞笥が總桐で十圓より六十圓位三方桐七圓五十錢より十圓位前桐四圓五十錢より七圓五十錢。

◎用簞笥が四圓より十二圓位二番が二圓五十錢より三圓五十錢型違ひ八圓より二十圓位。

◎長持の一番は桐製大一番十二三圓位同並一番九圓五十錢より十一圓位樅製大一番七圓五十錢より九圓五十錢位同並一番五圓五十錢より六圓位。

◎鏡臺二番一圓十錢針函一番四圓三十錢鏡臺姿見附一圓二三十錢より五圓位金蒔繪の御定紋附二十五六圓を要すと。

◎其他枕が黑塗で夫婦前が一圓内外硯函は黑塗で七圓二三十錢。

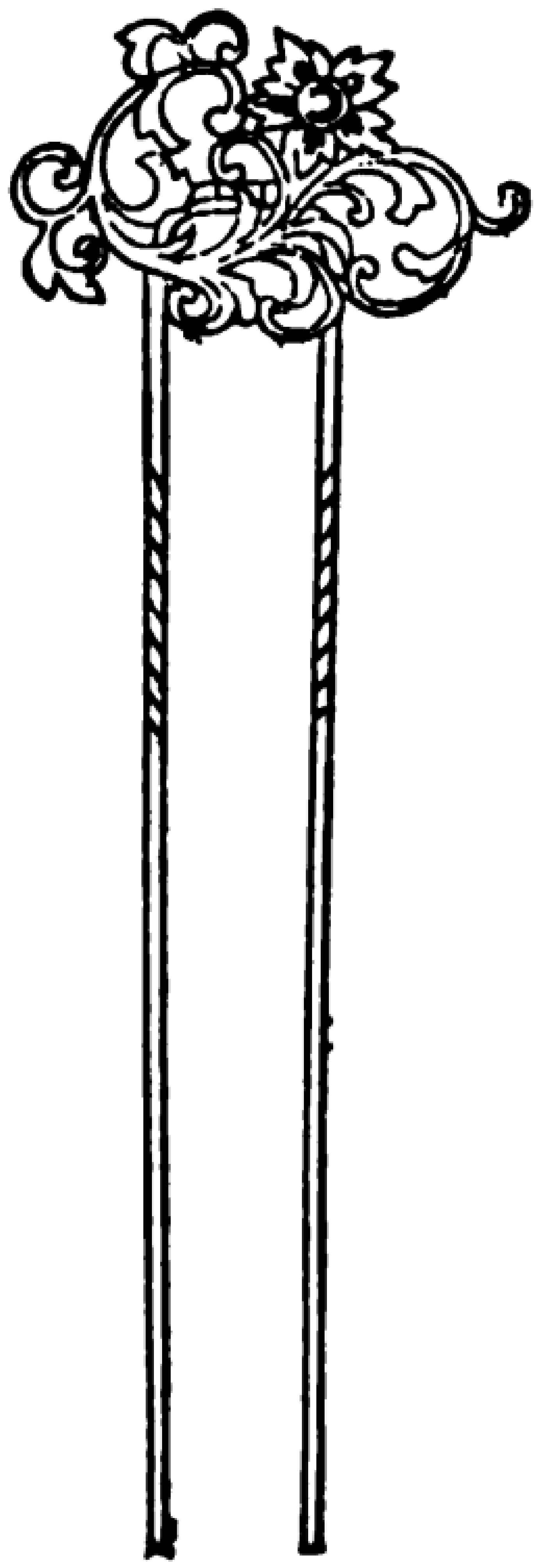
◎櫛等が百五十圓より百圓位挿込み十圓より二十圓位平打が六圓より十五圓位前挿五六圓位なり。

春の粧ひ

髪飾り（白牡丹）

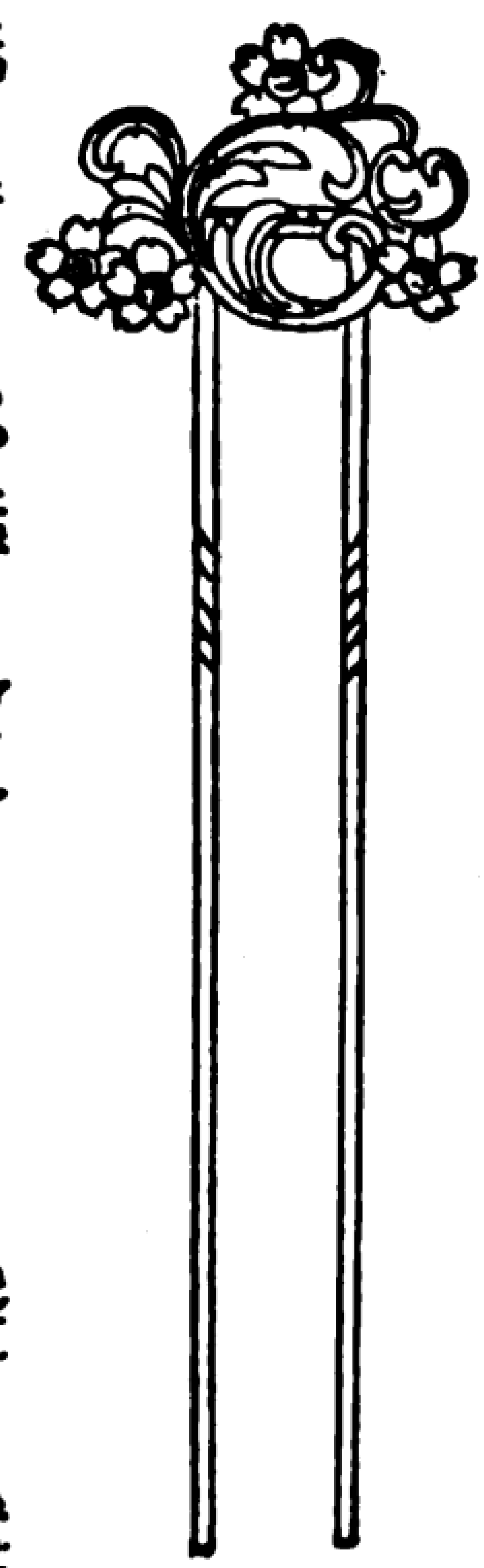
△櫛と中差●●●●　今年の春搾は例により勅題「新年の河」に因み、隅田川と玉川二種を調製しました、其の絵模様は櫛へ三圍の堤、中差へ待乳山の遠景、笄は玉川の晒布へ小松などをあしらひ、櫛と中差で全景を見せると云ふ趣向、櫛は黒鼈甲で高蒔絵と平蒔絵の研出しです、尤も年齢に由つてお好みが違ひ、若い方が高蒔絵…廿歳以上の方は、平蒔絵の研出しの方が高尚です、夫に櫛の格好も元禄形より棟の稍低い操形が流行です、価格は高蒔絵で二十圓＝平蒔絵で十五圓、

△釵と根掛●●●●　簪も勅題の一部分を取り、春の水で利かせるやうに致し、細工は金釵で水巴の透し彫、又お若い令嬢には金刻の銅で初日の出を見せ、赤銅で烏を二羽…裏は金切り彫で水の流れと云ふ、極く淡泊した意匠で孰れも平打釵、其の丸さは五分と云ふ所が流行で、



価格は十五圓乃至二十圓位、

根掛は古渡り珊瑚よりは金輪の方をお好み遊ばしますが、金輪は申上る迄もなく純金へ肉彫で春の草花、梅花や水仙花と云つたもので、

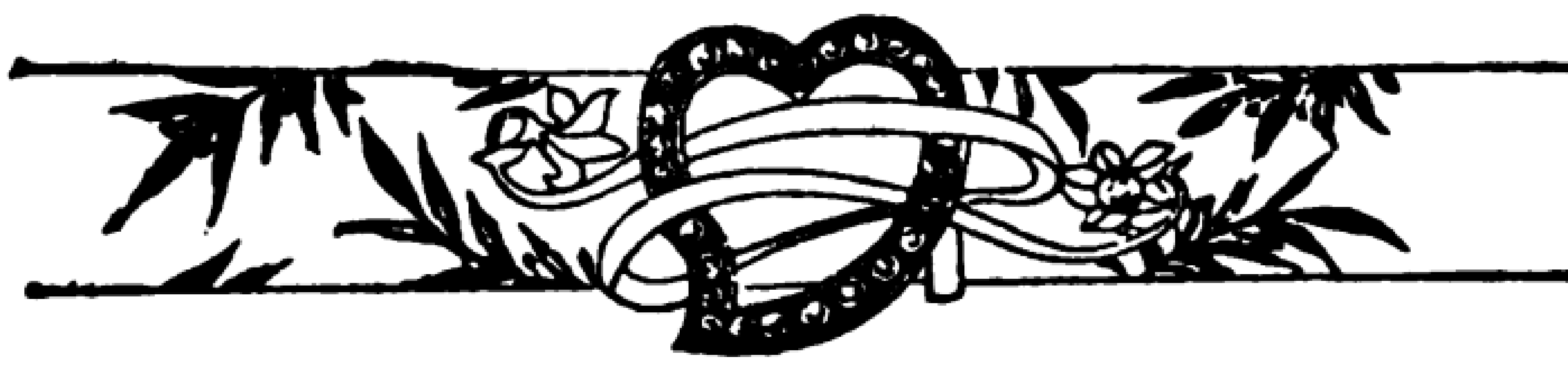


お好みに由つては梅の匂ひへ金剛石をあしらひます、価格は二十圓内外、

△帯留と貨幣入●●●●●　帯留は琥珀地へ紫の手綱染…金具の代用に角形の轡、銀貨入は絵馬形の袋へ友禅で三春駒を染め、裏は寂色へ轡を白で抜かせました、此帯留を「飛鳥はじめ」銀貨入を「春駒」と名付ます、価格は帯留が五十五銭＝銀貨入が五十銭、

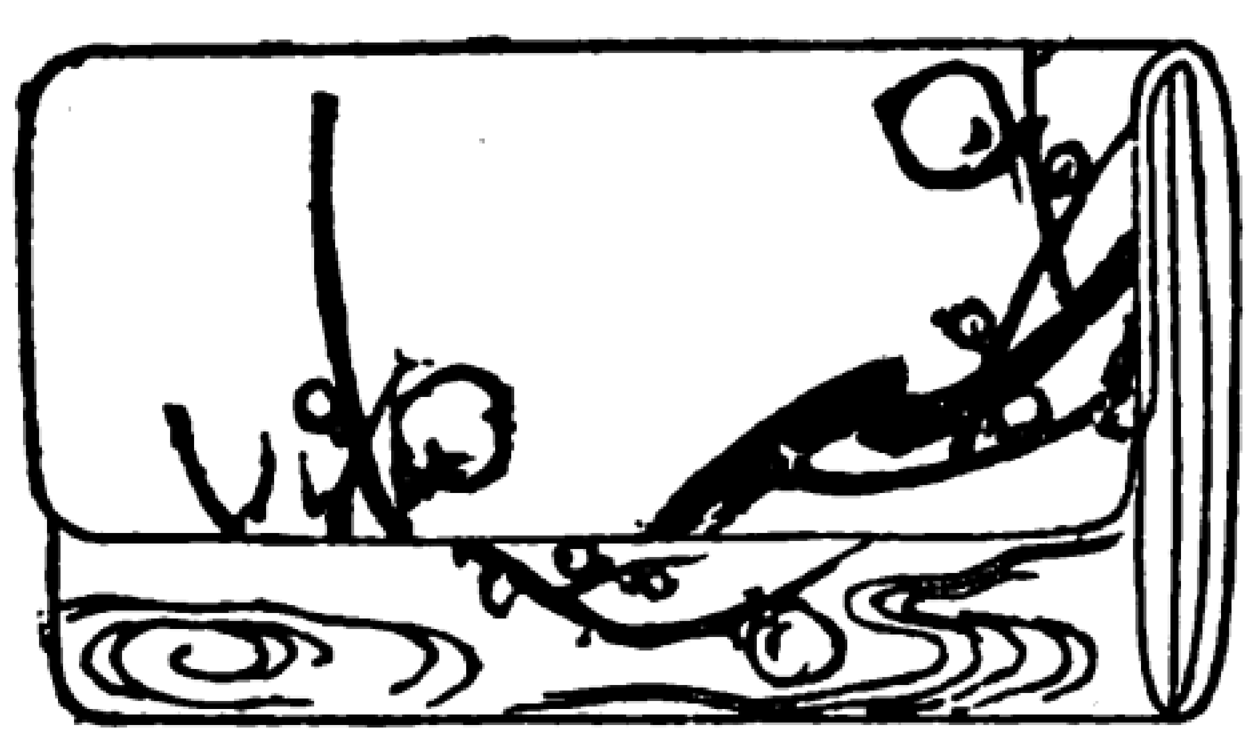
携帯品（玉寶堂）

△帯留と貨幣入●●●●●●　帯留は従前のやうに純金の金具は廃り、赤銅や四分一で目貫風の金象嵌が大流行です、貴婦人社会では金脚よりは細工物を御好み遊ばし、其の図柄はハイカラ向でハアト形、偖はリボン結びに菫をあしらひ、又は唐花の透し彫で孰れも金剛石とか真珠とかを嵌込であります、目貫模様は春駒＝水仙花＝小松引と云つた





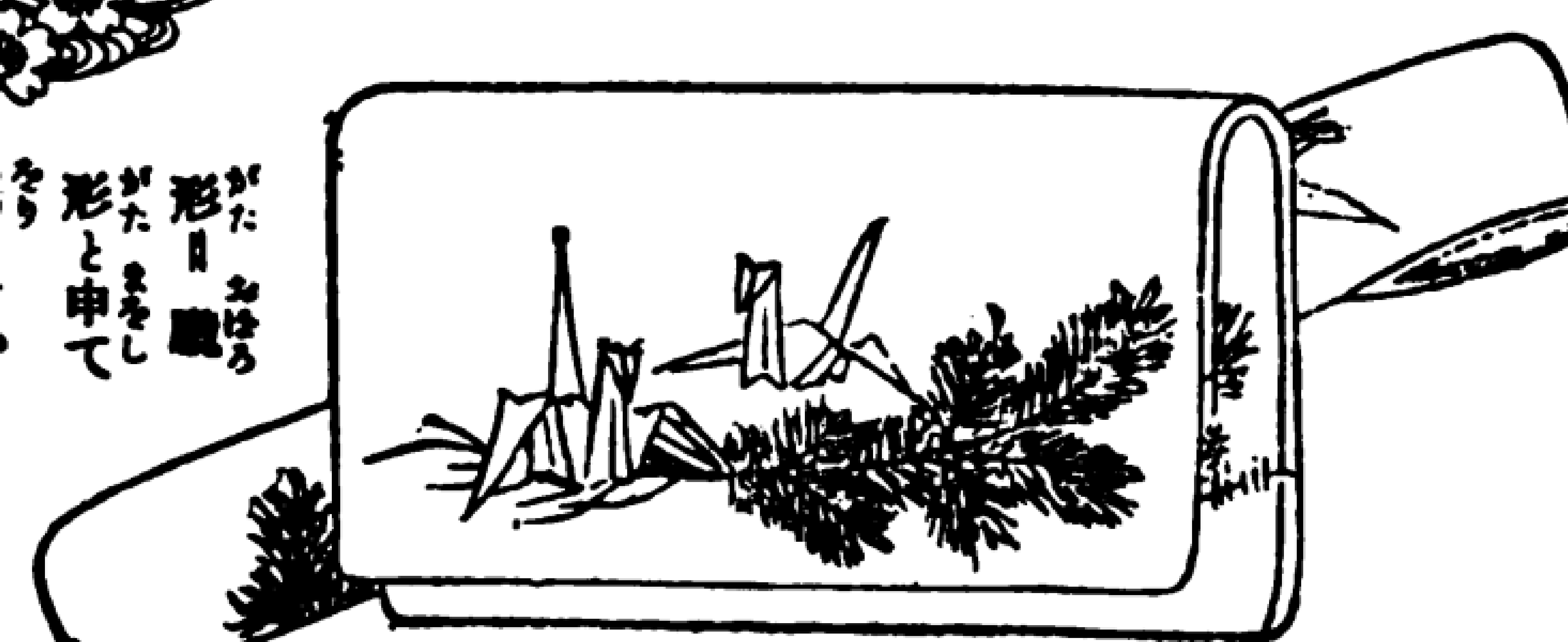
やうな彫刻、それから帯留の紐は繻珍はモウ廃れ氣味で、鹽瀬更紗の三分巾と云ふ所です、貨幣入は舶來の皮製もよいが、貴婦人方のお召になるには矢張り袋物の方が高尚です、紙入の形は三ツ折日の出形、二ツ折を三角形と申して、至つて上品です裂地は厚板織、敷島織、綴錦織、裏地は色無地鹽瀬などを用ひます、銀貨入は鹽瀬地で千鳥形と云つて、體裁が千鳥のやうになり口金も舊式の拳固は廢り、俗に蛤と云ふに一變しました、



△〇〇〇〇〇煙草入と煙管　煙草入は今日の貴婦人社會では、舊時のやうにお用ひになりませぬが、其でもまゝにはあります、其の煙草入の格好は叺か利久形で極く腰が低く、横長の方が御婦人持には流行で、地質は繡取=繡潰し其他は内紐緞と云ふ、羽織の紐などにある絹糸の編物です、煙管は姫如心=小宮=宮廷と云ふ種々な形で形切嵌金と云ふ極淺い彫刻で口金が流行、それに純金よりも白金の方が好かれます。

△〇〇〇〇〇指環と時計、鎖　指環も一時は井戸側式と云つて、歩の厚い量目の多いのを誇つたものですが、近來は極腕の細い一分五厘乃至二分止りで、草花の類を彫透しにしますから、指環臺の純金よりも工手間の方が高くかゝります、之を霞





形=朧形と申て居ます、

それにハイカラ向は夫婦形と云つて二線を捻ぢ合せ、白金の爪へ寶石を嵌め込だ物です、総て佛蘭西風の腕の細い艶消し物が大流行、

時計は總て彫出て金側白金に拘はらず、無地や梨子地と云ふ極淡泊した物…器械はメッケンで、兩蓋より片硝子＝文字板はウルミエトの數字、形は十三形…十四形と極つて居ります、時計の鎖は十八金と白金の打合せで、極々細く格好は抱き違州、注連繩、玉入長寢と云ふので、襟止は廢り一般に首掛鎖を用ひる樣になりました。

△○○○○○○部屋ピンと襟ピン　部屋ピンとは申す迄もなく束髮ピンで、細工は菫＝唐草＝リボン結びと云つた樣な、一定した形物ですが、之にはルビや眞珠、偖ては七寶と云ふ裝飾がしてあります、襟ピンの新形は松葉形…之も眞珠ルビを用ひ、梅花又は菫と云ふ、極く細い華奢な彫刻が流行で、それに目貫方と申しますのは昔し目貫風の彫刻を模寫て輪飾り、福壽草、讓葉など云ふ圖柄で、淡泊とした紫金＝燻銀へ金嵌金の細工物が流行です、

襟卷、肩掛、半襟　(三越吳服店調)

△○○○○○○○ボーアーとマップ　貴婦人の襟卷には一般にボーアーを御用ひですが、ボーアーは佛蘭西製で鳥の羽は駝鳥＝鷹＝鶴＝鴛鴦の類、無論年齡に由つて羽色が違つて來ます、價格も非常に懸隔があつて七八圓より三十圓位迄、それから毛皮マップ之も貴婦人の間に流行して居る品、價格は先づ二十圓內外、

△○○○○○○ショールの新形　一時流行した四角形は、既に廢れて中菱形＝水晶形＝短冊形と云ふ新形を好む樣になりました。中菱形とは長形の菱を半分にした三角形の物、水晶形とは中菱形に山を持つて、水晶の錠に似て居る所から付けた名前、短冊形は短冊の樣に細長い形です、

乃で色合は紅掛紫とかオリブ色とかで、地質はフラン天＝シール地が流行、柄行は元祿＝市松＝格子等で、價格は六圓內外、

△○○○○○半襟、肌着、手巾　半襟は最上等が縫模樣、跡は矢張り友禪染ですが、當年は繡の手入が流行です。地質は縮緬＝養老＝山繭格子入の類、染色は寂な鼠地か凱旋茶、模樣は元祿模樣、アルヌボー式、其他に種々あり、價格は一掛一圓より三圓位まで、

貴婦人方のお肌着は獨逸製のコンビチイシヨンが最も便利です、色は霜降か白で、股引き付て二圓內外ですから、下襦袢を召方が減りました、手巾は絹の小判で友縫が流行、一枚一圓六十錢、

△○○○○○舶來の化粧品　近頃は一般に和製より舶來品をお好き遊ばし白粉はロースと云ふ肉色粉白粉(一個三十錢)それから紙白粉(百枚十八錢)であります、それにハイカラ向きの紅はコスメチックの樣に押出すと、小口から紅が出るやうになつて居る佛蘭西製で、巴里ッ子の[illegible]中紅と云ふやうな物、黛は鉛筆やうに出來て居て至極便利です、價格は紅が(一個三十錢)眉墨が(一個二十五錢)です。

穿物類　(香取屋)

貴婦人召しの穿物は、元祿小町と云ふのが新形です、是は元祿形

へ剣を加えたもので、謂はゞ元祿形と小町形とを折衷した樣な物、其他は相變らず千代田草履です。

△柾よりも塗基　臺の高さは一寸八分…黒塗艶消し、又は黒の蠟塗と云ふ高尚向きで、糸柾は今年餘り流行致しません、鼻緒は緞通織＝厚板織＝繻珍、色合は鴨川染か。元祿茶などで、總て茶勝たものを好まるゝ傾向です、模様は相變らず元祿模様で、表は本南部表の價格七八圓位。

△中下駄と千代田草履　雨下駄は表附で塗つた中下駄、是は東下駄の臺を塗たと思召せばよい、價格は四五圓位から二三圓迄、鼻緒も駒下駄も變はありません、千代田草履は靴と同じやうに、何所へでも召れますから便利で、表は厚板＝繻珍等で唐花の模様が織出してあります、價格は二圓より三圓迄で頗ぶる體裁がよく、雪駄から見ると高尚で召てお輕いのが當店の特色です。

靴と流行

今日流行るのは、概して亞米利加風り、先きが廣くて圓い形の編上が一番である、皮はボックス、カーフ、ウ井スコンスキッドなど孰れも皆上等なものであるが、中にもキッド即ち山羊の皮のは光澤がよくつて、皮も柔かである、ボックスは八圓から六圓まで、キッドになると、十圓から七圓位ゐの所である。▲女學生の靴は、一つ釦は全く廢つて了つたと云ふのは、稍ともすると足の甲骨を傷けるとを免れぬからで、今では全く紐じめの淺編上や深編上げが流行る、中でも十二歳位ゐから十四五歳までは深編上げが流行るやうだ、男女學生とも代價は深編上なれば、大抵三圓五拾錢から五圓まで、半編上げだと三圓から四圓五十錢位ゐなものだ。▲赤皮も一時は行はれたが今は廢り氣味である、一體西洋では赤皮は散歩とか運動とか許りに穿く略式なものであるのに、日本ではフロックコートに赤皮を着けるなど一向平氣だから何時かの御巡幸の折には、赤皮を禁じた験もあつた、又た西洋では赤革を穿く時と黒革を穿く時はズボンから、靴下からして皆な別になつて居るが、日本では全くそんな區別がなく、黒革を穿いたズボンで以てドシ〳〵赤革を穿くのだからズボンに付いては黒皮の墨で直ぐ擦れて黒くなつて了う恐がある。▲護謨靴の方は編上げよりも多少持ちもよい、又日本のやうな、一々靴を脱がなければならん樣な家の建て方では、一々紐を解く時間の經濟でも非常な損であらうと思ふ。長靴は十二三圓から大抵十九圓までである。▲ズック靴は旅行用と云ふべきで、汗が蒸發して了ふので夏向きに宜しい。



處女文壇

美文

(天) 琴のね

名古屋市和泉町貳丁目　大野房子

かれて今宵こそはと契りおきしものから、まだ如月の風いたう寒けれど、月のあかきをたよりにて、綾子の君がり訪ひぬ。

「綾子は離亭に」と母なる君の曰ふに、案内知りたる家なれば、裏木戸押し開きて庭に出でつ。離亭には燈火明かう、琴の音ぞ聞こゆる。今しも千鳥の曲の半ばなりける。

おぼろに霞む春の夜の、梅の香りのえならぬに、われは其樹の下に佇みぬ。飛石傳ふ駒下駄の音にそれとや知り給ひしや、絕え〳〵になりし琴の調べのまた繼がれつゝ、月はよし、梅は星にかも似る、そよ古の物語りめく宵かな。靜かなる春の夜の想は夢の如し、幻のごとし。

琴の音はと絕えぬ、綾子の君は椽に出て、「そなたに居ませるは月の宮より天降りし嫦娥姫か、羅浮の女神か、とく迎へ申さでは罪やあらむ、御坐は設けたり、はやばや入らせ給へ」と戯れ言をかしう、「待つ間のいかに久しき事よ、君待つまの徒然の琴、心にくゝも興ひ給ふよ、庭の風寒からむに、」と……

釜の響き野川のせゝらぎにかよひて、呂爐の椽こ映ゆる火の影暖かう香薫して四邊に滿ちぬ。

興多かる茶室の春の夜も更けゆくらし。

(評)輕妙の文、精練の文字、而も親しき友の隔てなき情見へてうれしともうれし、想古きが如くにして今の心を失はず、文、意合せ得たる好文字。

(地) 淋しき夜

久留米市櫛原町　田中かほる

宵より降りだしたる雪はまだやまず夜は靜かに更けてゆく。病に臥せる妹はすや〳〵と眠つて居る。さてもやつれたる今の姿よ、顏は青さめ血の氣を失ひ此の世の人とも思はれず。日に〳〵弱りゆく妹の身を思ひてどうして泣かずにをられよう。あゝなんといふ不幸な身であらうか、まだ幼い時母を失ひ浮世の嵐を知らざる幼い頃より悲を覺え月花をも

るにつけ母の事が思ひだされ、戸の音をきゝては二人抱き合ふて泣いたとは幾度であつたらう、「わたしにはなぜ母ちやんがないの」と妹に泣かされたとも度々であつた。其後は夢の様に過ぎさりて妹は學校に通ふ身となつたがあゝ何たる事でありませう、妹は假初の風邪より重い病となり醫者は最早むつかしいといはれる、私には唯獨りの妹あゝ唯獨りの妹と又も別れればならぬのであらうか、哀れなる私を殘して母の跡を追うかと思へば天の無情をうらまずにはをられませぬ。

夜はいたく更けたであらう灯は淋しく燃えてその瘦顔をてらす、裏の藪で對折れが聞えたが又元の靜さに返つた。あゝ淋しい夜。

行文必ずしも巧とは云はれざれどこもれる眞情は人の心をつく

（人）朝の散歩

上總　齋　賀　子

朝の掃め終りて、皇神に祈を捧げて、み空を仰げば、なごりなく晴れ渡つて一ひらの雲だになく、前に眺むる嵐山もいつしか春立ちて、棠句ふうす霞、西吹く風も心地よう、月山の邊りに歩を運べは、風に亂るゝ糸柳に青蛙の一つ、いと寒げに隱れ居りぬ。あなあはれや　暖かき息ふきかけしに、驚きたる樣にて枝の間に入りぬ。其樣のをかしきに一人笑みつゝ、會歩を運べば。緑り色濃き松、香り床しき梅と並び立てり。げにこれよき對象なるよ、松の高潔、梅の貞操、あゝ我れも。梅花の淸きを師と仰ぎ、婦女子の道をいそしまんなと思ひつゝ歩を返しぬ。

斷篇に學を起し貞操に結べるはよろし。

（秀）散る花に對して

大分縣中津　宮　田　秋　子

雨に咲き風に開きし花、やがて又風に散り雨に落つ、咲きしは露にて散りしは誠か、いづれは短き夢の世に、梅の花の盛なつかしといふも、東の間のはえのみ、花は散りて流れに餅を浮べ、香は殘りて詩人の筆にかほる、悲しむべきか、喜ぶべきか、われは唯だ果敢なきものと觀ぬ。しかも果敢なきものゝなど花のみに限らん、人の世も亦たそれか、いとしき花の夢秘めて、消へ行く露に似たらん人の命の、さらにも哀れならずやは。散る花は根にかへりて、また來ん春に榮華を誇れど、人は死して魂いづこにさまよふべき、我今こゝに落花の跡を弔ひて、身の行末のそゞろに悲しかるべきを思ふ。

一種の人生觀、道理なきにしもあられども……

（秀）春の野邊

東京荏原郡大井村濱川　西　野　春　江

光のどけき彌生の空、みどりの野一里の春風ゆるう、ひばりは歌ひ胡蝶とび、牧笛の音は思はぬかたよりわく。

この日この野べにあこがれて、美しきあたりのけはひに醉ひ、わが身もわすれて暫し佇みぬ。

あゝその時よ、あらゆる汚れたる思はぬぐひ去られて、あたかも、大空の瑞彩に侍るかのごと、たゞ嚴かの念にみち、暫し身を香ぐはし草花のうちに埋め、うるはしき草花にあひ、胡蝶がこひをゆめみつゝ、とほく思をパラダイスに馳せぬ。

文簡にして要を得たり、心うき立つ春の野にかゝる感を起しゝ君のゆかしさよ。

胡　蝶

尾張　犬　飼　雨　園　女

胡蝶こそあはれにもまたなかしきものなれ。花のかなりの窓に入りくる朧生の空うらゝかなる春の日、障子うちあけて外面を眺むれば、よべ置きし露にぬれしにやあらむ、小さき羽もいと重げに立ちかれてしづかに眠り、やがて夕べともなりぬれば、寐所を爭ふにやあらむ、こゝかしこの花にすだきて踊るがごと 見ゆるなどいとなかし。

麗かなる春の野邊に花摘みての歸るさ、二人の少女の「蝶々、蝶々、菜の花にとまれ……。」と鈴を振るごとく歌ひ行けば、空より舞ひ下りし蝶の、少女の黒髪にさしたる花に羽操はしつゝ戯るゝなど、なかしくもまたやさし。

かく樂しく飛び遊べどもかくて疲れにし花もうつろひぬれば、尋れ行くべき方もしらで、美しかりし羽もきれ〴〵になりて、力なく飛び行くこそあはれなれ。

探梅の記

越前　相馬貞子

春野の小草ふみわけてそこはかとなくたどる程に、長閑なる鳥の聲は野邊のうるはしき花の下より聞えつ、こゝの垣根かしこのくまに咲きたるが皆一つ色にて美はしきを之れば「には梅の花」あれは「花梅」などゆびさしいふもなかし、柳の糸の垂れたるが生ひつゞきたる細道をゆくほどに數知れぬ梅の花蕾か露かとばかり咲き出でゝ、えならぬ匂ひみちみちつゝ霞にぎほふさまいとゞめでたし、花としいへばいづれめでたからぬはなけれどもよく霧にたへ霜を凌ぎ て匂ひいでたる梅の雄しさ松の操にもおとるまじ北野の天神の東風ふかばとかへりみ給ひし もむべなど謌りあひつゝ時のうつるをも覺えずふ とあふぎ見れば日まさに山の端に近くなればおどろきて家路にたどりぬ。

昔を得たり。

雪の朝

松山　籾山鑑子

夜の神はそのくしき御手もて一夜のうち に天地をつくりかへたまひしかと思はるゝばかり、中央に高くそびゆる城山の天主閣もうとましげなる家居もみな一色に白たえの衣美くしく神々しくおぼゆるなり。氷りたるひしやくつるべの繩などやう〳〵 とりて顔うちすゝぎ朝の祈禱な終り、庭園にとおり立てば名のみなる箱庭も打ふしたる枯草などみなこの光りに包まれぬ。折りしも山茶花の枝に雀二つ朝を讃美しつゝそこはかとなくあさりゐけるが、今しも裏の方より走せ來りし手飼の犬の何思ひけむまつしぐらに飛びかゝりぬ。あなむなのわざやと止むるもおそし木の枝にありし は高く去り犬は走りて讃美の歌は消え後には梅の花に、もにたる愛犬の足あと二ッ三ッ四ッ。

春雨

豊前　扇城女史

雨こそあはれは多かれ、わきて春雨ぞ一としほなる。丘ににほへる花やいかに、野に萌める菫やいかに。聲あはれ春雨今よひは晴れよ、おぼろの月に散る花訪はん程に、明日のみは降らざれ、妹と菫つまん程に。折しも窓に吹き入る花嵐、櫻花三片もて來ぬ、中に胡蝶の屍ぞ交れる、我はあまりのあはれさに、庭のかなたに葬りやりぬ。

春の日記の一ふしとや見ん。

秋

三重　奥瀬かすみ子

秋立ちぬ。

大方の夏草枯れ果てゝ、萩に桔梗に美しう咲き出でつ、黄ばみし木々の葉の、今朝は一しほ色まして、赤き柿の木梢に殘るも淋し。おのれは此日なつかしの友の墓訪ひぬ。

思ひ出の昔、早や三年となりにけり。友の面影未だ消えざるに、み墓はいたく苔むしぬ。心ばかりの手向の花、黄菊一枝折添えて、そとおろがみつ、やがて立ち上りけるに、日に弱り行く黄蝶一羽、ゆるやかに友が奥津城あり、やがても外なる蘭花の白菊にそと休らひぬ。打見やれば文雄としるせる小さなる名刺の添へられき、あはれ、亡き友の昔、手向の心忍ばれて、思はずも胸ふさがり、熱き涙は頬を傳ひぬ。

折しもみそらはるかに鋭き〳〵鳶の一と聲。
新しき想ならねどあまりにやさしければ。

立春

梶木高久しづ

年たちかへる春の空、四方の景色も何となう、春てふけはいを、帶びそめて、野べに山の上に、消えのこりたる白雪も、今はあとなく消えはて、庭面にまきいづる梅が枝に、來鳴く鶯の音もいとゞほがらかに、庭のかき根の若草も、やう〳〵色つきそめ、川邊になびける柳も緑りいとあざやかに、おちこちの、山々も、たなびく霞に、打けぶり、愛らしき少女子らの、若菜つまむとて、手籠さげ行く姿の、無邪氣なるなどいとめでたし。

▲美文に就て

余のいたく物足らず感じたるは美文なり、徒らに古人を眞似、虎な描きて猫となり、或は木を竹につぎたるが如き實に多かりき、よく古人今人の文を多く讀み、よく同化して自らの木をなし給へ、文はたとへば大なる袋に空氣を満たしかくて針にて小さき孔を穿ちそこより少しつゝ漏すが如しかくならざれば名文はなり難きものぞかし、今回の美文總じて消息文に劣る戰等ならずくれ〴〵にも遺憾なりむしたまへや、(選者)

消息文

(天) 病める友へ返し

伊豫宇摩郡松柏　石川きみ

嬉しとはげに今日の御文を手にせし時の我が心地に候、かるからぬ御病の之を三度目なる御手術と承りし節は、世に許されし博士の君の御執刀なればとは思ひ候も、流石に如何ならん御運命かと心元なさ限なく安き心も候はざりし、母事も外事ならず御察し申上、朝な夕な神だなに御あかし上げて陰ながらいのり上居候ひしが、其しるしも候てか、今度は御苦痛もさ迄ならず御後の御なやみさへいとかるうおはしまし候とや、御心地もすが〳〵しうおはすらん御筆の跡もいき〳〵しう拜せられ候て、たゞ御嬉しさにそゞろ心地に候。

愛しき御樣子すぐ御聞かせ下さる由、承り度さは山々に候へども今暫は何はで御待ち申候はん、今が御大事の御時、かまへて〳〵かる〳〵しう御筆などとらせ給ふな、もし御發熱など遊ばしてば如何致し候はん何も醫師の君の御そばなれば申迄も候はれどあまりの嬉し さには失禮なら願みずかくは、

返す〲も御後の御養生專一に　一と日も早う御目出度御退院の樣にと其れのみいのり上つゝ。かしこ

情こもり慈至れる文よ、親友の病を憂ひて神かけいのり手術の經過よろしときゝて喜び、しかも常道を失はず豫後の注意を與へし處實に千金の價あり、殊に飾り氣なく眞情の文字これやこれめでたき消息の文ぞ。

(地) 友の許に

愛知縣立高等女學校技藝科生　大野房子

心には思ひつゝもいつも〲消息怠りがち、ゆるし給ひてよ。寒さも嚴しき此頃御壯やかに御暮し遊ばされ候や伺ひ上まゐらせ候。私事父に伴はれ候て伊勢に遊び申候、かの高等小學第二年の折御別れ致せし糸子の君を津に訪れ申せし所、思ひもかけぬ再會よといたう悦ばれ各の學校の事其後の御友達方々の御消息など相語り、殊に親しかりし貴女の京都に居ますを聞きては驚かれたる樣子にて舊交を懷がまし　など云はれ候ひき、糸子の君は今女學校へ通はれ候何處も同じテニスは流行の由に承り候。今朝阿漕の停車場にて糸子の君と名殘惜しき袂を分ちて山田に着き申候。俥を驅りて內外の宮に參拜いたし候、　五十鈴の川の淸流に漱して神代ながらの杉の樹の間を過ぎ底の岩根に宮柱太敷建て千　木高知らす廣前に額つき候ひては、誰かは「何事のおはしますかは知られどもかたじけなさに淚こぼるゝ」の古歌の心を忍ばざるものやあらむと思はれ申候、それより電車に乘り換へて二見へと向ひ申候。　道すがらに見渡せば暮早き冬の夕陽の影は神路の山かけて朝熊の高嶺　に花やかにかゞやき居り申候。末筆ながら御母上さまにも宜敷仰せられたく願ひ上まひらせ候。かしこ

二見の宿につきて　房子より

(評)父君に伴はれて觀光に出立ちませる君の身ぞうらやましかる、此ふみ受けにし君が友もさぞかし懷かしく讀み返されし ならんと推しぬ、さてもうるはしき消息よ。

(人) 轉地先より都の友に

千葉縣佐倉町宮小路百六十五番地　水谷ちとせ

御別れ申候てよりはや十日と相成候今日は御豫定の通り　歌留多競技會の御催し有之候事と存じ遙々御盛會を祈り上候選手としての御得意さこそと推し上候指を啣へて羨む身を哀れとも思召さばせめて會の模樣にても委敷御知らせ被下度候私も轉地以來御陰樣にて日增に快く昨今にては藥と病と申事を忘るゝ位に候間憚ながら御安心被下度候

當地は名にし負ふ九十九里濱の起點にて西北に一帶の岡を負ひ東南遙に太平洋に向ひ誠に御暖かにて東京の三月頃の時候かと存候町とはほんの名許り戶數も百戶內外にてそれも漁師のみにて候舊曆を用ふる當地の今日は元日とやらにてお雜煮の御馳走は宜しく候へ共切餅の大きいのにはほと〲閉口致し候門松を見るの外お正月らしき事は少しも無之候每日の例ながら今日も午後には濱に出で波打ち際まで參り候墨を塗つた樣な眞黑な岩に濃と打寄せては颯と眞白に碎くる鞳音の波の壯しさ目もさむる許りに候沖には數十の漁船點々輪を畫いて濱に浮き濱に眠るゝあたり友呼びつれて飛び交ふ鷗の吹雪とまがふなんど繪を見る樣にて候

珍らしき事をかしき事數多有之候へ共そは後便にて追々申上可く候

失禮ながら御序のせつ梅子様露子様に宜しく御傳へ被下度候可祝

格別に奇あるにあらず、されどすら〳〵とものなれし筆のゆきかひ

味にうれし。

（秀）弟の近況を妹にしらす文

芝區　加藤綾子

昨日は繪葉書な有難う、それの着いた時に通雄が居て突然私の手から引たくつて持つて行かうとしますから、其は私へ來たのと申ますと嘘だいそれ此通り谷ミチチとしてあるじやないかつて其儘外へ跳出してしまいましたの、本當に此頃は惡戯ばかりして手に乘りませんよ、そして半日計りは見せませんでしたが、夕方にお隣から通雄さんが御遣失れになりましたと持て來て下すつたもんですから故と通雄に繪葉書を何所へやりましたと尋れますと、一寸考へてア丶あれなら返へしたじやないかア丶返したさ〳〵つて私の呼ぶのも聞は ず玄關の方へ逃げて行つたかと思ふと、モーエスに跨がつて走れ〳〵て無闇に頭を打つてるんですもの……火鉢の側にいらつした御母様がどうしてあんなで しやうと父上に仰有たら仕様のない奴だ今に舘（叔父）の舅も敗けるじやろッて莞爾してみえました、それでも文さん（妹）の噂が出ると妙に眞面目になつて凝乎と談ずるもの丶顏を眺めて居ます が終いには必と僕も十二に成つたら行んだッて申ます別封は通雄が三疊へかくれて書いたのです、何を書いたのが少とも見せませんがきつと面白いでしやう左様なら

うるはしき姉妹の情よ。

（秀）東都に學ぶ妹の許に

横濱市中村町　寺田光子

追々寒さに向ひ候へ共、そなたも無事御勉强の事と存じ候。此許御母様初め皆々元氣よく、花子も毎日學校に通ひ居り候。さて今日は御許に驚かすべき事出來致し申候。一昨夜十一時頃未だ床につきて間もなき頃表の方にて火事よ〳〵と騷ぐに驚き雨戶くり候處、火は近くにて、ポンプよ人よと大騷ぎ、折からの風に中々盛んに燃え上り、二時間許りにて漸く鎭火致し候。家にては何の障りもなく候へ共、そなた幼なき頃より御世話になりし先生の御宅、丸燒と相成り候。火元は先生の御宅より四五間先にて、松吉を御手傳ひに差上げ候處大層御喜びにて、大事な御品等松吉に御預け遊され親戚の家に御逃げ遊され候。實に不幸の災難にて御氣の毒とも何とも申上ろやう御座なく候。

そなたに話し候へば定めて驚く事と存じ候へ共、御見舞狀差上れば先生の御事故相すまぬ儀と、一寸御知らせ致し候。然し決して御心配は無用、皆々何かと先生の御力になり居候へば。

試驗も近々の由去年にも勝りてよき成績得ろやう祈り候。

日新しき文よ、殊に師友の情のこまやかなる樣みへて一しほうれし人情紙よりも薄き今の世に。

歌骨牌會に招く文

岩代　武藤新子

長くもかなと思ふ月日も夢の如く に打ち過ぎて最早試驗も間近く相成候へば例年の歌かろた會は今のうちに と存じ明日は土曜日に當れるを幸にそれ〳〵 準備もいたし候まゝ秋風ならずともあしのまろやをと ひ給はずや永々しうは御留め申すまじお く霜の白きを見ぬ程に御歸し申すべく候へばあはで此夜を過し てよなどつれなき御かへりことはなくまつとしきかば日暮るゝ程より御出のほど御待ち申上候かしこ

娯樂の會の招き狀としては中々に面白く讀まれたり、かく輕妙なる文を送られては、誰とて集はでやは。

他國の友に送る文

福井　宮崎加代

木枯にお庭の山茶花がみな散り、鏡の樣に澄み渡りたる青空にまん圓い淸いくお月樣、何と云ふ美しい夜でしよう、靜子樣も嘸御機嫌よくこのお月樣を見ていらつしやるだろうと思ふと、お月樣までが懷しいですわ、涙にぬれし袂を別ちましたのは昨日の樣ですが、早や二年も過ぎましたのねー、彼の小田卷繰返しても思出されますのは、毎日學びの庭の歸るさに手を取り合ふて、菫摘む野に遊び暮し、あるひは傘さし連て、花ちる園に過來し方や行末を語り合た事も御座いましが、胡蝶の夢のさめては却て恨めしい思出となりました、今はお互に遠山遠くへだつる身のお寫眞を眺ては、思はずお名をお呼ひ申た時も度々ですが、其度每に御文など取り出し繰返し卷返しては、唯一の友としております、お互に今の世は無事でさへ居れば會はれる時もありよせう、又會までの樂は、雁の便のそれのみですから、うれしい事も、悲しい事も、知らせ合ふのを、かゝさぬように致しましようねー、これからは、寒さが烈うなりますから、お身をお大切になすつて、おかぜ召さぬようおねがひ申ます

親友の情ぞげにうれしかる、結果の注意など殊に然り

姉へ歸鄉を促す文

房江子

姉樣、今度のお休には御歸りなさらないの。歸つて下さいよ。さうでないと、私、折角、考てる事が皆駄目になつて終ふんですもの。それに來月三日には小百合會の春季大會を開くのですよ。「春の野邊」といふ歌劇も既う出てゐて、鵜本先生も楠井の小母樣も御出席なさる筈ですから姉樣がお歸りだと皆どんなに御悅びたかわかりませんよ。餘興には、私も冬休みに習つた「若菜」を彈く筈、姉樣オルガンと合して頂戴よ。學校で去年の秋、郡中第一といふ評判のオルガンを買つたのですから、姉樣のお稽古は田舍でも出來るぢやありませんか、其から御預りしてる雛樣れえ、今年は大變な舊ですよ。春のお休までには屹度咲き揃つて姉樣をお迎するに相違ありません、其から彼や是や——姉樣が歸つて下さらないでは、此年の春休暇は少しも嬉しくなくなりますよ、れえ、歸つて下さいよ姉さん。お母樣もさう云つていらつやるんですから、

面白きおとづれよ、併しあまりあまたれ過ぎませんか。

和歌會に友を招く文

和歌　山村順子

かれて申上おき候ひし、和歌會の儀いよく來年の一月二日めでたき初春の御祝をかれて相開き候ことに定め申候久々にて友どちうちつどひ大君の御代とこしへに久しかれとことほぎ奉らんと存じ候、見處なき庭には候へ共佐保姬のゆかしき春の匂ひと咲き初めし白梅の花まではまがきの水仙など人待ちがほに候へは若し君が錦腸にふれて詠歌の栞とも成りなは花もさぞかし滿足なるべしと存候御日柄とて御用多にあらせらるべくとは存し候へども言葉の花も匂ひなくすべて夜の錦となりはてんこと殘り多く候へは花の心をおぼしやられひる過ぐる頃より是非に御臨席の程願上候、可祝

平坦の中に趣味あり、歌會の招狀としてよし、

短歌

（題　寶）

天

かしの實の只ひとつぶの子だからを
　御國のためにさゝげてしかな
　　　　　　　　　　　　伊賀　服部かつ子

評。御國の爲とは云へ、同情の涙なきを得ず候。

地

身に持てる寶なけれど玉をなす
　あせこそおのが寶なりけれ
　　　　　　　　　　　　東京　井上登美子

評。汗を寶との意面白く候。又玉の字用ひ得て妙と可申候。

人

世の中にたぐひはあらじ千早振る
　神代ながらの三ツのみ寶
　　　　　　　　　　　　石見　宮内登美子

評。神代ながらの語、力あり。
同じ人の歌に、
皇國の寶なりけり神代よりとはにくもらぬやまとたましひ
月に日に生ひ茂り行く人草はすめらみ國の寶なりけり
進み行く心しあらば世の中のものはみながら寶なるらん

秀逸

乙女子の寶は何と人とはゞ
　操とのみぞたゞこたへなん
　　　　　　　　　　　　和歌山　山縣くに子

「たゞ」の字、用ひ得て凡ならず。

たゞはげめ寶は小田の底にこそと
　子等に訓へて父逝きましぬ
　　　　　　　　　　　　岡山　立神峰子

うごきなき國の寶やこれならむ
　神代ながらの御をしへの道
　　　　　　　　　　　　京都　四辻清子

下葉まで紅ふかき民草の
　心や國のたからなるらん
　　　　　　　　　　　　敦賀　サカエ

紅深き心とは、則ち赤心の意。下層人民まで赤誠に富むを謂ふ。

何一つ殘るたからはあられども
　心ばかりは實らじとぞ思ふ
　　　　　　　　　　　　三重　服部歌子

世には乏しからぬ身にも心を實るがあり、可歎。

佳調

もゝちゝの黄金に玉にまさりたる寶は人の操なりけり
　　　　　　　　　　　　名古屋　大野房子

越後　小原操
くもりなき鏡に似たる心こそたからのうちの寳なりけれ

下野　新井琴子
かくれみの小槌瑠璃と品はあれど正しき道を寳とやせむ

姫路　船戸ゆき子
しろかねか黄金かあらずゆく駒の蹄こそ人の寳なりけり

名古屋　藤枝子
あやにしきこがねしろかね何かせむ人のぢしきぞ世の寳なる

名古屋　志村寸美子
寶てふ寳はあれど敷島の大和心にまされるぞなき

東京　宮内みどり
帆柱のたかき名あげしみ姫こそわが日の本の浮き寳なれ

用圖妙。

備中　中島國子
千萬の寳もなとてかゝやかんみかく心のなき身なりせば

石狩　佐々木まさ子
おしげなく千寳君に捧げまつり老し我身のせめをふさがむ

岡山　林榮子
君がため身をはおしまぬ武夫の心ぞ國のたからなりける

兵庫　天野眞
身を修め心をみがきいかで世の寳ともなれ人の子だから

福井　島ます子
ものごとに恐れたゆまぬ心こそ世わたる人のたからなりけれ

埼玉　飯塚たい子
時來なば寳も賣りて買すと思ひ定めしこともありにき

麹町　鈴谷好子
ともすれば仇ともならんこがれをばたからとたのむ人のうたてき

伊豆　久留島子
敷島のやまとをみなのみさをこそ世にありがたきたからなりけれ

大阪　美津野美也子
取傳ふ物し無ければこれやこのきみかかたみの家の子たから

大阪　百合文子
磨き上げし心の玉の光りこそ我日の本の寳なりけれ

牛込　伊地知菊千代
君に親につかふる道は人の世のよろづにまさる寳なりけり

熊本　たゞ子
たらちねの親のたまひし此身こそ換ふるものなき寳なりけれ

常陸　菊地峯子
身をかざる玉も錦もなにかせん心ぞ人のたからならまし

岩代　美野和子
村肝の心の鬼を草薙の劍は國の寳なりけり

備中　井上むら子
「鬼殿の酒振見ん」のさゞめきに寳ゆらめく桃太郎の舟

愛知　梶田愛子
國の爲め命おしまぬ益荒雄の心ぞ玉の寳なりける

伊豫　野口白露
祖先より傳へしたからなげうちて世をすくふべき人ぞゆかしき

美濃　伏屋伊智子
たらちねかいまはの時ののこし書これぞ吾が世の寳なりけり

常陸　田山すみ子

子寳の御國の礎築してし勵なかむる者のたのしさ
備前　杉本幸子

寳てふたからのかずはおほけれどまことぞ人のたからなりけり
安藝　大前國子

かぎりなくなさけたまはるわがせこそ世にたぐひなき寳なりける
肥後　松崎あき子

たからとてめつるを見れば大方は立てしいさをのかたみなりけり
大阪　三雲信子

世の様に染みならはで清らなる心ぞ人の寳なりける
備中　中島文子

夜ひかる玉にもまさる寳こそ人のこゝろの誠なりけれ
熊本　中村喜久子

國のためいさをゝたてゝ代々までのたからのこせる我子嬉しき
福島　遠藤きみ子

いろ〳〵のたからは世々に多かれど子寳ばかりめでたきはなし
越後　山井きく子

裏表なきこゝろこそ世の中のたからにまさる寳なりけり
佐渡　すみ子

國をとまし國をまもりのをのこうむ親こそ國のたからなりけり
丹波　佐藤けい子

これにます寳はあらじとこしへにみかけはひかる玉の外には
美濃　山田愛子

一死たゞ君にむくいむ心こそ思へば國の寳なりけれ
埼玉　宮倉いれ

身に積る學びの業は夜る光る玉にもまさる寳なりけり
大阪　樺田野子

大君に盡す心を敷島の千代に榮えむ寳なりけり
神戸　倉重千代子

諺にいふもうべなり生の子のさときぞ親の寳なりける
陸奥　十村ゆふ子

鶏が鳴く東の郷の不二の山とこよつきせぬ寳なるらむ
島根　高田美津江

しろかねも黄金もあれどくもりなきこゝろの玉ぞたからなりけり
横濱　寺田光子

つみあげし書のいくひらいくひらは我子のたから我家のたから
福岡　石橋百代

玉の簪錦の衣も何かせんみさをぞ人の寳なりける
大阪　田中常子

世の中の寳なき身ははくゝみて育てし子等ぞ寳なりける
磐城　佐々木千代

山とつむ黄金もいつか限りあり慈悲の心ぞ寳なりける
岡山市　大塚近繪

あはれいまなにかもとめむ心しも友ぞわが身の寳なりける
埼玉　三上音子

よき藝を身にもつ人は身のたから積れば國の寳なりけり
宇都宮　金田久和子

金銀を山ほどつみて換よとてなど子寳を賣りやしぬらむ
埼玉　松本久眞子

金だから子寳多くある中に心のたから持つは少し

新體詩

（甲）日の出の歌

鳥取市西町　天野清子

彩雲湧きて、晨の風の、
　我が世にくだり、夜の幕裂けぬ。
ほの／＼闇に、わかるゝ天の、
　岩戸をやゝに、時の子開く。
あゝよもの山、我が前に伏し、
あゝ大洋の、一ト孤島、旭と共に、國威は揚る。
雲をつんざくは、光かすはや、金線銀矢、あらかしこや。
　かしこきみいづ、四海にあふる。
正義の光、くまなくゆけば、まさなき闇は、
　あゝ今消えぬ、あゝ消えおはんぬ。
陸にはうたふもゝどりや、
　海にはひゞく樂の音や。
よろこびおどり世界はさめぬ、世界はさめぬ。
天の原、高く／＼、昇るよ／＼、旭かげ。
かゞやくよ／＼、旭のひかり、あらかしこしや。
よろこび躍り、世界は生きぬ、世界は生きぬ。

（乙）二つ家

兵庫縣明石町　玉島閑子

釣瓶一つ共同井戸　庭に境の垣もなく
梅桃櫻もろともに　一つ眺の爽らひや
背戸は涼しき青嵐　軒端にせまる白帆影
春夏秋冬諸共に　樂しき森の二つ家

（乙）平和

久留米市篠原町　田中かほる

萬頼の聲をひそめたる　闇の帳をつんざきつ
光り輝く天つ日や　五彩の雲のひろごりて
平和の天地おほうけり。
雲井の宮の欄干に　天使の女神おりたちて
情の御手をひらくとき　幸に謳ふ民草や
樂しき曙の歌をきけ。

（丙）梅さく宿

名古屋市和泉町　大野ふさ子

咲かばと待ちし軒の梅　さく如月になりにけり。
戰爭に勝ちて兄上の　歸り來ませるよろこびよ。
弟妹のうち集ひ　まだいわけなき季の兒も。
膝にすがりて嬉しげに　聽くいさましの物語り。
老ひ給ひたるふた親も　見るにたのしきほゝ笑みや。
茶の間の燭のあきらけく　愛の光りの滿つる春の夜。

努力

佐賀縣小城郡晴田村晴氣二七　尾保かめ

小さきサンゴも集ひつゝ、
逆捲く海のたゞ中に、
人も心を合せつゝ、
騒ぐ浮世のたゞ中に、

年月經れば大濤の、
峙つ島を築くなり。
敵に當らば仇波の、
樂しき社會をば立てつべし。

盛年不重來

佐賀縣小城郡晴田村晴氣二七　尾保かめ

年に再び春はなく、
昨日の朝は過ぎ行きて、
櫻は匂へ花の春、
かなしき秋のめぐり來ば、

人に盛りは又と來ず、
又來る朝は明日の朝、
人は勉めよ人の春、
歎くも甲斐や無からまし。

愛

名古屋南久屋町二丁目　鈴木方　志村寸美子

黄金しろかれちりばむる、
愛に乏しき夫もたば、
竹の柱に葺の屋根、
血のあたゝかき背子あらば、
愛てふ花はむつみ合ふ、

玉の臺に住めばとて、
涙はいつも絶えざらむ。
よし名はなくも貧しくも、
うきもつらきも思はむや。
春の家庭にのみぞ咲く。

夫失ひし人に代りて

大阪東區南本町三丁目百三十梅垣方　磯野かほる

年立ちかへるあら玉の、

嬉しき春はきぬれども、

嬉しきみ代になりぬれど。
凱旋あげて錦着て、
嬉しきみ代になりぬれど。

隣りの背子も歸りきし。

わが背は過ぎし遼陽の、
歸らぬ人ときくからに、

いくさの原に斃られて、
たま祭る身ぞかなしやな。

みなしご

攝津　濱田なみ子

父上迎へに行かなんと、
歸らぬ人と知りながら、
橋のたもとにたゝずみぬ。
待つ間程なく勇ましう、
橋のかなたに現はれぬ、
喜ぶさまのいぢらしさ。

れだるがまゝに伴ひて、
迎ふる人のむれに入り、
凱歌うたひつはものは、
父上かへり來ましぬと、

なやみ

越前　たが袖女史

月の雫を掌にうけて、
優しき女神の囁きか。
探ぐる自然の秘音に、
あゝ人の子の甲斐なけれ。
わかき煩悩を胸に保て、
しのぶにあまる涙かな。

葦の葉ずれの音を聞けば、
高き理想を慕へども、
さらでも痛らき人の世を、

嬰兒を抱く習慣

小兒は生後六箇月位になると暫くの間は形態を眞直ぐの位置に保つことが出來る、八箇月になれば人の手を貸らずして坐することが出來る、第一年の終り即ち誕生位になると自から立つことを試みる迄に發育するのが通例である、故にこの自然の發育をさせようとするには成るべく人が小兒に手を掛けてこれを押へたり、或は無理に早く匍はせたり、立たせたりすることは小兒の發育上に害を及ぼすから、しない方が宜い然るに下等社會などでは親が自から子供に構つて居ることが出來ない爲め自然と抛つて置くと云ふ譯になる、そこで却て子供が天然の順序に從つて發育をするのであるが、上等社會の人手の多い家になると子供を寢かして置くのを以て宛もその子供を粗末にするかの如くに考へて、出來得るだけ人の手の上、又は膝の上に置かうとする傾きがある、然るに子供は斯樣に人手を掛ければ掛ける程、その自由の運動を妨げられ、從つて筋肉の發育を害されるのである、斯くの如く取扱はれた子供の發育は放任せられた子供に比べると必らず遲れるのが常である、世間では上等社會の子供は單にその兩親の身體の虛弱の爲めに匍ふことや立つことが遲れるやうに考へて居るかも知れぬけれども、理由は決してそれのみではなく、却て餘り人手を掛けて抱いたりかゝへたりする爲めに天然の發育を妨げる場合が多い、第一この抱くと云ふ場合には人各々手勝手があつて、或人は常に右の方に抱き、或人は左に抱くと云ふ其習慣の爲めに子供が或一定の姿勢を取るやうな都合になり、それがつい癖となつて未だ極めて柔い子供の筋肉が一方に偏して不具の發育をすると云ふ場合がある、それから抱くことの爲めに子供が手足の運動を妨げられ、或は多少押へ付ける爲めに呼吸や血液の循環を妨げると云ふことになる故に、小兒はなるべく下に寢かして置き、充分自由に手足の動されるやうにする方が發育の上から子供の衞生上共に必要である、されば乳を飮ませる場合の外は決して人の手に抱かせて置かない方が宜しい、もし一度子供に抱く癖を付けると遂には一人で寢かして置くと今度は子供の方で宛も粗末に取扱はれるやうに感じて温順に寢て居なくなり人手の上でなければ遊びもせず眠りもせぬと云ふ風になつてこれが又子供の發育の上に思はず知らず不利益の結果を來たすのである云々。これは小兒衞生に學殖深き三島醫學博士の談話の一節なり。

短文

(天) 鞠　　鳥取　岡野喜久子

暖き春の日清き流れの邊りにて落花雪と散るを背にうけつゝ筆洗ふ手元へ絲にてかゝりし鞠流れつきぬそもや何處の誰が落したりけむ愛らしき少女の尋れ來る事もやと水上の方を打ち見やれども夫れらしき人更らになしせんかたなくかたへの綠の色濃き柳の枝に鞠を結び再び可愛き主の手に入らむ事を祈りつゝ家路にいそぎぬ

評六、同情ある文なり、自在なる文なり、人をして轉た其作者を推想せしむ

(地) 姉の元へ　　東京　曾村孝子

姉樣。未だ？、遅いことれ。背守の五猿が針箱の底で欠伸を爲てゐるよホ、、、先日乳母が面白いことを云ひましたの、夫れは家の梅の紅梅が先に咲いたら女の赤さんで、白梅が先だつたら必然男の赤さんなのですつて、で妾紅梅がと祈つてよ、而したら此頃ポカ〳〵と二三輪、紅い花瓣が……、必然女よ。嬉しいこと、何卒御身を大切にして早く赤さんの顔を……

評云、輕妙にして自在、言文一致の上乘なる者、

(人) 小さき廣瀨中佐　　伊豫　石川きみ

海軍が大好きの、今年九ツの敏坊、學校帽を後向きにかぶり、衣紋竹を帶につるして、鳩の樣な目を力一ツぱい見張り、聲するどく杉野……杉野……、やがて、アッとたをれさま、母さん早く赤い綿ッ……。

評云、赤い綿々々々、奇想天外より來る、

(秀逸) 元旦　　京都　松風女史

昨日の鬼も笑顔もて慶辭をのぶる今日行かふ人の心を神の見そなはさはいかにおかしからなん世の中は年のはじめよりいつはりもて飾れる物か

評云、宛然川柳的文章、面白い事〳〵

元日の日課　　越後　德増はる子

お雜煮の餅を多く食べて笑はれ、一杯のお屠蘇に赤い顔で學校の式に出でお友達に笑はれ、歸りに大路に辷つたので回禮者に笑はれ、家へ來てからは問禮者の應接振がわるいと云つて笑はれ、午後は遣羽子をして自分で自分の額を打つたので笑はれ、夜はかるたが下手だと云ふので笑はれた上旬こつてり墨を塗られました、今年の元日はなぜかう笑はれたでせう。

評云、笑ふ可し々々々々、笑は進歩の階段也。

(佳) 和樂　　大阪　かほる

おッ母さんに抱ッコされてお乳を吞てゐた事もあッたのれえ、と姉なる人が弟を見て笑へば何も可笑しか無いと、弟は亦笑ふ、母なる人は何も言はず唯にこ〳〵

評云、和氣靄々、

池邊のひとゝき　　甲斐　ふい子

暖かい春の日影を一ぱいに浴びながら、お化粧の水を捨てた其儘、池の邊を逍遙うと汀の玉藻が小波につれてゆるうゆれながら淸い淸い香を放つて居る。餘りのゆかしさに手をさし延べてそと水面に出て居る其一莖を引くと、それに驚いてか孵して居た緋鯉の一尾が飛び出して又向岸の藻の中に穩れて仕舞つた。岸邊の櫻は爛熳たる其姿を美しう水面に映して居る。

評云、刹那の光景、宛然一目に在り、

どちら

三重　奥瀬かすみ子

鳩の様な瞳、くッきりと色の白い、今年四ッの鞠ちやん、おぼつかなげに飛石傳ふて、私の部屋の障子開け様、可愛い聲。『姉ちやん』錢下さいと、廻らぬ舌で云ふ。私は机のひきだしから、五錢白銅一ッと、二錢一枚と取り出し、

「さア鞠ちやんどちら……」

鞠ちやんはしきりと考へて居る。

評云、可愛いゝ鞠ちやん、

背の子

大阪　はる子

紅梅咲しうぶすなのみ社、華表なゝめに朽ち果てゝ對の石狗苔むせり、階段には手拭にて髮しばれる兒守ら、うちつく鞠の拍子につれて、うたふ鄙歌ふし可笑しきに、スヤ〳〵と眠れる背の子、いかなる夢を結ぶらん、風ありて梅が香を運べば手にせる風車くる〳〵とめぐる。

消息文ヵ短文ニ

岡山　太田加女乃

ゆうべは雪がたくさん降りました私起きる齡すぐ雪達摩をこしらへましただいぶ大きいのですけれども意氣地なしだと見えて此の手紙を書く時はもう消えかゝつて居るの……

ねえさんは雪が積つた位のことに閉口して今日は來て下さらないの子ほんとにつまらないわ私先生に約束を破るなと敎へられてよ

評云、何だか主張のありさうな文だ、

おさな心

相模　奈良八重子

戰から歸られた兄さんば始終だまつて入らしやるわ、今日妾吉村の姉さんの死んだお話をすると、兄さんは彼方を向ひておしまいなの、おこつていらつしやるのだと思ふて驚いたわ、けれども兄さんはおこりはしないの。それでかう言ふの「彈丸にでもあたつて死んだ方がよかつた」ッて何故だか妾にはわからないわ、妾死ぬなんてこと大嫌ひ……

評云、少女不解阿兄心事

おめでたう

新潟　皆川こまつ

美代ちやんあけて御めでたう、あなたそこで御いくつかれ、さう〳〵去年のお正月に、まう一つ御正月がくると、十一で、尋常科を卒業して高等科へあがるのだと、大層よろこんでいらつしやいましたれ、さう〳〵御めでたう御めでたう、私までうれしいとよ。

牛飼

八王寺　中村文女

牛飼の作三は今年八十といふよい年だが妻もなく子もなく十三の時から今まで六十餘年一日の如く毎日自分の可愛がつて居る牛を引つぱつては野良へ出て行くのであるそして此の間は仲よしの吉兵衛爺さんから一人の娘をもらうたが作三爺さんは此の娘を手の中の玉のやうに可愛がつて居る。

評云、好生涯、

雪の一夜

福井島　萬壽

餘りの靜さに讀みかけし書とぢて窓の戸を押せば吹き入るゝ風は寒けれど降りしきりし深雪名殘なう晴れてぞ空には氷の如き月冴えわたりぬ川を隔てし向ふの農家の窓より洩るゝ燈火、光淡く庭の梅の古木の積りし雪の上に限なをる様、給にも似たらんやうなり、折々彼方の竹むらの夜風にざらつく音聞ゆ、内には梁を走り居る鼠の足音幽になりしと思ふうちに猫にやとられし、一しきり悲しげなるなき聲聞えしがやがてもとの靜さにかへりぬ、

評云、衝趣詩趣、

梅窓のたのしみ

宇都宮　金田久和子

月あれかしと待つ程に窓おしあけてそともを見ればほゝ笑みそめし梅の香ばしく匂ひ顔なうつ高の心地よさに月さえ出でたらむは實にうれしきものぞかしまして戰地より凱旋したる兄等とまどゐして梅が香におぼろ月夜のけしき見がてら戰語りを聞かんはまたこよなきたのしみにやあらむ

梅の便り

出雲　世貝ふみ子

こう梅の花が咲く頃になると滿洲へ行つて御出る兄さんの事が想ひだされるのである、兄さんは梅がお好であつて盆栽やなどに澤山植ゑて何よりのお樂としておいでだ、今日來たお手紙にも「今年も不相變い〻梅が咲いて美しいか」と書いてあつた、何時來るお手紙にでも梅の手入をよろしく賴むと書いてあるので妾は手紙の中へ妾が作つた梅の和歌一首と二三輪の梅の花とを封じて送つてあげた。

評云、梅花不變去年色、阿兄未還在滿洲、

大和魂

埼玉　うぐひす女史

一日戰死者の遺族を見舞ふ、一家皆泣く、憐れ一增、妾も亦涙數降、側に在りし四五歲の小兒ふと起つて玩具の小劍を持ち來りて意氣揚々として曰く「僕大きくなつてお父さんの敵を取るぜ」と、嗚呼美はしき哉大和魂。

樂しき住居

德島　松村幸子

おー雪子如何に世は惰れなくともあたら靑春の汝を此の片田舍に埋めて鄙にうきめのやつれも厭はず、其の働きのまめ〳〵さ甲斐なき母が有ればこそ父のみたまに歸おそろしや。母樣泣いて賜るな世を味氣なく思へばさも侍らむ世を思はれば怨みなく思へば思ひはつきぬもの、母樣と共に住み居る樂しさは春の花咲く其のごと母樣きませ池の邊に映る眞如の月を見んかな。

處女文壇懸賞募集

▲和歌　一人一首端書ニ限ル

▲新體詩　半紙一枚十句マデ

▲美文　廿四字詰廿行以內

▲短文　端書ニ限ル七行マデ

▲消息文　半紙一枚十行限リ

▲小說　半紙十五枚以內

以上題ハ隨意ノ事

賞金規定

●●●●●●●●●●●●

和歌新體詩、短文、の優等者へは左の賞金（圖書切符）を呈す

▲天壹圓　▲地五拾錢　▲人三拾錢

又美文、消息文の優等者へは

▲天貳圓　▲地壹圓　▲人五拾錢

▲秀逸三拾錢

小說の當選者へは

▲甲拾圓

▲乙五圓　現金にて呈す

投稿はすべて女學世界處女文壇係宛にて字體明瞭にすべし

（〆切二月十五日）



詞苑

塚越停春選

（天）鞠　備中　有田たまき

つくまりの音もかすみて聞ゆなり
　梅散る里の春の夕ぐれ

評曰。世には初めて見れば頗る面白く覺ゆれど、再讀三讀し、五讀十讀するに至て、興味索然たるもの少なからず。此は全く其れに反し、一見何の奇もなきが如くなれども、讀めば讀む程妙味のいや増す趣あり。蓋し氣象高く、蕭平たる忠厚含蓄の意を存し、些個の衒氣なきが爲めなるべし。音節亦極めて自然なるを覺ゆ。

（地）朝霞　美濃　山田愛子

津輕の海霞こめたり暦なき
　あいぬの里も春や知るらむ

評曰。高邁の氣象言外に顯著たるを見る。

（人）朝霞　牛込　峯崎白百合

夢と淡き有明月を一しほに
　おぼろに見する朝霞かな

評曰。詩品詩意と共に、春の曙の佳句ふ趣あり。

秀逸

〇〇朝霞　靜岡　西村扶子

朝なぎの磯邊の松をたよりにて
　八重の汐路を曳く霞かな

磯邊の松をたよりに八重の汐路を曳くとは、面白き着想也。たよりの語殊に面白し。

〇〇朝霞　神戸　關谷雪子

見渡せば松浦の沖の朝霞
　もろこしかけて棚曳きにけり

虚なる歌と可申歟。又頻が「竹林叢」、

くれ竹のはやしの中に聞ゆれど
　またふしなれぬ鶯の聲

〇〇朝霞　埼玉　東角井高子

行く駒の影はかくれてこの朝け
　引くは野面の霞なりけり

殆ど遺意遺句の妙を極む。

又讃が鞠を詠じたる歌、

人心まろくあれやとたらちねの
　縫ひし手鞠見ればうれしも　　常陸　田山すゑ

、○○朝霞

さほひめの朝なく〳〵に筑波峯の
　二荒かけて八重霞曳く　　埼玉　新堀仙子

是も雄渾の歌也。

丶○○朝霞

しらま弓生駒の山に朝霞
　春の手綱を引渡すらし

生駒と云ふより、手綱と思ひつきたるもの歟。

丶○○朝霞

夜の神のわすれたまひしれり絹の
　御衣（みけし）と見えて霞む朝かな　　新潟　椎谷うめ

夜の神の忘れたる絹の御衣と見たるが、面白く候。

○○竹林鶯

吳竹の枝に宿りをうきふしの
　よとしも知らで鶯の啼く　　浅草　窪田幸子

亦見るべし。

丶○○竹林鶯

吳竹の世のうきふしも忘られて
　しばし立聞く鶯のこゑ　　伊賀　服部かつ子

人情自ら然り。

讃の朝霞の歌は、

網引する聲の聲して浦々は
　霞こめたり春の曙

○○竹林鶯

吳竹のうきふししげき下道に
　よをうぐひすの聲をこそ聞け　　安藝　松坂梅子

讃が朝霞の詠、

舞ひたゝす女神の裾の小模様か
　霞むあしたの浦の松原

○○竹林鶯

うきふしも知らぬみやまの竹むらに
　何うぐひすのねをや鳴くらむ　　備中　駒井喜満子

流暢。

○○鞠

なか〳〵にうてば手まりの上るものを
　うたれて落る人もありけり　　越後　吉田梅子

○○鞠

もろ人の心を鞠のまろくあらば
　世にあらそひのあらじとぞ思ふ　　信州　高山嗣子

以上二首、共に鞠に寄せて教訓の意を歌ふ。

丶○○竹林鶯

梅もなき竹の林にふしなれぬ里の鶯こゑかぎり啼く　　丸亀　吉田米齋

佳作、佳作。

丶○○竹林鶯

梅の花咲く門をしばし鶯の
　竹の林に宿やかりけむ　　大阪　江口千夏子

ゝ○○竹林鶯

いかばかりうれしき節やこもるらん
　竹村分けて鶯のなく
常陸　菊地峯子

○○竹林鶯

春來れど梅まだ咲かぬわが宿の
　たかむら傳ひ鶯のなく
靜岡　箕浦富美子

ゝ○○竹林鶯

朝つとめ今しはてたる山寺の
　裏の竹村鶯のなく
石見　宮内登美子

以上四首、共に竹林鶯を歌へるもの、異曲同巧とか申す歟。

又箕浦孃の朝霞の歌、

霞より霞にあけて久方の
　光のどけき春の曙

宮内孃の鞠の歌、

たれこめて一人衣縫ふ窓の外に
　思ひ出多き鞠歌の聲

何となく只何となく戀しさに
　手鞠の年を數へ見るかな

○○朝　霞
山城　古川かつ

朝霞大海原を立てこめて
　ひびく聲のみ波にたゞよふ

○○朝　霞
播磨　富原愛子

綱引く聲のみ波に漂ふとは、妙。靄罩めたる狀想ふべし。

舟人もさをさす力や迷ふらむ
　霞棚曳く朝明けの頃

亦好作たるを失はず。

○○朝　霞
深谷　内田可年子

あけて行くはても知られぬ春の野を
　霞のふすまたてしきるらん

霞を襖と見立てたり。

○○朝　霞
松山市　田村幸子

佐保姬の霞の衣まだうすし
　いたくな吹きそ春の朝風

○○竹林鶯
備後　篠原左女

竹に寢し夜中の夢をや語るらむ
　ふしさへなれて鶯のなく

○○鞠
廣島　平岡敏子

歌ひつゝつくや手鞠の數々に
　嬉しかりける昔をぞ思ふ

何れも面白く候

ゝ○○鞠
名古屋　初菊女史

母の膝に手鞠抱きて幼子の
　眠れる窓に白梅の散る

何等平和の光景ぞ。

○○鞠
岡山市　林榮子

少女子がまりつきあそぶ椽の端に
　小猫たはれて日は長閑なり

○○朝　霞
伊豫　渡邊梅子

あさぼらけ淀の川瀨に月おちて
　八幡山崎霞こめたり

眞に淀川附近の歌也。

○○朝霞　　河内　竹内敬子

いつはあれどいづくはあれど霞たつ
　青菅山のしのゝめの空

讀が鞠を歌ひたるものは、

手鞠歌うたひ遊べる乙女子の
　かへりて淋し春の夕暮

○○朝霞　　千駄ヶ谷　瀬津櫻子

もしほやく浦のとまやの朝烟
　春はかすみも立ちや添ふらむ

亦佳。

○○朝霞　　河内　田中八須子

さしのぼる朝日の影のかすめるは
　朧月夜のなごりなるらん

讀が「竹林鶯」、

ふしなれぬ竹の林の鶯は
　けふ古巣をやいでしなるらん

○○竹林鶯　　牛込　池田くめ子

まど近き竹のさ枝に宿しめて
　ふしおもしろく鶯のなく

佳調

●　越後　まさ子

ほのぼのと明け渡り行く川添の堤の柳霞たなびく

●　櫻井　島眞喜子

たちこむるかすみが浦の曙は浪の音さへのどかなりけり

●　下野　金戸貞子

少女子が春の觀とつくまりのいとまとかなる御代のさまかな

●　麹町　むらさき

なにとなくこゝろのとけくうれしきは春のあしたのかすみなりけり

●　名古屋　森井せき子

亡き稚兒のかたみの小まりとり出てゝ哀れ母上何思ひます

●　下野　森てるの

あけぬとやまだかげくらき吳竹のふしどながらに鶯のなく

●　備中　渡邊倹子

むらからすねくらたち行梺のみ霞にのこす朝ぼらけかな

●　名古屋　清水みさを

雪消えぬ竹のはやしに聞こゆなり梅がゝまたぬ鶯のこゑ

●　伊勢　岸田美來

よる波の荒磯崎も名のみしてけさは長閑にかすみたなびく

●　府下　田中千代子

鞠なげに餘念なかりし下髮の七歳の昔しいとゞ戀しき

●　本郷　飯田あい子

大御代の春や來ぬらし朝ぼらけ霞ぞ匂ふ大和島山

●　水戸　榊春子

天地に物音もあらず明けゆきぬ富士の神山うす霞して

●　甲斐　清泉

吳竹の直き節しげきしげみより洩れてやさしき鶯の聲

●　姫路　船戸ゆき子

高砂の尾上の深雪そのまゝに外山の霞今朝立ちにけり
● 千葉　田村よし子

佐保姫の被衣とも見む野も山も霞こめたる春の曙
● 信州　岩間花子

天の糸うづみのこして不二が根はひとりかすみの海に浮べり
● 安藝　堂面幸子

あづさ弓春立田山今朝見ればたな引そむる淺がすみかな
● 愛知　梶田愛子

今朝見ればほのかになりぬ筑波山霞の衣早まとひけん
● 大阪　林すて子

笛にしもきらんと風ふくれ竹にはやふしなれてきなく鶯
● 本郷　平本みち子

まどちかき竹のはやしにやどしめてうきふしなげに鶯のなく
● 名古屋　世喜子

春の神のみ車すさひか野に山に霞たなびくありあけの空
● 熊本　安田文子

思ふどち心も空に打ちはやすテニスに春の日は斜なり
● 北海道　佐々木さわ子

まり歌の主は歸りて春雨に音なくぬるゝくち社かな
● 長門　杉山きくの子

さゝ竹の林にきなくうぐひすの初音に千代のいろもこもれり
● 肥後　松崎あさ子

棹の音をなごりにあまたすなどりの舟かくれゆく朝霞かな
● 名古屋　杉浦昌子

幼な子の手鞠にあきて春の夕奥の一間に母上を呼ぶ

春の色とかすみながらに明け行けば太古に似たり大和國原
● 東京　岡田慶子

朝な〳〵竹の林に花をこめてふしもたがへず鶯のなく
● 熊本　大谷潤

呉竹のふしの間もなく來る春を待ちとふしとや鶯の鳴く
● 大阪　中谷華泉子

朝がすみ春の汐路をたちこめてそこともわかぬ沖つ島山
● 京橋　水川光枝

船歌の聲のみはして帆影見えず霞が浦の春のあけぼの
● 前橋　宮内りき子

くれ竹のすぐなるおくにゆかしくも浮きふし知らず鶯のなく
● 越後　松永葉子

舟歌の聲のみ遠くきこえてはかすむ海原けさのどかなり
● 品川　高橋喜枝子

霞立つ向ふが岡に梅見えて春の日おそし鞠うたのこゑ
● 千葉　鎌田喜賀

をちの山こちの村々見えぬまで霞たなびく春のあけぼの
● 津市　泉子

山も峯も野も林も其のまゝを霞かゝりて朝日さし上る
● 伊勢　藤堂しげ子

なよ竹の直きにこゝろ移してかふし面白く鶯のなく
● 淺草　多田春雄

ふしなれぬ聲を恥ちてや鶯の竹むら深く啼わたるらん
● 河内　櫻井貞子

● 宇都宮　大谷淑子

仰げ今朝君のみいつのいや高き大内山に霞たなびく
● 香川 とみ子

つく手ふとそれてまろびしわがまりに小猫たはれて春日のどけき
● 北海道 加藤登貢子

荒熊の住むてふ蝦夷が笹叢に春しのはるゝ鶯の聲
● 新潟 小菅まさ子

ほの〳〵と富士の高嶺は明け行きて三保の松原霞たなびく
● 小倉 琴子

朝ぼらけありあけの月のかげ白く霞流れりみよし野の里
● 金澤 ゆり子

青柳の糸にも風は見えぬまでのどかにかすむ朝ぼらけかな
● 上野 佐藤露子

朝霞霞めぐりて旅の夜の夢より淡き小野の山里
● 備前 駒井友子

君が代のつきぬためしと少女子が千代を數へて毬つきあそぶ
● 宮城 石森よし

今朝見れば栗駒山の雪にさへ春を知らるゝ薄霞かな
● 紀伊 糸川みち

朝な〳〵茂れる竹のふしどよりゆめ路にかよふ鶯のこゑ
● 越後 梅村秀子

朝立ちの荷馬の鈴のいさましく宿より出で霞に入りぬ
● 兵庫 柳田のぶ子

とし立てど年は立てども妹の手鞠のまりはかたみとなりつ
● 喜多原 瀬津ふみ子

朝日さす竹の林に鶯の聲うらゝかに来てぞ鳴くなる

呉竹の枝を傳ひて今朝もまたふしおもしろく鶯のなく
● 小樽 藤田孝子

鶯のさへずる聲にさそはれて春は來にけり竹の下道
● 岡山 近藤紫子

戦話止み團欒の中に初曾孫の足あやぶくも鞠を追ふなり
● 奈良 中岡まさ

わが籔に鳴く鶯の一聲も去りにしあれの心地こそすれ
● 金澤 小島清見

乙女子が罪なき歌のおもしろくまりもたのしき風なるらん
● 長門 野崎妙子

朝月夜生駒の山にうすれゆきて梅のこずえにかすみ棚引
● 山城 古川よれ子

ひく〳〵なき高くとうたひ竹むらに節おもしろく鶯のなく
● 備後 和田常世

雲のいろはまだ夜ふかしと見えながらかすみて明くる有明の月
● 足尾 森 麗野

ひきわたすかすみの中に鶏なきてわが家わが里朝靜かなり
● 長門 杉山きくの子

待ちたりし其かひありて今朝は又竹の林に鶯のなく
● 秋田 波奈子

筑波根の山の端よけてゆら〳〵と朝日に匂ふうすがすみかな
● 水戸 坂本眞子

くれ竹のすぐなる方にゆかしくも世のうき知らで鶯のなく
● 越後 松永紫子

● 佐賀 藤松りか

君か代の春をほきてや吳竹の千代の音をなく鶯の聲
● 奈良　森西重子
愛らしや舌のまはらぬをさなこがつくまりうたのふしのかず〴〵
● 大阪　田中しゆん子
バイオリンの弓なげすてゝきけるかな竹の林の鶯のうた
● 德島　西野ひさし
春の庭乙女子二人手鞠つく歌の絶間を桃の花散る
● 下谷　太田榮子
枕邊にかゞり美しき小手鞠やちさき主が夢守るらん
● 長州　春山梅子
朝ごとに目なれし峯も春かすみかゝりて今朝の珍しきかな
● 紀伊　梅子
竹取の翁をまれてわけ入れば思はぬかたに鶯のなく
● 後志　大崎たれ
あけぼのの海に白帆の見ゑ初めて包む霞に動くともなき
● 大和　楢かほる子
光琳の繪さながらのながめかな霞たなびく朝の松原
● 麹町　梅子
はる〴〵と訪ふ友垣の宿はなくて竹の林に鶯のなく
● 長門　三宅千代子
眞帆片帆まづ見え初めて與謝の海霞晴れゆく天の橋立
● 水戸　榊八重子
めづらしや世はのどけしと鶯の今朝竹村に初音聞ゆる
● 滋賀　田中とみ子
乙女子の忘れやしけん鞠一つ黄昏の花の野邊に殘れる

● 芝　松山房子
貴人の御くつ拾ひて奉らする御園に又も鞠の音する
● 奈良　森西梅子
音を聞けば梅にちなみの鶯も竹の園生をこひし顔なる
● 大阪　井高いた
山里も春はきつらん我庭の竹の林に鶯の聲
● 但馬　柏村ちか
白波のたつや霞はこもり江の難波の浦の春の初花
● 東京　井上登美子
あさぼらけ霧にうなだる竹間よりまだふしなれぬ鶯のこゑ
● 赤坂　古川義子
まり一つ庭面に落ちて垣根ごしさゞめく子等のこゑしきりなり
● 周防　入千代
うらゝかに竹の葉ずれの音もせでなく鶯の初音ゆかしも
● 千葉　川奈部よし
美しき小鞠くわえて小猫戯るゝあと追ひ給ふ三の姫かな
● 越後　高橋いし子
名もしろき富士の高嶺に眉程のげにうつくしき朝霞かな
● 美作　池田竹代
守はゝや朝のつとめの木魚やみて裏の竹やぶうぐひすのなく
● 下谷　菊池楊子
朝日影やれし障子にてりそひて背戸の竹むら鶯の鳴く

問題の和歌投書は來月より處女文壇の規程に據る

柳體詩（劍花坊撰）

題「雪達磨」「梅」「犬」

天

山口縣下關觀音崎町　すみれ

犬芝居女形には白が爲り

評云、犬の題へ犬芝居を持つ來たとて、それを珍なり妙なりと譽める譯では無いが、其犬芝居へ女形といふ想を着けて、さて女形には如何なる犬を採用するだらうかとの疑問から、女といふものは優美にして白面なるを尊しとするから、犬の白毛の優美な奴こそ之が適役であらうと斷定した句、何の馬鹿々々しいと云へばそれ迄であるが、そこに無限の柳味が有つて、寶曆明和の面影を存して居るのは、撰者の此上も無く喜ぶ所である、誰でも想像が出來ないことでは無いが、さて斯うまで詠みこなすを容易で無い、柳多留の天保頃によく似た句があるやうに記臆して居たから調べたが無い、撰者の記臆違ひだらう、名句として頂戴する價値十分で有る、

地

栃木縣壬生町松本庄兵衛方　松本泉子

立聞を見とがめられて梅をほめ

評云、說明するにも及ばぬ、句意は明了になつて居る、滑稽の句で梅薫る附軒の障子を閉して何かこそ〳〵と秘密話をして居る、或は男女の戀の出會ではあるまいかと、すこしは燒氣味で立聞をして居ると、そこへ障子がガラリとあき、そこに何して居たと咎められ、イヤ別に何でもないあまりに佳い梅だから見とれて仕舞つて、所謂低徊去るに忍びざる者であるなどとぼけるところ、何といふ滑稽だらう、梅があるので、其立聞も非常な罪惡を犯したのでは無いといふことがわかるこれも風流のわざであらう、

人

栃木縣河内郡結島村大字下小倉九七　高橋はな子

ころがして起してそして雪達磨

評云、七轉び八起きは起上り小法師の達磨、鉢卷さしたり轉がして見たりするは棚の達磨である、「さア悟り拔いたと達磨いぢり出し」は川柳の滑稽、我柳樽を齒にすれば必ず達磨の畫を畫くことゝ定まつて居る、達磨といふ名を聞いた丈けですでに川柳めいた感じがする、雪達磨の句は、集まつた句の中で、此句より上に出る價値のあるものがあながち無いでは無いが、いかにも調子が面白くて、其間に一種の哲理を含んで居るところ抔、慥に我新派川柳の特色を發揮したものである、「乙」額を三疊して調子をとゝなへるところ、無い譯では無いが面白い、

秀逸之部

皆一句出さうな顔の梅屋敷　本所　松井比呂子

雪達磨木來木と消えて失せ　馬關　今田きよ子

犬芝居斑之丞とぞ申しける　岡山　横山たき子

雪達磨赤く塗つてと駄々を捏れ　三重　ちどり

雪の庭梅まで下駄が三度行き　尾張　穗積柴子

詩人ぶる廟の君は梅を挿し　越後　鈴木よし枝

襦袢模樣窓に染め出す梅の影　品川　すゞ女

雪達磨あたまの上に下駄のあと　本郷　柴子

犬の子は御菓子買うに一と苦勞　徳島　西野ひさし
坊の智慧ありたけ見たる雪達磨　能登　宮崎清子
いゝ香だと獅子ッ鼻押ッつける　神戸　岡名部こま
梅百株こゝは詩人の家に候　上毛　木暮松枝子
梅が香を探らんかなと盲者行き　麻布　うめ子
兄さんが來て雪達磨出來上り　大阪　三宅倚子
凱旋は梅咲く頃と縫ふ羽織　麹町　梅子
梅の枝でかい扉にひッかゝり　攝津　中馬靜
雪達磨雪合戰の的に成り　日野　入澤吹滿
其あした坐禪を解いた雪達磨　伯耆　入澤治關
曲藝の犬は世界を漫遊し　下總　松田かほる
小使も時に會堂の犬と爲り　越後　坪井わか
嚙合へ雌犬が出ると强くなり　本郷　諏訪貞子

佳句之部

雪達磨子供相應一工夫　鹿島　佐藤菊子
雪達磨拂子も持たず寒ざらし　長府　田阪豐子
闘犬は晴れの勝負にワンと鳴き　高知　岩田いわ子
雪達磨草履の眉毛炭團の目　岡山　横山かめ子
坊ちやんに勝の褒美を尾でれだる　佐賀　西村千代
自轉車の後から吠ゆる田舍犬　越後　木島てう
古物店梅の短冊金五錢　岡山　横山きよ子
愛犬の首輪へ赤いリボンなり　濱松　作美芳枝
あの人は犬に劣るとうしろ指　新潟　惠板きその

犬までが居候には尾をふらず　京都　龜井千代子
犬捨てゝ戻れば犬は戻つて居　大阪　堀尾信子
雪達磨草履二足で出來上り　名古屋　横井なみ子
のゝ樣の梅がほしいと頑是なさ　茨城　酒井いと子
雪達磨おてんと樣に恐縮し　千葉　鎌田壽賀
紅梅は奇麗な鳥を肩にのせ　伊勢　佐野みよし
雪達磨露の干ぬ間の天下なり　山城　古川かつ
盲目は犬がすます植木鉢　長崎　大山さだ子
梅咲いた方へ机を向けなをし　京都　梅園女史
眼の玉に小石二ツの雪達磨　尾張　吉川宗子
早咲きの梅には蝶も不馴なり　赤阪　白染衞門
手に息を吹き〳〵つくる雪達磨　小石川　野村敏子
リーダーの稽古始めに犬が出る　麹町　曉花
雪達磨坐禪豆屋の門へ出來　岡　梅子
黍團子食ひ〳〵犬は御供なり　下關　紫野乃夫子
梅咲いて居るなとそこら嗅ぎ廻り　備中　荒つる子
日がさせば本來空に歸るなり　京都　藤田靜枝
十年一日大西鄕について居り　高松　高橋濱野
かくれたる妾宅犬が嗅ぎ出し　大阪　前川四三子
軍ごとジヨンが御馬の代理をし　下關　今田きよ
日に向いて淚をこぼす雪達磨　山梨　岩岡いその
新米の夜行は犬に吠られる　本鄕　岩岡てい子
封筒に梅花を入れて妾は無事　尾道　中尾民子
お歸りの遲い恨を狆に云ひ　尾張　江崎田鶴子
目の黑いうちが身上雪達磨　安房　中西まさ

門前にまだらの達磨ひかへて居　大阪　六車よしを
往來を睨らんで達磨とけかゝり　館町　はる子
水打ちを犬はうろさく起き上り　讃岐　陶井智惠子
雪達磨東郷さんの顔に似せ　廣島　吉川きぬ
おこじとをお三は犬に八ツ當り　熊野　熊野たまき
雪達磨泣いて目のふち黒うなり　大阪　落合はな
中咲きを肩に上げて得意顔　岩代　阿部つき子
梅の實と聞いて全軍元氣づき　姫路　大竹きく
雪達磨炬燵の坐禪眺めて居　土佐　西尾智惠子
あれおよし天神様の花ですよ　愛知　梶田愛子
旦那様ほんに遇いよ犬の聲　山城　古川米子
坊ちやんの御庭をブチが占領し　大阪　仁木梅子
梅ヶ香に醉つて鶯歌ひ出し　横濱　立川きよ子
鶯が又啼いたので手折りかれ　熊本　田代みつ
雪達磨追々ふとる寒い事　石見　篠田徹子
紅梅を乳母にも一枝搜してやり　近江　林敏子
坊が手でつくるやさしい雪達磨　京都　山里の女
朝日さす達磨は消ゆる坊は泣く　備後　中村保子
犬でさへ恩を知るぞと意見なり　尾道　中尾元子
飛びついて頰をべつたりペスは甜め　奈良　土井たか子
犬の背に乘つてお嬢はかせぐなり　横濱　萬壽子
吠られて可愛人形を撫りつけ　岩代　木多せつ子
炭團屋の親はさせない雪達磨　大阪　かほる
雪達磨大きな炭團目に入れて　姫路　杉山靜子
梅一輪手紙に添へてあなかしこ　同　船戸ゆき子
叱られた尻をお三はポチに行き　越後　木島そう
梅の木に猫が上ると風情あり　伊賀　伊藤國子
鶯様は梅と香木かぎくらべ　三河　紅梅女史
雪達磨威張つて居るは日かげもの　横須賀　中里登
床の梅鶯が頭に歸宅し　大阪　増本くに子

選者吟

初雪に抱える程の雪達磨
紅梅の瓣を坊やが頰へ貼り
犬相撲危うくなると喰らひ付き

次回課題　『歌の會』『紙鳶』『郵便』
〆切二月十五日

謎々

『凱旋門』『燒芋』『ショール』とかけて

第一等

●燒　山梨縣東八代郡一宮村　岩岡よしの

睦じい家庭』と解く、心は『まるくあたゝかい

評云、似た想もあるけれど、其中で第一に出來がよい、圓滿の家庭に燒薯など〻對照が佳いでは無いか、謎も斯うフックリと圓くいくことが出來れば實に燒芋のそれよりも甘いものである。

第二等

●謎 出征前の乳呑兒』と解く、心は『歸って見たら立って居る　本所區石原町五十九　松井こう女

評云、巧みに出來て居るではないか、面白く出來て居るではないか歸つて見たら立つてる杯は新しいよ、解答者の機智に富んで居るだらうといふことも想像されて床しい。

第三等

●謎 お寺の再建』と解く、心は『有志勸化（勇士歡迎）

評云、言葉の上の解では成効したものといふて置く、洒落もあまり善く出來て居ない。

●燒…夫婦の愛」と解く、心は「つめたくなるとまづい　高知　横山まさ

●燒…家庭」と解く、心は「あたゝかいのでいゝ　群馬　木幕松枝

●燒…郵便局の火事」と解く、心は「切手（切つて）燒く　神戸　岡名部こま女

●燒…郵便局の火事」と解く、心は「切手（切つて）燒く　神戸　林みさを

●燒…郵便局の火事」と解く、心は「切手（切つて）燒く　本郷　岩岡てい子

●シ…天秤棒」と解く、心は「肩にかける　下野　月笑女史

●シ…軒端の梅」と解く、心は「ひさしに匂ふ（似合ふ）　豊多摩　光江

●燒…子を思ふ親の心」と解く、心は「あたゝかい　神戸　ゆき子

●燒…兌換券」と解く、心は「おさつとも云ふ

●シ…鬼の重荷」と解く、心は「肩にかける　上毛　かへで子

●謎…理髪代」と解く、心は「刈つた（勝つた）印　福岡　平井つる子

●謎…冬羽織」と解く、心は「絽紗（露西亞）では作らぬ　越後　坪井わか

●シ…赤見」と解く、心は「出るときはいつも肩にかゝる　大和　奥田眞子

●燒…交際術」と解く、心は「寄生（處世）に要資なもの　富山　たか子

●シ…鑄造物」と解く、心は「型（肩）にかける　河内　田中八須子

●燒…正直」と解く、心は「處世（寄生）に入用　横濱　金田たか子

●燒…人氣俳優」と解く、心は「門子（下戸）に好かれる　京都　福澤ふみ

●燒…銀行の火事」と解く、心は「おさつ（紙幣）を燒く　本郷　HY生

●燒…南柯の夢」と解く、心は「覚め（冷め）ぬうち　岩代　菅野和子

●謎…小供のわるさ」と解く、心は「と（月）がない　山口　田坂豊子

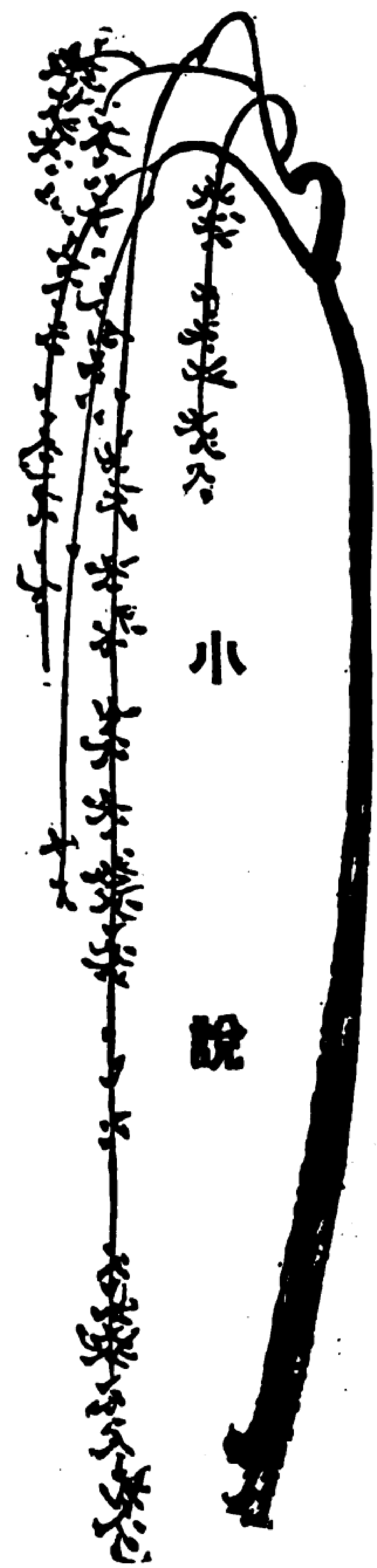
●燒…海水浴」と解く、心は「暑い（熱い）時　横須賀　中里萬壽子

大謎課題

『リボン』とかけて　（〆切 二月十五日）

『稲荷鮨』とかけて

『試験前』とかけて



痣

小山内八千代

宮内家の第三の令息豊香がお付人の、千速が居間と定められた所は、母屋續きの湯殿に隣つて、中庭に添うたお廊下の突きあたり、西向の明るい四疊半で、細骨の二枚障子を開けば、前は霜に凍つた空地の、只見れば何の眺めもないけれど、夫でも住みなれてみれば向ふに結ひめぐらした建仁寺に、去年の名殘の自然生の實の殼が、銀に輝いて風に鳴りつゝ縋つて居るのも其下にいたづら挿しの寒菊が根を付けて淋しげに咲いたのも、毎年毎朝の眺めながら、東へ續いた裏畑に、大根の莖の黄ろい枯れた畝のまに〳〵、蠶豆の葉の新らしく霜を負うたのも、其又向ふに高い〳〵檜並木の美しい造へたやうな枯枝の先に、五ッ六ッばかり小さな葉の散り殘つたのを、間違へては小鳥かと思ひ、いつ迄飛ばぬをいつ迄もながめて、人に呼ばれて心づけば、昨日も騙された枯葉の群と、思ひ出して可笑しかつたのも、其根元あたりから向ふへまだ〳〵廣い空地の中に、根笹繁つて尾花の株の、三ッも四ッも白髮の髪を振り亂してゐるのを、月の良い晩見に出て物好きと笑はれたのも、朝日夕日に檜の影の、長く〳〵横はつた枝の先を、指に押へて影ならぬ枝の何れに當ると言ひ爭ひ、子供らしいと言はれたのも、今の千速には

何も彼も早や思ひ出となる。

此空地に一本一本の緋桃李もまだ咲かぬ、去年あの桃の、枝なりに透間もなく眞赤な花を付けて奇麗だつた其下に、私が豐樣のお帽子を編みながら、ふつと一雄さんの事を思ひだして、斯んな時若し此前へ一雄さんが立つて、千いさん何してるのと仰有つたら何んな心持だらう、夫こそよく小說にあるやうな、書にあるやうな。どんなに極が惡いかしれぬと、氣が付いて見れば何だか浮氣つぽい、自分の腹を見透されたやうな氣がして、頰が火照つて來たので驚ろいて顏を上げたら、夫こそ夢と言はうか幻と言はうか、全くの全くの一雄さんが何時の間にか前に立つて居て、千いさん何してるのと言つた時には、餘り不思議のやうに思はれて私は一時腦がぼうッとして了つた、あの時は桃の咲いてる時、其前の夏、まだ私が普通のお小間使で居た時、豐香樣も最早お三ツだから、お乳の人はお離しになつて、お付人に若い人を内の者から撰ばうといふお噂が立つと、朋輩の方々の樣子が一時に違つて、先は撰れちがひにも別段お聲もかけて上げなかつた人達まで、豐樣豐樣つて騷ぎ出して、お乳の人は彼方でも此方でも何んなにちやほやされたか知れない、けれ共私は夫が何故ともしらずに過ごしてる内、お乳の人からある日呼ばれて、奧樣の仰せで貴女が豐樣のお付人になり升、隨分お氣をつけてあげて下さいまし、朋輩の衆も多い、其多い人達が、一樣に此お役を何がなし得のあるやうに望んでる中故、辛い悲しい人の妬もあるかもしれねど、貴女ならば夫も堪へて下されやう、何分お願ひ申しますよと言はれた時には、私は何うやら、ずんと重い荷を脊負はされたやうな氣がして、まア私のやうな若い者に如何してそんなお役が勤まりませうと言つたらば、イヽエ年の若いのは奧樣のお望み、年寄は萬事に行き屆いては居やうなれど、お子達の時世に遲れる患があるからと言ふ仰せ、夫ならば私よりもまだ若いお方がありませうにと言へば、お乳の人が改まつて、詰らぬ事を言ふぢやありませんか、あれ程お大切に遊ばす豐樣のお付に撰まれたのを喜んでお受

け申さないのは不審な人と言はれて見れば、成程、私も夫しきの事分らぬのではないけれ共、實を言へば私も明々年になればお暇を戴かなければならない身故、先が知れて居ながらお付き申すのも何となく疾しいので、夫でそれとなくお辭退申したのなれど、お乳の人の樣子が何うも腹をお立てなされたやうなのに是非もなく、夫は私とてもどんなに望ましいお役か知れませんけれ共、私も不幸續きでお邸へ上つて、一生御奉公申すとでも言ふのならば、飛び付いても此お役は受けさして戴いて、朋輩衆にもこれ見よがしにお立派にお育て申し度いのは山々ながら、私は兩親も達者なれば又兄とても立派に腕のある商人で、家も朝夕の煙には事かけず、嫂とても優しい人で、私が御奉公に出る時にも可哀さうがつて、泣いて送つて與れた程の人、夫ゆゑ何日何時お暇戴きに出やうもしれず……と言ひかけたらば、分りました分りました、貴女はそんなに言葉を廻してお言ひなれど、夫では貴女は明々年になればお暇をお戴きになる事が分つてるので夫でお辭退なされますな、けれ共其裏にはお約婚の一雄樣とやらが其時は工科大學とやらを卒業遊ばして、夫で新世帶のお美しい處をお見せなさらうといふのに、今からお子持の眞似は嫌だと、斯う言ふ腹でございませう、好うございます、奥樣から伺つて何もかも知つてる私の前でよくものめ〳〵と、餘りですよつてお乳の人が厭だといふのにくすぐるんだもの、夫からお乳の人が又其面目になつて、斯う言へば氣を惡くするかと思つて默つてましたが、實は明々年に貴女がお暇をお取りなさる頃には、奥樣のお里方のお身内のお娘御が豐樣のお付人に上る筈、夫までのお手代りゆゑと、明されて見れば何となく我身の我儘が恥かしく、さう言ふ事ならどうぞ奥樣には直ぐにお受けしたやうに申しあげて下さいと言つて又勝手なお望みと笑はれ、其晩改めて奥樣から朋輩衆へ私を豐樣付きにすると言ふお言ひ渡しがあつて、胸をどき〳〵させ乍ら、其日新らしく戴いた此お室へ歸る道々、お乳の人がそつと肩へ手をかけて、他の奉公人に妬まれぬやう、詰らぬ誇りを受けぬ

やう、私も御四男様をお守りの間合には随分お心もつけませうが、どうか何分お願ひいたしますよと染々言はれた時には、何の譯ともしらず涙が零れて涙が零れて、何うしても止らないで、其儘其晩は開けて了つた事もある。けれ共私は何と言ふ幸福か、別段朋輩の方にも憎まれず、御母様や兄様が訪ねて來た時に、一寸手代りに抱いて下さるのにも、親切に親切に勦つて下すつて、たしか去年の今頃だつけ、お邸へ上つてから二年目に始めて一雄さんが來て呉れた時にも、お島さんが手空だからつて豐様を無理に抱いて下すつていろいろ親切に心づけて下さるから、極りの惡いのも忘れて室へ行つたら、其時は一さんは絣づくめの着物を着て、小倉の袴の新らしいのを穿いて、窮屈さうに座つて居て、家から頼まれたものを默つて出して、一時間も話さず歸つて了つたので、皆様が淡白した方だ淡白した方だつて幾度も賞めて下すつたのが何んなに嬉しかつたかしれぬ。夫から其夏の試験に一さんは何でも月謝の要らぬ……といふとさもしい様だけれ共、何でもさういふ、何とか生になつたとか言ふ事で、一さんの家の小父様も小母様も大變祝つたさうで、一さんは彼んな人だから、何だ月謝が要らないのがそんなに芽出度いのかと言つたさうだけれ共、夫は無理な言分だと思つた事もある。夫から此間久しぶりに尋ねて來て……私は一生忘れない、日も月も年も忘れはしない、其時一さんは制服を着て角帽を冠つて居た、一さんの御父様は家の御父様のやうな武骨者と違つて、意氣な氣の利いた人だから、一さんの洋服の仕立も、私なんかに能くは分らないけれども、何となく好い恰好な、今更らしいが立派な方だと思つたが……、あゝ私の幸福も其時きり、人の身はほんとに何時如何變りゆくものか知れはしない。

其時私は丁度豐様のお供して、裏のお畑から其處の李の下を潜らうとしたら、いつうかの編物の時のやうに、一さんがぶつと立つて居て、千いさんッてお呼びだつたから、私は仰天して、まア如何して？ッて聞くと、今日は用ではないけれ共違つて來た、千いさん忙

しけらや歸るッよつて仰有るから、イ、エ今日は豊樣のお供してる丈で用は少しも有ません、まア室へ入らして下さいッて言つたらば、さう？　あゝ其方が豊樣ッていふのかい、僕は始めて逢ふね、恐ろしい可愛いお子ぢやないか、豊樣此方向て下さいッて、一さんが何の氣なしに、私の足許に彼方向いて立つて入らした豊樣の側へ顔を寄せたら、めつたに人見知遊ばした事もないのに、あの時はどうした拍子だつたのか、急にわつと聲を上げてお泣き出しになつたから、私はどんなに仰天したらう、私がお付になつてからは、一度もまだおむづかつた事はないのにと思つて、ほんとに折角自分が組み立てたものを、根元から崩されて了つたやうな氣がして、俄かに一さんが恨めしくなつたけれ共、何も一さんばかりの故ぢやない、私がつひ豊樣を忘れて一さんと御話したのが惡かつのだと、思ひ直して、一生懸命にお詫び申しあげておだまし申しても、如何してもお聞き遊ばさないで、反りかへつて、厭々あの人厭々ッて仰有るんだもの、一さんにはお氣の毒で、今度は豊樣も餘りだと思つたけれ共、これはお幼さい事なんだから、一さんの方から一寸場所を避けて下されば好いと思ふのに、男といふものはあゝも妙な氣質のあるものかしら。避ける處か押すやうに寄つて來て、可笑しいぢやないか、何が嫌なんだらう、豊樣何が嫌なんですッて、餘計私のお抱き申してるお顔の處へ顔を寄せて、眞面目に强い聲で言ふもんだから、豊樣はなほ〳〵火の付くやうにお泣き遊ばして、厭よう〳〵つて仰有るから、まア情ない、他の人に聞かれても私が何れ程の事でもしたやうで、お乳の人に來られたからつても極が惡いと思つて、一さんも大人げない、詰らないぢやありませんかッて、お畑の方へ行かうとすると、又後から追つて來て、詰らないとも全く僕が一寸顔を寄せた位で、そんなに泣かずともの事だ、一體何が氣に觸つたんです、僕はゆく〳〵千速と一處になつてからも、宮内家の三男は、己の妻が三年てしほにかけたのだといふ事を、言つて見たい、言つたらば何となく樂しからう嬉しからう、空想的な考か

も知れないけれど、而して其後貴君が一廉の名士となつた時までもお互に昔を語つたならばと思つて居た」正直僕はさう思つて居たのに、今逢つて今嫌はれては餘り情ない、坊ちやん、何處が嫌なんです、嫌な處は直しませうツて、あの人も不思議な人、あんなお幼さい方に全で談判でも開く氣で詰めかけるのだもの、夫からさういふ譯ぢやありません、お子供衆だから、何もさう眞面目に怒らないでもと言つたら、子供だと言つても五ッにもなれば、少しは善人か惡人かの感じはあらう、僕は五ッの時自分の腕で家を組み立つて遊んだものだッて……だつて一さんと豐樣とは何と言つても育ちが違ふから、智惠も違ひますと言へば、例へ智惠が違はうとも、人の嫌な處が分る位なら、其嫌な處を指す事は出來さうなものだ、もしも感ちがひなら構はない、僕は機嫌の直る迄歸るまい、此儘歸つては氣持が惡い、夫では僕はもう詰問はしまい、愛して上げやうッて、今度は頻りに御機嫌を取りだしたけれ共、其時の一さんの顏と言つたら、眼を逆釣つて色は眞青に變つて、唇はぶる〳〵震へて、夫だのに無理に笑ふから、私は身慄ひの出る程凄くて恐くて、あゝ私は何といふ不幸福なんだらう、こんな恐ろしい顏をする人を良人に持つのかしらと思つたら、居たゝまれず夢中に又逃げやうとすると、一さんは豐樣の手首を逆さに緊と取つて、豐樣、豐樣、僕は怒らないから笑つて下さい、さア泣かないで笑つて下さい、僕も笑ひますからつて。あゝ其時の聲――顏。思ひ出しても戰慄とする……。豐樣は絕え入るやうにお泣き遊ばすし、人を呼びたくも夫は一さんに對して出來ず、其中に何處を何う來たのか丁度お裏門の處へ來て居たから、其處から無理に一さんを押し出して、夢の樣な氣持で、片手抱きに豐樣をお抱き申して掛金を掛けてる處へ、お聲を聞きつけて、殿樣はじめ御出ましになつたつけが、其時の皆樣のお顏の色と言つたら……あゝ思つても面目ない。

其晩から豐樣は大熱。夫から五日目の昨日までといふものは、夢にも現にも恐い〳〵ッて私の袖をお離し

遊ばさず、やう〳〵昨夜あたりからは御機嫌も直つて、お顏色も好く、お醫者樣も最早大丈夫と仰有つて、皆樣も今朝からはお居間お居間にお歸り遊ばして、ちつとも私に掛念遊ばす方もないけれ共、あの綺麗な可愛いお手首に、一筋丸く一さんの親指と人差指とで握つた痕が眞紫に殘つて了つたのだもの、夫は直りもしやう消えもしやうけれど、私は申しわけがなくて申し譯がなくて、あの痣を見ながら迚も御奉公は出來ないし、さうかと言つてお暇を戴いても、家へ歸れば近々に一さんの處へ嫁かねばならず、夫は私もう如何しても嫌なのだから、如何ぞ遊ばしてと奧樣にお願ひしたらば、夫程迄にお前がいふのならば、何事がなくても今年はお前も下る年ゆゑ、邸に不自由はないのだから、若しお前が嫌でなくば、一年なり半年なり京都の家へ行つて見たら如何であらうといふ仰せ、さう願へれば願つたり叶つたり、どうぞ〳〵さう遊ばしてと申し上げると、側に居たお乳の人が、まア奧樣ゝ貴方もお年若ゆゑさう思召すのも御尤ではあるけれ共、あの晩貴女の御附樣が御詫びに見えてのお言葉にも一雄さんの御後悔の御樣子も確かに分つて、殿樣も奧樣も豐香樣と一雄さんとは今後間違ひのない樣にお顏を合せぬといふ丈の御條件で恨みも何もない事にして、御ゆるしも出るなり又豐樣の方からのお詫びもあつたのだから、貴女一人が夫程迄に一雄さんをお嫌ひなさるのはお氣の毒かと思ひます、此處は綺麗さつぱりと蟠りのないやうにしてお上げなさらなくてはなりますまいと言ふので、奧樣も、さう聞いて見れば私も一圖に千速ばかりを可哀さうに思つたのは女の愚痴であつた、夫に豐香とても只驚いたといふ計りで何の大した事もないといふ診斷でもあるし。痣とても直らぬ事はあるまいから、そんなに氣にかけてお呉れでなくても好い、京都といへば路も遠く、ちよつと逢ひ度いにも遇ふ事は出來ず、夫では私始め豐香にも殘り惜しいから、私の先の言葉は消して了つて、一雄の處へ暫く嫁き度なくば、何日迄此處の邸に居てくれても好のだからッて仰有つて、何にしても一度一雄に逢つてからにした方がいゝから

つて、お乳の人がお使で一雄さんは來て呉れたけれ共、私の方から解けやう〳〵としても、あの人は妙な廻りつくどい口ばかり利いて、十歳にも足らぬ豐樣の事を、羨ましいのお睦しいのと、彼では爪の垢ほども自分の非を悟つた氣色はありはしない、而して私が一さんを捨てゝ迄も、豐樣を思つてる樣な、一さんの事は忘れてゞも了つたやうな……、あゝ男の嫉妬といふものは、あゝも厭な氣持の惡い恐ろしい馬鹿々々しいものかと思つて、ふつ〳〵私は厭になつた、けれ共私は正直を言へば一さんは思ひ切れない、切れないけれ共良人にすべき人ぢやないと其時思つて了つたのだから、何も忘れて了つて昔のいゝ事ばかり思ひ出て暮すのには、どうしても側に居ては駄目だと思つて、とう〳〵明日の晩京都へ立つ事にして了つたのだけれども、發つて了つた後で一さんは何と思ふだらう、たつた今來たあの人の手紙には、又幾つも〳〵詫びるといふ事を書いて遣して、もう決して詰らぬ事は言はぬ、ほんの戯れの積りで言つた事が千いさんの氣に觸つたのだから、今度こそ本當に詫るからつて書いてあるけれ共、私はもう決心した、私はもう一倍、他人の中で揉まれて來くなつて一さんなんかに見下られぬやう、而して、一さんのあの心をも直してあげなければ濟まぬと思ふ……けれども右を見ても左を見ても知らぬ人ばかりの中へ行つて……去かも京都はぞべら〳〵と氣の長い所ださうな、そんな所で私は勤まるかしら、考へれば心細い淋しい。

千速は思ひの夢の糸を斷つて顏を上げる。夕の鐘が弱く顫へて、木枯しがざアツとばかりに垣を搖れば、眞赤な夕日が隣町に有名の大銀杏の骨寒き幹の半よりも下に落ちて、畑續きの荒地を嘗めて建仁寺の脊に光を落せば、一寸位に間を置いては細い影が黃金色に土を這つて、自然薯の殼が又から〳〵と鳴る。

寒菊の花がもう枯れて、白くたんぽゝの蕊のやうにぼやけて、風に吹かれては莖がぎごち無さうに左右に搖て、葉の赤く縮つてるのもすさまじく、早く切て了はなかつたのが酷い事をしたやうにも胸を責める。

「千速さんお上りですよ。」

お湯殿でお乳の人の聲がする、千速は忘れてた浮世に出たやうにはつとして立ち上る。

さう〳〵もう豐樣をお抱き申すのも今夜つきり、しみじみお抱き申さなくては氣が濟まぬと、千速はとつかは室を出でお湯殿の戸を開くと、朦朧と湯の氣が溢れて、お廊下の硝子障子が一度に曇ると、今朝お臺處の婢が惡戲に、お雑巾かけながら息をかけて書いた、眼の大きな鼻の三角の、四角な口から舌を出した恐ろしげな顔が朧げに姿を顯はす。

お湯殿の中には、其湯氣よりも尙白く、大きなタオルに包まれた豐香が、お乳の人に支へられて立つて居て、突然よろ〳〵と千速に縋りつく。

『まア、お暖かにおなり遊ばしたこと。』

其儘抱いて室へ歸つて、暖ためて置いた外のタオルで全然拭いて、眞白なお寢衣を着せかけた。

豐香は色の白い、頰のふくらかな、髮の毛の眞黑な、口元に一ッ大きな黑子があつて、愛嬌の零るゝやうな、眼に張のある、一體を言へば力んだ顔だけれど、今はまた窶れの見えて何處となく女らしく思はれるのを、千速は俯かずうち目守つて、

『豐樣。』

『アイ。』

『豐樣。』

『アノ。』

『なアにとお言ひ遊ばせな。』

『なアに。』

『まア!』

千速は堪らず其手を取つて頰に當てたと思ふと、はつとして離す、豐香は離されたのを千速が常の戲れかと、又其右手を千速の頰に持つてゆく。眞綿に束ねたやうに柔らかな其手首に蜒蜓が廻るかと一筋の靑痣。

あゝ私は心細くとも淋しくとも京都へ行く、そしてあの時の事も、この痣の事も忘れて、幾年か經つてから、美しい御手になつた豐樣に御目通りして、優しい一さんの事を思ひ度い。

『豐樣。』
『アイ。』
『千速は明日お暇戴きましても宜しうございますか。』
『あゝ！』
『お暇と申せばもうお眼にかゝれませんのですよ、千速は見えなくなる人でございますよ。』
『何故？』
『……』
千速は又新らしき別離の情を覺えて、頰に頰を寄せて抱きあげれば、豐香は輕々と抱かれてクックツと笑ふ。
あゝ此方な可愛い方を措て如何して行かれやう、例へ東京に居たとて一さんに逢ふまいと思へばそれ迄。
『豐樣。』
『アイ。』
『あの千速はもう東京に居りませう、而してもう豐樣のお側は離れない事に致しませうね？』
『あゝ！』

『京都から好いお方が入らしても千速をお嫌ひ遊ばしては不可ませんよ。』
『あゝ！』
『けれ共豐樣は何方がお好きでせう、千速と京都のお方と。』
『千速の方が好き。』
『ほんとでございますか。』
『あゝ！』
『千速も豐樣を一番お好き申しますよ。』
『あゝ！』
此時靜かにお廊下を通る人、
『乳母さん？』
障子を開けて、
『おや、まだ此方でしたの、お冷え遊ばすと不可ませんよ、お火燵が出來て居りますよ、はゝゝゝ豐樣。』
『お乳の人は美しく染めた齒を見せて鮮かに笑つて、戯けた顔を突き出して膝行り寄る。豐香が身を捻つて笑ふのを面白さうにも一ツ、

「ばゝゝゝゝゝ。」
「乳母いや。」
「おや。」
豐香は千速に辛き其右手を延べて、千速が頰をそとなしく〳〵と撫でゝ、
「千速、可愛い可愛い。」と笑ふ。
「おやおや、まア。」お乳の人と千速とは聲を合して、
「オホゝゝゝゝ。」
けれども千速が眼には人しれぬ淚が輝く。
お乳の人は眞面目になつて、
「あゝ忘れた、貴女、千速さん、最前一雄さんが見えましたよ、貴女手紙をお上げなすつて?」
「えゝ!」
「夫でね是非逢ひ度いからつてね……夫から私もね、貴女に聞いて見てからでなくては分らないから、兎に角只今は一寸お買物にお出になりましたからつて言ひましたらね、夫では一時間ばかりして又來るからつて、而して、千速は非常く怒つてゞも居ますかつて、心配してお出でゞしたよ。」
「さう?」
「貴女、京都へお出でなさるにしても、もう一度お逢ひなすつた方が可いでせう、奥樣も其方が可からうツてねえ。」お乳の人は眞面目に千速の顏を見る。
千速は俯向いて吐息を仕く。
「乳母や。」
「ハイ。」
「これお湯へ這入つても落ちないの?」
豐香はいつか千速の膝を辷つて、衣の袖口を唇に浸しては、手首の痣の痕きを拭ふ。
「ハイ……。」
「落ちないねえ千速。」
顏見合した二人の女、千速は矢庭に豐香を抱いて、
「乳母樣、私一さん來たら最早發つたと言て下さい、そして私明日の朝發ちます。」
夕の風にまた自然生がから〳〵と生つて、一間一間に燈を運ぶおはしたの足が廊下に忙しい。（了）

處女文壇　懸賞小説

辻占賣

田鶴子

「煙の都と云へど名さへ嬉しき浪花の空、忍ばぬ日とてなきを、去年の樂しみ夏休みにも、あかで別れし我れ、今年の正月休みには是非にも來て机の塵はらひくれ」と、京都なる兄上からの御玉章に誘はれて、俄に思ひ立ちし今日の旅、旅とはいへど大阪と京都、二時間足らずの汽車の中も、母上の御心附け淺からぬに今朝結ひ立ての高島田、俄に氣にかゝる鏡の前、兄様の見玉ひなば、アノお口の惡い兄さま猿芝居のおかるよろしくだなどと例の大笑ひは今から目に見つるやう何だか極りわるくもあり、さりとて今朝結ふたばかりのをと未練もありて、何處やら、マア／＼と皆を驚かして、素見されたくもあり、思案半に母上のけたゝましくせき立て玉ふに猶豫もならず、着物は故と兄様のお土產にいたゞきしをゑらびて、襟を合はす、裾をそろへる、帶を〆める、も一度鏡を見る、やがて母上前に立ち玉ひて「ア、それでよし／＼、車屋の吉さん氣をつけて下され。」「ハイ畏りました。」

横町のまがり角に町内の女房四五人、見送られて町を幾廻り身は早や梅田の驛につきて上り列車へとのり込みぬ。七條に着しは午後四時過車は鴨川の岸をつたひて直馳り、五條四條三條の橋も數へつくして、肌寒き比叡おろしに我も淋しきか、招きがほなる柳の梢に夕日影つめたく、流るゝ水も暮れを忙ぐ風情あり。吉田町なる竹内の家に着けば、車の止る音を聞きつけて下女の松が出むかひ、「マア牧野のお嬢様よくいらつしやいました、お髷が立派で見かはすやうで御座ります」とつく／＼我が頭を見るに恥かしく「叔母様は」と問へば「ハイ昨日から大津の御親類へ」とばかり。いつ

も飛んで出る春さんも見へず、道理で御叔母樣と御一所なるべし、叔父樣なき家の跡には兄樣一人、只今お湯をめしていらつしやるとの松の返事を聞き流し座敷に通て見れば、兄上の机の上は例によりて例の如く、金文字入りの洋書や手紙や雜誌が入り亂れて其中に幾度か朱の入りし論文原稿らしきが、いかにも精神のこもりて貴く見られぬ。其原稿紙の右の角に立てられたるはわらはの寫眞、少し恥かしくうつむきて寫したるが、恰も論文草稿を讀むらん姿、やがてはと未來の樂しき夢早や頰に上りて我ながら顏の赤らむを覺へぬ、兄樣の來まさぬ內にと雜誌は雜誌、洋書は洋書とそこそこにかたづくる折しも、庭に一輪早咲の梅机上の花瓶にとはさみもつて庭下駄はきしもの丶、もしやこ丶ろざしあだとなりて大切の梅なる故折りて叱らる丶こともあらばと思ひとゞまりて、かたへの水仙三四本瓶にさ丶んとするとき、下駄の音ゆたかに兄樣歸り玉ひぬ。わらは丶思はず花もそこ〳〵に、次の室へにげ込めば斯くとも知り玉はぬ兄樣の、眞面目に手拭と石鹼を松に渡し玉ふに松の突然オホ丶丶丶丶と笑ひ出すに『己の顏になにかついてるのか』とたづねたまへばいよいよ高く笑ふ其をかしさにこらへかねてわらはもオホ丶と襖の影よりかけ出で『兄樣新年はおめでたう』『やッ靜枝さん、いつきたのちつとも知らなかつた一杯喰つたチー』とやがて三人大笑ひ。『ヤア是は何流といふのだよく生けてあるチ』『アラ兄樣いやですよ是は牧野流といふの』『フン牧野流か』と花にそ丶がれし御目を直ぐ一直線にわらはが頭から帶から着物に、『いやだわ』と思はずさしうつむけばオホ丶丶丶と松の高笑ひ『松おぼへておいでよ』

偶の來訪に叔母上居たまはず淋敷となれば、兄樣はいそがる丶卒業論文の起稿も今夜は一夜休みとして何角とわらはがためにつとめたまふ。先づ此方から註文の熊野を見事に謠ひ玉ひしのちは、兄上より春さんの琴持ち出で丶千鳥の御註文、夜は靜に心は淸らかに快く、兄上のさしむかひに座り玉ひて、此時許りは大眞面目に耳をそばだて丶一音の微ものがさじと身構へ玉

ふに、妾も一生懸命、百千人の聴衆の前に奏づるよりも遙に興深く爪音も何時もより澄へて聞へしは、心なき下女の松までが仕舞事の手を止めて臺所のひちりんの火消ゆるも知らで板の間につッたち、片手に茶碗片手に布片を持たまゝ、立往生をさゝれましたと『通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜ねざめぬ須磨の關守』と唱ひ納めると直ぐ座敷に飛んで來て『マアお孃樣のホントに、ホントに、今晩のは何といふ好い聲でせうね』とわざわざキチンと兄上の後に座つての賛め言葉にも知られたり。やがて三人鼎に坐りて花合せトランプ等遊びの興も果て夜もおひ〳〵更けゆき十一時にも近かるべく伯母樣は明日ならでは歸りたまはず、兄上の早や眠げに見ゆるに、蓐など松に差圖して敷かせ、お寢衣のほころび等針とりまゐらすれば、何となくはや高島田を丸髷に結び直したる心地せられ、例の空想むら〳〵と起りて言葉杜絶へ物淋敷折柄、バラ〳〵と窓の障子に音づるゝ雨『アラッ』と立ちて引あくれば、今まで澄へ渡りし空に何時のほどよりか群雲たちて星をのみ、月をのみ、梢に月を宿したる梅もあやなく、庭の葉蘭に聲たてゝみぞれ交りに時雨なりけり。

折柄表に『運氣緣談戀の辻占』と細き聲『兄さん辻占を買つて見ませう』『なんだつまらない』と一口に消さるゝを、何故か無暗に心にかゝる今の聲、幼かりし時無二の仲よしなりしおはなといふ自分が乳母の一人娘、其後絶へて消息なかりしが此間、京都で辻占賣るを見たる人ありと聞きし時、亡き乳母の事ども思ひ出して涙ぐまれ、京都に行かば是非たづねてと、當てもなくこひしがりしを、今の賣り聲もしやお花ではなきやと、其女見たさの念とゞめ難く、物數寄と笑はるゝを強て松を走らせて自分も門口に立ち出でゝ見れば、傘もなければ俄の雨、手拭に凌ぎしとおぼしくぬれそぼちて、頭重けにうなだれて近よるみめも賤しからず年は廿五か六か、うすき半てんの背にふくよかなるはねむれるおさな子、穴だらけの毛糸のづきんのなかに罪なき夢をつゝみて、小さき息に鬢のほつれ毛のゆらぐも寒氣なり。『お前さん此暗いに雨さいふり出してさ

ぞ難儀だろう暫時こゝで休んでおいでよ。』『へイ難有御座りますが是丈賣つてしまひませんと』と辻占出す手にポタリ一雫辻占の紙はぬれたり『お前さん如何かしたの。』『エ、不調法いたしました』と更にとりかへんとするをとがめて、よく見れば、慥に女の目は涙にうるほひて保ちかねたる雫は頬を傳ふあやしさ『お前さん何處か惡いのお腹でも痛むのではないの』とたづぬれば女は長きまつ毛をしばたゝきて『まことにすみませんつい思ひ出されまして』と泣く樣のたゞならず庭の小笹がおとずれの音ひとしきりはげしくふく風雨戸にあたりて物すごきに、女の青ざめたる顔更に愁まさりて、今はゝやたえがたふ、辻占もつ手もかすかにわなゝきて、足もと覺束なく、是をみぞれまじりの雨の中につき出しやりて、背なるおさな子の夢やぶらん事我心よはき身には罪おかすやらん心地せられて、松の澁面もなにかは、女のあまたゝびいなむを強て玄關に腰かけさせて、とりあへず火鉢にあたらせ、ミルク、チヨコレート、等心を入ていたはれば、女はうれし氣に兩眼涙あふれて言葉なく折柄臺處よりかけつけたるジヨンの見なれぬあやしきものと見てとりて、例のけたゝま敷ほへたつれば背なる小さき夢は忽ちやぶられて、ワツと泣き出すに、立ちよりて抱きやればニコニコしてあかつきたる中にも、座にそまぬ兩眼涼しく我を見る可愛さ、あはれうすき衣に手足は凍るばかり手近の松が肩掛につゝみやり、ミルク等與ふれども、矢張母の乳戀しげに見回すいじらしさ、女は側に見る松の手前心ぐるし氣に、おさな子をかい取りてホツト一息、肩掛勿體なしとておしかへしふくまする乳房やせたり。假ひ是がたづぬるおはなにあらずとも辻占の紙よりうすき人ごゝろ、情なき世を何處に送るかといよいよ案思らるゝはおはなの身のうへ。風稍靜まりたれど、雨は小やみもなく、かゝる夜にさまよひたりとて、火かげのもるゝ家さへなかるべく、女の一人や二人は臺所の隅にでもとおちつかせて、さてきくともなしに女の涙語り、あつき雫は幾度か、おさなき頬に落ちぬ。

名はすまとやら、あづさゆみ春の夢は蝴蝶の一時、さめてははかなしうき世の定め是非なや、すま子が袖におく露の雫、語らばこゝにも涙川斯る人もある世なりけり。

若き血汐のわきかへりて、青春の戀にあこがれし身の、其昔忍べば寒き夜半の床結びしきのふの夢の跡御覧下され、何たる不幸ぞ此子生れて兩親の揃ひし温きはぐゝみの味を知らず、僅に辻占賣りて其日の煙どころか燒芋一つさへ買へぬ時もある此母の乳なれば、ゆたかなる筈もなけれど別に風もひかず病氣もせず、生れて二年、やう〳〵此頃二足三足歩きかけしを、父親に見せたかりしを、力一杯はぐゝみし甲斐もなさけなや、夫は豫備の二等卒開戰早々召されて出征し二三回は無事の消息もありしが、去年の春奉天の戰に滿洲の露と消へて萬事休みぬ。今も今此横町にて年も似たり夫の姿其儘の一本線の二等卒、明日は我子のかほ見らるゝことかと笑ひながら樂しげに語りながら行きすぎし三人の凱旋兵士、嗚呼我夫はなにとてかへり玉はぬ、此子見たくはなきか、此私を、とつもる恨もしら雪の富士の高根に雪は消ゆとも、とくるひまなき私が此むねいつの日いつの代にとけましよう。

國は遠し九州の片田舍に、兩親はなし兄弟はなし、唯一人の義理ある姉はあれど、生れてまゝしき母の手にかけられ愛といふもの味知らぬ身に、十八の秋のくれ、ちる花に心あらば流るゝ清水に情ありとは新らしからぬ言の葉ながら、八重の汐路のわだつみまでも、からきうき世の荒浪を、如何でともに越すべきものゝありともおもはねば、初めのうちこそ柳に風と受け流せしものゝ、現在從弟の親友ではあり、日をふるにしたがひていよ〳〵其眞心も見へ、たゞならぬ親切の數數、つひほだされては其人にくからず、罪と知りつゝ熊本の七軒町、伯母の元に預けられ居し身を以て、大膽にも人々の目をぬすみて、ちぎりかはせし二人の戀夫三年の義務濟みて、歸國の頃ははづかしや、此子の五月といふ、世間はれての子ならば、祝の帶さへするほどなるに、不憫や此子、お腹の中から不仕合者、

といだきしひざの子たへがたう見つめては又涙なり。

今日も思案にくれの鐘、いく度か數へしのちは無分別にも恩ある伯母に一言もあかさで、さすがに涙にくもる目にゆるして下されとばかり、夫の國へ、其後の私、樂しと思ひしは唯の半年、たつかたゝぬに夫は出征、殘るは鬼のやうな姑に兄夫婦が子供二人、夫なきのちの姑兄嫁、氏も素性も知れぬ女出てゆけがしの朝夕の振舞言葉、いく度か袖に涙の雨をつゝみて、海士の子のぬれにぞぬれし此袂も、乾らぬ色の我眞心夫にほめてもらひたさに、忍び〳〵し甲斐もなく滿洲の嵐に散し夫が跡追ひ度にも此子の不憫さに、少しの知るべを便りに、流れ越し鴨川のほとり、情なや其人は何處に行きしやら、文字なき身の常日頃、便りせざりし口惜しさ、さりとて歸らん家もなく、何處をあてどしら雲の、雨ふらばふれ風ふかばふけ、天にまかせし親子二人を、鬼ばかりもなき世かな、或る人の親切に毎日辻占賣りて、やう〳〵命拾ひはするものゝ、朝夕に智恩院の鐘の聲諸行無常は我ためか、是でも名譽の戰死を遂げしものゝ妻かと心細く、末は如何なることやらん、寢られぬ夜半もありそ海の、濱の眞砂の數にかなしき女の長物語りに夜は更けて同情の涙に袖しぼりつゝ、今は早や慰むること葉も知らず、銀貨いくつかとらせて、あはれに影うすき女の姿見送りし時は風もおさまりて、うどんやの聲かすかに、吉田山に鳴くかつこ鳥の思ひ出したやうな一聲、あとは淋敷、いつのほどよりか傍に松のいびきのみ高し。

（乙賞金拾圓　兵庫縣西ノ宮姓不詳田鶴子）

田鶴子の君に賞金贈呈致し度至急住所姓名御一報あれ

▲水彩畫帖　（大下藤次郎氏）

元來水彩畫帖なるものは印刷の困難なると費用の嵩むとを以て容易に企てられざるものなるが水彩畫に熱心なる氏は今回一書肆と相談して畫帖出版を企て試に夏の漁村、秋の多摩川の二圖を印行されたり、二圖共色彩鮮麗從來雜誌の口繪等に有觸たるものとは大に趣を異にして眞に肉筆に接するの思ひあり。

千手曲

停春樓主人

前場　春宵宴

（上）門外

場所は、鎌倉狩野介が屋形の門外。

時は是れ元暦元年四月二十日。終日雨。若葉の陰に遲櫻のまだ散り殘るあり。

樂座合唱「とても散る色にはあれど遲櫻、仇し雨には濡らさじ、と掩ふ若葉の袖屏風、嵐待つ間の暫しが程も、守るは春の心なるらむ。

巡警の武士、左右より登場。

甲「これは〳〵方々、御役目御苦勞に存じまする。雨も一入降りしきれば、」

乙「暫くこれで、」

丙「休息致さうでは御座らぬか。」

丁「其れが宜しう御座らう。去り乍ら方々、御同樣に大切な預り人警固の役。今此の鎌倉は靜謐なれど、西國は當時源平合戰の眞最中にて、平家へ心を寄する輩何所に潜むか料り難い。かまへて油斷は大敵で御座るぞ。」

皆々「如何にも左樣で御座る。」

甲「其れはさうと、聞けば今日は君（頼朝）の御諚により、羽林（中將重衡）にも、御湯引かせられ、今宵又徒然の御慰めにと、御酒宴の催しもある趣。何と方々は御聞及び御座らぬか。」

丁「其通り我等も聞及で御座る。其れに就ても、武士の情けは、また格別の儀で御座るな。」

皆々「其りや又何故で御座る？」

丁「何故と申して、敵ながら斯樣の催しは、流石我が君で御座らぬか。羽林も羽林、平家の中にて、此卿ばかり人も懷き、故入道殿（淸盛）の覺えも取り分け愛でたかりしは理り、逝ぬる日、我が君へ の御對面、我等遙に見申したが、天晴れ健氣の御振舞は、ほど〳〵感じ入つて御座る。」

皆々「何とお言やる、貴所には逝ぬる日の御對面を正しく見られたとな。」

丁「如何にも見申した。」

皆々「こりや面白い。其日の御模樣、一通り我等に御聞かせ下さらぬか。」

丁「易い事で御座る、去らば是より物語るで御座らう。

さても去ぬる彌生の末つ方、三位中將重衡の卿、梶原平三殿相具して、伊豆の國府へ御着也。折節君北條に御座あれば、急ぎ伴ひ參らせて、二十八日の御對面。中將其日の打扮は、引立烏帽子に、藍摺の直垂着。惡びれもせず參上ある。君は澁塗りの立烏帽子、白の直垂、空色の扇を持ち、靜々と御着座にて、梶原殿を使とし、是迄の御下向、思ひも寄らず有難く悅び入て候也。賴朝、故入道殿の御恩、山よりも高く、海よりも深く、罷蒙りて候へば、御一門の事露疎かならねども、朝敵とて追討の院宣を下され、私ならねば力及ばず。斯樣に思ひ寄らぬ世の習ひにて候へば、程なく屋島の大臣殿にも見參に入ぬとこそ覺へ候へ」と、仰を承けて梶原殿、羽林の前へ跪り、申し傳へむと致されたれど、羽林は遙に我が君に申す樣「一門運盡き都を落ちし上は、西國にて如何にも成るべき身の、是れまで下向、心外に存ずる也。實故入道の芳恩思し忘れさせ給はずば、疾く〳〵頭を刎ねらるべし。熟ゝ事の心を案ずるに、湯王は夏臺に囚はれ、文王は羑里に囚はる。上古猶此の如し、况や末代をや。王者又遁れ難し、况や凡夫をや。就中我朝は、源平の兩家、昔より牛角の將軍にて、帝位を守護し奉り、互に狼藉を鎭めたり。然るを重衡、一の谷にして討るゝにも非ず、逝るるにもあらず、誤て虜れと成り、再び故鄕に憂名を流し、今此の耻を蒙る事、昨日の人の上、今は我が上に懸りたり。身の耻に似たりと雖、弓矢取るもの敵に虜るゝ事、其先例なきにしもあらず。只御芳恩には、急ぎ頸を召されよ」と、健氣の一

言。並み居る大名小名達、皆涙をば流したり。」

甲「何と方々、聞かれし乎。」

乙「いしくも申されたるもので御座るな。」

丙「弓矢取る身は相身互、」

丁「羽林の健氣さ、」

甲「我が君の御情け、」

皆々「こは一對の美談で御座らう。」

乙「斯くも大切の預人警固するからは、」

丙「我々としておろそかには成らぬ事、」

丁「いざ〳〵是より。」

皆々「一廻り廻つて參ると致さう。」

退場。

幕落ちて、宴席開く。

(下)　宴席

狩野介屋形の一間。菅の根の永き春の日も、雨に暮れて燈火あり。

樂座 甲唱「朝に雲の上の花と榮え、暮に楚囚の孤怨を泣く、本三位中將重衡卿。

羽林重衡登場。

樂座 甲唱「一たび都をゝちこちの、行衛も知らぬ旅にさすらひ、西海の船の中にして、雲井の月を眺めては、都の空を餘所に戀ひ、雁の行く手を慕びては、誰が玉章の文字が關、留めもあへず逝く人の、恩賜の御衣の移り香に、昔を泣きし宰府の秋、屋島の浦の梶枕、鎧片敷く假寢の、夢路に通ふ小夜千鳥、聞きてわびしを、今は又、鳥が啼くなる東路の、逢阪の關名のみにて、粟津が原のあはたゞしく、打出の宿を立ち出でつ、長汀曲浦の春の旅、翠柳空しく情を惹き、落花馬蹄を趁ふといへども、春の風さへよぎて吹く、まゝならぬ身を奈何にせむ、袂をしぼる野路の雨、涙に陰る鏡の山、不破の關屋の板庇、惠みの露に濕るゝ身は、行衛や如何に鳴海潟、昔男の韓衣着つゝ馴れしと詠めけむ、其八橋も徒に、蛛手に物を思へとや、濱名の橋を打渡り、又越ゆべしと思はねど、小夜の中山あとに見て、宇津の山邊のうつゝとも、夢とも分かず行く駒の、脚に任する蔦の道、たどり

たどりて清見潟、清き其名は汚さじと、ふりさけ見つつ、不二が嶺の、み空を焦す夕烟、千々の思ひに燃ゆるらむ、此や是の、戀をば瘦ぬべしとこそ、歌はれにけむ足柄の、關路を餘所に伊豆の府や、心ならずも幾夜さを、明かし暮せば、星月夜、鎌倉山に何時か來つ。松吹く風も敵の聲、窓を打つなる春雨さへ心に碎くばかり也。

此間重衡振事

重衡朗吟『勝敗は兵家も期すべからず。榮華は由來春の夜の夢。たとへば運盡き力窮りて、身は虜はれとなるとても、あながち武門の恥ならねど、電光石火の假の世に、惜しからぬ命を生存へて、西海の波に漂ふ一門の、武運の末を餘所に見る、拙き果報ぞ恨みなる。死すべき時に死せずして、なまじいに情ある敵の手に渡り、世に辛からぬもてなしを、受くるも武道の本意に非ず。唯何事も宿業のなす所、力を竭し命を待つ、外にせむすべあるべきや。』

樂座甲唱『折柄降り添ふ雨の音、孤囚萬里の旅の身は、只斷腸の外ぞなき。

重衡感慨のこなし

樂座乙唱『窮鳥懷に入る時は、獵夫も之を殺さずとかや。君の怨敵、父の仇、恨み重なる中ながら、生死の自由を失ひし、人に辛きは武士ならず、恨みは恨み、仇は仇、運命拙き人の上、誰か一掬の涙なからむや。

主人狩野介宗茂案内にて、武衛朝賴の使者藤判官代邦通、工藤一臈祐經、官女千手前を伴ひ、引續いて狩野介が家子侍、瓶子肴杯を持ち登場。

宗茂『吾が君兵衛佐殿より、御使者にて候。』

邦通『遙々邊土へ御下向と云ひ、殊には終日雨の御徒然、聊御慰め申上げたく、吾が君の御諚に由り、藤判官代邦通。』

祐經『工藤一臈祐經、此なる官女千手の前を相伴ひ、』

邦、祐『乃ち參上致して候。』

重衡『さては佐殿より此の重衡を慰めの御使にて候か。重衡今は虜はれの身、敵の慰めを受くべきに

らあねども、武士の禮を以て待たるゝからは、敢て辭むべきにもあらず。佐殿の御芳志、重衡身に取りて祝着に存ずる所也。

千手「東路の埴生の小屋のいぶせきに、幾日の宿り重ねさせ、御夢安き夜もあらじ。せめて今宵は御心の、紐もとく〳〵一獻を、まげて過ごさせ給へよかし。」

宗茂「侍共、瓶子を是へ。」

侍「畏こまりて候。」

樂座乙唱「千手は瓶子取り上げて、酒三獻を侑めつゝ、

千手「此は東の鄙乙女、花の都の貴人を、慰め參らす術とては、いざ白雲の立居さへ、慣はぬ賤が身にしあれど、君が千歳を祈るなる、心ばかりを酌みて給べ。」

祐經「祐經とても、其昔小松内府に伺候して、屢見參に入りし身の、有爲轉變の慣ひと云へ、遠き東に今宵しも、又見參に入らむこと、人の上とは思はれず、御痛はしう存ずる也。祐經斯くて在るからは、惡しう計らひ申さじ。御心置きなく、一夜さの憂さを霽らさせ給ふべし。」

樂座乙唱「と、共に慰め參らせつ、酌さし置きて千手の前、朗詠の聲清しくも、

千手朗詠「羅綺之爲二重衣一、妬二無レ情於機婦一。管絃之在二長曲一、怒二不レ闋於伶人。」

樂座乙唱「と、二度三度返したる、聲も調べも調ほり、氣高かき姿一入に、愛を籠むる遠山の、眉は新月の秋を低れ、紅匂ふ眼元の潮に、春の淡雪消え敢へず、觸らば落ちん風情也。

樂座甲唱「中將心も打解けて、

重衡「長曲の闋らざるを怒るとは、永日ながら湯引かせて、夜さへ又、長々と、酒勸むなる其れをだに、情無しとの心かや。湯も酒も我が心より起らねど、折柄優に聞ゆるものか。去り乍ら、北野天神此句を遊ばして、此を詠せむ所には、我魂行臨み、其人をばし守らむとの御誓。神明にも、佛陀にも、見放されたる重衡が、其助音は憚りあり。

佛道成るべき事あらば、さも有りなむ。」

樂座乙唱「と、宣はすぞ、千手はやをら取り敢へず、

千手「十方佛土中、以二西方一爲レ望。九品蓮臺間、雖二下品一應レ足。雖二十惡一兮猶引接、甚レ於二疾風之披一雲霧一。雖二一念一兮必感應、喩三之巨海之納二涓露一。」

樂座合唱「朗詠の聲朗らかに、中將も助音しつ、歌ひすませば、祐經も、今様の節面白く、共に興をぞ添へたりける。

祐經今様「極樂ねがはむ人は皆、彌陀の名號唱ふべし。阿彌陀佛々々、南無阿彌陀佛、阿彌陀佛陀佛大悲阿彌陀佛。」

重衡三たび受けて、杯を千手に賜へば、千手之を邦通に讓り、四五人取渡しある。

樂座合唱「狩野介は指圖して、纐纈の袋に入りたる琵琶一面、錦に裹む笛一枝、皷も共にさし置けば、中將横笛手に取り給ひ、工藤は皷、千手の前は、琵琶掻き抱き、月の面半遮る雲の袖、潯陽江の昔さへ、坐ろに懷ぶばかり也。

重衡侍の持出す笛を取り、祐經は皷、千手は琵琶を取りて、音じめす。

重衡「いでや一曲の五常樂を吹くべきぞ。是れ重衡が後生樂!」

五常樂合奏。

重衡「是よりは皇麞急、重衡が身の往生急と覺えたり。」

皇麞急合奏。

重衡「倚も吹かなむ廻忽は、百年の浮世の旅路何時か果て、つひの泊りの墓へ行く、野邊を送葬の一曲ぞ。此も我が身にふさはしや。」

廻忽合奏。

樂座合唱「斯るが中も春の夜の、早しん〳〵と更け渡れば、樂の調べの音も冴え、隙漏る風の身にや浸む、是れ今生の思出と、吹き澄ましたる其人を、今眼の前に見遣りては、流石にも、猛き阪東の武者さへ、袖をしぼらぬものぞなき。

何れも悲傷の思入れ。

樂座甲唄「重衡感慨の涙を拂ひ、千手が侑むる盃を、なみなみと引受けて、悲壯淋漓の聲張り擧げ、

重衡朗詠「燭暗數行虞氏涙。夜深四面楚歌聲。」

樂座甲唄「と、二度返して朗詠す。拔山蓋世の項王が、千古の恨も、斯くぞと思ひ知られたり。

重衡浩歎。

樂座乙唄「邦通、衣紋かいつくろひ、

邦通「今宵もいたく更ぬれば、今は御暇賜はるべし。」

皆々「お去らば。」

重衡「去らば。」

樂座合唄「去らば〳〵と人々は、打連れて起つ村千鳥、跡白波の其れならで、殘るは雨の音計り。

邦通以下退場。

樂座甲唄「重衡卿は茫然と、起ち上らむとする折しも、

樂座乙唄「引き返して工藤祐經、宿衣を捧げ千手の前、

千手「宿衣一領、進め參らせよとの仰ごとを畏み、千手再び御前に候。」

祐經「邊鄙の士女、還て其興あるべき歟と君の御諚、乃ち白川の長者が娘千手の前を伴ふたり。此の鎌倉におはさむ程は、御心安う召置かせられ、然るべう存ずる也。……それ千手殿、心を籠めて御介抱申されよ。」

樂座乙唄「と、千手を前に押し遣れば、はつと計りに手をつかへ、言ふべき術は白妙の、玉を欺く襟元に、こぼれ掛りし丈なす黑髮、亂れて物や思ふらむ、赤らむ顏に百千々の、心を語る燈火の下、おもはゆげにぞ見えたりける。

祐經「身は御暇を。」

樂座乙唄「と、工藤祐經、千手も共に起むとするを、

祐經「御身は此處に。」

樂座乙唄「と、押止め、心殘して入りにける。

祐經退場。

樂座乙唄「跡見送りて千手の前、取り付く島とて荒磯の、浪に揺らるゝ蜑小舟、行衛も知らぬ心地して、ひとり思ひにこがれては、見て水鳥の起ちて居つ。

是より千手振事。

樂座甲唱「一樹の蔭の雨宿り、花の雫に濡れ初むる、其れも他生の緣しとや。此は相敵の中ながら、雨や霰と隔つなる、人も落れば、溪川の、同じ流れを掬ぶ身の、世に棄て難き物思ひ。

是より重衡亦起ちて、二人振事。

樂座合唱『木石ならぬ重衡も、落花流水情なき人にあらねど、去りながら、思ひ廻せば、迚も世に生存ふべくはあらぬ身の、あだし契りを爭でかは、結びて人に亡からむ後、あやなく物を思はせじ。風に柳の靡くと見せて、心移さぬ翠りの色の、辛き情けは神ぞ知るらむ。神ぞ知る。

二人左右に分れる。

樂座合唱「ふりさけ見れば降る雨も、何時かは知らず小止みして梢に殘る二十日の月。

千手『我が袖の涙に宿す影ながら、手にも捉られず片破の月。』

重衡『片破の月の身なれば西へ入る、山の端をのみ思ふばかりぞ。』

樂座合唱「山の端をのみ思ふなる、其月影の入りもせで、夜はほの〴〵と明け渡る。

二人宜しき所に立ちて、幕。

後場　墨染衣

場所は、千手の尼が庵室。

時は、中將重衡が南都に斬られてより後三年の六月二十三日、即ち重衡の第三年忌也。

樂座甲唱「逝くもの日々に疎しと、誰か謂つし。世を五月雨のふるにつけ、袖の涙の色添ひて、花の衣は何時しかに、身も墨染の尼法師。

千手の尼、手向の草花を携へ登場。

樂座甲唱「無慘や千手の前、今年二十の上はまだ、盛りを三つの花の面、桃李の粧ひ濃やかに、鎌倉中に歌はれし、昨日の姿引換へて、霓裳羽衣の舞の袖、苔の衣と變りては、雲臺華閣の春の宴、一夜の夢と覺めて今、松風蘿月冷かに、香烟洩るゝ窓の戶を、敲くは峯の嵐のみ。柴の樞の明暮の、心に懸るものとて

ば、只白雲の幾去來。甍破霧燒二不斷之香一、戸落月挑二常住之燈一てふ、其朗詠を目のあたり、行ひすまして居たりける。

此間千手の尼振事。

千手獨吟「思へば涙の露ながら、籠めて折りにし心の色の、匂ふ夏野の花一枝、いざ亡き人に手向けなむ。」

千手草花を佛前に手向け、會向する。

樂座乙唱「思ひは同じ伊王の前、

平六兵衛が娃女伊王の前、同く尼姿にて、花道より登場。

樂座乙唱「年こそ一つ後れたれ、彼に櫻の色あれば、此には梅の香も深く、同じ東の花なりし、花の姿を染め更へて、墨の衣、今はしも、あやめも分かぬ皐月闇、言ひ合はさねど郭公、同じ思ひを空に啼く。過ぎにし春の面影は、懐ぶに餘る立姿、花立花の花の下、昔床しき香や匂ふ。

此間伊王の尼振事あり、舞臺に來る。

樂座乙唱「伊王の前は寂寞の、柴の樞にたどり着き、

伊王「千手殿の庵室は此にておはするか、伊王是まで參りて候。」

千手「何、伊王殿の見えられしとや。折も折とて今此處に、音づれ給ふ不思議さよ。」

樂座甲唱「千手は庭に下り立ちて、門の戸開き、

千手「伊王殿。」

伊王「千手殿。」

二人「思ひも寄らぬ互の姿、變れば變る世に逢ふものかな。」

樂座合唱「變れば變る世に逢ひて、變る姿を見るにつけ、先立つものは涙のみ、暫し言葉はなかりける。

二人愁傷のこなし。

樂座甲唱「氣を取り直し千手の前、

是より千手起ち上りて、振事となる。

樂座甲唱「思ひ廻せば春の夜の、雨にかなでし琵琶の曲、虞氏が涙の其れならねど、果報拙き其人の、昔を泣きし其夜より、

千手「一年餘り宮仕へ。」

是より伊王起ち上りて、振事。

樂座乙唱「妾も共に呉竹の、一夜々々を隔てゝは、

伊王「人をいさめの夜の伽。」

千手「過ぎし世をしも懐ぶ身の、詩歌管絃の故事さへ、語り明しゝ夜半もあり。」

伊王「何時かは春の花の色、世をば紅葉の秋の香の、いづれ哀れは人の上、數へ暮しゝ時もあり。」

樂座甲唱「生死流轉の海の上、波に搖らるゝ一葉の小舟の行衞誰か知る、定めなき身は一人かは。

千手振事ありて、

千手「一人ならねば定めなき、世をしもあだに恨まじと、歎きしものを。」

樂座乙唱「本の露、末の雫の、誰れや彼れ、後れ先だつ浮世の慣ひ、濡るゝは竟に一人かは。

伊王振事ありて、

伊王「一人ならねば兩袖を、絞る歎きの甲斐なくも、恨めしものと、いさめしを。」

二人「數ふれば、」

跡は地に渡す。

樂座合唱「夢と過ぎし、三年の昔、今日と云ふ今日、其人の身は奈良坂の路の露、あだに結びてあだに散る、あだしき便り聞きてより、心に染むる墨の袖、君の御許しあらざれば、花の衣を着けながら、身は木枯の秋を泣き、明かし暮らしゝ此の日頃。

二人振事

千手「思へば〳〵、伊王殿。馴れ奉りし其一年、岩木を結ばぬ中將がなどか、我等に靡く心のなかるべき。なれども斯く成る御身とて、人に思ひをつけじ、我も物を思はむと、心強くもおはしゝ事の最惜さよ。あだし契りは結ばずとも、宮仕へせし其人に、我が百年の身を捧げ、菩提を助くる女の意地。」

伊王「況してや過る夜な〳〵に、斯くあさましき境涯も、先世の定めと聞く上は、思ひ殘す事なけれども、後世弔ふべき一人の子さへなきことの悲さよと、歎かせ給ひし痛はしき。我等ならでは誰か又、

後世を弔ふ人あらじ。』
千手『今日を不思議の思出に、思ひ定めて樣を變へ、
斯く本意を遂ぐる上は、』
伊王『同じ岩井の閼伽を掬び、』
千手『同じ香花に亡き人の、菩提を助け奉り。』
二人『共に九品の往生を、いざ是よりや祈らなむ。』
二人立ち上りて、

伊王『千手殿。』
千手『伊王殿。』
二人『是も宿世の。』
地へ渡して、振事。
樂座合唱『定めがと、互に手に手を鳥が啼く、東乙女の鑑ぞと、後の世までも隱れなし。
二人手を取り合ふて、幕。

（完）

▲短詩 はつしほ

小說作家中の大人露伴子、其率ゆる所の門人を會して新たに短詩の一機軸を出す、是れ世に傳ふる四行詩なるものなり。人事を詠じ、自然を吟じ、眼前の景物、古代の想像、僅かに數行の文字によつて自在に言ひ、自在に顯はし而かも玲瓏婉轉の妙致を極む。近頃冗漫にして然かも乾燥なる文字に飽きたる吾人この篇に接して恰も醍醐の美を酌みたるの想あり（春山堂發行實價四十錢。）

▲時代武家女學叢書

元祿より天保頃まで世に行はれたる女子教育の書を梅澤和軒氏の輯めたるものにして烈女百人一首、女中道志るべ、女四書なども其中にあり、多くは教訓的のものにて日本の婦女教育の參考となるべきものなり（定價三十五錢有樂社發行。）

▲少年少女 新遊戲集

遊戲は兒童の生命なり、兒童に遊戲を禁ずるは小鳥に囀りの舌を縛し、蝶に舞の翼を奪ふがごとしとは此の篇の序文に在り、然り誠に其の通なり、著者西村渚山氏小波門にありて少年文學に關する種々なる研究なされし人なればこゝに撰まれたる遊戲のごときも專ら小兒の心性を善導すべきものに就て考案し、適切にして趣味ある種類を多く集められたるがごとし新年宴會、カルタ遊び以下十數種いづれも面白し（定價三十五錢、大日本護國幼年會發行。）

▲家計簿

家庭の友編輯主任羽仁女史は新家庭の經營に深く心を注がるゝの人なり、この家計簿は女史獨特の意匠に成りたるものにて俸給生活を成さるる家の會計簿として尤も適切なるものとして世の奧樣達に推薦す定價四十錢內外出版協會。）

婦人界の飛躍

歳は是れ丙午、天馬空行、今年こそはと、何れの方面に在てもその活動を期待せられ覇氣勃々精氣満々たる改暦の劈頭、年計は元旦にありとの古諺を新しく我婦人界の飛躍こそ頼母敷も目出度けれ、即ち大澤、片山、高木、佐々木、三宅、佐藤、三浦、岡田等の醫學博士夫人首唱の下に、貴族、富豪、教育家等の賛成ありて、去る一月十日九段坂上の富士見軒に於て、松平男爵夫人、千家男爵夫人を始め二十六人の上流夫人を委員として婦人新年祝宴は開かれたり、當日車馬を驅つて臨場せられたる閨秀無慮——名、名刺の交換、談話、茶菓及び晩餐の饗應と云ふ順序にて、各々歡を悉くして退散せられたりと云ふ。

さて新年第一令夫人の話頭に上りしは何ぞ、これをして若し下流社會の婦人なりせば、姑、小姑の噂にて持ち切らるべきこと疑ひなく、偶々通人ありて異彩を放つとせば、芝居の噂位が關の山なるべし、而も今回の參集は當代上流の閨秀揃ひなれば、門外漢の容易に揣摩し得る限りにあられども、昨年より一昨年へ掛けて孰れも愛國婦人會や、篤志看護婦人會などに關與せられ、且つ出征軍人慰問に家族扶助に日夜斡旋奔走せられたるとなれば、その懷舊談もあるべく、戰後發展すべき婦人界の事業に付て其意見を交換せられたるなるべし。

又その晩餐の膳羞が西洋料理なりしと云へば、常に遠慮勝なる我婦人の慣習を打破せられ萬事社交的に行きし事なるなるべし、さるからに彼の當世紳士が華族會館の宴席上、正宗の瓶をポケットに忍ばせるが如き、將た折詰辨當を車の蹴込に同乘せしめらるゝが如き醜態は絶て無かりしならん。斯くて公會に於ける令夫人達が健啖の結果は、少くとも向後辨當の小きを誇りとしたる女學生の弊風を打破せらるの一助ともならんか。

抑も純粹なる婦人のみの宴會は本年の我婦人新年宴會を以て嚆矢とす、由來男子のみの宴席は殺風景にして其弊に堪へざりき、此に於て我國に在ては特殊の機關(藝妓)を生じて杯盤の間を周旋するに至れり、是れ心ある人の常に顰蹙する所なり、されど單に婦人のみの宴會も亦聊か物足らぬ心地ぞさる。願はくはこれを機として男女の交際會開かれたきものなり。

婦人界彙報

▲日本橋婦人懇話會　區內有力家の夫人相互の親睦を圖り傍ら社交的智識の交換を旨として開かれたる同婦人會は日本橋倶樂部を會場として毎月一回女子教育界の名流を聘して衛生育兒、家庭、教育上有益なる講話を聞き、又種々なる社交上の協議を爲すことゝなり居れるが、同會は既に一昨年開戰の始め他に率先して恤兵袋十數萬個を製して戰地に贈り次で慈善演藝會を催して區內出征中の家族を扶助するなど着々社交的事業の活動を見るに至りしは喜ぶべし、上掲の寫眞板は一月十三日新年宴會紀念撮影の一部にして當日參會の夫人は左のごとし。

市原夫人よし子、濱口夫人蓮江、花岡夫人享子、西澤夫人ふし子、大澤夫人雨芳、大橋夫人すゑ子、小倉令孃高子、柿沼夫人花子、棚橋絢子女史、鹽石夫人さく子　津村夫人錠子、中井夫人かれ子、野本せん子、山本夫人たま子、前川夫人ゑつ子、前田夫人きく子、小西夫人たつ子、近藤夫人てい子、菊池夫人盛子、清水夫人米子、仁杉夫人うた子、廣部夫人鎌子、日比谷夫人もと子、杉村夫人きし子

▲博士夫人懇話會　刀圭社會の名家大澤、片山、高木、佐藤、三宅、佐々木、三浦、岡田等各博士夫人の首唱の下に年末年始の繁縟を改む可く目的にて、一月十日午後一時より麴町富士見軒にて年始會を開きたり。當日は簡單なる洋食の晩餐ありしが會の決議として「當日出席しながら尚ほ且つ廻禮をなすものは會の主旨に違反する者ゆゑ決して答禮に及ばざるは勿論場合によりては會より除名することある可し」との規約あり當日會合の貴婦人は、鳩山春子、穗積歌子、同松子、高木鐐子(敬三夫人)、相馬睦子、園田銈子(孝吉夫人)、山脇房子、松平須麻子、千家俊子、三井捨子、下田歌子、三輪田眞佐子の諸氏なり

▲軍人家族授產婦人會　同會は最も健全に發達せし婦人事業の一なり、日露戰爭中出征せし人の留守家族にして俄に家計不如意を訴ふるもの尠なからず、然るに篤志の醵出は自ら限りありて何時までも多數の家族を救濟し得ざるは勿論、若しこれありとするも却て獨立の精神を沮喪せしむる恐れあるより、女に適當の職業を擇びその賃錢を給して生計を助くるの主旨より起りしなり。上掲の寫眞板の列名左の如し。

前列　村井母堂季子、伊東大將夫人美津子、千家男爵夫人俊子、江副夫人熊子、齋藤夫人專子

中列　千家男爵(顧問)、黑木大將夫人百子、奧村夫人菊子、高橋夫人鈴子、岡田代議士(顧問)

後列　岡田夫人靜子、清浦男爵夫人錬子、近藤政利(顧問)

▲愛國婦人會の新年互禮會　愛國婦人會新年互禮會は去月十七日偕行社に於て開會、會長岩倉公爵夫人開會の詞を述べ次に大山元帥本會に對する感謝の辭を朗讀せられ了て宴に移り一同歡を盡して散會したるが來賓には大山元帥を始めとして岡部子、清浦男、澁澤男、堀內中佐數氏あり參會者には近衞、毛利、大山、鍋島、板垣、夫人其他幹事の諸氏を合して百八十餘名、

元帥の感謝狀は
愛國婦人會會員各位は日露戰役の長日月間終始一貫熱誠を以て軍人の優遇慰問に勉勵せられたり是れ我輩の深く感謝する所なり余は本日此盛會に寵招せられたるを機とし玆に軍人全體の意を體し此會の功績を賞頌し其の益々隆盛ならんことを祈る

▲●●●●●●●將校婦人會の創設　「今や戰爭は熄みたりと雖も國民の倶に枕を高くすべき秋にはあらざる可し」なる趣旨の下に「陸海軍將校婦人の交誼を厚ふし平時と戰爭とを問はず必要なる事業をなし國恩に酬ゆる目的」にて三好中將未亡人梅子、宇佐川、木村の兩少將夫人、男爵夫人佐野喜弥の諸氏發起者となり大山、奥、川村、黑木の各大將夫人の贊同を得て去月廿日其創設發會式を九段偕行社に擧行す、席上矢吹第一師團長は來賓を代表して賛辭を述べ擧つて捕虜に就ての談話、由上騎兵大尉の實戰談等あり一同紀念撮影をなして散會したるが同會は每月十五日を以て定期會とし會員一同の茶話會若くは講話會を開き追て機關雜誌をも刊行すと云ふ入會志望者は四谷須賀町三十五番なる同會事務所へ申込まる可しとなり。

▲●●●●●●日本女子大學校　にては本年四月入學せしむべき生徒の募集を告示せり、其入學を許す學科は左の如し、

家政部、國文學部、英文學部、教育學部

因に無試驗入學を許すものは十七歲以上の婦人にして左の資格を有するものなりと

一、同校附屬高等女學校卒業生
一、修業年限五ヶ年官私立高等女學校の卒業生師範學校の卒業生
一、師範學校の卒業生
一、修業年限四ヶ年の高等女學校卒業後一年以上專攻又は補習科を修めたるもの
一、專門學校入學檢定試驗に合格し尙一ヶ年以上の學歷を有する者

學費は授業料一學年廿七圓五十錢校費一學年五圓五十錢受驗料一圓五十錢入學料二圓寄宿舍費食料每月六圓外に寮費一圓なりと。

▲●●●●●東京音樂學校　にても本年四月入學せしむる甲種師範科及乙種師範科の生徒を募集せり甲種師範科に入學せんとするものは年齡十七歲以上にして高等女學校師範學校卒業又は之に等しき學力あるものにして入學試驗科目は左の如し

第一號　試問、唱歌、國語若くは英語、體格
第二號　國語、數學、理科、地理、歷史

但し師範及年限四ヶ年の高等女學校卒業者又は之と同等以上と認むる者は第一號表のみ科し其他は全科目を試驗す、但し唱歌に重きを置くは言ふまでもなし甲種師範には官費生ありて一ヶ月六圓の學資を給與す修業年限は三ヶ年なり次に乙種師範科に入學せんとするものは十七年以上にして修業年限四ヶ年の高等小學校卒業及之に等しき學力を有するものは簡單なる試驗を經て入學し得るの規定なり。

三月分記事豫告（三月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊／增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引　四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引　三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引　二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引　二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せす
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅九年二月五日發行　第六巻第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

明治卅八年度 新刊圖書

以下掲記せる圖書は、弊館が昨三十八年中新たに出版發賣せる處に係れり、顧れば三十八年度は、前年より繼續したる世界空前なる日露大戰爭の餘響に依り、一般商工業の遲滯沈靜せし際にも拘はらず、本館の事業は年々歲と共に進捗發達の好調を失はざるのみならず、前年度の大發展に加ふるに更に一段の生氣を加へ、特に長足の進步を爲し、機あれば必らず活躍するの前例を實現せり。今や平和は克復せられて、我帝國は武人の赫々たる偉勳により、一躍して世界列强の班に伍するに至れりと雖も、戰後の施設經營は一に吾等實業家の双肩に掛り、少しく步を誤れば戰勝の光榮は烟散霧消して反つて國家疲憊の結果に終らんとす、既に世界の商戰場裡に立つ豈緊褌一番國家有終の勝を得るに努めずして可ならんや、吾館微力なりと雖も、自今一層鋭意發奮以て文化開發の本分を盡くさん哉。玆に昨年度發刊の圖書目錄を掲げて大方の閲覽を請ふに當り、一言所思を陳ずといふ。

發兌元 東京本町 博文館

御註文規定

△博文館は自館出版品と一手專賣の委托品の外他店出版品は一切取扱ひ不申候

△御註文の節は必らず代金御添付被下度候、又郵劵代用は一割增に限り申候

△郵便爲替の御送金は受取局を東京郵便局、受取人を博文館と劵面へ御明記被下度候

△書狀の宛名は必らず日本橋區本町三丁目博文館小賣係と御認め被下度候小石川區の印刷工場又は博文館編輯局等筋違の宛名にての御註文は延着は勿論書狀の紛失其他の錯誤あるも弊館は其責に任じ難く候

△書狀は文字を分明に御認め被下度候殊に御住所御姓名は最も御注意願上候

△金高壹圓以上の御送金には受領證差上げ可申候得共壹圓以下は送本丈けにて用辨可仕候

△御進物賞品等に最便利なる全國取引店共通の圖書切符發賣す金高は御隨意に調製可仕候

▲雜誌

●太陽 第十一卷自第一號至第十六號 十六冊

每月一回一日發行年四回定期增刊發行

▲正價一冊參拾錢 郵稅一冊三錢

定期增刊 ◉明治史第二編財政史 ◉新法令 ◉世界之帝王 ◉明治史第三編外交史

●實業世界太平洋 第四卷自第一號至第廿四號 二十四冊

每月二回一日十五日發行

▲正價一冊拾貳錢 郵稅一冊壹錢五厘

●日露戰爭實記 自第四拾七編至第百拾編 十六冊

每月三回三日十三日廿三日發行

每月一回八日定期增刊發行

▲正價一冊拾錢 郵稅壹錢五厘

●戰爭實記寫眞畫報 自第十二卷至第四十卷 廿九冊

每月一回八日發行

定期增刊

▲正價一冊貳拾錢 郵稅一冊貳錢

臨時增刊

◉旅順降伏紀念帖 ◉第一軍寫眞帖 ◉第二軍寫眞帖 ◉奉天占領紀念帖 ◉陸海敵軍寫眞帖 ◉旅順現狀寫眞帖 ◉海軍戰捷紀念帖 ◉韓國寫眞帖 ◉第四軍寫眞帖

◉日本海大海戰 ◉樺太寫眞帖 ◉樺太回復紀念帖 ◉媾和紀念帖 ◉沿海州寫眞帖 ◉觀艦式寫眞帖 ◉伊勢行幸寫眞帖 ◉滿洲軍凱旋寫眞帖

●文藝俱樂部 第十一卷自第一號至第十六號 十六冊

每月一回一日發行

年四回定期增刊發行

▲正價一冊貳拾五錢 郵稅一冊貳錢五厘

定期增刊 ◉初芝居 ◉花柳風俗志 ◉風流陣 ◉新撰落語大全

●少年世界 第十一卷自第一號至第十六號 十六冊

每月一回一日發行

年四回定期增刊發行

▲正價一冊拾錢 郵稅一冊壹錢五厘

定期增刊 ◉春の世界 ◉秋の世界 ◉夏の世界 ◉冬の世界

●中學世界 第八卷自第一號至第十六號 十六冊

每月一回十日發行

年四回定期增刊發行

▲正價一冊貳拾錢 郵稅一冊貳錢

定期增刊 ◉明治戰記 ◉世界三十六文豪 ◉青年傑作集 ◉菊花壇

●女學世界 第五卷自第一號至第十六號 十六冊

每月一回五日發行

年四回定期增刊發行

▲正價一冊貳拾錢 郵稅一冊貳錢

定期增刊 ◉小天地 ◉世界各國家庭事情 ◉閨秀文壇 ◉當世交際社會

（後付の一）

外務省通商局編纂每月六回三、八ノ日發行

● **通商彙纂** 自第一號至第七十四號 七拾四册

▲定期刊行分 一册九錢（郵稅共）
▲臨時増刊分 一册拾八錢（館負擔）

每月一回算術、代數、幾何の三册宛發行

● 中學課程 **數學講義錄** 各科共 自第八號至第三十號 十五册

▲正價各科一册拾錢 郵稅一册一錢

每月一回算術、代數、幾何の三科三册宛發行

● **數學世界** 各科共 自第一號至第九號 二十七册

▲正價各科一册拾錢 郵稅一册一錢

臨時増刊

◉數學お伽雙紙（上中下）

◉記臆すべき公式と答案の書き方（上中下）

每月一回二十日發行

● **圖書世界** 第六卷 自第一號至第八號 八册

▲正價一册參錢 郵稅一册一錢宛

以上第三種郵便物トシテ遞信省認可ヲ受ケ居ル雜誌十二誌二百九十三種ヲ發行セリ

▲圖書

● **帝國百科全書** 自第百廿一編至第百卅九編 十九册

▲並製ノ外總クロース特製本アリ 正價一册五拾五錢郵稅一册拾錢宛

- ● 文學士松本孝次郎君著 **兒童心理學** 全一册 洋並綴 大判 三二六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士小川銀次郎君編 **世界美術史** 上下 全二册 洋並綴 大判 六四八頁 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢
- ● 法學士守屋源次郎君著 **經濟政策概論** 全一册 洋並綴 大判 三三〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 法學士澤田鈫一郎君著 **政治學史** 全一册 洋並綴 大判 三一七頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 獸醫學士小倉坪太郎君著 **獸醫學汎論** 全一册 洋並綴 大判 三一二頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 仙臺醫學專門學校教授須﨑勝三郎君著 **應用定量分析** 全一册 洋並綴 大判 三四四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士融道玄君譯 **宗教進化論** 全一册 洋裝 大判 三一六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士久保天隨君著 **朝鮮史** 全一册 洋並綴 大判 三三六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士石原卽聞君著 **佛教哲學汎論** 全一册 洋裝 大判 二九八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士德谷豐之助君著 **社會倫理學** 全一册 洋並綴 大判 三四八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士十時彌君著 **進化論** 全一册 洋並綴 大判 三〇八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 理學士大築佛郎君 理學士八谷彪一君共著 **鑛物學** 全一册 洋並綴 大判 三六四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 文學士田淵友彥君著 **韓國新地理** 全一册 洋並綴 大判 三五〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢
- ● 法學士勝部國臣君著 **清國商業地理** 全一册 洋並綴 大判 三五八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

（後付の三）

文學士石倉小三郎君著 ●西洋音樂史 全一册洋並製 大判三一六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

文學士小川鋠次郎君著 ●近世美術史 全一册洋並製 大判三一八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

文學士林森太郎君著 ●日本文學史 全一册洋並製 大判三五二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

八木奘三郎君著 ●普通人類學 全一册洋並製 大判三六二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

工業叢書 自三十二至三十九 八册

工學士淺田忠順君著 ●石鹼製造法 全一册洋並製 中判二六五頁 正價七拾錢 郵稅八錢

工學士江濱常吉君著 ●蒸汽機關 全一册洋布上製 中判二九六頁 正價八拾錢 郵稅八錢

工學士江濱常吉君著 ●最新汽機回轉汽機 全一册洋布上製 中判三三二頁 正價八拾錢 郵稅八錢

工學士大河戶宗治君著 ●力學圖解法 全一册洋布上製 中判四四〇頁 正價八拾錢 郵稅八錢

工學士關盛治君著 ●水力機械學 全一册洋布上製 中判三一〇頁 正價八拾錢 郵稅八錢

工學士若目田利助君著 ●電燈及電氣鐵道 全一册洋布上製 中判二八五頁 正價七拾錢 郵稅八錢

工學士守田鐵之助君著 ●製氷及冷却法 全一册洋布上製 中判二七六頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

工學士中澤電雄君著 ●電氣磁氣計算法 全一册洋布上製 中判三〇〇頁 正價八拾錢 郵稅八錢

理學士山崎直方君、理學士佐藤傳藏君共編 ●大日本地誌（全部十卷）

第四卷 近畿 大判背皮金字金輪表紙 堅牢美本 千三百餘頁 正價參圓 小包送料貳拾錢

故文學博士高山林次郎君遺稿 姉崎文學博士齋藤文學士共輯 ●樗牛全集（全部五卷 四卷既成）

第二卷 文藝及史傳 上 ▲大判總クロース金模樣金字入紙數壹千頁頗美本 正價壹圓五拾錢 小包料貳拾錢

第三卷 文藝及史傳 下 ▲大判總クロース金模樣金字入紙數七百七十餘頁頗美本 正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢

第四卷 時勢及思索 全 ▲大判總クロース金模樣金字入紙數千百二十頁頗美本 正價壹圓五拾錢 小包料貳拾錢

伊藤侯題辭 山縣侯題辭 井上伯題辭 松方伯題辭 桂伯題辭 澁澤男題辭 大隈伯序文 伊東祐穀君編

●明治三十八年 世界年鑑（大判竪八寸七分 横六寸三分 函入美本）

▲全一册洋裝總クロース千四百七十頁 ▲正價四圓廿五錢 小包料參拾錢 ▲極彩色石版圖廿四枚挿入

博文館編輯局編纂 ●増訂現行 日本法令大全 全一册 上裝大判 背皮 四千頁

▲正價四圓五拾錢小包料 四拾錢

（後付の四）

博文館編輯局編
改正増補 **帝國六法全書**
▲正價九拾錢 郵税拾貳錢
▲總革特製壹圓拾五錢 郵税拾四錢
全一冊洋布上製 小判一八九六頁

文學士大町桂月君 文學士久保天隨君 大田淳軒君共編
新式いろは引節用辭典
▲正價貳圓 小包料拾五錢
▲特製貳圓五拾錢 小包料拾五錢
全一冊洋布上製 三六判 一三〇〇頁

女子高等師範學校教授 槇山榮次君外九君補助
報知新聞家庭記者 中村木公君編
實驗問答 **日本家庭節用**
▲正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢
全一冊洋布上装 三六判一二七〇頁

巖谷小波君著
伯林土産 **戀の畫葉書**
▲一名留學生氣質
▲正價壹圓 郵税拾錢
全一冊洋布上装 中判 四六〇頁

理學士吉田弟彦君著
改訂 **日本商業地圖**
洋裝大判(縦一尺二寸 横八寸八分)二頁開き地圖十一面 附錄重要統計四十圖
▲正價壹圓 小包料拾五錢
全一冊

海軍省御認可
日露戰役 **海軍寫眞集** 第三輯迄既成
▲太陽判大和綴横本全面寫眞版五十面入
▲特製總クロース金字金繪表紙頗美本

海軍機關大監關重忠君撮影編纂
日露戰役海軍寫眞 **朝日の光**
第一輯 並製正價貳拾五錢 郵税六錢
特製正價七拾五錢 郵税八錢
第三輯 上製正價一冊參拾錢 郵税六錢宛
特製正價一冊八拾錢 郵税八錢宛
▲正價壹圓 郵税四錢
▲四六判二倍判洋布上装頗美本
▲寫眞版紙數百十四頁
全一冊美本

坪谷水哉君編纂
日露戰爭 **凱旋みやげ**
▲正價三拾五錢 郵税八錢
▲太陽判横綴寫眞壹百五十餘圖
全一冊美本

農學博士稻垣乙丙君著
農藝物理 **氣象學**
▲正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢
脊皮上綴 大判 五四〇頁

坪谷水哉君著
日本漫遊案内 下
▲正價壹圓 郵税拾錢
▲全部二冊各洋布上製府縣所在地
▲銅版圖廿餘頁風景寫眞八十餘圖
洋布上綴三六判 美本六百餘頁

富益農學士 田中花浪君合著
家庭園藝術
▲正價八拾錢 郵税拾錢
全一冊 中判 洋布上綴 五八〇頁

井上文學博士 有馬文學士共編
武士道叢書
▲正價一冊五拾錢郵税拾錢宛
全三冊 洋装 大判一六〇〇頁 (下巻に限り郵税拾貳錢)

(後付の五)

佐藤陸軍少將題字 井上文學博士序文 秋山梧庵君編
現代大家 武士道叢論
全一册洋裝並製 大判五〇八頁
▲正價五拾錢 郵稅拾貳錢

文學士齋藤隆三君著
元祿世相志
全一册洋裝並製 大判三四八頁
▲正價四拾五錢 郵稅八錢

博文館編輯局編纂
明治三十九年 當用日記
大形一種 中形二種 小形一種
大形 菊判上製總クロース金文字入 正價五拾錢 郵稅拾四錢
中形 四六判背皮特製金文字入頗美 正價五拾錢 郵稅拾貳錢
中形 四六判總クロース上製金文字入 正價參拾五錢 郵稅拾錢
小形 菊判半截上製總クロース金字入 正價參拾錢 郵稅八錢

明治三十九年 懷中日記
袖珍美本 製本堅實
新形 細長形總クロース 高尙美本 正價貳拾錢 郵稅貳錢
上製 總クロース金文字入重要附錄百餘頁 正價拾八錢 郵稅貳錢
並製 模皮金文字入上綴重要附錄百餘頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

子爵細川潤次郎君序文 赤堀又次郎君校訂
心學叢書（第六編）
自一編至六編 本編にて完結
▲正價一册四拾錢 郵稅一册八錢

田山花袋君著
第二軍從征日記
全一册洋並綴 大判四八〇頁
正價六拾錢 郵稅拾貳錢

西園寺侯爵題字 白岩子雲君校 安井正太郎君編纂
湖南
全一册洋並綴 大判四二八頁
正價壹圓 小包送拾五錢

竹越與三郎君著
臺灣統治志
全一册洋並綴 大判五七七頁
正價六拾五錢 郵稅拾貳錢

韓國學政參與官 文學博士 幣原坦君著
日露間の韓國
全一册洋並綴 大判二〇〇頁
正價參拾五錢 郵稅六錢

後藤新平君序文 森孝三君譯
殖民行政 組織改革論
全一册洋並綴 大判一一五頁
正價貳拾錢 郵稅四錢

後藤新平序文 波蘭シダコツフ氏原著 田原禎次郎君譯述
光榮の日本
全一册洋裝 大判一五四頁
正價貳拾五錢 郵稅四錢

伯爵大隈重信君述 武井宗十郎君筆記
大隈伯時局談
全一册洋並綴 大判一九四頁
正價參拾錢 郵稅六錢

安部磯雄君著
北米の新日本
全一册洋並綴 中判二二三頁
正價參拾五錢 郵稅四錢

矢野文雄君序 鳥谷部春汀君著
時代人物月旦
全一册洋布上綴 三六判五七三頁
正價七拾錢 郵稅拾錢

松永聽劍君編纂
樺太及勘察加
全一册洋並綴 大判三六〇頁
正價五拾錢 郵稅八錢

中央新聞從軍記者岡田雄一郎君著
滿洲起業案內
全一册紙皮上綴 三六判二六六頁
正價參拾錢 郵稅四錢

千葉敬止君 川井甚平君合著
農家の副業
全一册洋並綴 大判二〇〇頁
正價貳拾五錢 郵稅六錢

博文館編輯局編纂
改正 徵兵規則大全
全一册洋並綴 袖珍五〇〇頁
正價參拾五錢 郵稅六錢

（後付の六）

杉本文太郎君著 **陸軍諸兵種解說** 全一冊 洋並綴 大判三一〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

陸軍少將東條英教君題辭 陸軍少佐宍道省三君校閲 杉本文太郎君著 **陸軍解說** 全一冊 洋並綴 大判二三〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

兒玉大將題辭 陸軍大尉佐藤信亮君校閲 杉本文太郎君著 **戰鬪圖解** 全一冊 洋並綴 大判一八三頁 正價參拾錢 郵税六錢

陸軍步兵中佐岡野敏雄君校閲 同步兵大尉小山永行君著述 **陸軍入隊案内** 全一冊 洋並綴 袖珍三二〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

東鄉大將題辭 河原陸軍少將序文 杉本文太郎君著 **海軍解說** 全一冊 洋並綴 大判二〇〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

黑木大將書簡 藤井少將序文 黑木軍通譯官來原慶助君著 **黑木軍百話** 全一冊 洋布上製 大判一七二頁 正價四拾錢 郵税六錢

海軍主計中監窪田重弌君著 日露戰役紀念 **彈片** 全一冊 洋並綴 三六版五〇〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

千葉紫草君纂譯 **最近外交秘密** 全一冊 洋並綴 小判三一七頁 正價參拾錢 郵税六錢

釋雲照律師著 **佛教原論** 一名 法界同歸德教論 全一冊 洋並綴 大判三三四頁 正價五拾錢 郵税八錢

文學博士前田慧雲君述 **親鸞聖人** 全一冊 大和綴 大判一二五頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

中村鈴子女史編 **家庭の模範** 全一冊 洋布上綴 中判四二四頁 正價參拾八錢 郵税六錢

家庭衞生訓 全一冊 洋装 大判四〇八頁 正價參拾五錢 郵税六錢

海軍大軍醫際岐敬治郎君譯 **女子衞生學** 全一冊 洋並綴 小判三二〇頁 正價參拾錢 郵税四錢

醫學士小玉龍藏君著 **延命長壽法** 全一冊 洋布上綴 三六版四四〇頁 正價六拾錢 郵税六錢

産科婦人科專門醫稻生鑑次郎纂著 **實習産婆學** 上卷 通常産 全一冊 洋装並製 大判三六〇頁 正價七拾錢 郵税拾錢

治庖會第四教場主幹龜井まき子女史著 **家庭料理法** 全一冊 洋装並綴 大判二三〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

醫學得業士橋公行君著 **八丈島保養案内** 全一冊 洋装並製 三六判一八四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

日本遊戲研究會編纂 **摸範運動會法** 附新式舞踏遊戲 全一冊 洋並綴 中判三〇〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

早稻田大學野球選手橋戸信君著 **最近野球術** 全一冊 紙皮上綴 三六判二七五頁 正價參拾錢 郵税六錢

早稻田大學加藤進君向井正法君合著 **最新游泳術** 全一冊 洋並綴 中判二六二頁 正價參拾錢 郵税四錢

戸田主獵局長校閲 報知新聞記者高橋迎月君著 名家實談 **銃獵秘訣** 全一冊 洋布上綴 三六判二四六頁 正價參拾錢 郵税六錢

八木柴三郎君著 學生必携 **修學旅行案内**（關東の部） 全一冊 洋布上綴 三六判六九二頁 正價四拾五錢 郵税八錢

竹貫眞文君補 竹貫直人君編 實用 **新式速算法** 全一冊 洋並綴 中判二九四頁 正價參拾五錢 郵税六錢

野口寧齋君遺稿 **寧齋詩話** 全一冊 洋並綴 中判四二〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

香國土居通豫君編 **作詩活法** 全一冊 洋布上綴 小判五九七頁 正價五拾錢 郵税四錢

文學博士重野安繹君序 石崎篁園君編述 **國民作文軌範** 全一冊 紙皮上綴 三六判五六〇頁 正價四拾錢 郵税六錢

- ● 書翰文研究　神戸高等商業學校敎授中川靜君著　全一册洋布上製　三六判四五二頁　正價六拾五錢　郵税八錢
- ● 格言辭典　千岸貫一君撰　作文演說　全一册洋布上製　小判五八四頁　正價五拾錢　郵税八錢
- ● 支那新字典　清國全權公使楊樞君題辭　岩村成允君編　北京正音　全一册洋裝上製　三六判四四〇頁　正價壹圓　郵税六錢
- ● 明治壹萬句　內藤鳴雪君閱　今井柏浦君編　全一册和裝横綴　中判四四〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

受驗問答叢書　自第廿九編至第三十五編　七册

- ● 新撰衞生生理問答　醫學得業士首藤瑛君編　全一册紙皮上製　小判二〇二頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰家事問答　近藤正一君編　全一册紙皮上製　小判二六四頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰憲法行政法問答　法學士辻宏吉君編　全一册紙皮上製　小判二四三頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰商法問答　法學士太田資時君編　全一册紙皮上製　小判二三二頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰國際公法私法問答　法學士土屋彥太郎君編　全一册紙皮上製　小判二一八頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰刑法問答　法學士石原磊三君編　全一册紙皮上製　小判二六〇頁　正價貳拾錢　郵税四錢
- ● 新撰民刑訴訟法問答　法學士淸水幸藏君編　全一册紙皮上製　小判　頁　正價貳拾錢　郵税四錢

世界お伽噺　自第六拾六編至第七拾九編　十四册

巖谷小波君編（每編木版密畫挿入）

- ● 日の罰（北アメリカ）　全一册洋並製　大判六四頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 浮かれ笛（愛蘭士）　全一册洋並製　大判七〇頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 活水死水（デンマーク）　全一册洋並製　大判七四頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 光の劍（愛蘭）　全一册洋並製　大判六四頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 木兎太郎（獨逸）　全一册洋並製　大判七八頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 少年國（瑞典）　全一册洋並製　大判七〇頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 小人鼻助（獨逸）　全一册洋並製　大判八〇頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 龜の智惠（アフリカ）　全一册洋並製　大判六二頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 世は情（ノルウエイ）　全一册洋並製　大判七二頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 變身術（ハンガリー）　全一册洋並製　大判六二頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 豆の手蔓（イギリス）　全一册洋並製　大判六六頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 薔薇姬（獨逸）　全一册洋並製　大判六二頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 地獄廻り（希臘）　全一册洋並製　大判　頁　正價八錢　郵税貳錢
- ● 九番人形（アラビヤ）　全一册洋並製　大判　頁　正價八錢　郵税貳錢

（後付の八）

巖谷小波君編

少年日露戰史 自第八編 至第十五編 八册

● 少年日露戰史 黃海の卷 全一册洋並製 大判一〇四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

● 年少日露戰史 遼陽の卷 全一册洋並製 大判一〇四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

● 少年日露戰史 沙河の卷 全一册洋並製 大判一〇四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

● 少年日露戰史 旅順の卷 全一册洋並製 大判一〇四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

● 少年日露戰史 奉天の卷 上下二册洋並製 大判二一二頁 正價一册拾貳錢 郵稅一册四錢

● 少年日露戰史 日本海の卷 全一册洋並製 大判一〇六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

● 少年日露戰史 樺太の卷 全一册洋並製 大判一〇四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

醫學博士井上通泰君監修 每編專門博士の講話

家庭衛生叢書 自第參編 至第七編 五册

▲全部十二册洋裝大判正價一册貳拾錢
全部十二册貳圓拾錢郵稅一册六錢宛

第三編 ●日本の室內空氣に就て(醫學博士緒方正規先生)●轉地療養の話(其三)(ドクトル富士川游先生)●小兒の病氣に就て二三の注意(醫學博士三輪信太郎先生)●小兒の衛生に就て(醫學博士弘田長先生)●遺尿症に就て(醫學博士朝倉文三先生)●眼科衛生談(醫學博士井上通泰先生)(●衛生雜話)……六件

第四編 ●胃腸の話(醫學博士井上善次郎先生)●耳の攝生(醫學博士岡田和一郎先生)●乳母の衛生に就て(醫學博士緒方正規先生)●狐憑とヒステリーとの關係(醫學博士吳秀三先生)●眼鏡の話(醫學博士井上通泰先生)●衛生雜話……六件

第五編 ●創傷の話(醫學博士三輪德寬先生)●神經の攝生に就て(第一)(醫學博士吳秀三先生)●「ザフテリア」の話(醫學士宮本叔先生)●皮膚の衛生(醫學博士岡村龍彥先生)●肺結核の話……十三件

第六編 ●ペストの話(醫學士宮本叔先生)●身心の養生(醫學博士大澤謙二先生)●家庭に於て注意すべき二三の學校衛生(醫學博士三島通良先生)●產時の創傷傳染(醫學博士木下正中先生)●(衛生雜話)肺結核の話……十五件

第七編 ●黴毒に關する家庭の注意(醫學士筒井八百珠先生)●家庭と黴菌と(醫學博士遠山椿吉先生)●姙娠中の攝生(醫學博士緒方正清先生)●便秘の話(醫學博士井上善次郎先生)●花柳病雜話……十八件

▲文武堂新刊

● 續美辭寶典 鹽井雨江君序 西村醉夢君著 全一册洋並製 袖珍五一〇頁 正價四拾錢 郵稅六錢

● 農業經濟原論 農學博士佐藤昌介君校閱 農學士佐藤昌君著 全一册背皮上製 大判三九〇頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾四錢

● 實用養蠶新書 農學士粱田斌君 蠶業專攻園田國三郎君合著 全一册洋並製 大判二七四頁 正價五拾五錢 郵稅八錢

● 日本移民論 法學士大河平隆先生著 全一册洋並製 大判四〇〇頁 正價七拾五錢 郵稅拾錢

● 物理學(前編) 理學士林茂增君著 全一册洋裝 小判一九三頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

● 代數學(前編) 陸軍大學校教授宮本藤吉君編 全一册洋裝 小判一四八頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

● 植物學 農學士今村猛雄君著 全一册洋裝 小判一八四頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

● 日本地理 志賀重昂君閱 設樂金三郎君著 全一册洋裝 小判二三二頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

哲學館大學講師三石賤夫君著
●國文典 全一册洋裝 小判一六二頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

哲學館大學講師安藤弘君著
●漢字異同辨 全一册洋裝 小判一七〇頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

農學士今村猛雄君著
●鑛物學 全一册洋裝 小判一五七頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

哲學館大學講師三島定之助君著
●外國地理 全一册洋裝 小判一五五頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

文學士丸井圭治郎君 高島米峰君共著
●東洋史 全一册洋裝 小判一八七頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

平井金三君 平井廣五郎君共編
●大英文典 前置調上 全一册洋裝美本 大判二〇九頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

同
●大英文典 前置調下 全一册洋上裝 大判三四六頁 正價壹圓參拾錢 郵稅拾錢

岡田市治君著
●英語異同辨 全一册洋裝 袖珍四〇〇頁 正價五拾錢 郵稅六錢 ▲特製本 正價六拾錢 郵稅六錢

宇野光三郎君著
●シャルとウイル 全一册洋並綴 小判一四六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

岸本能武太君撰訂（文部省檢定濟）
●實踐道德 全一册厚紙上綴 中判一二七頁 正價參拾錢 郵稅四錢

玉眞岩雄君撰訂
●英文日本海大海戰 全一册洋布上綴 中判一二六頁 正價參拾錢 郵稅四錢

村井知至君校訂
●英文朗讀演說文集 全一册洋布上綴 中判一七一頁 正價四拾五錢 郵稅四錢

岸本能武太君編
●英文海詩百編 全一册洋布上綴 袖珍二一三頁 正價四拾五錢 郵稅貳錢

ドクトル、オブ、フイロソフイー元田作之進君著
●和英英和兵語辭典 全一册紙皮上裝 袖珍三三四頁 正價壹圓 郵稅六錢

英學新報社編纂
●明治三十九年 英文當用日記 全一册洋布上綴 四六判 頁 正價五拾錢 郵稅八錢

同
●明治三十八年 英文懷中日記 全一册紙皮上綴 長方形三一二頁 正價參拾錢 郵稅四錢

▲繪はがき 日本葉書會新刊

日本葉書會發行
●繪はがき 古今美人 全六枚木版刷 鳥の子紙 卅六度刷 正價一圓 郵稅貳錢

同
●元祿風姿 薄化粧 プロマイト六枚入一組 正價九拾錢 郵稅二錢

同
●新意匠 美人風俗 全五枚木版縮緬紙 極精巧彩色刷 正價五拾錢 郵稅一組貳錢

日本葉書會發行
●佳人の裝 全六枚木版刷 鳥の子紙精巧畫 正價壹圓 郵稅貳錢

同 水野寛方君寫
●繪はがき 寛政美人 全六枚木版刷 鳥の子紙精巧畫 正價六拾五錢 郵稅貳錢

日本葉書會發行
●繪はがき 時代美人 歌川國峰君筆（享和時代の美人風俗） 全六枚木版刷 鳥の子紙精巧畫 正價八拾五錢 郵稅貳錢

同 寺崎廣業君筆
●繪はがき やまと風俗 全六枚木版刷 鳥の子紙精巧畫 正價壹圓 郵稅貳錢

日本葉書會發行
●繪はがき 京の子 岡田三郎助君畫 全一枚原版刷 精極美 正價參拾五錢 郵稅十枚迄貳錢 ▲臺紙附 正價五拾錢 郵稅五枚迄貳錢

同 解說書及石版はがき附
●泰西名畫繪葉書 コロタイプ刷十五枚一組 正價五拾錢 郵稅四錢

同 プロマイト寫眞
●繪はがき 東京四大公園 全四枚上野淺草日比谷芝公園 正價五拾錢 郵稅三組迄貳錢

博文館卅八年度新刊圖書目錄

發行所	品名	枚	定價錢
日本葉書會發行	●清嬌	六	三〇
同	●水彩葉書 山と水（上）	六	一八
同	●辻占	一	五
同	●水彩十景（上下）	各五	各二〇
同	●意外（上下）	上一 下二	各一〇
同	●祝賀箋	一	五
同	●新題 新年の川	五	一〇
同	●月桂冠	六	二〇
同	●昔嘶	三	三〇
同	●千紫萬紅	六	二〇
同	●富士三景	三	八
同	●繪はがき 海老茶式部（壹輯 貳輯）	各三	各一五
同	●家庭繪葉書（上下）	各六	各一八
同	●俳諧繪葉書（春）	七	二〇
同	●俳諧繪葉書（夏秋）	各七	各三〇
同	●滑稽漫畫葉書	六	二〇
同	●滑稽漫畫繪はがき ハイカラ	六	二五
同	●風俗十二ヶ月（上下）	各六	各一二
同	●動物繪葉書	六	一五
同	●富士と元祿美人	二	各一五
同	●六藝繪葉書	六	二〇
同	●歷史繪葉書	六	二五
同	●活人畫繪はがき 春（壹輯）	四	一六

發行所	品名	枚	定價錢
日本葉書會發行	●水彩寫生 夜の中禪寺	六	一八
同	●繪はがき 黃菊白菊	七	二二
同	●繪はがき 糸すゝき	五	二〇
同	●繪はがき 海（第壹輯 第貳輯）	各六	各一五
同	●繪はがき をみなへし	五	二〇
同	●最新流行 元祿踊	三	五
同	●繪はがき 秋草と美音	六	一五
同	●歌舞伎繪葉書	三	一〇
同	●美人風俗 大和なでしこ	六	三〇
同	●日本名所繪葉書（上中下）	各五	各二〇
同	●繪はがき 花？人？	六	三五
同	●繪はがき 東美人	三	一〇
同	●水彩繪葉書（三種）	各六	各一八
同	●透畫葉書 涼風	六	一五
同	●こどもはがき	六	一五
同	●繪はがき 花もみぢ	六	一五
同	●名所はがき 日光（上下）	各一〇	各二五
同	●今樣大津繪	六	一五
同	●靖國神社紀念葉書	六	一〇
同	●新裝美人（上下）	各六	各一五
同	●詩箋葉書	六	一五
同	●繪はがき 名所葉書（上下）	各六	各一二

發行所	品名	枚	定價錢
日本葉書會發行	●名所繪葉書（上下）	各六	各一八
同	●繪はがき 元祿姿	五	一五
同	●繪はがき 都の花（上下）	各五	各一五
同	●滿艦飾葉書（上下）	各六	各一二
同	●繪はがき 四季の花（上下）	各六	各二〇
同	●滑稽葉書	三	三〇
同	●繪はがき 戀十種	一〇	五〇
同	●繪はがき 愛	六	二五
同	●繪はがき 世界のパノラマ	六	二〇
同	●繪はがき 花と蟲	六	一八
同	●水彩十二ヶ月（上下）	各六	各二五
同	●解語の花	六	一八

日本葉書會發行

●スケッチ　無地獨書 三十枚　正價參拾錢 郵稅貳錢

日本葉書會製

●葉書帖　三種

（總クロース金字金模樣入頗美本）

▲大判　正價參圓　小包料拾五錢

▲中判　正價八拾錢　郵稅拾錢

▲小判　正價五拾錢　郵稅六錢

（後附の一二）

近刊豫告

- 岐阜縣師範學校教諭 蒔田宗次君著 ● 中等教育 新撰物理學階梯 四六判合表紙背クロース横組 紙數三百餘頁
- 東京美術學校教授 白井雨山君閲 ● 應用家庭美術 洋裝四六判美本
- 米國海軍大佐マハン氏原著 海軍省教育本部 大島貞益君譯 ● 英國水師提督 子ルソン傳 全一册洋裝 紙數四百餘頁
- 中村士德君 大久保千濤君著 ● 本邦地理詳説 全一册中判並製 紙數約六百頁
- 第二高等學校教授文學士 杉谷泰山君述 ● 處世哲學 全一册洋裝大判 帝國百科百四十三編
- 法學士 南弘君述 ● 國家學 全一册洋裝大判 帝國百科百四十四編
- 法學士 南弘君述 ● 政治學 全一册洋裝大判 帝國百科百四十五編
- 法學士 辻宏吉君著 ● 新式英語作文書取法 全一册四六判横綴本 紙數約三百頁
- 農學博士 稻垣乙丙君著 ● 農家節用 農業辭典 洋裝上製菊判 紙數七百二十頁
- 文學士 物集高量君 文學士 長連恒君 合著 ● 散文韻文 美文辭彙 洋裝上製三六判 總クロース金文字入 紙數壹千餘頁
- 中島義弌君著 ● 新撰日用女禮式 菊判並製本
- 竹貫佳水君著 ● 少年算術遊戲 菊半截紙皮金字入 紙數約二百五十頁

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の一二）

女學世界
（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）　第六巻第参號　（明治卅九年二月五日發行 毎月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）